

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 40 —

福岡県朝倉郡朝倉町・杷木町所在 外之隈遺跡の調査(集落編)
(外之隈遺跡 II)

1996

福岡県教育委員会

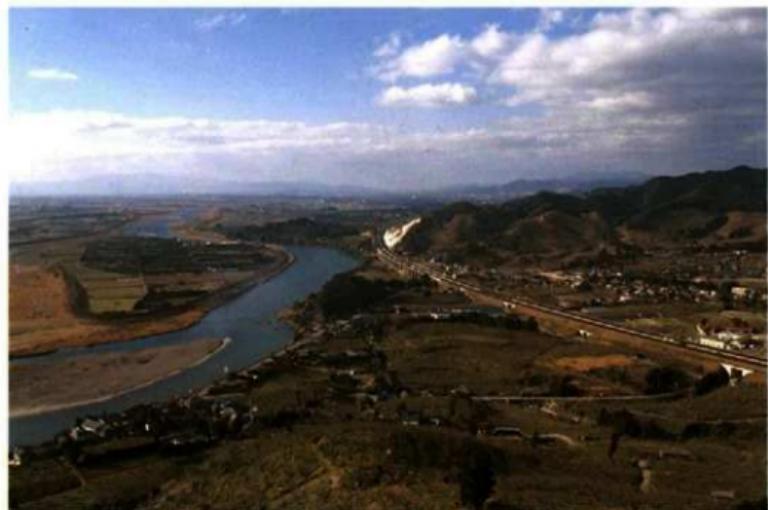
九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 40 —

福岡県朝倉郡朝倉町・杷木町所在 外之限遺跡の調査(集落編)
(外之限遺跡 II)

1996

福岡県教育委員会



外之限遺跡遠景（調査後）



1 外之限道路V区全景



2 外之限道路VII区全景

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、九州横断自動車道建設敷地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施してまいりました。発掘調査は既に完了しております、今後は調査報告書を順次刊行していく予定であります。

本報告書は、昭和62・63年度に発掘調査を実施した朝倉郡朝倉町及び杷木町所在の外之隈遺跡についての調査成果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第40集としてとりまとめたもので、外之隈遺跡の二冊目にあたります。

外之隈遺跡は、古墳時代初頭の墳丘墓と後期の集落跡を主体とする遺跡で、今回は集落跡についての報告であります。

本書が、甘木・朝倉地域における文化財及び歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いに存じます。なお、発掘調査・整理報告にあたり多大なるご協力を頂いた地元の方々をはじめとして、関係各位に深く感謝いたします。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例　　言

1. 本書は、昭和62・63年度及び平成2年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団の委託を受けて、発掘調査を実施した外之隈遺跡の二冊目の報告書であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第40集にあたる。
2. 本書は先に刊行した外之隈遺跡I（墳墓編）の続編で、今回は外之隈遺跡IIとして集落跡を掲載した。
3. 遺構の実測は、調査担当者の他に中間研志・高田一弘・武田光正・佐土原逸男・日高正幸・安岡克行・目修二・堀内宏之・石橋丸子・谷口晶子・丸山啓子・石井律子・高倉美智子・矢野シズ子諸氏の協力を得た。
4. 出土遺物の整理・復原作業は、岩瀬正信整理指導員のもとに九州歴史資料館復原室及び福岡県教育庁指導第二部文化課甘木発掘調査事務所において行った。鉄器の保存処理には、九州歴史資料館学芸二課参考補佐横田義章氏の協力を得た。
5. 出土遺物の実測は、大野愛里・西田美代子・宮田ゆみ・辻啓子・井上・木下・伊崎・小田による。
6. 図面作成・製図作業は、豊福弥生・原カヨ子・関久江・井上・木下・伊崎・小田による。
7. 本書掲載の写真は、遺構を井上・伊崎・小田が撮影し、遺物は北岡伸一の撮影による。
8. 掘出で使用する方位は、平面直角座標の第二系に基づく座標北である。
9. 遺跡分布図は、昭和62年国土地理院発行の「甘木」1/50,000を使用した。
10. 図版1の航空写真は、国土地理院の撮影による。
11. C¹⁴年代測定は、社団法人日本アイソトープ協会に依頼し、その分析結果を収録した。
12. 竪穴住居跡カマドの熱残留磁気測定は、鳥取大学理学部の伊藤晴明（当時）・時枝克安先生に依頼し、その分析結果を収録した。
13. I区1号墓・II区2号墓出土青銅鏡の鉛同位体比の測定は、国立歴史民俗博物館の斎藤努氏に依頼し、その分析結果を収録した。
14. 本書の執筆は、III区を伊崎が担当し、IV～IX区の遺構及び特殊品を小田が、土器は井上が行い、編集は小田があたった。

本文目次

I 調査組織と調査経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	7
III 調査の内容	10
1. 遺構の概要	10
2. III区の調査	11
A. 古墳時代以降の遺構と遺物	11
(1) 穫穴住居跡	11
(2) 土 坑	40
(3) その他の出土遺物	42
B. 弥生時代の遺物	43
C. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物	43
(1) 穫穴住居跡	43
(2) 土 坑	46
(3) その他の出土遺物	48
3. IV区の調査	50
A. 古墳時代の遺構と遺物	50
(1) 穫穴住居跡	50
(2) 土 坑	59
(3) その他の出土遺物	63
B. 旧石器時代の遺構と遺物	64
(1) 包含層	64
4. V区の調査	65
A. 古墳時代の遺構と遺物	65
(1) 穫穴住居跡	65
(2) 落込み	91
(3) その他の出土遺物	91
B. 縄文時代の遺物	94
5. VI区の調査	96

A. 古墳時代の遺構と遺物	96
(1) 竪穴住居跡	96
(2) 土 坑	100
6. VII区の調査	101
A. 古墳時代以降の遺構と遺物	101
(1) 竪穴住居跡	101
(2) 挿立柱建物跡	173
(3) 棚 列	175
(4) 土 坑	178
(5) 製鉄遺構	190
(6) 大 溝	190
(7) 小 溝	195
(8) その他の出土遺物	203
B. 旧石器・縄文時代の遺物	206
7. VIII区の調査	208
A. 古墳時代の遺構と遺物	208
(1) 竪穴住居跡	208
(2) 土 坑	215
(3) その他の出土遺物	217
B. 弥生時代の遺構と遺物	219
(1) 竪穴住居跡	219
C. 旧石器・縄文時代の遺物	219
8. IX区の調査	220
A. 古墳時代の遺構と遺物	220
(1) 竪穴住居跡	220
(2) 土 坑	230
(3) その他の出土遺物	230
B. 弥生時代の遺物	231
IV 自然科学的分析	234
1. C ¹⁴ 年代測定結果報告	234
2. 外之限遺跡III区住居跡カマドの地磁気年代	235
3. 朝倉町外之限出土青銅鏡の鉛同位体比測定結果	241

V 総 括	243
1. 外之限遺跡の集落について	243
2. カマドの構造について	245

図 版 目 次

巻頭図版 1 外之限遺跡遠景（調査後）

巻頭図版 2 (1) 外之限遺跡V区全景
 (2) 外之限遺跡VII区全景

本文対象頁

図 版 1	外之限遺跡周辺航空写真（国土地理院 KU-76-2X）	7
図 版 2 (1)	外之限遺跡遠景（筑後川対岸から望む）	7
	(2) 外之限遺跡及び志波台地遠景（恵蔵八幡宮上空から望む）	7
<III 区>		
図 版 3 (1)	III区全景（北から）	10
	(2) III区全景（南東から）	10
図 版 4 (1)	1・2号住居跡（南から）	11
	(2) 同貼床下部（南から）	11
	(3) 1号住居跡カマド（南西から）	12
図 版 5 (1)	3・4号住居跡, S X1 (南西から)	15
	(2) 2号住居跡カマド（南から）	13
	(3) 3号住居跡カマド（南西から）	19
図 版 6 (1)	4号住居跡カマド（西から）	21
	(2) 6・13号住居跡（南西から）	24
	(3) 13号住居跡カマド（南西から）	36
図 版 7 (1)	7号住居跡（南西から）	27
	(2) 7号住居跡カマド（南西から）	27
	(3) 热残留磁気サンプル採取後	27
図 版 8 (1)	9号住居跡（南から）	29
	(2) 9号住居跡カマド（北東から）	31
	(3) 10号住居跡（南東から）	31

図 版 9	(1) 11号住居跡（南東から）	31
	(2) 11号住居跡カマド（南西から）	33
	(3) カマド発掘状況（南西から）	33
図 版 10	(1) 5・12号住居跡（西から）	23
	(2) 12号住居跡カマド（南西から）	35
	(3) 14号住居跡カマド（南から）	38
図 版 11	(1) SX1（南から）	43
	(2) SX1遺物出土状況（南から）	43
	(3) SX4（南西から）	46
図 版 12	1~4号住居跡出土土器	12
図 版 13	4~9号住居跡出土土器	21
図 版 14	9・11・12・14~16号住居跡, SX4, ピット出土土器	31
図 版 15	(1) SX1出土土器①	43
	(2) SX1出土土器②	43
	(3) III区出土繩文土器	48
図 版 16	(1) III区出土石器①	49
	(2) III区出土石器②	49
	(3) III区出土石器・土製品・その他	42
	(4) III区出土鉄器	42
〈IV 区〉		
図 版 17	(1) IV区全景（南上空から）	50
	(2) IV区全景（東から）	50
図 版 18	(1) 西端トレンチ（東から）	64
	(2) 西端トレンチ土層	64
	(3) IV区出土石器	64
図 版 19	(1) 1号住居跡（東から）	50
	(2) 1号住居跡カマド（南から）	51
図 版 20	(1) 2号住居跡（南東から）	54
	(2) 2号住居跡カマド（南東から）	54
図 版 21	(1) 1号土坑（西から）	59
	(2) 5号土坑（北東から）	63
	(3) 1号住居跡出土土器	54
図 版 22	(1) 2号住居跡, 3号土坑出土土器	55

(2) 住居跡・土坑山土土製品	61
(3) 西端トレンチ出土鉄器	63
<V 区>	
図 版 23 (1) V区全景（西上空から）	65
(2) V区東端部（西から）	65
図 版 24 (1) 1号住居跡（北西から）	65
(2) 1号住居跡カマド（南西から）	66
(3) 煙道部断面（南西から）	66
図 版 25 (1) 2号住居跡（南西から）	67
(2) 2号住居跡カマド（南西から）	69
図 版 26 (1) 3号住居跡（南西から）	70
(2) 3号住居跡カマド（南西から）	73
(3) 遺物出土状況（南東から）	70
図 版 27 (1) 4・5号住居跡（東から）	77
(2) 5号住居跡カマド及び遺物出土状況（東から）	77
図 版 28 (1) 6号住居跡（南東から）	78
(2) 6号住居跡カマド（南東から）	82
(3) 遺物出土状況（南東から）	78
図 版 29 (1) 7号住居跡（南西から）	83
(2) 7号住居跡カマド（南西から）	83
(3) 9号住居跡（南から）	88
図 版 30 (1) 8号住居跡（南東から）	84
(2) 8号住居跡カマド（南東から）	84
(3) 遺物出土状況（南東から）	84
図 版 31 1~3号住居跡出土土器	67
図 版 32 3・5号住居跡出土土器	74
図 版 33 5・6・8号住居跡出土土器	78
図 版 34 8・10号住居跡、1号小溝出土土器	87
図 版 35 (1) 住居跡他出土石器	95
(2) 住居跡他出土石器・石製品・土製品	95
(3) 住居跡他出土鉄器・土製品	95
<VI 区>	
図 版 36 (1) VI区全景（西上空から）	96

(2) 1号土坑（北西から）	100
図版 37 (1) 1号住居跡（南東から）	96
(2) 1号住居跡カマド及び遺物出土状況（南東から）	96
図版 38 (1) 2号住居跡（西から）	99
(2) 1・2号住居跡出土土器	97
〈VII 区〉	
図版 39 (1) VII・VIII区全景（北西上空から）	101
(2) VII区全景（南東から）	101
図版 40 (1) VII区東端部上段（北から）	101
(2) VII区東端部下段（北から）	101
図版 41 (1) 1号住居跡（北西から）	101
(2) 1号住居跡カマド（南西から）	101
(3) カマド完掘状況（南西から）	101
図版 42 (1) 2号住居跡（東から）	103
(2) 2号住居跡カマド（南西から）	105
(3) 遺物出土状況（南東から）	105
図版 43 (1) 3号住居跡（南西から）	109
(2) 3号住居跡カマド（南西から）	110
(3) 4号住居跡（南西から）	112
図版 44 (1) 5号住居跡（南東から）	114
(2) 遺物出土状況（北東から）	114
(3) 6号住居跡、2号建物跡（北西から）	115
図版 45 (1) 7号住居跡（南西から）	117
(2) 7号住居跡カマド（南西から）	117
図版 46 (1) VII区西端部住居群（西から）	120
(2) 9~11・16号住居跡（南から）	120
図版 47 (1) 9号住居跡（北から）	120
(2) 9号住居跡カマド（南から）	120
(3) 10号住居跡（東から）	122
図版 48 (1) 11号住居跡（南から）	123
(2) 11号住居跡カマド（南から）	123
図版 49 (1) カマド内遺物出土状況（南から）	123
(2) カマド完掘状況（南から）	123

	(3) カマド袖部横断面（南から）	123
図版 50	(1) 12号住居跡（北西から）	128
	(2) 13号住居跡（西から）	130
	(3) 13号住居跡カマド（南から）	131
図版 51	(1) 14・20号住居跡、3号櫛列、3号大溝（北西から）	132
	(2) 14号住居跡（西から）	132
図版 52	(1) 15号住居跡（南から）	132
	(2) 15号住居跡カマド（南から）	133
	(3) 遺物出土状況（南から）	133
図版 53	(1) 17号住居跡（南西から）	137
	(2) 17号住居跡カマド（南西から）	139
	(3) カマド袖部縦断面（東から）	139
図版 54	(1) 18号住居跡（南西から）	142
	(2) 19号住居跡（南から）	144
	(3) 19号住居跡カマド（西から）	144
図版 55	(1) 20号住居跡（西から）	147
	(2) 22号住居跡（南西から）	148
	(3) 23号住居跡（南西から）	150
図版 56	(1) 24号住居跡（南東から）	150
	(2) 24号住居跡カマド（南東から）	150
	(3) 遺物出土状況（北東から）	150
図版 57	(1) VII区中央部下段住居跡群（南西上空から）	151
	(2) 25号住居跡（東から）	151
図版 58	(1) 27号住居跡（南西から）	153
	(2) 27号住居跡カマド（南西から）	154
図版 59	(1) 28号住居跡（北東から）	156
	(2) 29号住居跡（南西から）	159
	(3) 29号住居跡カマド（南西から）	159
図版 60	(1) 30号住居跡（北西から）	162
	(2) 31号住居跡（南東から）	162
	(3) 32号住居跡（東から）	162
図版 61	(1) 32号住居跡土層断面（南から）	162
	(2) 同貼床下部（東から）	162

(3) 32号住居跡カマド（東から）	162
図 版 62 (1) 33号住居跡（東から）	165
(2) 同貼床下部（東から）	165
(3) 33号住居跡カマド（南東から）	165
図 版 63 (1) 34号住居跡（西から）	165
(2) 同貼床下部（西から）	165
(3) 34号住居跡カマド（西から）	165
図 版 64 (1) 36号住居跡（北西から）	170
(2) 37号住居跡（南から）	171
(3) 37号住居跡カマド（南から）	172
図 版 65 (1) VII区中央部上段遺構群（北西から）	173
(2) 1号建物跡、4号土坑（北西から）	173
図 版 66 (1) 3・4号建物跡（西から）	173
(2) 1号柵列（北西から）	175
(3) 檻列柱穴土層断面（南西から）	175
図 版 67 (1) 2号柵列（南西から）	178
(2) 3号柵列、3号大溝（南東から）	178
(3) 3号柵列柱穴内耳環出土状況	178
図 版 68 (1) 1号土坑（南東から）	178
(2) 遺物出土状況（南東から）	178
(3) 1号土坑土層断面（北西から）	178
図 版 69 (1) 3号土坑、5号小溝（南東から）	181
(2) 3号土坑土層断面（北西から）	181
図 版 70 (1) 4号土坑（北西から）	184
(2) 遺物出土状況（南西から）	184
(3) 5号土坑（東から）	184
図 版 71 (1) 6号土坑（南東から）	184
(2) 遺物出土状況（西から）	184
(3) 7号土坑（北西から）	185
図 版 72 (1) 9号土坑（北東から）	188
(2) 10号土坑（北東から）	188
(3) 11号土坑（北西から）	188
図 版 73 (1) 1号製鉄遺構（南東から）	190

(2) 1号大溝、1・2号小溝、2号土坑（南東から）	190
図版 74 (1) 2号大溝（北東から）	191
(2) 2号大溝土層断面（南西から）	191
(3) 遺物出土状況（南東から）	191
図版 75 (1) 3号大溝（北西から）	193
(2) 3号大溝土層断面（南東から）	193
(3) 鉄鎌出土状況（南東から）	193
(4) 土師器甕出土状況（南東から）	193
図版 76 (1) 6号小溝（南から）	198
(2) 10号小溝（南西から）	201
(3) 12号小溝（南から）	202
図版 77 1・2号住居跡出土土器	101
図版 78 2～4号住居跡出土土器	105
図版 79 5～7・10号住居跡出土土器	114
図版 80 11・13号住居跡出土土器	124
図版 81 15・17号住居跡出土土器	133
図版 82 17～20・24号住居跡出土土器	139
図版 83 24・27・29・31・33・34号住居跡出土土器	150
図版 84 37号住居跡、1～4号土坑出土土器	173
図版 85 6・8号土坑、2・3号大溝、2・3号小溝出土土器	185
図版 86 (1) 5・10号小溝出土土器	198
(2) VII区出土石器	206
図版 87 (1) VII出土石器・石製品	207
(2) VII区出土鉄器①	205
(3) VII区出土鉄器②	205
図版 88 VII区出土土製品	207
〈Ⅶ区〉	
図版 89 (1) VII区西端・Ⅷ区全景（南上空から）	208
(2) Ⅷ区全景（北西から）	208
図版 90 (1) 1～4号住居跡（北から）	219
(2) 1号住居跡（北から）	219
図版 91 (1) 2号住居跡（南から）	208
(2) 4号住居跡（南から）	210

図 版 92 (1) 6号住居跡 (西から)	213
(2) 1・2号土坑 (北西から)	217
図 版 93 (1) 1・2・4~6号住居跡出土土器	208
(2) 5号住居跡出土紡錘車	213
(3) VII区出土石器	219
〈IX 区〉	
図 版 94 (1) IX区調査前状況 (西上空から)	220
(2) IX区全景 (横断道開通後, 南上空から)	220
図 版 95 (1) 1号住居跡 (南東から)	220
(2) 1号住居跡カマド (南から)	220
(3) 遺物出土状況 (東から)	220
図 版 96 (1) 2号住居跡 (西から)	224
(2) 土層断面 (西から)	224
(3) 2号住居跡カマド (南西から)	224
図 版 97 (1) 3号住居跡 (南東から)	229
(2) 遺物出土状況 (北西から)	229
図 版 98 1・2号住居跡出土土器	220
図 版 99 2・3号住居跡出土土器	224
図 版 100 外之隈遺跡四景	

挿 図 目 次

第 1 図 九州横断自動車道路線図	
第 2 図 外之隈遺跡地区割図 (1/3,000)	1
第 3 図 外之隈遺跡地形図 (1/3,000)	3
第 4 図 外之隈遺跡周辺地形図 (1/10,000)	6
第 5 図 外之隈遺跡周辺遺跡分布図	折込
〈III 区〉	
第 6 図 III区遺構配置図 (1/200)	折込
第 7 図 1号住居跡実測図 (1/60)	12
第 8 図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)	12

第 9 図	1号住居跡出土土器実測図 (1/3)	13
第 10 図	2・16号住居跡実測図 (1/60)	14
第 11 図	2号住居跡カマド実測図 (1/30)	15
第 12 図	2号住居跡出土土器実測図① (1/3)	16
第 13 図	2号住居跡出土土器実測図② (1/3)	17
第 14 図	3・4号住居跡実測図 (1/60)	18
第 15 図	3・4号住居跡カマド実測図 (1/30)	19
第 16 図	3号住居跡出土土器実測図① (1/3)	20
第 17 図	3号住居跡出土土器実測図② (1/3)	21
第 18 図	4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	22
第 19 図	5・12号住居跡実測図 (1/60)	23
第 20 図	5号住居跡出土土器実測図 (1/3)	24
第 21 図	6・13号住居跡実測図 (1/60)	25
第 22 図	6号住居跡出土土器実測図 (1/3)	25
第 23 図	7・8・15号住居跡実測図 (1/60)	26
第 24 図	7号住居跡カマド実測図 (1/30)	27
第 25 図	7・8号住居跡出土土器実測図 (1/3)	28
第 26 図	9号住居跡実測図 (1/60)	29
第 27 図	9号住居跡カマド実測図 (1/30)	29
第 28 図	9号住居跡出土土器実測図 (1/3)	30
第 29 図	10・11号住居跡実測図 (1/60)	32
第 30 図	10・11号住居跡出土土器実測図 (1/3)	33
第 31 図	11号住居跡カマド実測図 (1/30)	34
第 32 図	12号住居跡カマド実測図 (1/30)	34
第 33 図	12号住居跡出土土器実測図 (1/3)	35
第 34 図	13号住居跡カマド実測図 (1/30)	36
第 35 図	13号住居跡出土土器実測図 (1/3)	37
第 36 図	14号住居跡カマド実測図 (1/30)	37
第 37 図	14号住居跡出土土器実測図 (1/3)	38
第 38 図	15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)	39
第 39 図	S X2・3実測図 (1/60)	40
第 40 図	ピット他出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	41
第 41 図	III区出土鐵器他実測図 (1/2)	42

第 42 図 S X1実測図 (1/60)	44
第 43 図 S X1出土土器実測図① (1/3)	45
第 44 図 S X1出土土器実測図② (1/3)	46
第 45 図 S X4実測図 (1/20)	46
第 46 図 S X4出土土器実測図 (1/3)	47
第 47 図 繩文・弥生土器実測図 (1/3)	47
第 48 図 III区出土石器実測図① (1/3)	48
第 49 図 III区出土石器実測図② (1/2)	49
<IV 区>	
第 50 図 1号住居跡実測図 (1/60)	50
第 51 図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)	51
第 52 図 住居跡出土土器実測図① (1/3)	52
第 53 図 住居跡出土土器実測図② (1/3)	53
第 54 図 2号住居跡実測図 (1/60)	55
第 55 図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)	56
第 56 図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)	57
第 57 図 住居跡出土土器実測図④ (1/3)	58
第 58 図 1号土坑実測図 (1/30)	59
第 59 図 2~5号土坑実測図 (1/40)	61
第 60 図 土坑出土土器実測図 (1/3)	62
第 61 図 IV区出土石器・鐵器・土製品実測図 (1/2)	63
第 62 図 調査区北壁土層断面図 (1/100)	64
<V 区>	
第 63 図 1号住居跡実測図 (1/60)	65
第 64 図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)	66
第 65 図 住居跡出土土器実測図① (1/3)	68
第 66 図 2号住居跡実測図 (1/60)	69
第 67 図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)	70
第 68 図 住居跡出土土器実測図② (1/3)	71
第 69 図 3号住居跡実測図 (1/60)	72
第 70 図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)	73
第 71 図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)	75
第 72 図 4・5号住居跡実測図 (1/60)	76

第 73 図	5号住居跡カマド実測図 (1/30)	77
第 74 図	6号住居跡カマド実測図 (1/30)	78
第 75 図	住居跡出土土器実測図① (1/3)	79
第 76 図	住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)	80
第 77 図	住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)	81
第 78 図	6・7号住居跡実測図 (1/60)	82
第 79 図	7号住居跡カマド実測図 (1/30)	83
第 80 図	8号住居跡カマド実測図 (1/30)	84
第 81 図	8号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 82 図	住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)	85
第 83 図	住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)	86
第 84 図	9・10号住居跡実測図 (1/60)	88
第 85 図	10号住居跡カマド実測図 (1/30)	89
第 86 図	住居跡出土土器実測図⑨ (1/3)	90
第 87 図	落込み出土土器実測図 (1/3)	91
第 88 図	1・2号落込み実測図 (1/80)	92
第 89 図	溝出土土器実測図 (1/3)	93
第 90 図	遺構検出時出土土器実測図 (1/3)	93
第 91 図	V区出土石器・鉄器・土製品実測図 (1/2)	95
<VI 区>		
第 92 図	1号住居跡実測図 (1/60)	96
第 93 図	1号住居跡カマド実測図 (1/30)	97
第 94 図	住居跡出土土器実測図 (1/3)	98
第 95 図	2号住居跡実測図 (1/60)	99
第 96 図	2号住居跡カマド実測図 (1/30)	100
第 97 図	1号土坑実測図 (1/60)	100
<VII 区>		
第 98 図	1号住居跡実測図 (1/60)	102
第 99 図	1号住居跡カマド実測図 (1/30)	103
第 100 図	住居跡出土土器実測図① (1/3)	104
第 101 図	2号住居跡実測図 (1/60)	105
第 102 図	2号住居跡カマド実測図 (1/30)	106
第 103 図	住居跡出土土器実測図② (1/3)	107

第 104 図	住居跡出土土器実測図③ (1/3)	108
第 105 図	3号住居跡実測図 (1/60)	109
第 106 図	3号住居跡カマド実測図 (1/30)	110
第 107 図	住居跡出土土器実測図④ (1/3)	111
第 108 図	4号住居跡実測図 (1/60)	112
第 109 図	住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)	113
第 110 図	5号住居跡実測図 (1/60)	114
第 111 図	6号住居跡・2号建物跡実測図 (1/60)	115
第 112 図	7号住居跡実測図 (1/60)	116
第 113 図	7号住居跡カマド実測図 (1/30)	117
第 114 図	8号住居跡実測図 (1/60)	118
第 115 図	住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)	119
第 116 図	9号住居跡実測図 (1/60)	121
第 117 図	9号住居跡カマド実測図 (1/30)	122
第 118 図	10号住居跡実測図 (1/60)	123
第 119 図	11号住居跡実測図 (1/60)	124
第 120 図	11号住居跡カマド実測図 (1/30)	125
第 121 図	住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)	126
第 122 図	住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)	127
第 123 図	12号住居跡実測図 (1/60)	128
第 124 図	住居跡出土土器実測図⑨ (1/3)	129
第 125 図	13号住居跡実測図 (1/60)	130
第 126 図	13号住居跡カマド実測図 (1/30)	131
第 127 図	14号住居跡実測図 (1/60)	132
第 128 図	15号住居跡実測図 (1/60)	133
第 129 図	15号住居跡カマド実測図 (1/30)	134
第 130 図	住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)	135
第 131 図	16号住居跡実測図 (1/60)	136
第 132 図	17号住居跡実測図 (1/60)	137
第 133 図	17号住居跡カマド実測図 (1/30)	138
第 134 図	住居跡出土土器実測図⑪ (1/3)	140
第 135 図	住居跡出土土器実測図⑫ (1/3)	141
第 136 図	18・24号住居跡実測図 (1/60)	142

第 137 図	18号住居跡カマド実測図 (1/30)	143
第 138 図	19号住居跡実測図 (1/60)	144
第 139 図	19号住居跡カマド実測図 (1/30)	145
第 140 図	住居跡出土土器実測図⑬ (1/3)	146
第 141 図	20号住居跡実測図 (1/60)	147
第 142 図	21号住居跡実測図 (1/60)	148
第 143 図	22・23号住居跡実測図 (1/60)	149
第 144 図	24号住居跡カマド実測図 (1/30)	151
第 145 図	住居跡出土土器実測図⑭ (1/3)	152
第 146 図	25・26号住居跡実測図 (1/60)	153
第 147 図	27号住居跡実測図 (1/60)	154
第 148 図	27号住居跡カマド実測図 (1/30)	155
第 149 図	28号住居跡実測図 (1/60)	156
第 150 図	住居跡出土土器実測図⑮ (1/3)	157
第 151 図	29・30号住居跡実測図 (1/60)	158
第 152 図	29号住居跡カマド実測図 (1/30)	159
第 153 図	住居跡出土土器実測図⑯ (1/3)	160
第 154 図	31号住居跡実測図 (1/60)	161
第 155 図	32号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 156 図	32号住居跡カマド実測図 (1/30)	163
第 157 図	住居跡出土土器実測図⑰ (1/3)	164
第 158 図	33・36号住居跡実測図 (1/60)	166
第 159 図	34・35号住居跡実測図 (1/60)	167
第 160 図	34号住居跡カマド実測図 (1/30)	168
第 161 図	住居跡出土土器実測図⑲ (1/3)	169
第 162 図	住居跡出土土器実測図⑳ (1/3)	170
第 163 図	37号住居跡実測図 (1/60)	171
第 164 図	37号住居跡カマド実測図 (1/30)	172
第 165 図	1・3・4号建物跡実測図 (1/80)	174
第 166 図	建物跡・櫛列出土土器実測図 (1/3)	175
第 167 図	1号櫛列実測図 (1/120)	176
第 168 図	2・3号櫛列実測図 (1/120)	177
第 169 図	1・3号土坑, 5号小溝実測図 (1/100)	179

第 170 図 土坑出土土器実測図① (1/3)	180
第 171 図 土坑出土土器実測図② (1/3)	182
第 172 図 4・5号土坑実測図 (1/80)	183
第 173 図 6号土坑実測図 (1/80)	185
第 174 図 2・7・8・12・14号土坑実測図 (1/60)	186
第 175 図 土坑出土土器実測図③ (1/3)	187
第 176 図 9~11・13号土坑実測図 (1/40)	189
第 177 図 1号製鉄遺構実測図 (1/30)	190
第 178 図 製鉄遺構出土土器実測図 (1/3)	190
第 179 図 1~3号大溝土層断面実測図 (1/80)	191
第 180 図 大溝出土土器実測図① (1/3)	192
第 181 図 大溝出土土器実測図② (1/3)	194
第 182 図 小溝出土土器実測図① (1/3)	196
第 183 図 小溝出土土器実測図② (1/3)	197
第 184 図 4・6・10・14号小溝実測図 (1/100)	199
第 185 図 小溝出土土器実測図③ (1/3)	200
第 186 図 小溝出土土器実測図④ (1/3)	202
第 187 図 ピット・表採他出土土器実測図 (1/3)	204
第 188 図 表採土器実測図 (1/3)	205
第 189 図 VII区出土石器実測図 (1/2)	206
第 190 図 VII区出土石器・鉄器・土製品実測図 (1/2)	207
〈VIII 区〉	
第 191 図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)	208
第 192 図 1~3号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 193 図 住居跡出土土器実測図① (1/3)	209
第 194 図 4号住居跡実測図 (1/60)	211
第 195 図 住居跡出土土器実測図② (1/3)	212
第 196 図 5号住居跡、4号土坑実測図 (1/60)	213
第 197 図 6号住居跡実測図 (1/60)	214
第 198 図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)	215
第 199 図 1~3号土坑実測図 (1/30)	216
第 200 図 捣乱坑他出土土器実測図 (1/3)	218
第 201 図 VII区出土石器・石製品実測図 (1/2)	219

〈IX 区〉

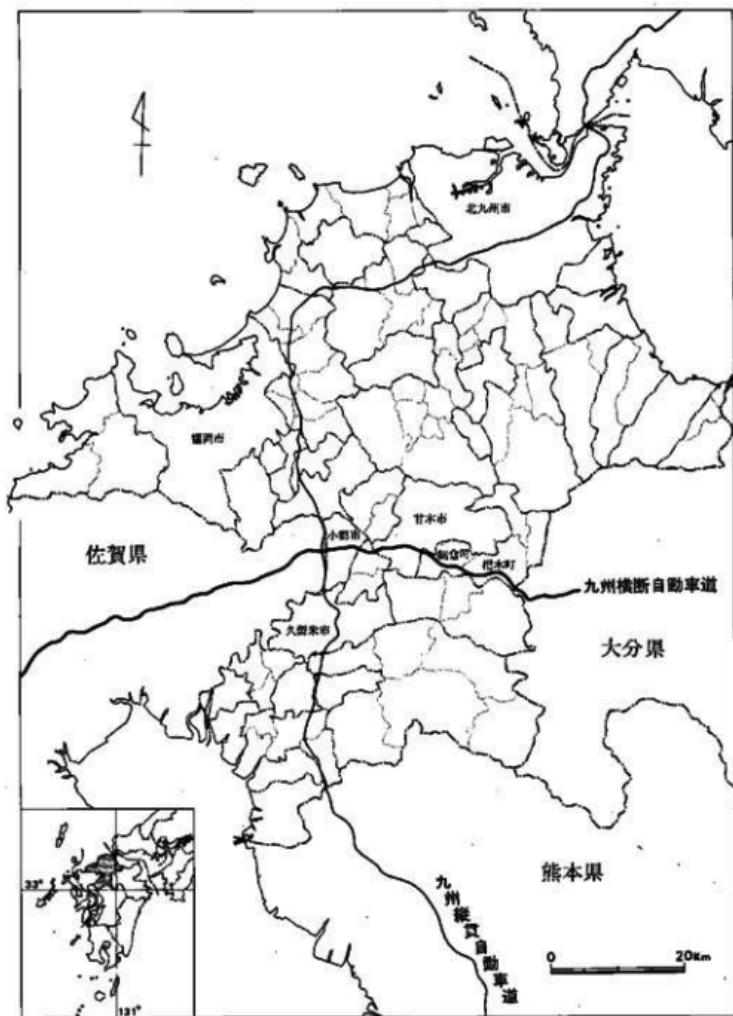
第 202 図	1・3号住居跡、1号土坑実測図 (1/60)	221
第 203 図	住居跡出土土器実測図① (1/3)	222
第 204 図	2号住居跡実測図 (1/60)	223
第 205 図	2号住居跡カマド実測図 (1/30)	225
第 206 図	住居跡出土土器実測図② (1/3)	226
第 207 図	住居跡出土土器実測図③ (1/3)	227
第 208 図	住居跡出土土器実測図④ (1/3)	228
第 209 図	住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)	229
第 210 図	2号土坑実測図 (1/30)	231
第 211 図	表探土器実測図 (1/3)	231
第 212 図	熱残留磁気測定関係図①	239
第 213 図	熱残留磁気測定関係図②	240
第 214 図	外之限出土青銅鏡の鉛同位体比	242
第 215 図	外之限遺跡集落変遷図	243
第 216 図	外之限遺跡カマド分類図	245
第 217 図	カマド主軸方位グラフ	245
第 218 図	V区3号住居跡カマド煙道部壁面拓影	246

表 目 次

表 1	外之限遺跡調査進行表	1
表 2	住居跡一覧表	232
表 3	外之限出土青銅鏡の鉛同位体比	242

付 図 目 次

付 図 1	外之限遺跡地形測量図 (1/400)
付 図 2	外之限遺跡遺構配置図 (1/400)
付 図 3	V区遺構配置図 (1/200)
付 図 4	VII・VIII区遺構配置図 (1/200)



第1図 九州横断自動車道路線図

I 調査組織と調査経過

一次調査の経過

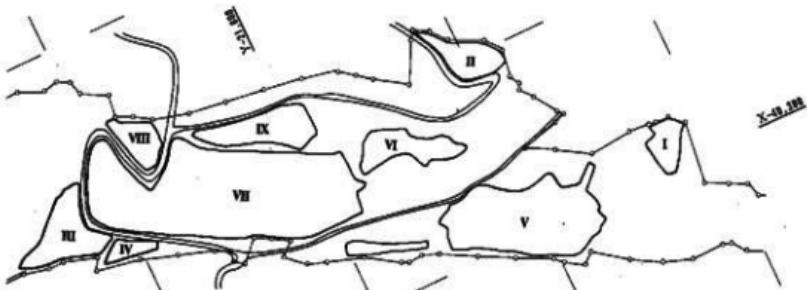
九州横断自動車道第38地点（建設工事区のSTA227+90～231+40）は、麻底良山から筑後川に向かって派生した丘陵の南斜面に該当し、STA231+20付近が朝倉町と杷木町との町境にある。この町境の台地においては、昭和31（1956）年に福岡県立朝倉高等学校史学部が外限遺跡として石棺墓2基・無蓋土塚（木棺墓）2基を調査した箇所である。

当該地において横断道の路線は、丘陵斜面部を通過するため本線部分に加えて丘陵斜面の大規模な開削が行われることとなり、約26,000m²を調査対象面積としたが、試掘の結果、遺構が存在しないI-V区间の急傾斜面とVI区北・東・南方の急傾斜面を除外した約12,700m²について発掘調査を行った。調査以前は柿畠・雜木林であり、調査区内を走る農道を境にしてI-VII区まで便宜的に区分け（第2図）した。調査は必ずしもI区から順番に行ったわけではなく、遺構番号が極端に離れる恐れから、各区ごとに1番から遺構番号を付して対処した。なお、I-II区の調査経過については、「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-35-外之限遺跡 I」に詳述されており、そちらを参照されたい。

I区は本陣山から筑後川に突き出た丘陵の頂部（標高77m）で、かつて朝倉高校が調査を行った箇所である。昭和62年11月16日から調査を開始し、墳丘墓2基を検出した。1号墓・朝倉高

表1 外之限遺跡調査日程表

月	11	12	1985	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日															
I															
II															
III															
IV															
V															
VI															
VII															



第2図 外之限遺跡地区割図 (1/3,000)

校調査の4号無蓋土壙から画文帶神獸鏡と勾玉が出土した。II区はI区から北西方向に100m程度行った箇所で、丘陵鞍部（標高101m）において墳丘墓1基を調査した。墳丘墓には6基の墓が埋葬されており、1号墓から重圓連弧文鏡が、2号墓からは飛禽鏡が出土した。III区は調査区西端の丘陵平坦部で、翌年1月7日から遺構検出を行った。縄文時代の住居跡・土坑及び6世紀後半の住居跡を検出したが、II区と併行して行ったため日々山道を往来しての調査となった。

V区はI区西側の丘陵斜面部で、1月中旬頃より表土剥ぎを開始した。近世墓に手をつけたもののII・III区と併行しての調査であり、また、面積が広いこともあってII区の調査が一段落した5月に入つてから本格的に取りかかった。7月上旬、これまで調査を担当していた伊崎が広幡城跡（椎田バイパス関係）の調査のため豊前に赴くこととなり、大迫遺跡の調査が終了次第、井上・小田が引き継ぐこととなった。交替した早々の7月中旬、集中豪雨に見舞われ、V区1号墳西側の土壁が崩壊し、開道まで土砂が流失し、その復旧作業で手間取った。V区では6世紀前半の円墳1基と6世紀中～後半の住居群・落込み及び近世墓3基を検出した。

VII区はV区の40m西側の緩傾斜面で、V区の調査中に併行して表土剥ぎを行った。当該区は区分中約5,800m²と最も広い面積を有する。10月初頭、東端部から遺構検出を始めたが、柿畑の開削によって遺構密度は割とまばらであった。6世紀後半の竪穴住居・建物・樹列・土壙・溝・製鉄遺構などを検出している。VI区はVII区東側の急傾斜面（標高70m）であるが、ややフラットな面がみられたため念のために表土を剥いだところ、竪穴住居跡2軒・土坑1基を検出した。あの様な急な場所にも人々が生活していたのかと全く驚かされた。

VIII区は調査区北西端で、農道の存在によりVII区とは区分した。弥生時代の円形住居跡1軒及び6世紀後半の竪穴住居跡5軒・土坑を検出した。IV区は農道を挟んだIII区の東隣であるが、現場事務所・テントを設営していたため最後にまわし、調査はVII区と併行して行った。

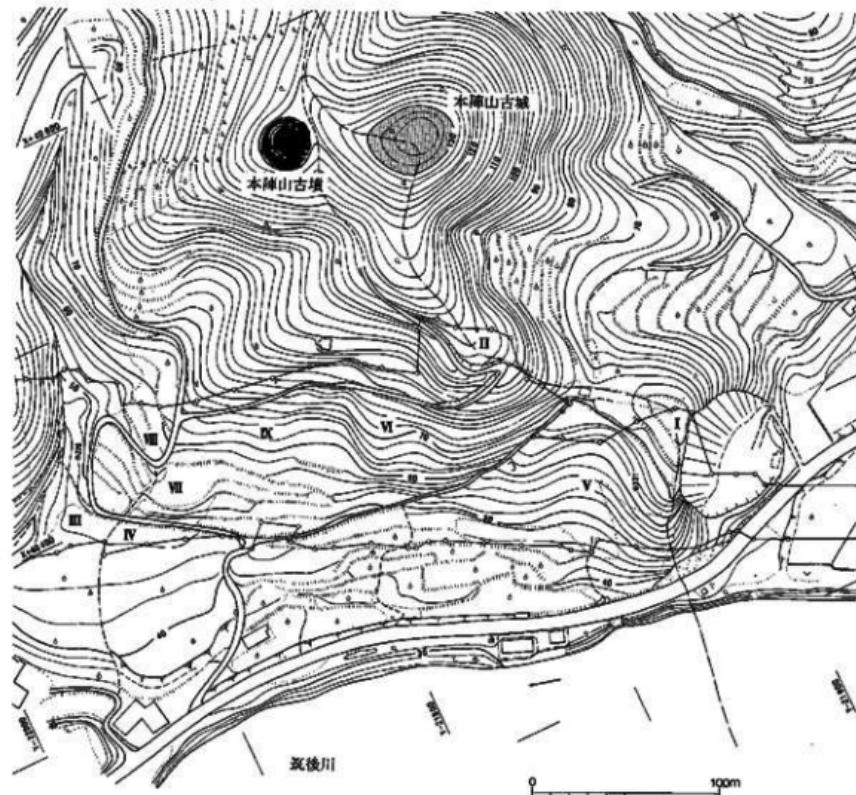
外之限遺跡の一次調査は、I区を昭和62年11月16日より開始し、翌年12月27日のIV区トレント土層実測の終了でもって完了した。調査期間は約1年2ヶ月の長さに及ぶが、供用開始の工期が追迫していたため公團側の意向を尊重し、工事と併行しながらの調査となつたため調査終盤においては、調査期限及び重機・ダンプの騒音・排煙との戦いでもあった。

二次調査の経過

横断道朝倉一杞木間開通後の平成2年6月30日～7月1日の集中豪雨によりSTA229+00周辺法面の一部が崩壊する危険性が生じ、急速、防災工事を施す必要が生じた旨の連絡が道路公団日川管理事務所より入った。現地の丘陵斜面部には、既に隨所にクラックがみられ、発掘調査を実施する上でも危険性があるため、短期間で必要最小限の調査を実施することとなつた。

諸般の事情により、調査は9月5日から開始したが、重機による表土剥ぎができないためベルコンと八輪ダンプを投入しての人海戦術となつた。VII区との関係上、遺構が存在する可能性の

地区	遺構概要	出土遺物	調査期間	調査面積	調査担当者
I	墳丘墓・土坑	古式土師器・須恵器・鉄器・玉類	871116~880323	約 380 m ²	伊崎・木村
II	墳丘墓・土坑	土師器・鉛鏡・鐵器	871211~880705	約 380 m ²	#
III	住居・土坑	縄文土器・須恵器・土師器・石器	880107~880309	約 930 m ²	#
IV	住居・土坑	須恵器・土師器・鉄器・土製品・旧石器	881125~881227	約 220 m ²	井上・小田・日高
V	住居・落込み・円墳・近世窓	須恵器・土師器・鐵器・土製品・石器	880119~881012	約 2,870 m ²	#
VI	住居・土坑	須恵器・土師器	881001~881026	約 730 m ²	#
VII	住居・建物・階列・土坑・溝	須恵器・土師器・鐵器・土製品・旧石器	881001~881226	約 5,840 m ²	#
VIII	住居・土坑	須恵器・土師器・石製品	881125~881226	約 470 m ²	#
IX	住居・土坑	須恵器・土師器	900905~901011	約 910 m ²	#



第3図 外之限遺跡地形図 (1/3,000)

高い箇所を選びトレーンチを設定し、造構がかかれば拡張するという手法を用いた。その結果、6世紀後半の豊穴住居跡3軒と土坑1基を検出し、ここを報告書ではIX区とした。調査期間中、数日雨に見舞われたが、10月11日に無事調査を終了することができた。

昭和62・63年度の調査関係者及び平成6年度の整理関係者については、外之隈遺跡Ⅰに掲載済みなので、今回は平成2年度の調査関係者と平成7年度の整理関係者について掲載する。

平成2年度

日本道路公団福岡管理局

局長	笠坂 繁（前任）	柴本 悅士
次長	小西 康夫	
業務部長	添島 孝志（前任）	湯原 裕
管理第一課長	勝久 明	
管理第一課長代理	鳥羽 正美	

福岡建設局

局長	倉沢 真也
次長	飛田 孝
総務部長	佐野 博志
管理課長	三根 敬正
管理課長代行	前田 正信

平成7年度

福岡県教育委員会

教育長	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	濱地 茂伯	松枝 功
理事	亀谷 陽三（兼任）	田中 正行
指導第二部長	月森 清三郎	丸林 茂夫
指導第二部参事	葉石 煉	
文化課長	六本木 聖久	松尾 正俊
文化課参事	森本 精造	柳田 康雄
文化課課長補佐	安野 義勝	元永 浩士
文化課技術補佐	石松 好雄	
文化課参事補佐	中矢 真人	井上 裕弘
同	大塚 健	櫛口 達也
同	池原 健治	川述 昭人
同	松尾 正俊	木下 修
同	柳田 康雄	角 伸幸
同	井上 裕弘	児玉 真一
同	石山 煉	新原 正典
同	濱田 信也	磯村 幸男
同	副島 邦弘	中間 研志
同		小池 史哲

[庶務・管理]

文化課庶務係長	池原 健治（兼任）	
文化課管理係長		柴田 勝朗
文化課主任主事	沢田 俊夫	東 健二

[調査]

熱残留磁気調査	島根大学理学部 伊藤晴明・時枝克安
鉛同位体比調査	国立歴史民俗博物館 斎藤 努
炭素年代測定調査	（財団法人）日本アイソトープ協会
文化課調査班	
同 総括	柳田 康雄（兼任）
同 総括補佐	井上 裕弘（兼任、調査・整理担当）
同 技術主査	木下 修（現参事補佐）
同 技術主査	中間 研志（現参事補佐）
同 主任技師	佐々木隆彦（現九州歴史資料館学芸二課参事補佐）
同 主任技師	伊崎 俊秋（現甘木歴史資料館副館長、調査・整理担当）
同 主任技師	小田 和利（現九州歴史資料館調査課主任技師、調査・整理担当）
同 文化財専門員	木村幾多朗（現大分市歴史資料館長、調査担当）
同 文化財専門員	日高 正幸（現小石原村教育委員会、調査担当）
調査補助員	高田 一弘
	武田 光正（現遠賀町教育委員会）
	佐土原逸男
整理指導員	岩瀬 正信

[発掘作業員]

青柳みゆき 足立イツエ 足立シズカ 足立ナツミ 井手 和枝 妹川ミドリ 梅尾 一枝
猿原サチエ 鈴原ミユキ 林 ノブカ 半田 久子 半田 松子 日野智恵子 日野マツ子
日吉キヨノ 星野礼子

[整理作業員]

豊福 弥生 原 カヨ子 関 久江 塩足 里美 渡辺 輝子 高瀬 照美 大野 愛里
宮田 ゆみ 西田美代子 秋吉 邦子 岡 泰子 辻 啓子 穴見 褒子 小国みどり
高島 妙子 近藤 京子 坂本恵津子 安永 敬子 安武 道子 森 紀子

出土鉄器の保存処理は、九州歴史資料館参事補佐横田義章氏の協力による。出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館写真室北岡伸一氏による。

第4圖 外之限道路周辺地形圖 (1/10,000)



II 遺跡の位置と歴史的環境

本題に入る前に、当遺跡の所在する朝倉町について若干紹介しよう。

朝倉町は、福岡県のほぼ中央で、日本有数の穀倉地帯である筑後平野の北東部に位置する。町域の東縁は朝倉郡杷木町と接し、北縁及び西縁は甘木市と接し、町域の南端は筑後川に限られ、浮羽郡田主丸町・吉井町と対峙する。人口約12,000人、面積34.56km²の農業を主体とする町である。かき・ぶどう・もも・なし・りんごなどのフルーツは当町の特産品であり、国指定文化財の三連水車は力強く回り、フルーツ狩りの観光客の目を楽しませている。

主な交通網は、筑紫野市と大分県日田市とを結ぶ国道386号線のみであったが、横断道のインターチェンジを擁し、近年は企業の進出も目立っている。

遺跡の位置

外之限遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字外之限17・18番地他、同字61-2番地他、同字63-1番地他、同字本陣461-2・461-4番地他で、大半が朝倉町に所在するが、I・II区の一部は朝倉郡杷木町大字志波字本陣5828-86・87番地他に含まれる。

朝倉低山地に属する米山（標高590.9m）が南西方向に徐々に高さを減じ、麻底良山（標高294.9m）と高山（標高190.3m）の二つの山に分岐する。麻底良山から南の筑後川に向かいさらに高さを減じるが、その途中に一段小高い本陣山（標高135.6m）があり、そこから延びた丘陵鞍部にII区の墳丘墓が占地する。I区の墳丘墓は、II区からさらに南に下った丘陵突端部に占地し、標高はI区で77m、II区は101mを測る。そこからの眺望は非常に素晴らしい；遺跡の眼下には、筑後川が滔々と流れ、太古より広大な筑後平野に潤いを与え続けてきた。III～IX区はI・II区南西側の丘陵斜面部にあたり、III区西側の谷部を隔てて大迫遺跡と対峙する。また、I・II区丘陵東側の高山と麻底良山に挟まれた小台地が志波台地である。

横断道は、鳥栖インターから鳥栖丘陵・城山丘陵を横切り、朝倉扇状台地群・朝倉低山地を抜けて大分県日田市に通じる。朝倉町内においては大字石成～入地にかけての朝倉扇状台地群を通過し、大字菱野～山田にかけては朝倉低山地を通過する。低山地の裾部においては、従来より群集墳の存在が知られていたが、台地部では朝倉高校の調査によって数例の遺跡が知られる程度であった。大迫遺跡と外之限遺跡は丘陵の急傾斜地に立地し、大迫遺跡では弥生中期前半の集落と7世紀後半の埴輪群及び8世紀後半～9世紀前半の大火葬墓群が、外之限遺跡では6世紀中～末の集落が営まれており、両遺跡はその立地において特異性を示す。しかし、遺跡の立地について、我々遺跡の調査に携わる者の認識を覆した両遺跡の存在意義は高く評価されるべきものである。

歴史的環境

当地域の歴史的事件の筆頭に挙げられるのは、「日本書紀」にその名を残す朝倉橋広庭宮であろう。『日本書紀』齊明天皇七（661）年五月乙未朔癸卯条によると「天皇、朝倉橋広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を斬り除いて、此の宮を作る故に、神忿りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。…（中略）…秋七月の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りましたね。」とあり（註1）、百濟救済のため九州に行幸した齐明天皇は朝倉宮に崩した。

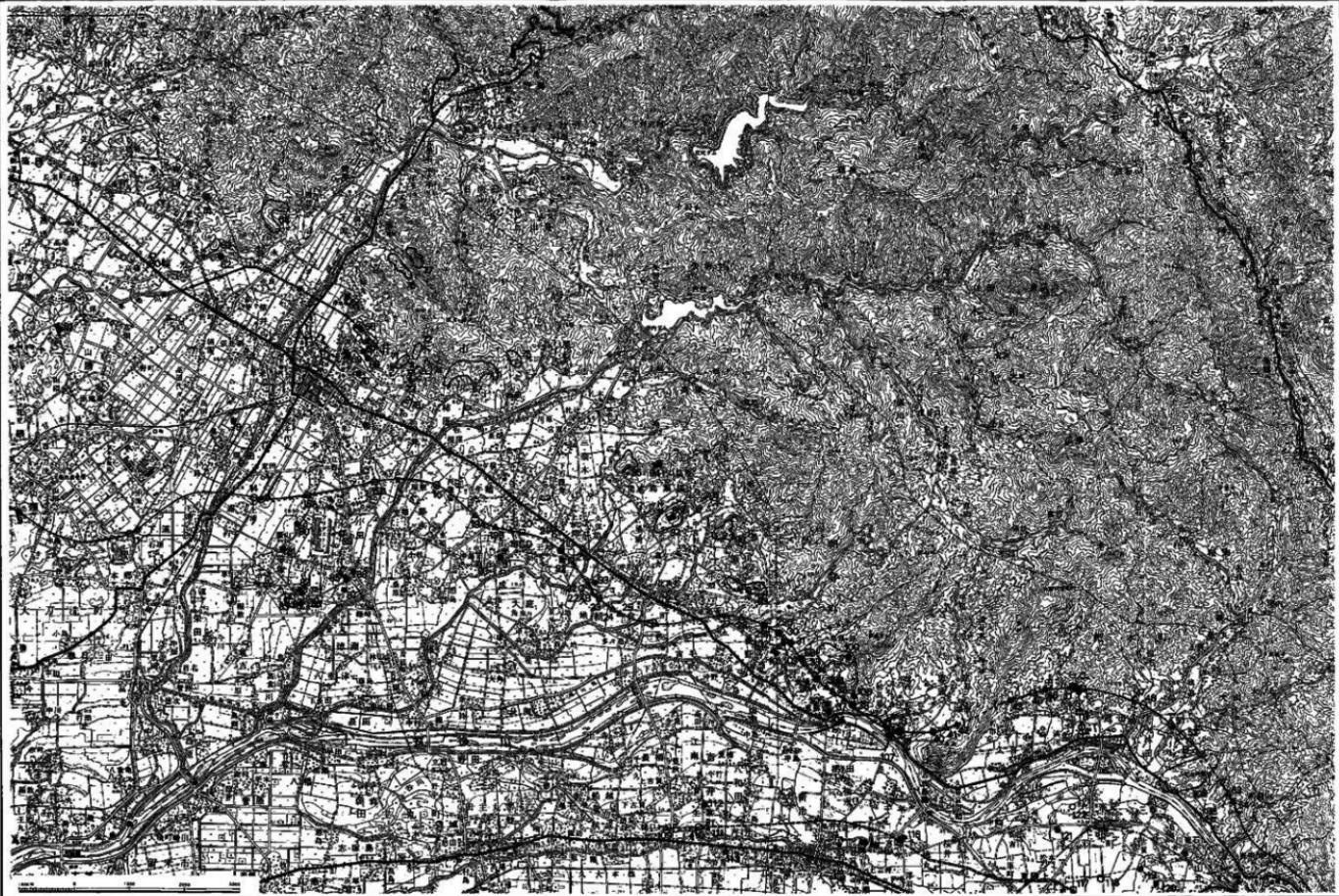
朝倉社は麻底良山頂に鎮座する麻底良布神社とみられ、朝倉町大字須川・同町大字山田・杷木町大字志波の3地区が麻底良山の山麓部に位置することから朝倉宮の候補地として挙がっている。志波台地に立地する杷木宮原遺跡（註2）・志波桑ノ本遺跡（註3）・志波岡本遺跡（註4）の3遺跡からは、桁行方位を等しくする大型の掘立柱建物群が検出され、大追遺跡の火葬墓群の下層から検出された7世紀後半の建物と同一企画のもとに築造されており（註5）、その築造年代は大追遺跡の建物群と同時期とみられる。志波地区は三方を麻底良山と高山で囲まれ、もう一方には自然の濠ともいいくべき筑後川が流れる天然の要害であり、その南には肥沃な平野が広がる。軍事的側面からすると申し分のない所であり、宮本体は志波台地の中心部に存在する可能性が最も高い（註6）。

次に、本跡を特徴付けるのは、急斜面部に立地する古墳時代後期の集落であるが、横断道関係で調査された同時期の遺跡を主にみてゆこう。

上の原遺跡（註7）は、朝倉低山地に属する鬼ヶ城山に源を発する佐田川と荷原川に挟まれた扇状台地の東端部に立地する。弥生時代中期と古墳時代後期及び奈良・平安時代を主体とする大集落跡で、弥生時代中期の斐棺墓・木棺墓・土壙墓からなる墳墓群も埋葬されている。

古墳時代の遺構には、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝がある。6世紀後半～末の竪穴住居跡は20軒検出され、調査区の北半部に展開する。一辺3～6mの方・長方形を呈し、北壁中央に作り付け型及び突出型カマドを付設する。主柱穴は4本であるが、時代の降下とともに住居壁側に寄る傾向があり、カマドも作り付け型から突出型へと変化する（註8）。7世紀後半の竪穴住居は前段階よりも竪穴部が縮小し、一辺2.5～3m程度となっている。

長島遺跡（註9）は、朝倉山塊より派生する中位段丘の先端部に立地し、妙見川と奈良ヶ谷川に挟まれた細長い島状を呈する。C地区において、古墳時代～古代の竪穴住居跡51軒、掘立柱建物跡10棟、土壙墓14基、通路遺構が検出された。本跡で特筆されるのは、24号住居跡出土の鎧帶である。24号住居跡は他の住居跡より一回り大きく、7世紀後半段階にあって一辺6.8mの規模を有する。また、24号住居跡と重複する25号住居跡も大型で、鐵器を保有していた。両住居跡には当集落の長が起居していたのであろう。また、包含層からではあるが、焼塩壺が出土しており、内陸部における塩の流通という問題もはらんでいる。



第5図 外之弘法寺附近道路分布図 (1/50,000)

9	春樹道跡	65	神丸古墳群
11	立於道跡	66	新堀寺古今古墳群
	宮原道跡	67	吉守塚古墳
	トトノ道跡	68	風の上塚古墳
14	西原道跡	69	児の竹古墳
15 A	下原道跡	70	新原道跡
15 B	高原道跡	71	大曾根野辺古墳群
16	等々上道跡	72	大曾根谷台古墳群
19 A	大曾根道跡	73	大曾根南古墳群
19 B	大曾根道跡	74	大曾根北古墳群
19 C	石山久保道跡	75	淀田古墳群
20	中原道跡	76	中原名子古墳群
21 A	西田寺道跡	77	下原名子古墳群
21 C	大曾根保道跡	78	柳原野山古墳群
21 D	上ノ原道跡	79	上ノ原道跡
22 AB	治場ノ上道跡	80	大觀寺道跡
22 C	祇園南道跡	81	東山道跡
23	施設寺道跡	82	神奈古墳
24	宇治道跡	83	小伏宝溝道跡
25	東山出道跡	84	小伏出口道跡
27	長瀬道跡	85	小山茶臼道跡
28	中川見道跡	86	小柳森山道跡
29 A	原ノ東道跡	87	小川小坂古墳
29 B	妙法填築群	88	小平正臣道跡
30	幾原道跡	89	小山蒸籠道跡
31	山ノ仲伴道跡	90	金川中島山道跡
33	長瀬道跡	91	石城古墳
34	今华东道跡	92	乙王丸遺跡
35 A	上ノ宿道跡	93	鍋塚道跡
35 B	葛原山道跡	94	鳥居院1号墳
36	稗田道跡	95	古鹿古墳群
37	大通道跡	96	富堆冢古墳
38	外ノ原道跡	97	宮地獄古墳群
39 A	把木宮原道跡	98	鬼女寺古墳群
39 B	中ノ原道跡	99	御門古墳群
40	志走桑ノ木道跡	100	山田良田古墳群
41	志走桑本道跡	101	御門古墳
42	江原道跡	102	御門西道跡 〔工事用道路〕
43	大通道跡	103	總見古墳
45	磐田道跡	104	鬼屋八幡古墳群
46	夕月・天麗道跡	105	鬼屋山古墳群
47	上佐田道跡	106	本澤古墳
48	畠原道跡	107	志走室滴首古墳
51	植原道跡	108	把木神籠石
52 A	小原道跡	109	豐原五反田道跡
52 B	二谷道跡	110	堺町道跡
53	障子道跡	111	大曾根道跡
54	上原原道跡	112	生之井横
57	藤原古墳群	113	雪舟古墳
58	山田古墳群	114	月内古墳
村 I C		115	日向古墳
A	鞍掛道跡	116	綱室古墳
B	前田道跡	117	日之邊跡
C	原ノ道跡	118	神出道跡
D	クリナガ道跡	119	神出雲野道跡
60	高田道跡	120	移田移々道跡
61	小坂古墳	121	田山雨道跡
62	佐古古墳	122	北波道跡
63	阿波佐嘉古墳群		
64	隈江古墳群		
凡例			
表		落	墓地
●	○	□	△
▲	◆	■	●
■	◆	●	▲



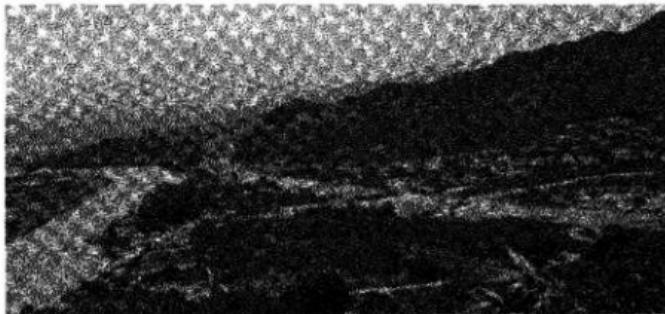
第8图 III区渔场配置图 (1/200)

長田遺跡(註10)は、麻底良山より派生した八つ手状に伸びる丘陵に立地し、外之限遺跡の1km北西に位置する。6世紀後半を主体とする集落遺跡で、堅穴住居跡15軒が検出された。2・8・13号住居跡カマド内からは、手標ね土器・模造鏡・土玉などの土製品が出土しており、カマド(火)に対する祭祀行為がなされたものと考えられる。また、奈良時代と推定される製鉄炉・砂鉄貯藏穴も検出されており、付近には金場という小字が残っており、非常に興味深い。

前述した杷木宮原遺跡は、台地の突端部に位置し、6世紀中～末の堅穴住居跡3軒を検出した。9号住居跡カマド右袖前面からは、土玉が出土している。

以上、横断道関係で調査された古墳時代後期の遺跡を概述してきた。弥生時代終末～古墳時代の墳墓遺跡については、外之限遺跡I(註11)にまとめられており、そちらを参照されたい。

- 註 1 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 「日本書紀」(日本古典文学大系68) 1982 岩波書店
註 2 小田和利編著 「杷木宮原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-21-』 1991 福岡県教育委員会
註 3 昭和61年度に福岡県教育委員会が発掘調査を実施した。調査担当の小池史哲氏の御教示による。
註 4 註3に同じ。
註 5 小田和利編 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-24- 大追遺跡」 1991 福岡県教育委員会
註 6 摘著 「福岡県朝倉町大追遺跡と朝倉橋広庭宮について」『北部九州の古代史』 1992 有明文化を考える会
註 7 高橋章・小田和利編 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-33-上の原遺跡」 1995 福岡県教育委員会
註 8 摘著「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』 1994
註 9 小池史哲編 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-35- 長島遺跡I」 1995 福岡県教育委員会
註10 井上裕弘編 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-30- 長田遺跡」 1994 福岡県教育委員会
註11 伊崎伸秋編 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-35- 外之限遺跡I」 1994 福岡県教育委員会



高山より望む外之限遺跡

III 調査の内容

1. 遺構の概要

今回は、集落縄としてIII～IX区検出の遺構及び出土遺物を報告するが、基本的に外之限遺跡は大迫遺跡との境の谷部からI区丘陵突端部までの長さ約350mに渡る丘陵斜面部及び裾部に該当する。以下、各区検出の遺構・遺物の概要を列举する。

遺構	出土遺物
III 区 <旧石器時代>	ナイフ形石器・角錐状石器・石刃
<縄文時代>	縄B式土器・晚期土器・打製石鎌・磨製石斧
・竪穴住居跡 1軒	
・土 坑 2基	
<古墳時代>	須恵器・土師器・鉄器・紡錘車・砥石
・竪穴住居跡16軒	
IV 区 <旧石器時代>	台形石器・スクレイバー
・包含層	
<古墳時代>	須恵器・土師器・鐵錐先・土玉・土鍬
・竪穴住居跡 2軒	
・土 坑 5基	
V 区 <縄文時代>	石鎌・石匙
<古墳時代>	須恵器・土師器・鉄器・砥石・土玉・模造鏡
・竪穴住居跡10軒	
・落込み 2基	
・円墳 1基	
<近世>	
・墓 3基	
VI 区 <古墳時代>	須恵器・土師器
・竪穴住居跡 2軒	
・土 坑 1基	
VII 区 <旧石器時代>	角錐状石器・細石刃
<縄文時代>	石鎌・打製石斧・磨製石斧
<古墳時代>	須恵器・土師器・鉄鎌・耳環・砥石・フイゴ・土製品
・竪穴住居跡 37軒	

・建物跡	4棟	
・橋列	3列	
・土坑	14基	
・製鉄遺構	1基	
・大溝	4条	
・小溝	14条	
VII区 <弥生時代>		土器
・円形住居跡	1軒	
<古墳時代>		須恵器・土師器・石製紡錘車
・竪穴住居跡	5軒	
・土坑	4基	
VIII区 <古墳時代>		須恵器・土師器
・竪穴住居跡	3軒	
・土坑	2基	

2. III区の調査

III区は外之限遺跡の西端部にあり、地形としては北から南西へと緩やかに傾斜し、遺構検出面での比高差は約6mである。前記の遺構の他にSKとした柿種樹用の穴(柿穴)、SKHとした柿の木の肥料用穴(柿肥料穴)、SDとした新しい溝があり、これらから須恵器・土師器や石鎌が出土しているが、本来は住居跡等に属していたものである。また、SK・SKHからは針金のような鉄器が出土している。

A. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡 (図版4-1・4-2、第7図)

調査区の中央やや東寄りの所にある。南北に3.05~3.25m、東西に2.8~3.1mの長方形プランをなし、その南隅で2号住居跡を切っている。また、北東・北西辺に柿穴に切られる。面積は8.5m²。北東・南西辺の間を二等分する主軸の方位はN41°30'E。灰茶褐色土を埋土としていた。カマドが北東辺の最東端、東隅に接する如くにて存する。床面は中央部がガチガチに固くなってしまっており、北東近くに安山岩・片岩の礫が転がっていた。柱穴は現状ではみられず、下層から2個が検出されたものの、これも通有の如き4本の配置とはならない。また周壁に沿って一

段深くなっている。

出土遺物の量はあまり多くなく、埋土中に縄文晩期土器片もあった。6世紀末を前後する時期であろう。

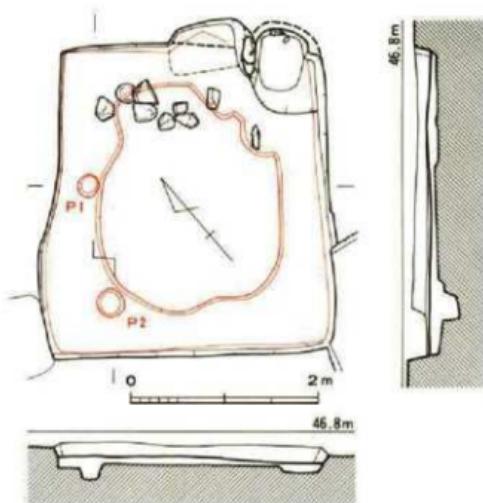
カマド（図版4-3、第8図）

北東隅近くに造られている。床面で幅45cm、長さ25cmが北東壁から突出する。左袖は柿肥料穴に切られながらもごく一部に黄褐色粘質土が残るが、右袖については確認できなかった。燃焼部は住居床面から15cmほど低くなっている。壁面はとてもよく焼けており、熱残留磁気のサンプルを採取している。

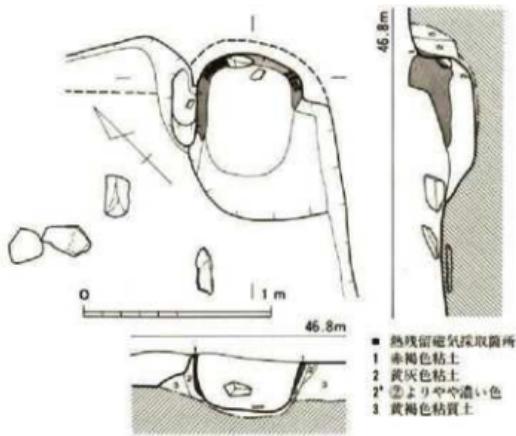
出土遺物（図版12、第9図）

須恵器（1~4） 1~3の立上りはそれほど高くない。2は口唇部に少し面を取り、受部端部には打欠きがある。復原口径11.2cm、受部径13.8cm。4は壺であろう。

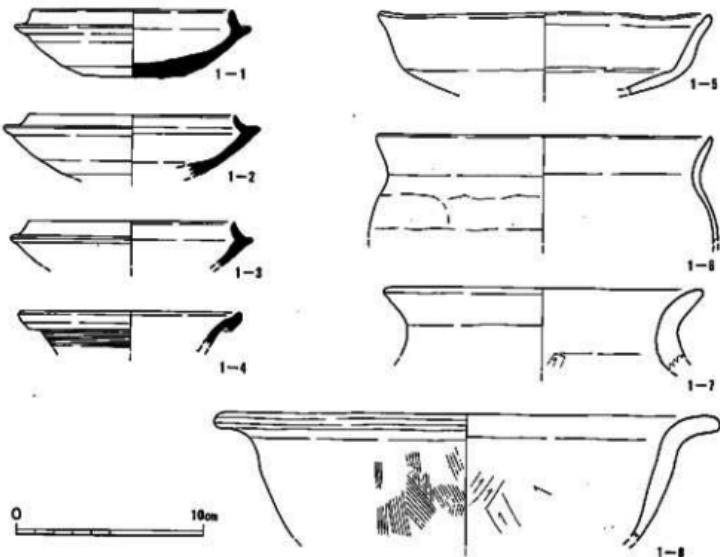
土師器（5~8） 5は環で、外底部に板状のもので押された圧痕がある。6の壺は器壁がかなり薄い。復原口径18cm。7の甕は器壁が厚い。8は鍋形で、内面は煤けている。復原口径27cm。5~8はカマド内から出土した。



第7図 1号住居跡実測図 (1/60)



第8図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)



第9図 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

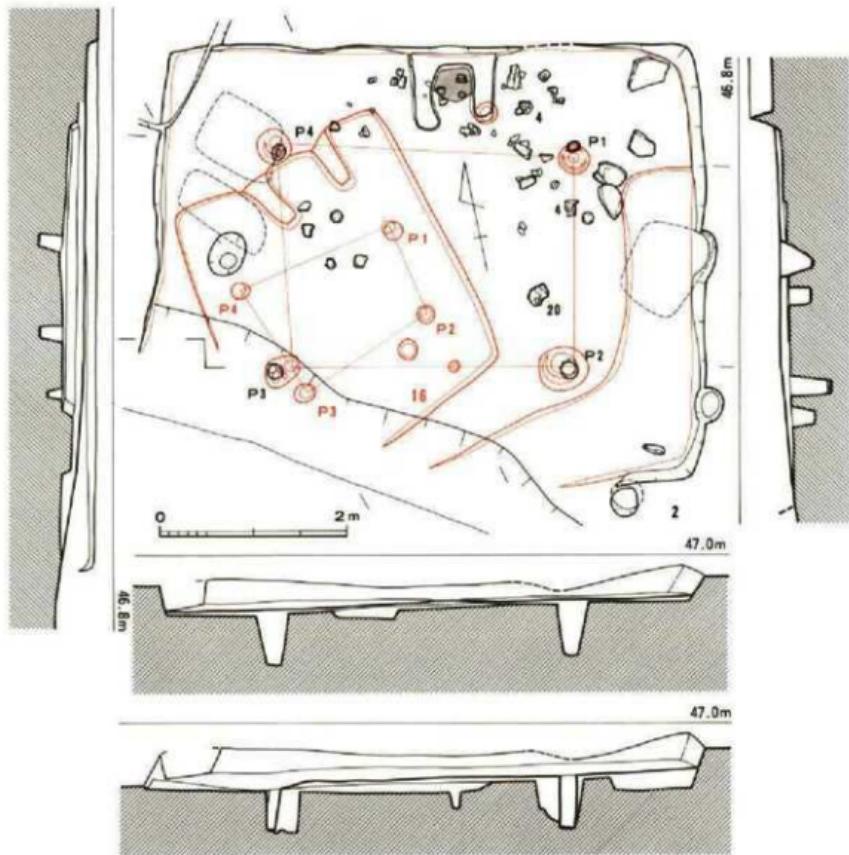
2号住居跡 (図版4-1・4-2, 第10図)

1号住居跡に切られてその東南にあり、床面下から16号住居跡が検出された。南辺と西辺の一部が焼地造成時の段で削られている。東辺は4.6m、北辺は復原で5.6mを測るので東西に長い長方形プランとなる。また、3箇所を柿穴・肥料穴に切られている。面積は25.8m²ほどであろう。東西両辺をもとに南北方向の主軸を求めるとき、それは北辺のやや東寄りにあるカマドの左袖を通るものとなる。方位はN10° E。茶褐色土を埋土としていた。

床面は一部に固くなかった所があった。主柱穴はP1~4の4本としてよいが、P1~2間が2.2m、P2~3間が3m、P3~4間が2.4m、P1~4間が3.2mを測る。東壁から南壁に沿って下層は一段深くなっている。P1の周辺には安山岩・片岩の礫と土器片があった。出土遺物のなかに縄文晩期土器片と黒曜石・サヌカイトの剥片もあった。6世紀後半~末頃であろう。

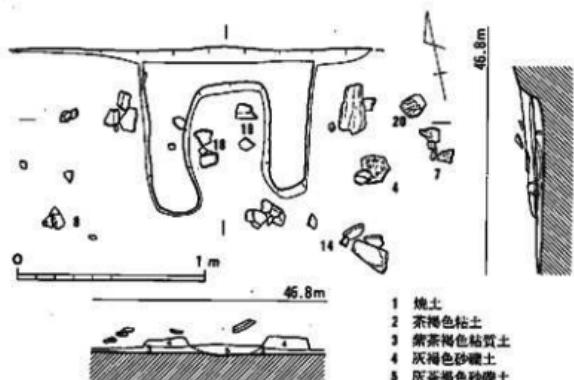
カマド (図版5-2, 第11図)

突出しないタイプであるが、故意に潰したと思われる状態で検出された。それでも袖の下部



第10図 2・16号住居跡実測図 (1/60)

は残っていて、外の幅は85~95cm、奥行き82cmを測る。焚口幅は35cm、燃焼部奥行き65cmである。焚口の所には、その上に庇として架けていたと思われる21~27×32cmで、厚さ11cmの片岩板石が落下していた。



第11図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版12・16-2・16-4, 第12・13・41・48図)

須恵器 (1~4) 1は蓋で、外天井部にヘラ記号がある。2の壺身は完形で、外底部にヘラ記号がある。口径11.2cm, 受部径13.3cm, 器高3.9cm。3の立上り部分は細い。復原口径13cm, 受部径は15cm。2とは違ったヘラ記号がある。4は甕の腹部片で、復原径39.4cm。カマド東とP1南から出土している。

土師器 (5~21) 5~7は須恵器を模倣した精製の壺で、5は復原口径11.4cm。8の碗も精製で、復原口径11.8cm。カマドの西から出土した。9~16の甕のうち9・10は小型で、9の口径は11.6cm。10は口縁内側に煤が付着する。11は内面にコケが付着する。12は口唇部が丸くなる。14の口縁内面にも煤が付着する。口径15cm。カマド前面の出土。15は大型で口径19cm。17~21は甕で、17は口縁内面に煤が付着する。18は幅径14.5cm。19の口径は28cm。20の把手には下端に刺突した溝みがある。口径26cm。21には煤が付着している。18・19はカマド内、20はカマド東とP1の北から出土した。

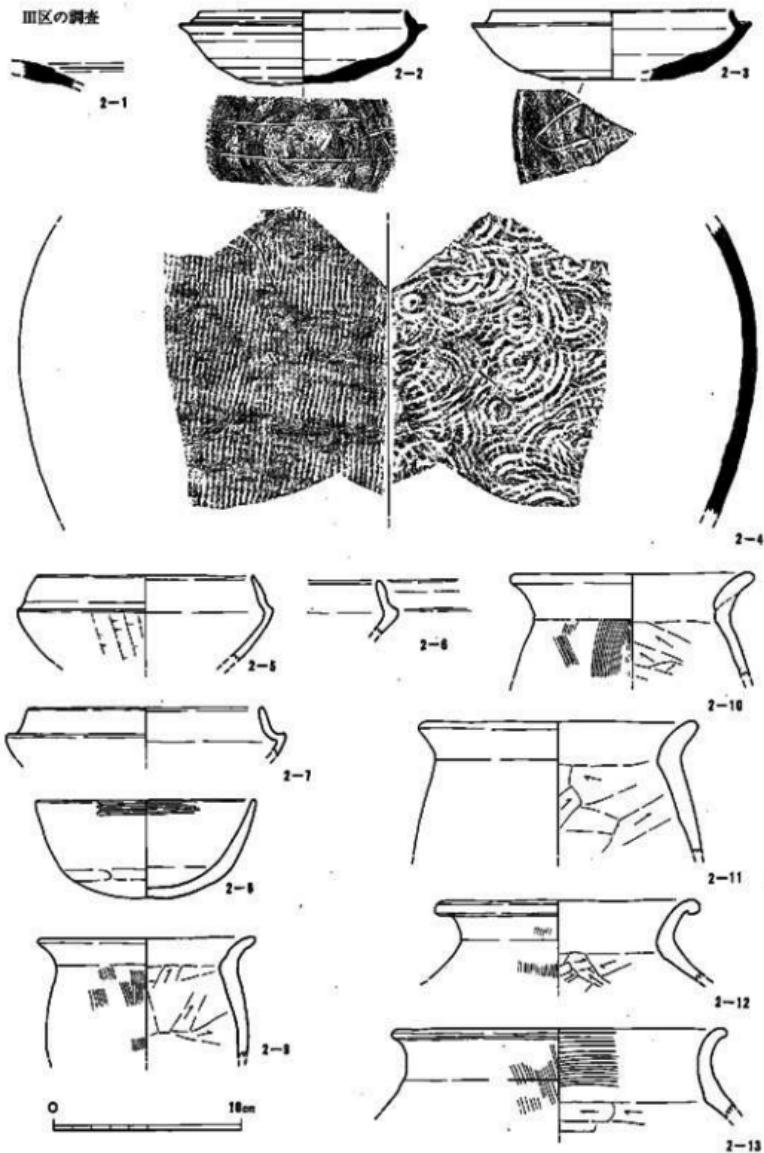
石 器(第48図7) 玄武岩質で、石器であるかどうか定かでないが、すり石の可能性がある。長さ6.2cm, 重さ56.2g。カマドの東から出土。

鉄 器(第41図1・2) 1は折り曲げた鉄棒であるが、用途不明。あるいは鉄線の混入の可能性もある。2は鐵だろう。

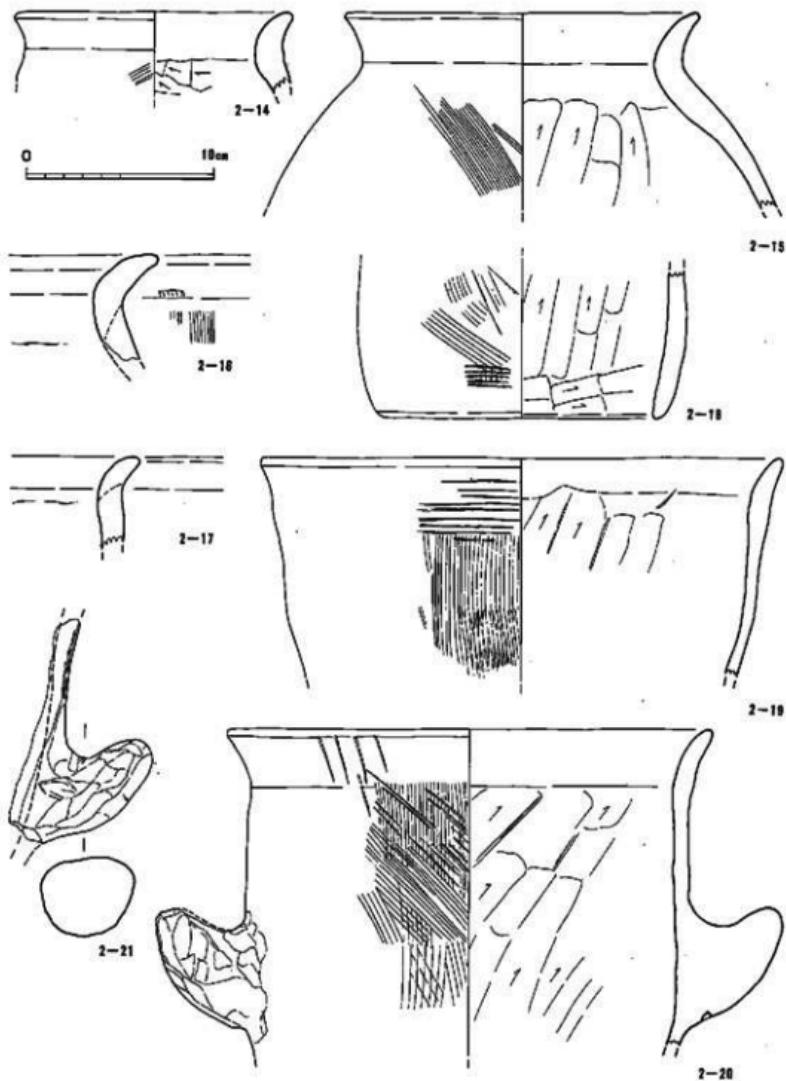
3号住居跡 (図版5-1, 第14図)

2号住居跡の東方にあり、S X1・3を切り、4号住居跡に東辺を切られている。また柿穴にも

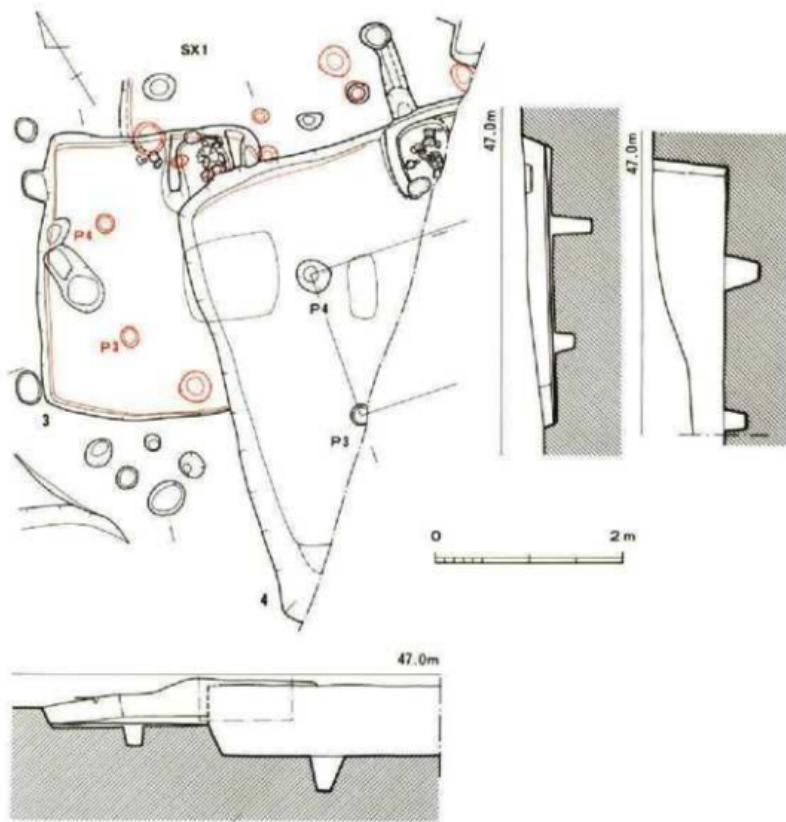
III区の調査



第12図 2号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第13図 2号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第14図 3・4号住居跡実測図 (1/60)

切られている。北辺は2.2m、西辺は2.9mを測り、南辺は復原で2.5m程となる長方形プランを呈する。主軸方位はN29°30'Eとなり、それは北辺の東隅に接して設置されたカマドの左袖のさらに外側を通るものとなる。面積は復原で5.9m²ほどであろう。黒茶褐色土を埋土としていたが、西隅近辺は特に黒い土があり、当初は別個の土坑が存するのではないかと考えたほどであった。この上面から黒曜石の石刃が出土している。主柱穴P3・4はあるが、P1・2は4号住居跡に切られて存しない。P3-4間は1.2m。カマド内と周辺から土器が出土している。また出土遺

物の中に弥生土器片もある。6世紀後半でもやや古い頃であろう。

カマド（図版5-3、第15図）

突出しないタイプであるが、右袖の半分を4号住居跡に切られている。焚口幅は45~50cm、燃焼部奥行き75cm程度であろう。奥壁から25cmの所に石の支脚が立っていて、その上に土師器の壺があった。

出土遺物（図版12、第16・17図）

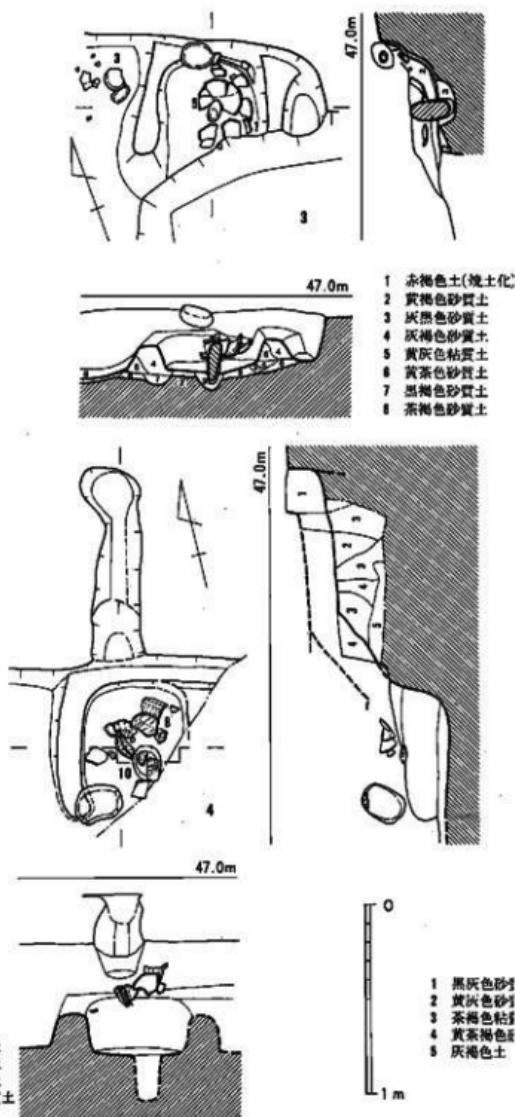
須恵器（1・2）ともに蓋で、1は内天井部に同心円当具痕がある。

口径14.4cm。カマド内出土。2は口縁と身の境の沈線が1より深い。

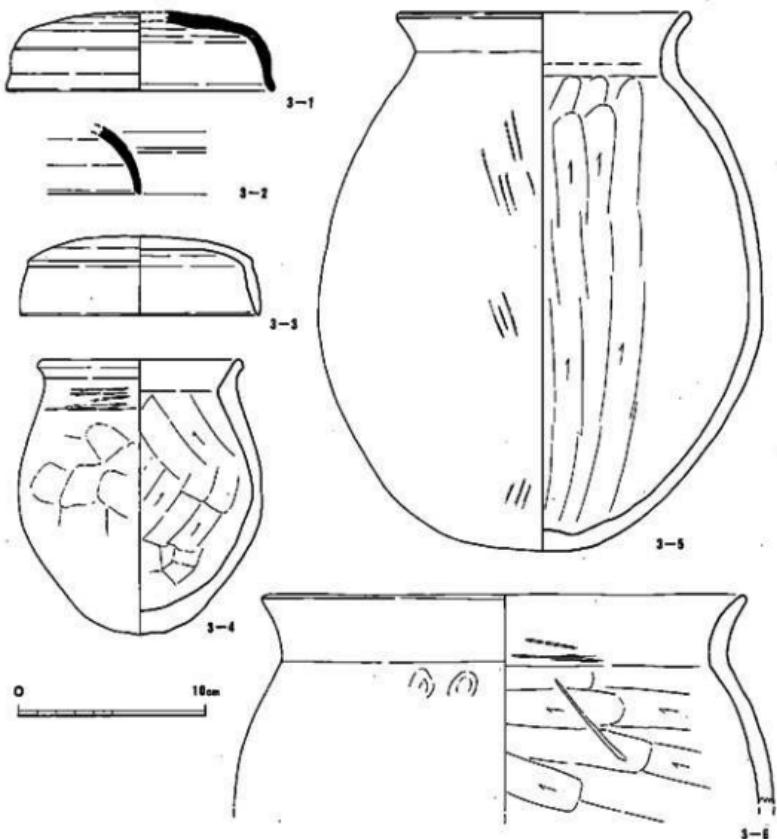
土師器（3~8）3の环蓋外表面は化粧土の上に黒漆を塗っている。口径12.8cm、器高4.2cm。カマド西の出土。4~6の壺のうち、4の口縁部は内面が直線的で、底部は分厚い。口径11cm、器高14.6cm。5はほぼ完形で、外表面はタタキの上をナデらしい。底部は少し平らになる所がある。口径15.7cm、胴径23.6cm、器高28.7cm。6は復原口径26.0cm。

7・8は接合しないが同一個体で、第17図のような瓶となろう。8の内面にはイネ科植物の茎で擦過した痕跡がある。口径19cm、胴径9.2cm。6を除いてカマド内出土。

- 1 黒灰色砂質土
- 2 黄灰色砂質土
- 3 茶褐色粘質土
- 4 黄茶褐色砂質土
- 5 灰褐色土



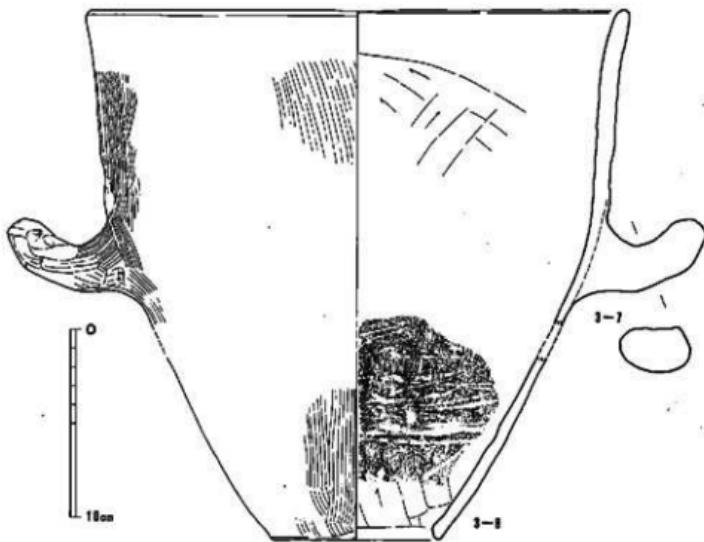
第15図 3・4号住居跡カマド実測図 (1/30)



第16図 3号住居跡出土土器実測図① (1/3)

4号住居跡 (図版5-1, 第14図)

3号住居跡を切ってその東にあり、S X1も切る。柱穴・肥料穴にも切られている。約半分は農道下に隠れたままであり、西辺の4.8mは判るもの、北辺は残存長3.3mがわかるのみである。おそらく南北か東西にやや長い長方形プランを呈するのであろう。床面には柱穴P3とP4がみられ、心心間1.6mを測る。P3・P4を通る軸線と、北辺に付設されたカマドの中心を通る軸線の方位はN13° Eで一致する。茶褐色土を埋土としていた。カマド内に土器が遺存し、ま



第17図 3号住居跡出土土器実測図(2) (1/3)

たサヌカイトの鉢も出土している。6世紀後半であろう。

カマド (図版6-1, 第15図)

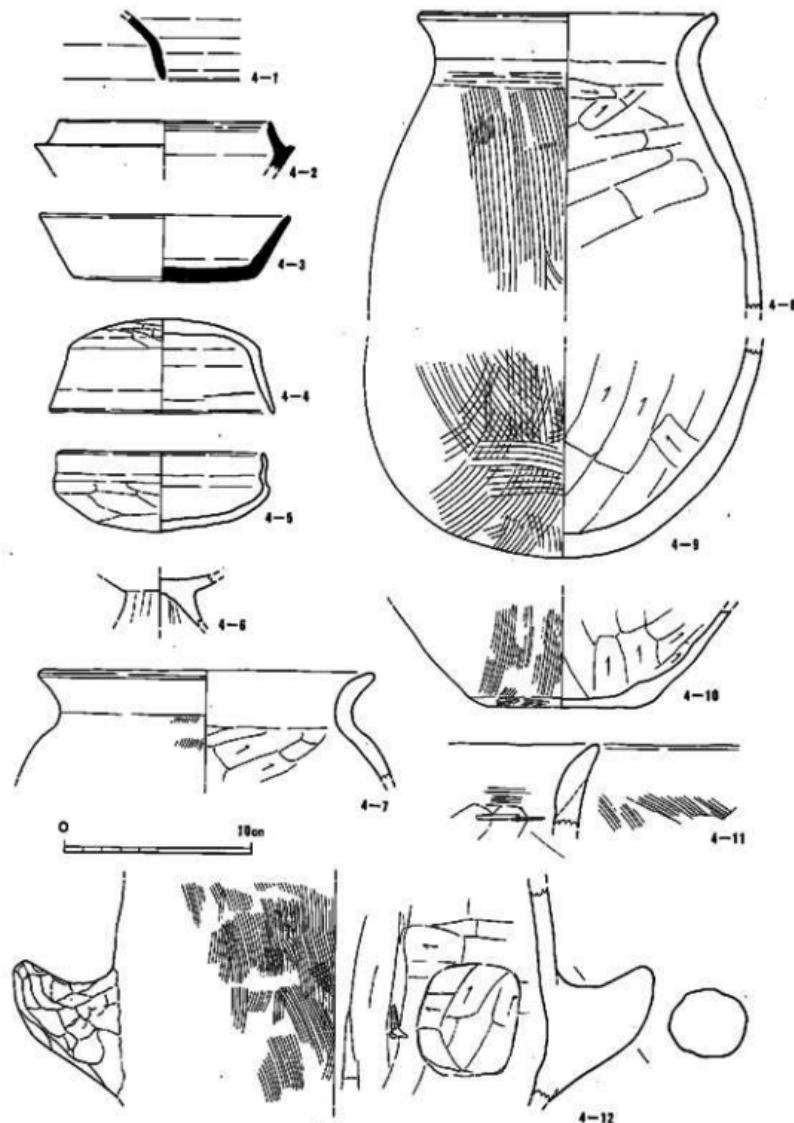
煙道のみが壁面から突出し、本体は住居内に構築されている。右袖は殆ど調査区外にかかるが、焚口幅45~50cm、燃焼部奥行き70cmほどであろう。床面奥壁から40cmほどの所に上面径15~19cmのピットがあるが、ここには左袖先端部に転がっていた花崗岩がもと支脚として据えられていたものと思われる。煙道は奥壁から約38°の角度で斜めに伸びたあと、北側へ底面のレベルをやや高くしてゆき、先端にピットがある。

出土遺物 (図版12・13, 第18図)

須恵器(1~3) 1の蓋は口縁部と体部の境に沈線等は入らない。2は口唇部内側に段が付く。また、受部端に打欠きがある。復原口径11.5cm。3号住居跡の混入であろうか。3の坏は外底面に板目压痕がある。口径13.5cm。混入であろう。

土師器(4~12) 4は壺としたが椀の可能性もある。精製で口径12cm、器高5cm。5の坏は口径10.2cm、器高4.2cm。6は高坏片。7~10は甕で、7は復原口径18cm。8・9はカマド内出土で、同一個体らしい。8はなで肩で、復原口径16cm。9は器壁が厚く、外面には煤が付着する。10の底部は平らになる。11・12は瓶である。

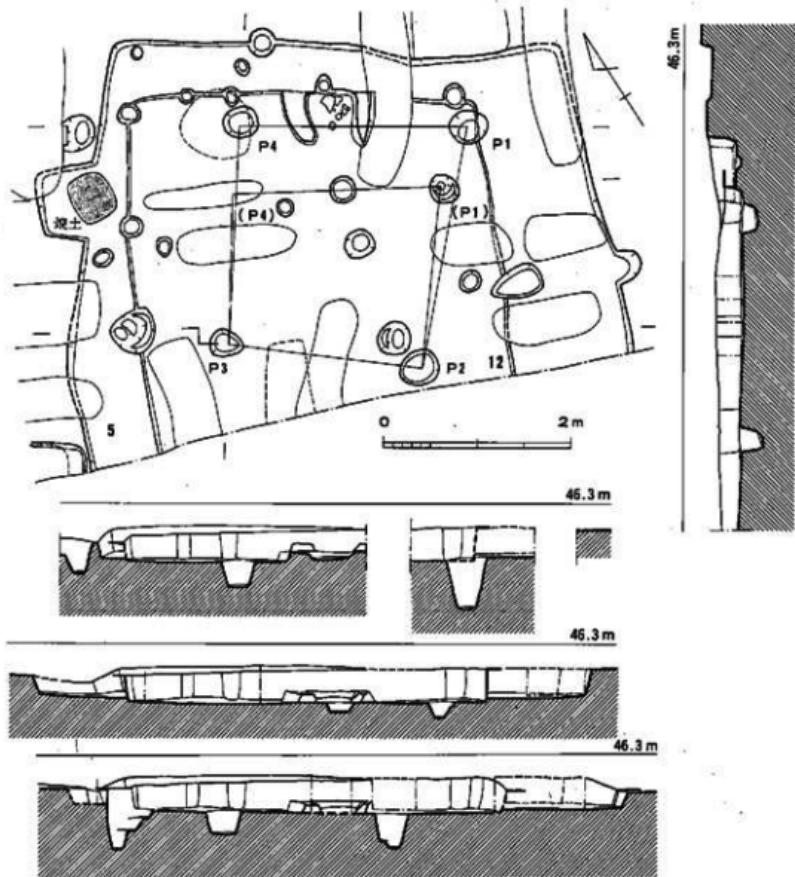
田区の調査



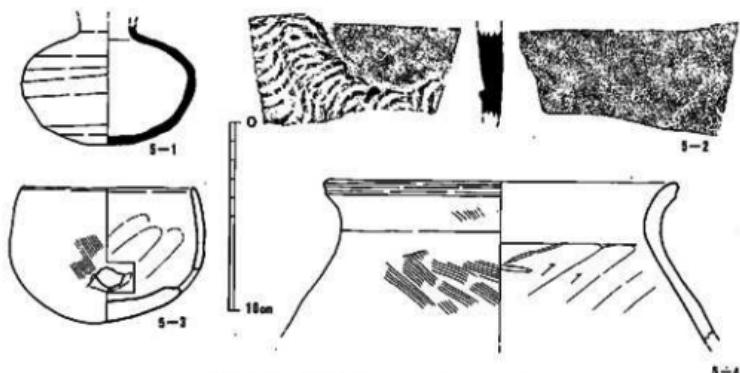
第10図 4号住居跡出土土器実測図 (1/3)

5号住居跡 (図版10-1, 第19図)

1号住居跡の西南にあり、南端は調査区外にかかる。12号住居跡がこれの直上に営まれている。10箇所も柿穴・肥料穴に切られており、虫食い状態であった。北辺の4.8m以外は西辺が残存長4.6mなので、おそらく方形に近いプランであろう。床面には幾つかのピットがあるが、主柱穴となると特定し難い。しかし、12号住居跡のP2・P3を用い、P1・P4を取り上げても



第19図 5・12号住居跡実測図 (1/60)



第20図 5号住居跡出土土器実測図 (1/3)

よいかもしれない。その時P1-2間が2.6m、P2-3間は2.1m、P3-4間は2.3m、P1-4間は2.4mを測る。床面については捉えにくかった。西辺の北寄りに幅60-80cmで、約50cmの突出部があり、そこに焼土があったのでこれがカマドであろう。袖等については不明であった。カマドの中心を通る方位はN59°W。少量の土器の他、黒曜石の鉢が出土している。6世紀後半でも古い頃であろう。

出土遺物 (第20図)

須恵器(1・2) 1は壺で、孔が無いから蓋にはならない。胴径9.2cm。床面出土。2は横瓶の胴部片であろう。外面はナデである。カマド内出土。

土器器(3・4) 3はほぼ完形の壺で、胴下半に穿孔がある。口径9.4cm、器高7.2cm。床面出土。4の裏は口唇部外面が少し瘤む。復原口径19cm。カマド内出土。

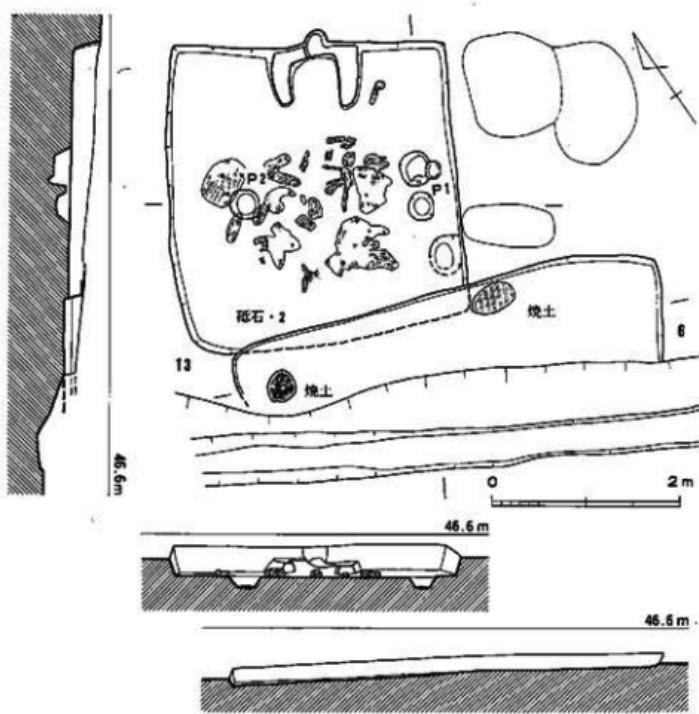
6号住居跡 (図版6-2、第21図)

1号住居跡の西方にあり、13号住居跡の一部を切るが、南側は柿畑造成時の段によって削平されている。北辺の4.65m以外は東辺が残存長1.1mであり、それ以上はわからない。残存部に柱穴も検出されなかった。北辺の中央よりやや東寄りの壁下と北西隅近くに焼土があったが、前者の所がカマドの痕跡であろうか。袖等は全く不明である。茶褐色土を埋土としていた。少量の土器のほか、砾石、軽石、木炭、黒曜石剝片が出土した。6世紀後半でも新しい頃であろう。

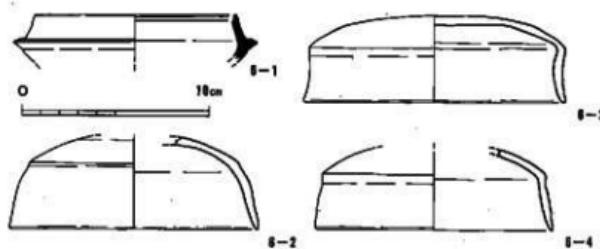
出土遺物 (図版13・16-2、第22・48図)

須恵器(1) 壊身の破片で、口唇部内側は僅かに窪んでいる。復原口径10.8cm。混入分。

土器器(2~4) 何れも須恵器を模倣した蓋である。3はほぼ完形で、内外ともに黒漆塗りの痕跡がある。口径14cm、器高4.7cm。2・3は床面出土。



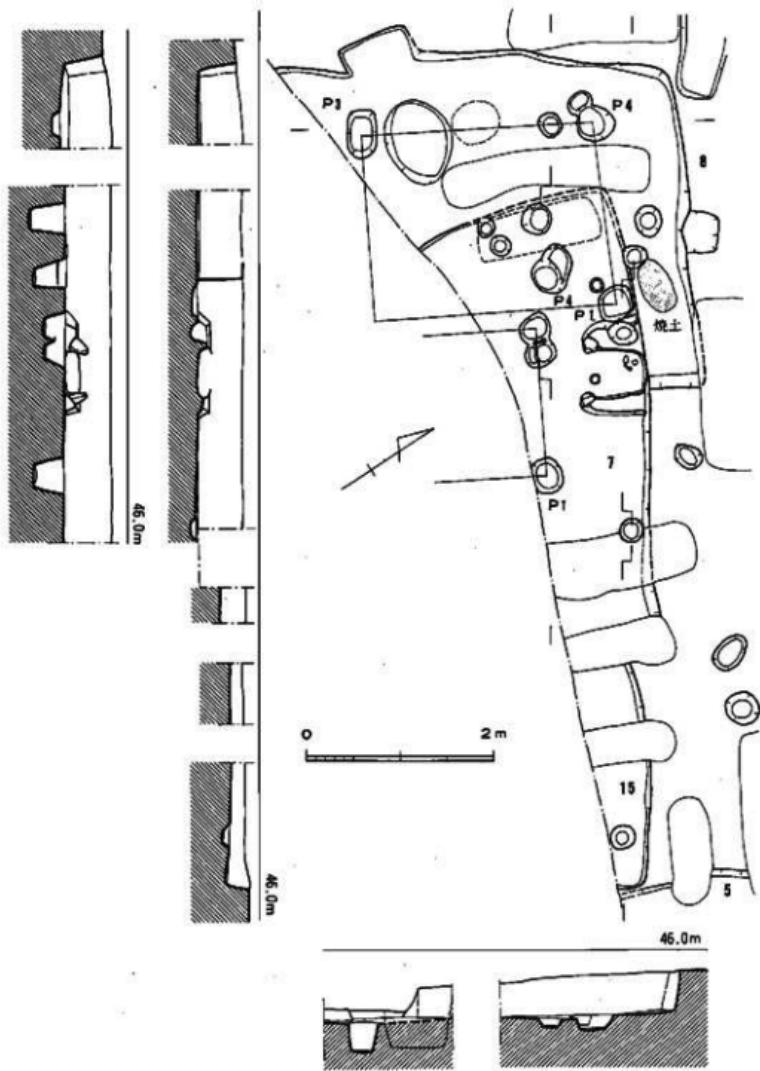
第21図 6・13号住居跡実測図 (1/60)



第22図 6号住居跡出土土器実測図 (1/3)

石 器(第48図1) 硬砂岩の砥石で、仕上砥である。現存長8.2cm。

III区の調査



第23図 7・8・15号住居跡実測図 (1/60)

7号住居跡（図版7-1、第23図）

5・12号住居跡の西にあり、南端は調査区外にかかる。8号住居跡を切り、柿肥料穴で面的に確認できないけれども15号住居跡をも切っている。北辺の長さ4.2m、西辺が残存長2.1mであるが、おそらく方形に近いプランであろう。床面にある幾つかのピットのうち主柱穴となるのはP1・P4であり、調査区外にP2・P3が存するものと思われる。P1-4間は2.1mを測る。北辺にカマドがあり、その中心を通る方位はN29°E。茶褐色土を埋土とする。土器以外に繩文土器、弥生土器、石斧、黒曜石スクレイバーが出土した。6世紀末を前後する頃であろう。

カマド（図版7-2・3、第24図）

突出しないタイプである。両袖先端である焚口に玄武岩質の石が門柱の如くに立てられ、上方は内傾している。下端で焚口幅52cm、奥行きは65cmを測る。焚口から10cm強の所に小ピットがあり、焚口の手前には石が転がっていたが、これは支脚とその抜き跡であろう。床面はよく焼けており、熱残留磁気のサンプリングを行った。

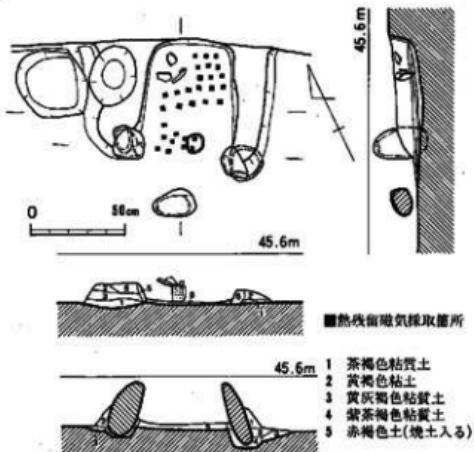
出土遺物（図版13、第25図）

須恵器(1) 蓋で、器肉は厚い。復原口径14.2cm。床面出土。

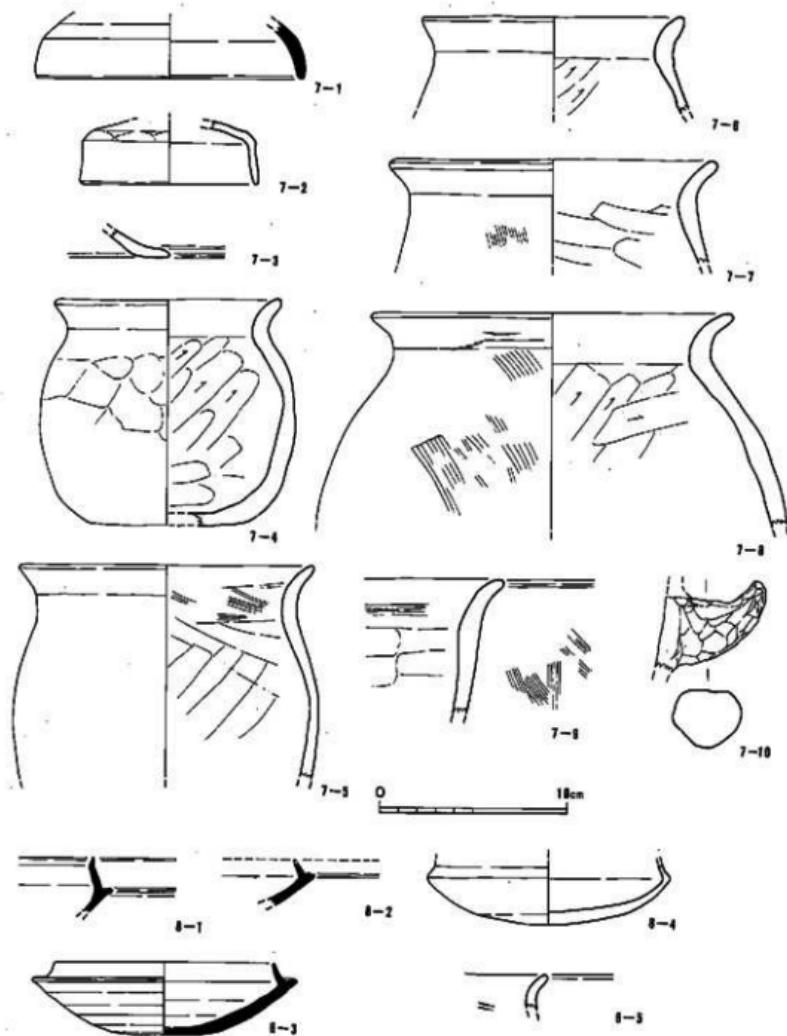
土師器(2~10) 2は壺蓋になろう。復原口径9.6cm。3は高环の脚架である。4~8は甕で、4は器壁が厚くどうしりした器形をなす。口径・器高とも12cm。床面出土。5は復原口径15.8cm。カマド内出土。8は胴の張る器形で、復原口径19.4cm。9・10は甕であろう。6~9は床面出土。

8号住居跡（第23図）

7号住居跡に切られてその西にあり、10号住居跡を切っている。柿穴と柿肥料穴にも切られている。南側は調査区外にかかる。北辺の長さが3.4mで、西辺が残存長4.2mであるから南北に長い長方形プランになろう。床面のP3・P4と7号住居跡カマドの横にあるP1が主柱穴となって、調査区外にP2が存するものと思われる。P1-4間は2m、P3-4間は2.5mを測る。黄茶褐色土を埋土としていた。北辺近くの東寄りに焼土がみられたが、これは床面よりだいぶ上の所で検



第24図 7号住居跡カマド実測図 (1/30)



第25図 7・8号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出された。しかし、カマドの位置はここが妥当と思われる。少量の土器以外に弥生土器、サヌカイト鐵、角錐状石器が出土した。6世紀後半であろう。

出土遺物（図版13、第25図）

須恵器(1~3) 壕身で、1は口唇部内側が僅かにへこんで段になる。2の立上りは短く、口唇部に打欠きがある。3も口唇部に打欠きがあり、復原口径11.9 cm、受部径14.2cm、器高3.8cm。

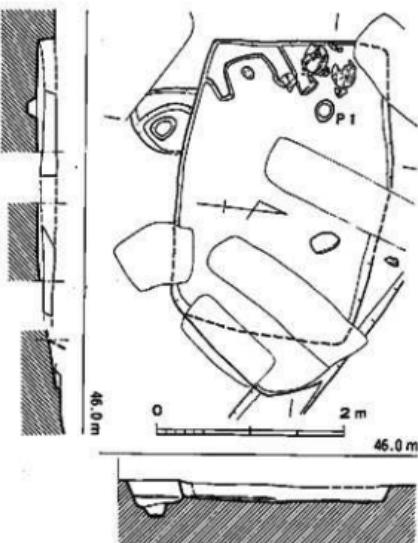
土師器(4・5) 4は須恵器模倣の壺で、復原受部径13cm。5は甌であろう。

9号住居跡（図版8-1、第26図）

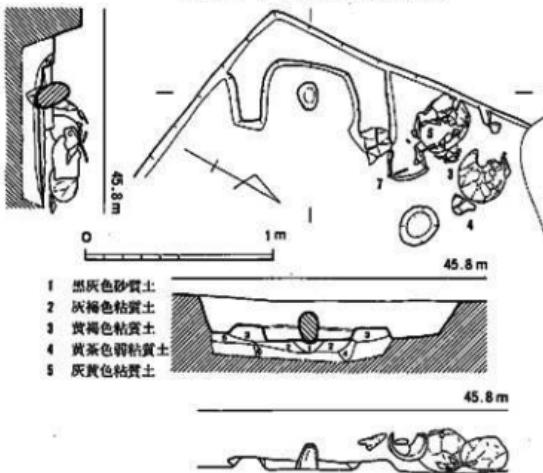
7・8号住居跡の北、6号住居跡の西にある。これは他の住居との重複はない。東西に長い小型の、少し崩張り気味の長方形プランをなす。

南北方向は1.85~2.0 mで、最大2.25m、東西は2.9~3.2mを測る。面積は5.4m²。壁も床面も柿穴・柿肥料穴で5箇所を切られている。床面に柱穴は1個しかない。

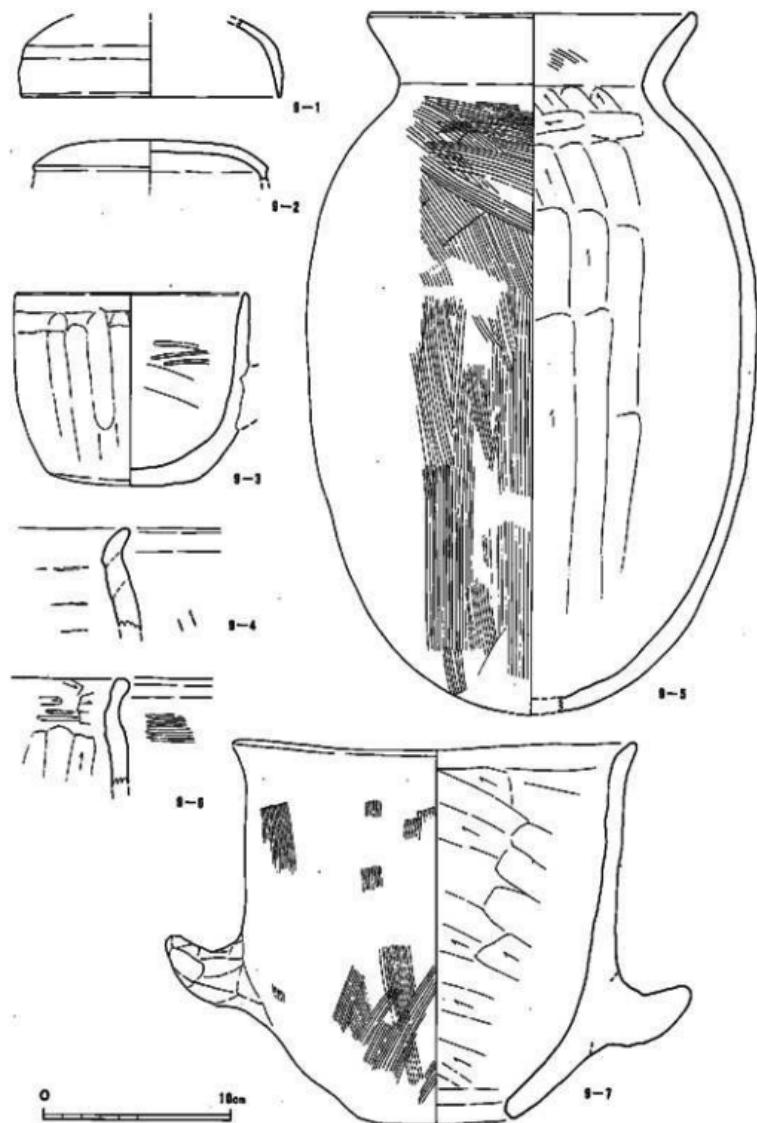
床面は硬化しておらず、粘土をベターッと置いているが如くであった。黄茶褐色土を埋土とする。南北両辺の中間を通る主軸方位はN89°Wである。西南



第28図 9号住居跡実測図 (1/60)



第27図 9号住居跡カマド実測図 (1/30)



第28図 9号住居跡出土土器尖測図 (1/3)

隅にカマドがある。須恵器は1点もなく土師器のみで、他に鉄器と縄文土器片が出土している。6世紀後半であろう。

カマド（図版8-2、第27図）

黄褐色粘質土を用いた袖の基部が残る。焚口幅45cm、燃焼部奥行き40cmを測り、奥壁から15cmの所に支脚とした石が立っていた。この支脚は黒灰色砂質土を用いて安定させている。右袖の北側に土師器が置かれたまま潰れていた。

出土遺物（図版13・14・16-4、第28・41図）

土師器(1~7) 1・2は須恵器模倣の蓋で精製品。2は内外とも黒漆塗りである。3は把手の付くマリ形土器で、精製品ではあるけれどもつくりは粗い。もとは内外とも黒漆塗りである。口径12.4cm、器高10.2cm。4・6は肩の張らない器形で變とすべきか。5は長胴の甕で、口径17.5cm、胴径24cm、器高37.2cm。7は瓶で、把手がかなり下位に付く。口径21.7cm、裾径7.6cm、器高20.4cm。

鉄器（第41図3） 刃部が太めだが、鐵であろう。

10号住居跡（図版8-3、第29図）

8号住居跡に切られてその西にあり、11号住居跡にもその南側を切られている。また、柿穴と柿肥料穴にも多くを切られている。南側は調査区外にかかる。北辺の長さが8号住居跡との位置関係から3.5m程であろうことと、南北長が4.3mを越すから長方形プランであろうことが知られる程度である。床面には3個の柱穴があるが、主柱穴たりえるかどうか不明である。淡黄茶褐色土を埋土としていたが、プランはつかみにくかった。カマドについても不明であるが、存したとすれば西辺であったかも知れない。少量の土器以外に弥生土器、黒曜石の打製石器が出土している。6世紀後半としておく。

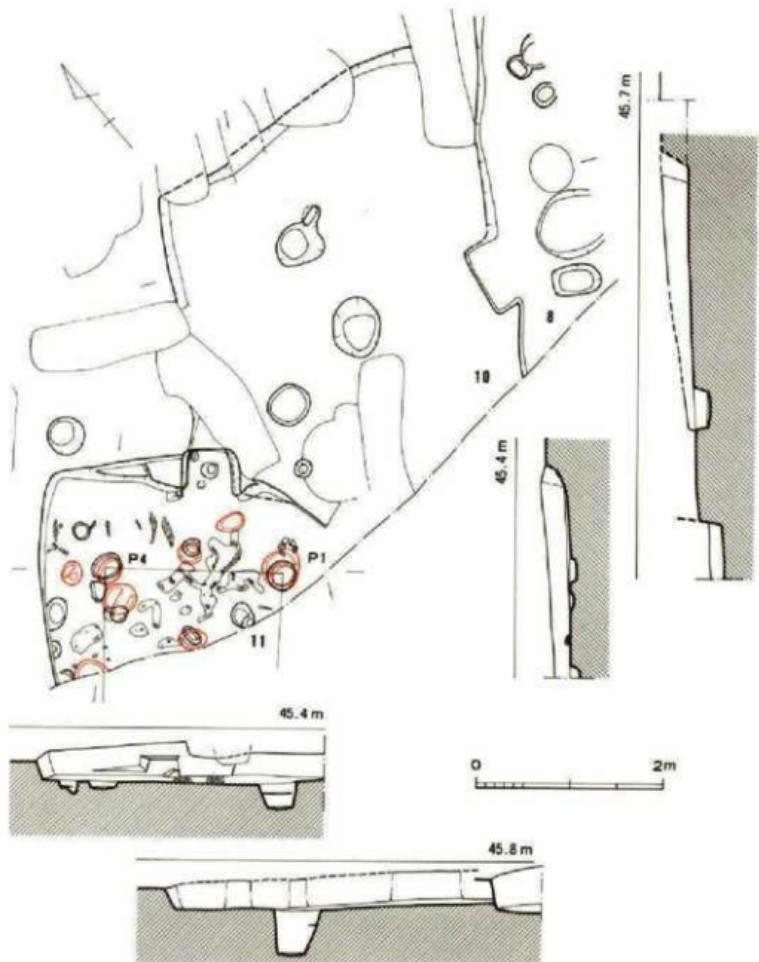
出土遺物（第30図）

須恵器(1) 坯蓋片である。口唇部先端は尖り気味である。

土師器(2) 瓶の把手になろう。

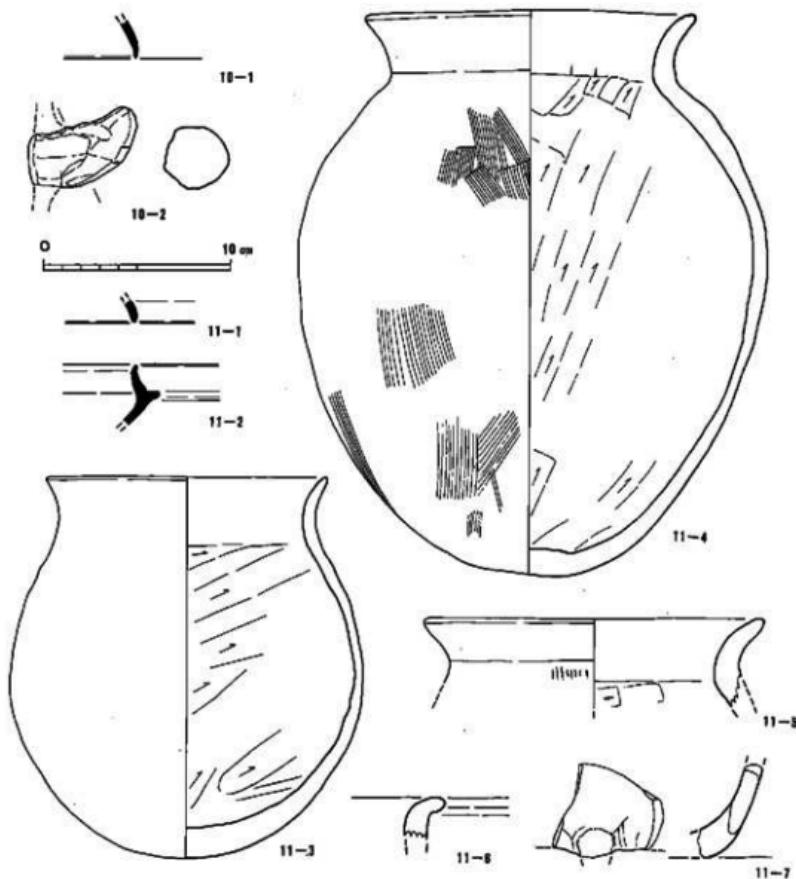
11号住居跡（図版9-1、第29図）

10号住居跡の西にあり、それを切って、南半は調査区外にかかる。北辺にカマドが付き、その西側部分は壁面がテラスを有して二段になっているが、ここが本来の住居に付属した部分であるのかどうか判らない。今は突出型のカマドとしておく。カマドの東側壁面も乱れていて、住居西辺からすれば北辺は鋭角的に曲がって不整形のプランとなる。西辺は2.3mが遺存し、東西長は3.1mを測る。床面に多量の炭化物があり、薬・薫の様なものもある。焼失住居である。炭化物の下の床面はガチガチに硬かった。主柱穴は1.9m間隔でP1・P2がみられ、P2・P3は



第29図 10・11号住居跡実測図 (1/60)

調査区外にあると思われる。茶褐色土を埋土としていた。カマドを通る主軸方位はN39° Eである。須恵器・土師器以外に縄文土器片、弥生土器、ナイフ形石器が出土している。6世紀後半



第30図 10・11号住居跡出土土器実測図(1/3)

であろう。なお、この住居の炭化材のC¹⁴年代は、 1760 ± 75 年B.P.の値が得られている。

カマド(図版9-2・3、第31図)

突出型で、左袖はごく僅かにみられるが、右袖は全くみられない。焚口幅52cm、燃焼部奥行き50cmを測り、奥壁から20cmの所に支脚とする石が立ち、その上に土師器甕が乗っていた。この支脚は径18cm、深さ10cmのピット内に据えて茶褐色粘質土を用いて安定させているが、それ

III区の調査

の北と西南にある深さ4~5cmの小ビット内にも同じ土が入っていた。この小ビットの意味はわからない。壁面はよく焼けており、西壁で熱残留磁気のサンプリングを行った。

出土遺物（図版14、第30図）

須恵器(1・2) 1は坏莖片である。2は口唇部内側に斜めの面をとる。床面出土。

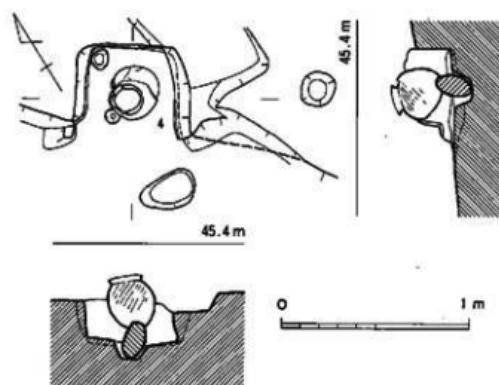
土師器(3~7) 3の裏の外面はナデ、内面はケズリである。底部は分厚い。口径15.2

cm、胴径19cm、器高20.3cm。床面出土。4はカマド内の支脚上にあった甕で、やや歪みがある。胴部最大径は上位にあり、底部は径7cm前後が不安定ながらも平底に近い。外面下半には煤が付着する。口径15~17.7cm、胴径25cm、器高30.3cm。5も4と似たような器形であろう。床面出土。6・7は瓶であろう。7の底部は単なる大きな円孔ではない。

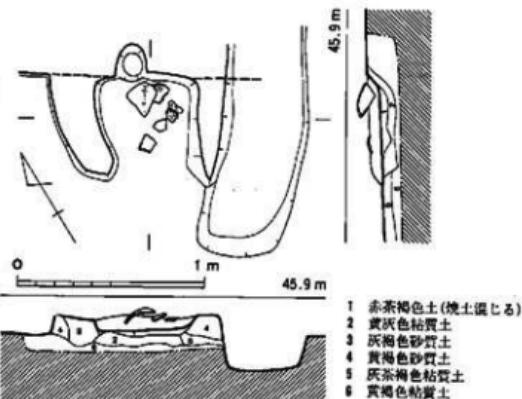
12号住居跡（図版10-1、第19図）

5号住居跡と重複してその直上にあたり、南端は調査区外にかかる。北辺の3.7m以外は西辺が残存長3.8mなので、おそらく南北に長い長方形プランであろう。床面にある幾つかのビットのうち主柱穴は変則的ながらP1~4を指定するが、P4は紳肥料穴で切られているものとする。P1~2間が2m、P2~3間は2.1m、P3~4間は1.6m、P1~4間は2.2mを割ることになろう。

東辺・北辺の壁上にビットが幾つか重複しているのは、あるいはこの住居に関連するものかもしれない。東西面辺の中間に通る主軸方位はN26°Eである。



第31図 11号住居跡カマド実測図 (1/30)



第32図 12号住居跡カマド実測図 (1/30)

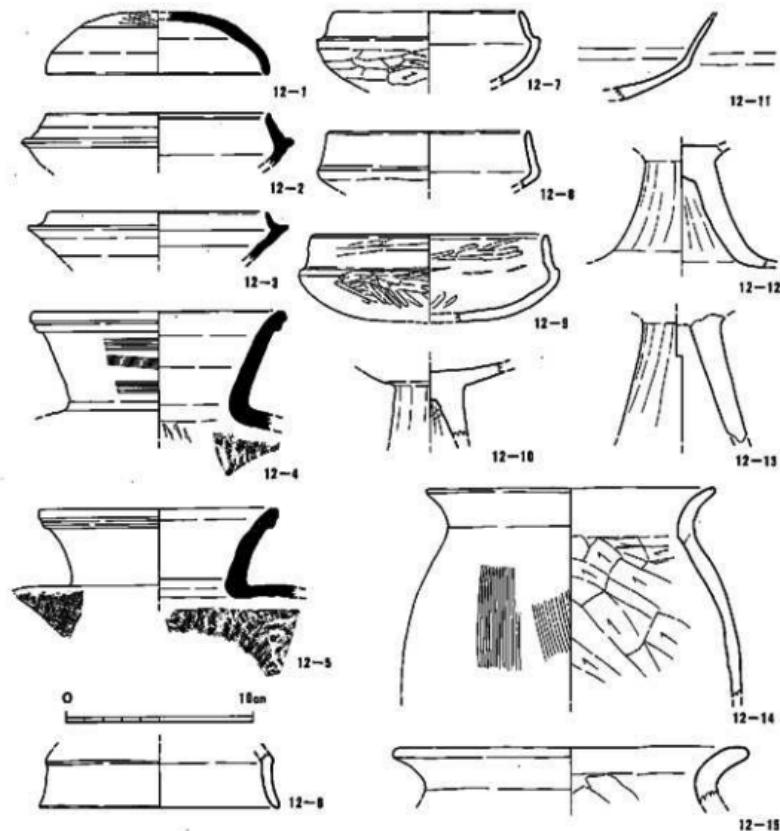
- 1 赤茶褐色土(燒土混じる)
- 2 黄灰色粘質土
- 3 沽褐色砂質土
- 4 黄褐色砂質土
- 5 灰茶褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土

それは北辺にあるカマドの左袖上を通るものとなる。濃茶褐色土を埋土としており、床面については捉えにくかった。土器のほかに鉄器があり、また縄文土器、石斧、サヌカイト錐などが出土している。6世紀末を前後する頃であろう。

カマド（図版10-2、第32図）

右袖の一部を柿肥料穴に切られているが全形はわかる。焚口幅36cm、燃焼部奥行き55cmを測る。土師器の壺の破片が遺存していた。

出土遺物（図版14・16-4、第33・41図）



第33図 12号住居跡出土土器実測図 (1/3)

須恵器(1~5) 1は蓋で、外天井部は手持ちのヘラケズリである。復原口径12cm。2の身は口唇部内側に僅かな段が付く。復原口径12cm。これは5号住居跡に伴っていたものの混入かもしれない。3は2と違って口縁の立上りが無い。4・5は横瓶の口縁部かと思われ、同一個体の可能性がある。また、これは埋土中出土であるが、5号住居跡カマド内の破片とも同じ個体の可能性があり、そうすれば混入とみなすべきであろう。4の復原口径は13.8cm。

土師器(6~15) 6は蓋で精製品。内外とも黒漆塗りである。7~9の身も精製品で、9は復原口径12.6cm。10~13は高坏片。14・15は蓋で、復原口径は14が15.4cm、15は19cm。他に図示できなかった壺の破片の中に外面に黒漆を塗ったものがあった。

鉄器(第41図4) L字形に近く折り曲げた鉄棒であるが、釣針ではないようだ。用途不明。或いは鉄線の混入の可能性もある。

13号住居跡 (図版6-2, 第21図)

6号住居跡の北にあって、それに南辺を切られている。北辺が2.9m、西辺は3.3mで、東辺・南辺は推定で2.9mと3mのほぼ方形のプランとなろう。炭化物が多く検出されており、焼失住居としてよい。礎のようなものもあった。床面はガチガチの硬い所もみられた。主柱穴は通常の4本が検出されていないが、東西の壁に近い中央のP1・P2の二本柱であろうか。東西両辺の距離を二等分する主軸は、北辺の中央にあるカマドのほぼ中心を通る。方位はN30°E。面積は8.3m²ほどであろう。灰茶褐色土を埋土としていた。遺物量は少ないので、土器のほかに紡錘車・砥石、それに弥生土器、石斧、サヌカイト剥片が出土している。6世紀後半代と考えるが、この住居の炭化材をC¹⁴測定した結果は、1760±90年B.P.の値であった。

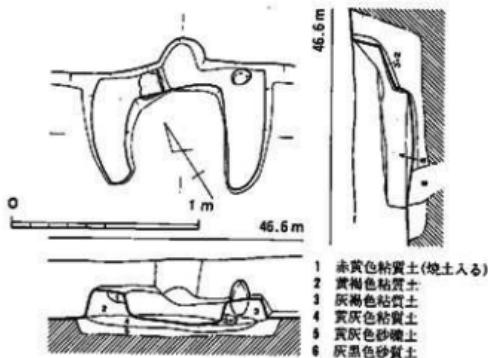
カマド (図版6-3, 第34図)

煙出しが僅かに突出するもので、焚口幅48cm、燃焼部奥行き53cmを測る。床面は熱残留磁気測定のサンプリングを行った。

出土遺物 (第35図)

須恵器(1) 坏蓋の口縁部小破片で、口唇部は丸い。

土師器(2~6) 2は須恵器を模倣した蓋である。3は小型の壺で、復原口径7cm。4・5も小型である。6は壺であろう。

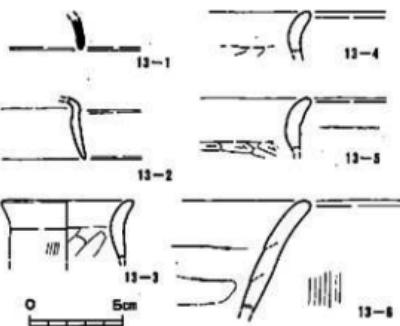


第34図 13号住居跡カマド実測図 (1/30)

石 器（第41図5・第48図2）

第41図5は滑石製の紡錘車で、断面が台形状になる。上面・下面ともに中央の孔から放射状に出る条線がある。側面は横方向のケズリで面取りがなされている。上面径3.81cm、下面径4.42cm、高さ1.3cm、孔径0.71~0.79cm、重さ43.9g。カマドの東側床面出土。

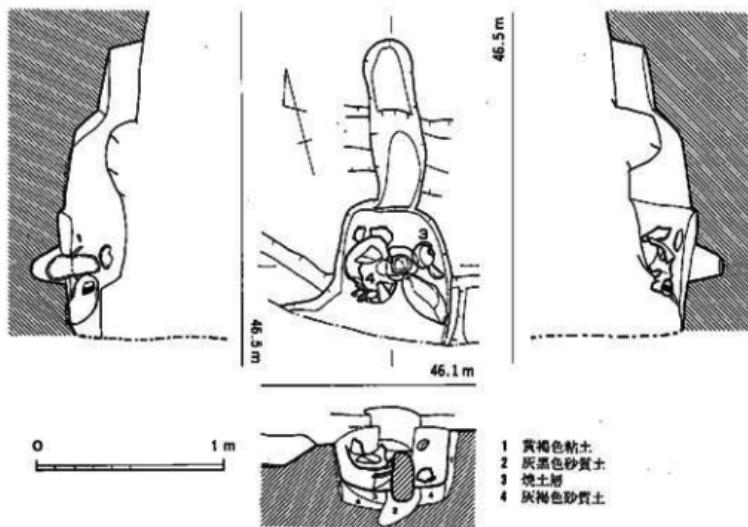
第48図2は頁岩質の仕上砥で、四面ともに使用している。全長14.8cm。



第35図 13号住居跡出土土器実測図(1/3)

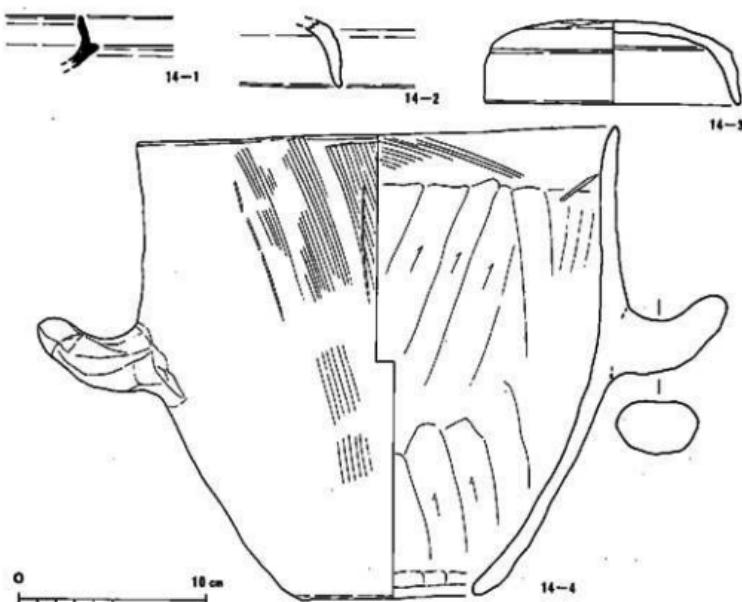
14号住居跡（第8図）

調査区東側の南端にあり、調査区内にはカマドのみが顕を出している。方形か長方形プランの住居跡で、その北辺にカマドが付いているものである。茶褐色土を埋土としていた。カマド内に土器が遺存していた。6世紀後半であろう。



第36図 14号住居跡カマド実測図(1/30)

III区の調査



第37図 14号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド (図版10-3, 第36図)

燃焼部が突出し、その先に煙道が付く。右袖は残っていたが、左袖はみられなかった。焚口幅56cm、燃焼部奥行き48cmを測り、奥壁から30cmの所に支脚とする石が立ち、その上に土器器瓶が割れて残っていた。この支脚は径18cm前後、深さ18cmのピット内に据えて灰黒色砂質土を用いて安定させている。右袖の内側、支脚の南に大きめの石が倒れていたのは焚口の底としていたものか。煙道は約40cm伸びたあと15cmほど高くなり、さらに35cmほど伸びて行く。主軸方位はN15° E。

出土遺物 (図版14, 第37図)

須恵器(1) 壁身の小破片で、口唇部内面は僅かに窪む。

土器器(2~4) 2~3は須恵器を模倣した蓋である。3の口径13.5cm、器高4.4cm。4は瓶で、把手は上面が少し窪んでいる。口径25.6cm、据の孔径9cm、器高25.2cm。

15号住居跡 (第23図)

7号住居跡の東にあって、ちょうど施肥料穴のところで7号住居跡と重複するが、7号の方に整

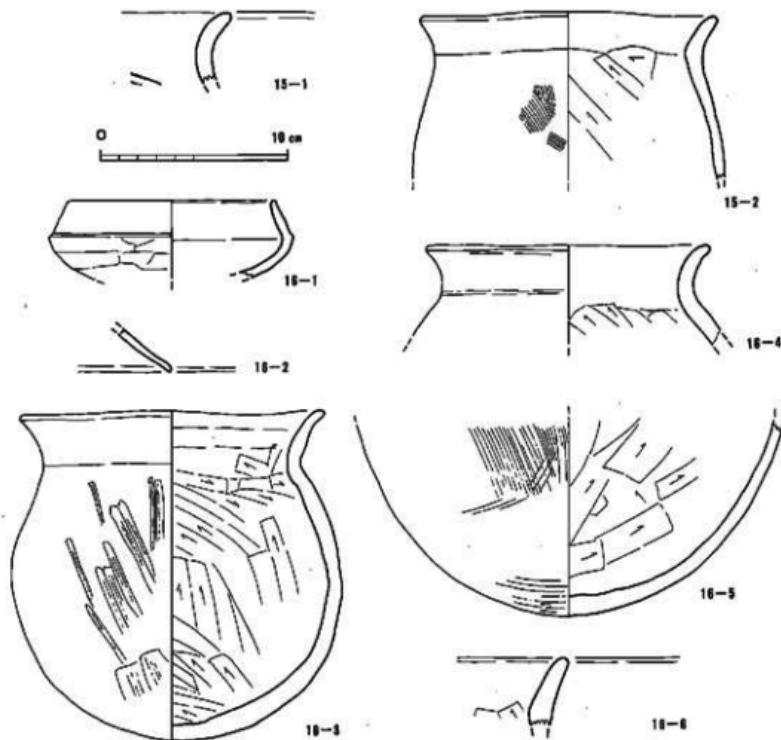
面が伸びていかないのをみると、7号に西辺を切られれているとしてよい。北辺が長さ2.4mまでわかるのみで、大半は調査区外にある。よって詳細は不明。6世紀後半としておく。

出土遺物（図版14、第38図）

土師器(1・2) ともに壺で、2は復原口径15~16cm。

15号住居跡（図版4-2、第10図）

2号住居跡の床面下から検出されたもので、2号住居跡と同様、南辺と西辺の一部が削られている。東辺は3m、北辺は2.5mを測るので南北に少し長い長方形プランとなる。面積は7.2m²ほどであろう。東西両辺をもとに主軸を求めるとき、それは北辺にあるカマドの左袖の内側を通る



第38図 15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)

ものとなる。方位はN18°W。主柱穴はP1~4の4本としてよいが、それらを結ぶとP1~2間が1m、P2~3間が1.55m、P3~4間が1.3m、P1~4間が1.75mとなり、台形状になる。出土遺物は少なく、須恵器はない。6世紀後半としておく。

カマド 突出しないタイプで、焚口幅は45cm、燃焼部奥行き60cmを測る。

出土遺物（図版14、第38図）

土師器（1~6） 1は須恵器を模倣した精製の壺で、復原口径11cm。2は高壺の脚據であろう。3は球形壺の壺で、外面は植物質の原体で擦過している。口径16.4cm、胴径17.7cm、器高17.6cm。カマド東の出土。4は復原口径15cm。5は壺の底部片で、6は瓶であろう。

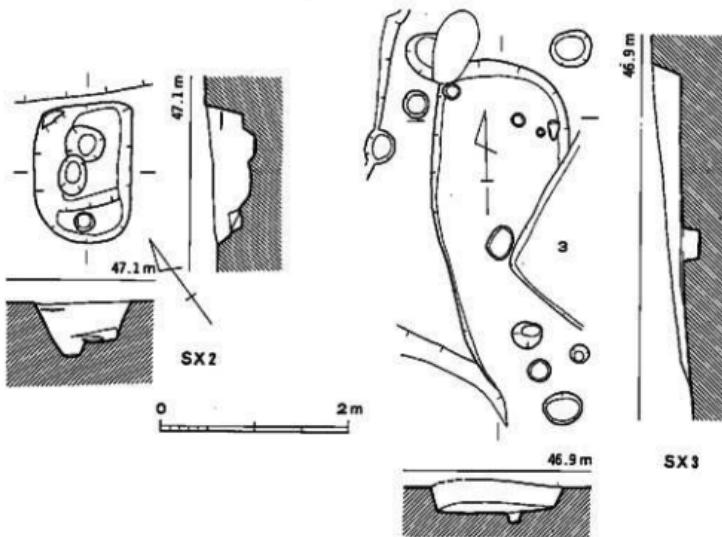
（2）土 坑

S X 3 （第39図）

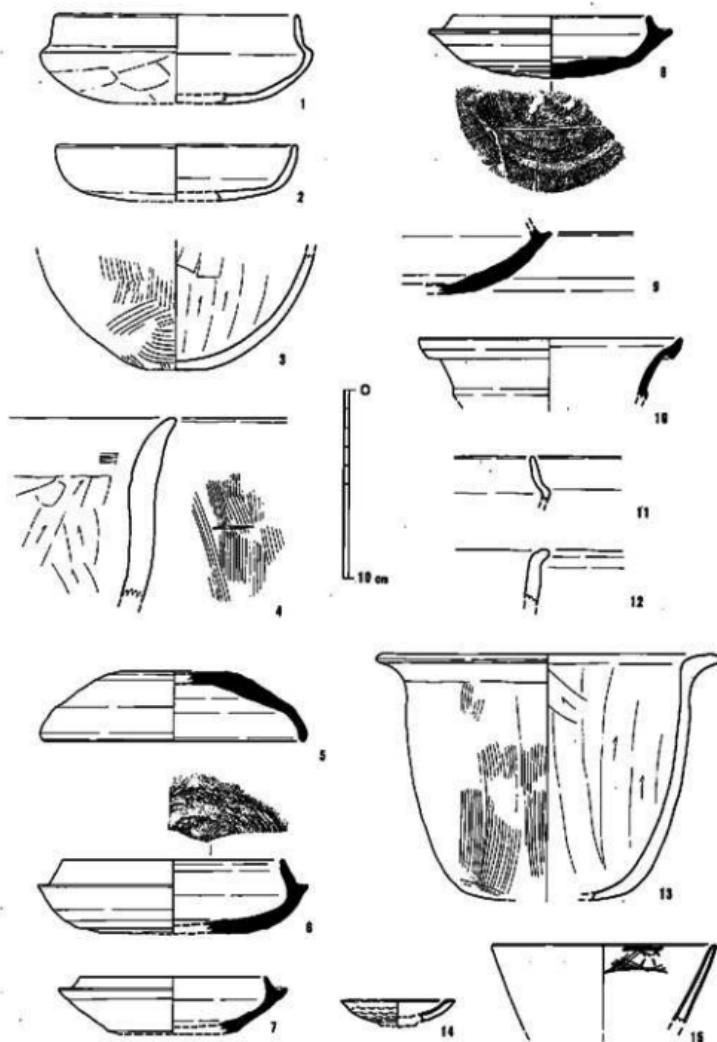
明確な土坑とは言ひ難いが、SX3としておいた。3号住居跡に切られた南北に長いもので、南北3.5m、東西1.45mを測る。

出土遺物（第40図）

土師器（12） 12は壺の口縁部片である。胴は張らない。



第38図 SX 2・3実測図 (1/60)



第40図 ピットI出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

(3) その他の出土遺物

S X3以外に明確な土坑は見当たらなかったが、柱穴あるいは造構検出面、柿穴、柿肥料穴、調査区西端の斜面などから出土した遺物がある。

出土遺物（図版14・16-3、第40・41図）

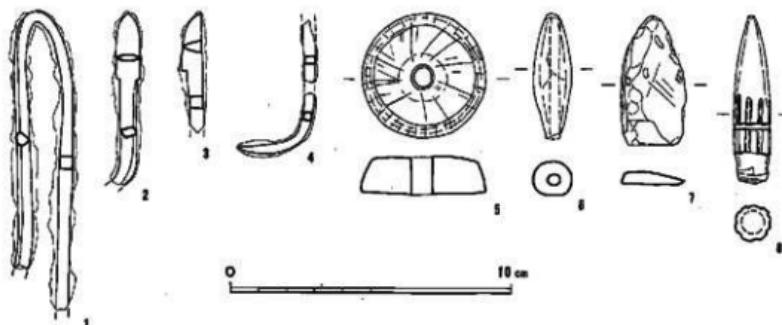
須恵器（5~10） 5は西端斜面出土の壺蓋で、復原口径14cm。6は調査区東端近くの柿穴出土の壺で、内底面に原体不明の压痕がある。復原口径11.8cm。7は西端斜面出土の壺で、復原口径10cm。8も西端斜面出土の壺で、口唇部に面をとっている。復原口径10.6cm。9はピット出土の壺。10は造構検出面の壺で、復原口径14cm。

土師器（1~4・11・13） 1~4はピット出土。1は須恵器を模倣した精製の壺で、内外とも黒漆塗りの痕跡がある。復原口径13.2cm。2の壺はかなり強い二次熱を受けている。口径13cm。3は甕の底部。4は甕であろう。11は柿肥料穴出土で、外面は黒漆塗りである。13は造構検出面の甕で、口縁はL字形に屈折する。口径18.6cm。

磁器（14~15） ともに西端斜面の出土で、14は青白磁。紅皿であろうか。復原口径6cm。15は外面が青磁、内面は染付の碗で、復原口径12cm。

土製品（第41図6） 調査区東端の南側にある柿肥料穴付近で採集された土錐である。長さ4.41cm、幅1.43cm、孔径0.32cm、重さ5.4g。

銃弾（第41図8） 造構検出面採集の銃弾で、鉄の表面を銅で覆っているらしく、表面は綠銅をふいている。基部には鉄鏽がふく。長さ5.96cm、径1.28cm、重さ40.7g。



第41図 III区出土鉄器他実測図 (1/2)

B. 弥生時代の遺物

調査区内で遺構は検出されなかったが、土器が出土している。

出土遺物（図版16-1、第41・47図）

弥生土器（第47図7～11）7は壺の口縁部片で、口唇部全面に刻み目がある。8も壺で、口縁に断面三角形の突帯を貼り付けている。9は壺の底部か。10は壺の底部で、復原径9cm。11は壺の底部であろう。復原径8.2cm。いずれも住居跡からの出土で、7・9は18号、8は3号、10は10号、11は13号の出土である。

石 器（第41図7）安山岩質の剥片を一部磨いて鐵としたものらしい。弥生時代の所産とする確証はないが、他の時代とするよりは確率が高いだろう。長さ4.61cm、幅2.34cm、厚さ0.44cm、重さ6.7g。9号住居跡を切る柱穴から出土した。

C. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物

旧石器時代の遺構はない。遺物が数点あるので、ここの石器の項で一緒に述べる。縄文時代は前期と晩期とがある。前期は竪穴住居跡1軒、晩期は土坑2基があり、土器が出土しているが、それ以外に時期不詳の石器がいくつかある。

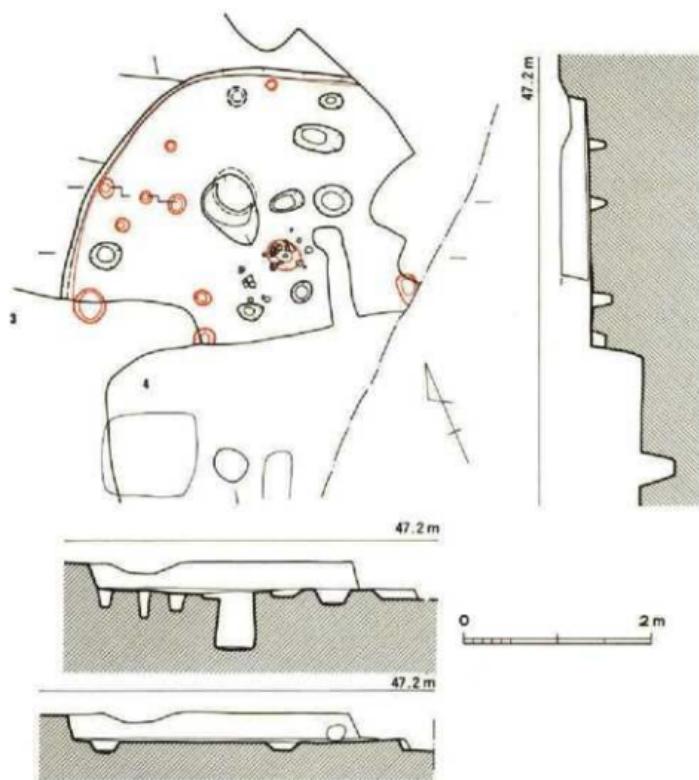
（1）竪穴住居跡

S X 1（図版11、第42図）

調査区東端部にある。南側を3・4号住居跡に切られ、東側は農道にかかっている。3・4号住居跡プランの北側に黄茶褐色弱粘質土の抜がりが円形に認められ、それを掘り進めていくなかで土器片と若干の焼土が集中して検出される所があり、壁面も立ち上がるに及んで、住居跡であろうと認識したものである。北側に弧状に残存する壁面から復原すると半径2.25mとなり、直径では約4.5mを測ることになる。中央の土器片と焼土は床面より浮いていた。柱穴は小さいものが10個ほどあったが、壁際に巡るのかもしれない。

出土遺物（図版15-1・2、第43・44図）

土 器（1～19）円筒形をした轟B式土器で、全ての破片が胎土・焼成は同じであるが、色調に茶色と赤茶色があり、また量から見てこれらは1個体ではなく、最低2個体分はありそうである。外面は口縁下に細い隆帯を貼り付けるが、それは10条で終わっているらしい。それより下位は地文の条痕のままである。内面は擦過のちナデを施している。底部はみられない。1には



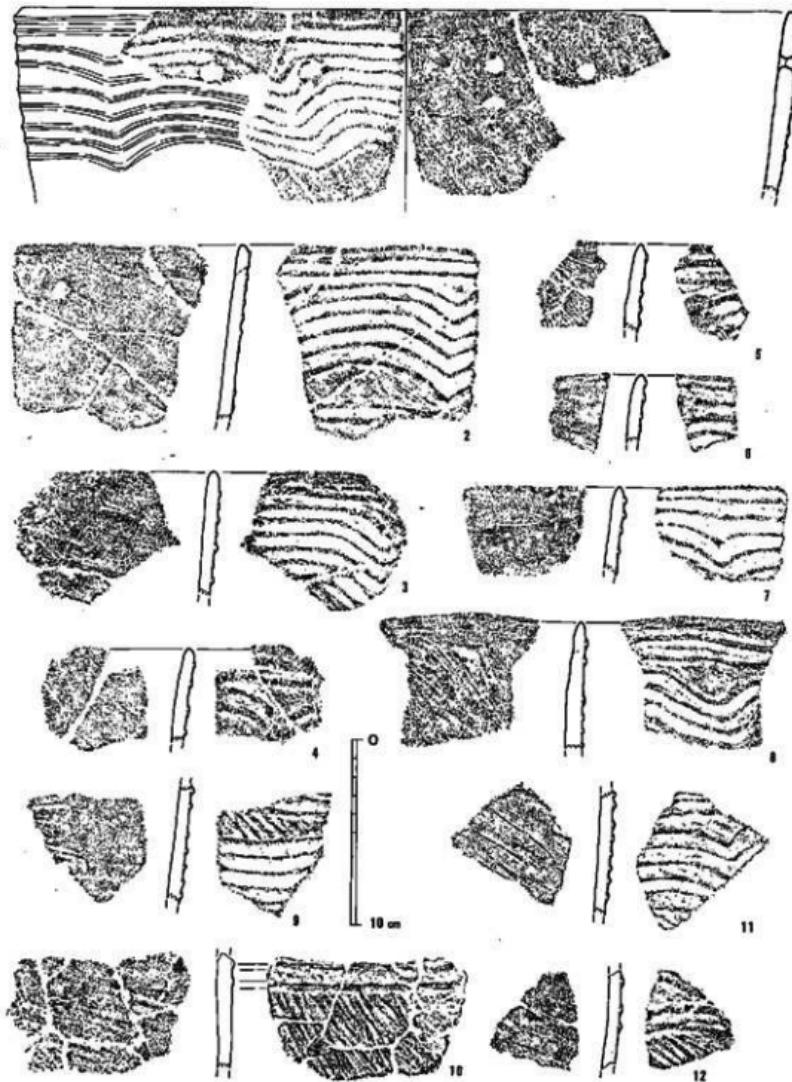
第42図 SX 1実測図 (1/60)

口縁下に焼成後の穿孔がある。復原口径は41cm。

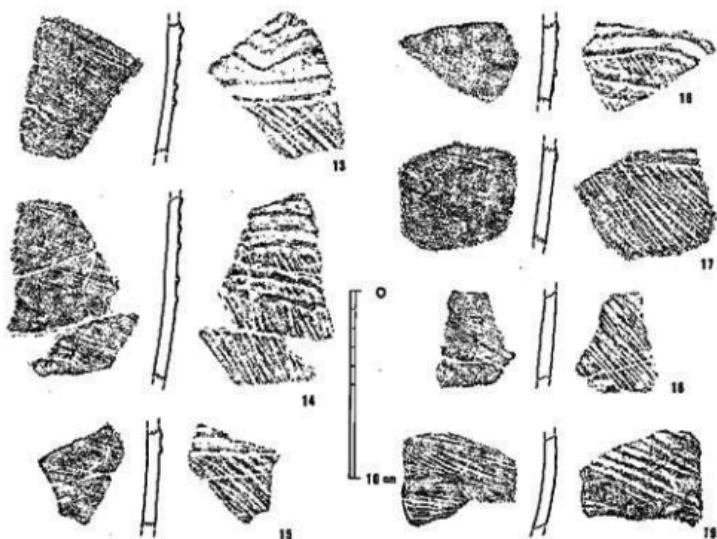
(2) 土 坑

S X 2 (第39図)

S X 1 の西にある。幅103cm、長さ150cmの丸みをもった長方形で、内部は段が付くとともにピットもある。深さは最大55cm。晩期土器片が2点出土しているが、小片のため図示できない。



第43図 SX 1出土土器実測図① (1/3)

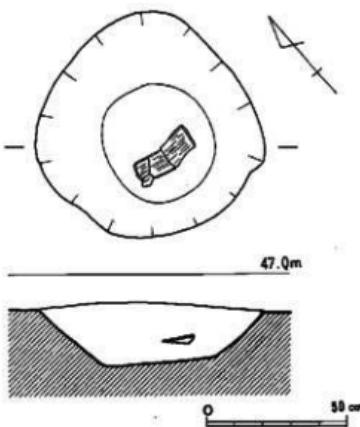


第44図 SX 1 出土土器実測図② (1/3)

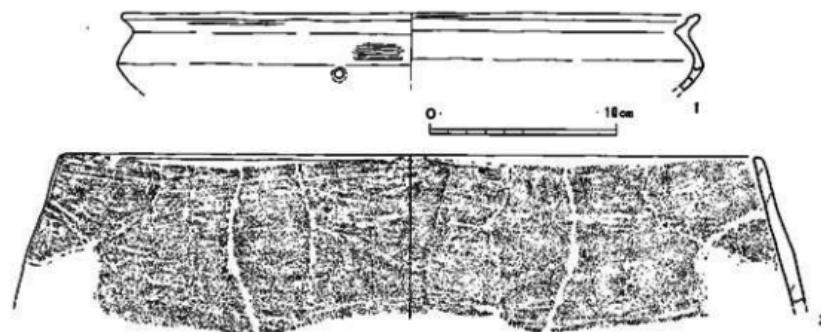
S X 4 (図版11-3, 第45図)

1号住居跡の北にある円形プランの土坑である。上面で75~80cm、底面で38~42cmを測り、深さは22cmが残る。底面からやや浮いて土器片が出土している。

出土遺物 (図版15-3, 第46図)

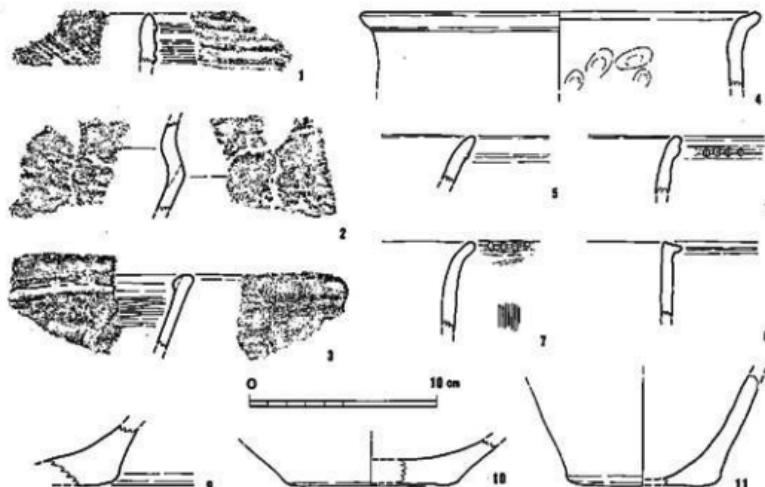


第45図 SX 4 実測図 (1/20)



第46図 SX 4出土土器実測図 (1/3)

土 器(1・2) 1は黒褐色を呈する浅鉢で、黑色磨研土器であるけれども風化が著しい。体部下半に穿孔がある。復原口径30.8cm。2は深鉢になろう。口縁は緩やかな波状をなすらしい。復原口径37.6cm。従来の編年でいう黒川式であろう。



第47図 縄文・弥生土器実測図 (1/3)

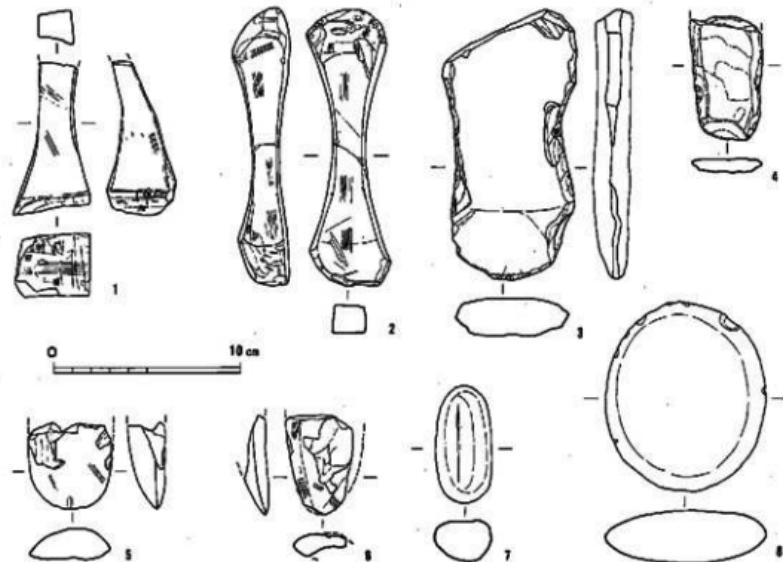
(3) その他の出土遺物

他の時期の住居等から出土した土器・石器がある。

出土遺物 (図版15-3, 16-1・2, 第47-49図)

土 器(第47図1~6) 1~3は4号住居跡出土で、1は前期・森B式の口縁部片であるが、SX 1からの混入品であろう。2・3は晩期・黒川式の鉢で、2は内外とも条痕、3はミガキである。4は7号住居跡出土で、晩期の深鉢としておく。復原口径21.4cm。5も深鉢で、9号住居跡出土。口縁下に低い突帯が貼り付けられる。6は11号住居跡出土の刻み目突帯の甕である。

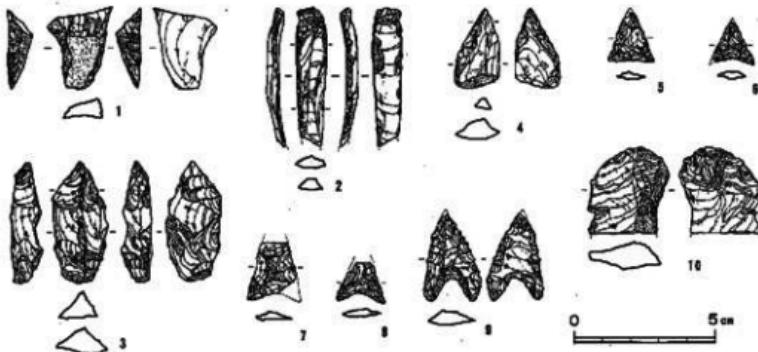
石 器(第48図3-6-8) 3は7号住居跡出土の局部磨製石斧で、使用痕のある先端刃部の上方を磨いている。長さ14.4cm、重さ274.4g。片岩。4は両端部包含層出土の扁平な片岩で、石斧としておく。長さ6.6cm、重さ31.4g。5は12号住居跡出土の磨製石斧。刃部先端は部分的に刃こぼれしている。蛇紋岩製。6も蛇紋岩の磨製石斧で、13号住居跡出土。8はすり石であろうか。凝灰岩質で採集品。



第48図 III区出土石器実測図① (1/3)

(第49図1~10) 1~3は旧石器である。1は黒曜石のナイフ形石器で、横長剥片を素材とし、表面と右側面に自然面が残る。長さ2.95cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm、重さ3.6g。11号住居跡出土。2は黒曜石の縦長の石刃で、両側縁の大半を急傾斜の側面調整のあとで磨いており、断面が丸くなっている。長さ4.9cm、幅1.05cm、厚さ0.45cm、重さ3g。3号住居跡出土。3は角錐状石器で、稜上からの剥離がなされ、断面は三角形をなす。黒曜石。長さ4.3cm、幅1.9cm、厚さ1.1cm、重さ8.3g。西端斜面出土。

4~10は縄文時代の所産であろう。4はサヌカイトの尖頭状石器で、下端に自然面が残る。長さ2.9cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ3.15g。8号住居跡出土。5~9は打製石器で、5~7がサヌカイト製、8~9は黒曜石製。5は先端をごく僅かに欠損している。長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.25cm、重さ0.6g。8号住居跡出土。6も先端と片方の脚端部をごく僅かに欠損する。長さ1.5cm、幅1.55cm、厚さ0.28cm、重さ0.5g。12号住居跡出土。7は先端と片方の脚を大きく欠損している。長さ2.05cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ1.1g。4号住居跡出土。8は先端部を欠損する。長さ1.5cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.5g。10号住居跡出土。9も先端部を欠損するが、その先端部に打点がある。長さ3.15cm、幅2.1cm、厚さ0.55cm、重さ2.55g。5号住居跡出土。10は黒曜石製のスクレイバーである。長さ3.1cm、幅2.9cm、厚さ0.95cm、重さ9.8g。7号住居跡カマド内出土。



第49図 III区出土石器実測図② (1/2)

3. IV区の調査

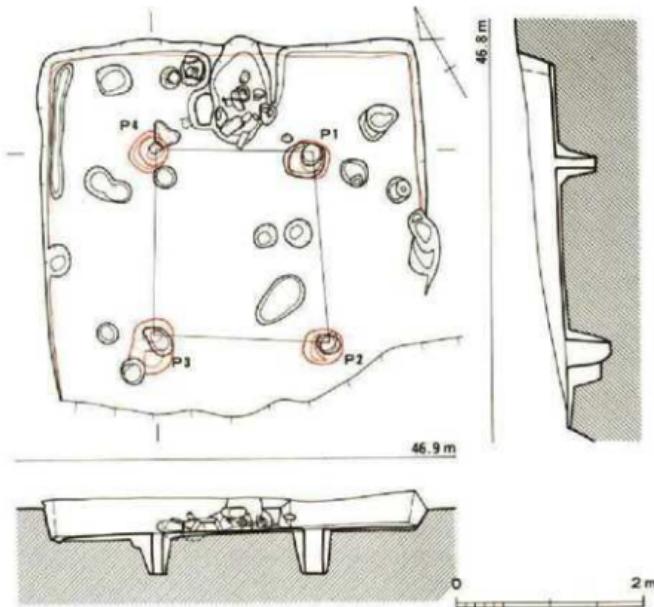
当該区はIII区の東隣で、VII区とは農道を挟んだ南側にあたる。6世紀後半の竪穴住居跡2軒と土坑5基が検出された。また、調査区の南西部で旧石器時代の包含層を調査した。

A. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡 (図版19-1, 第50図)

調査区の中央で検出した。北東壁長3.9mで、南北西壁は削平により遺存しないが、長方形の柱配置から平面形は南北にやや長い隅丸方形を呈すると考えられる。壁高はカマド付近で0.4mを

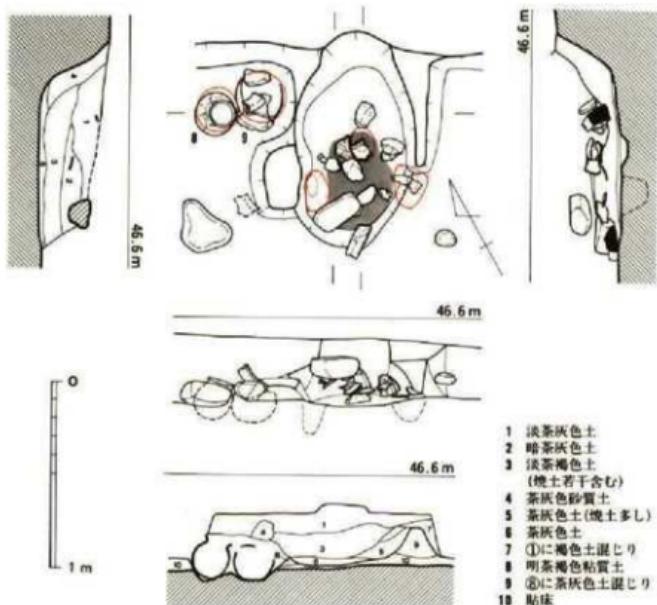


第50図 1号住居跡実測図 (1/60)

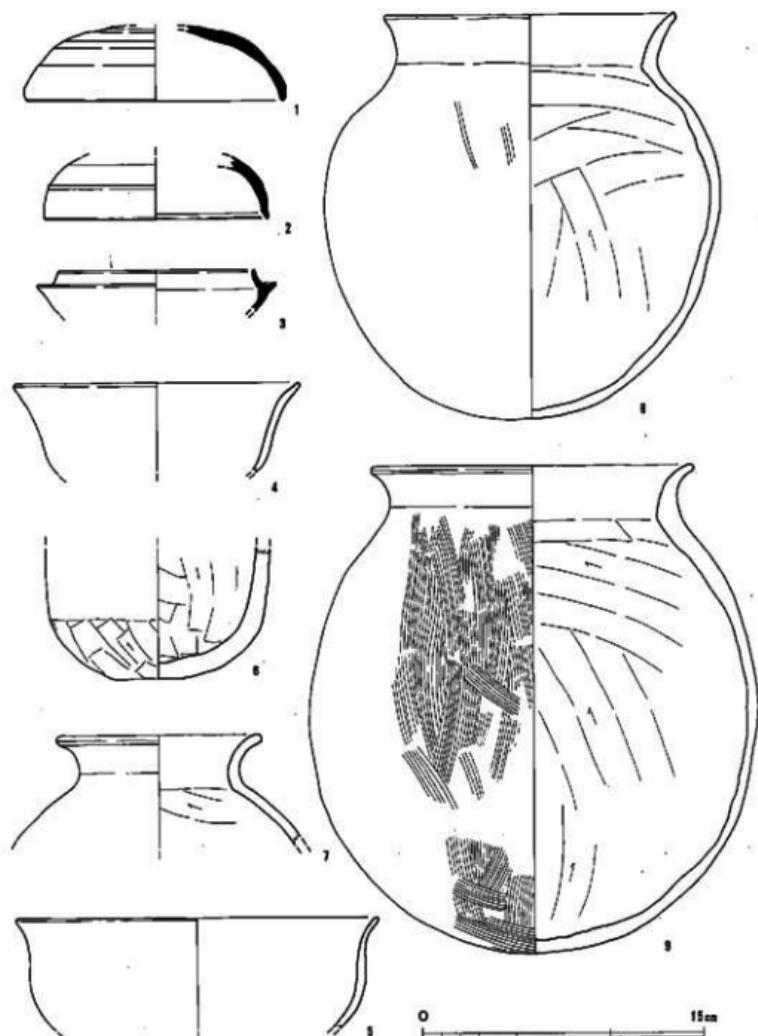
測る。主柱穴はP1~4で、径15cmの柱痕跡を確認した。貼床を剥がしたところ、径0.4mの柱掘形を検出した。柱間はP1~2間2.08m、P1~4間1.68mを測る。

カマド（図版19-2、第51図）

I a類で、北東壁中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留めるにすぎない。袖部は明茶褐色粘質土で構築しており、焚口幅35cm、壁体長96cmの規模である。右袖は長さ60cm、基部幅35cm、残高21cmで、左袖は長さ81cm、基部幅33cm、残高14cmを測る。カマド内には土製支脚が据わった状態で二箇所あるが、もう一つは左袖の外に置かれており、カマドの使用を放棄している。火床中央部には石製支脚の抜取り穴が、焚口部には袖石の抜取り穴があることから当カマドは作り直しと考えられる。火床は35×50cmの範囲で赤変している。煙道部は削平により遺存しない。カマド内から土師器小甕と川原石が浮いた状態で出土した。また、左袖と床面を掘込む形で土師器甕2個体が据えられており、水甕として使用されたものであろう。

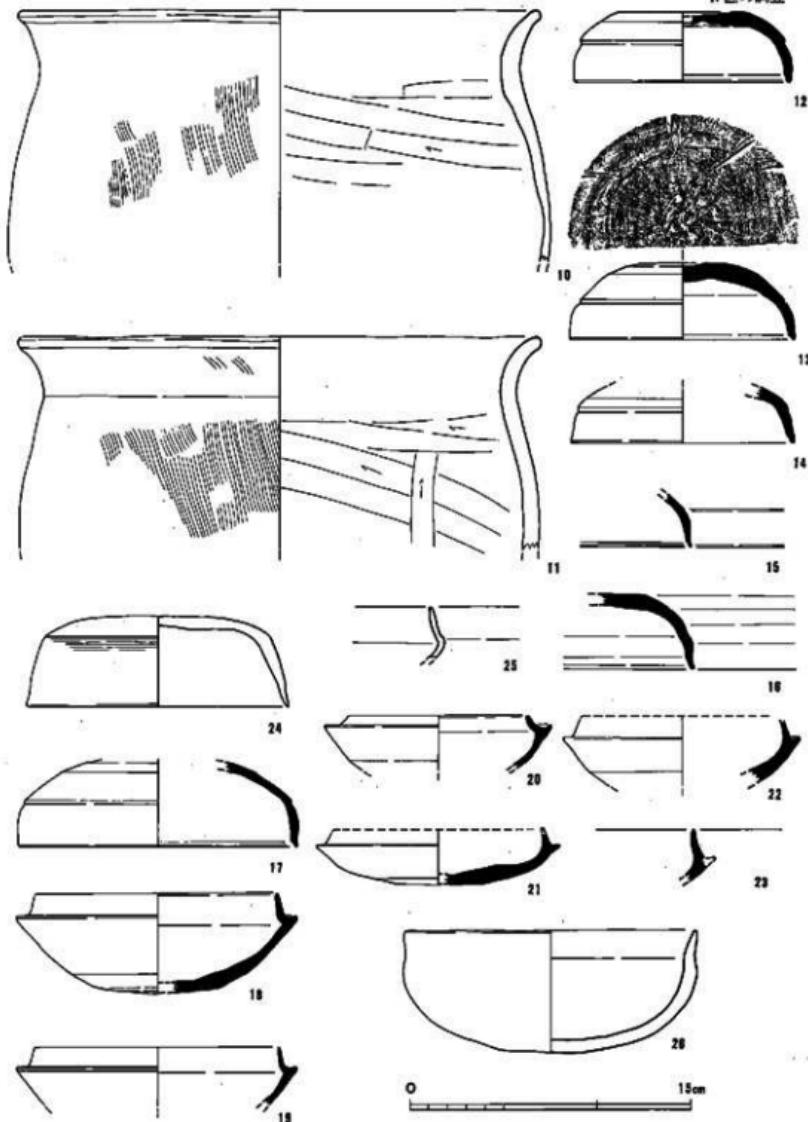


第51図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)



第52図 住居跡出土土器実測図① (1/3)

IV区の調査



第53図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

出土遺物（図版21-3、第52・53・61図）

須恵器(1~3) 1・2は坏蓋の資料である。1は体部外面の屈折縫が不明瞭、2は明晰な小型の坏蓋で、復原口径は1が13.9cm、2は12cmを測る。調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外ロクロヨコナデで仕上げている。

3は蓋受けの立上りが低い环身の破片資料で、復原口径10.6cmを測る。調整は内外ともロクロヨコナデで、色調は内面灰褐色、外面灰色を呈し、焼成も良好である。

土師器(4~11) 4・5は梳の破片資料で、復原口径は4が15.4cm、5は19.4cmを測る。調整は体部内外ともナデで仕上げている。色調は4が内面黄褐色、外面黒灰色。5は淡橙色を呈する。

7~11は甌の資料で、大・中・小がある。7は小型品で復原口径11cm。8・9は中型品で、口径は8が15.6cm、9は17.2cm。器高は8が14.1cm、9は26.1cmを測る。調整は胴部外面ナデ仕上げのもの(7・8)と刷毛のもの(9)とがあり、内面の調整はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。9の胴部外面には煤の付着が見られる。10・11は大型品で、復原口径は10・11とも28cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は10が内面黄褐色、外面橙褐色、11は内面黄褐色、外面橙色を呈し、焼成良好である。

土製品(第61図3・4) 3・4はカマド内出土の土玉で、3は径0.85cm、厚さ0.7cm、重さ0.45gを測り、こげ茶色を呈する。4は筋錐形を呈し、径0.95cm、厚さ1.05cm、重さ0.7gを測る。上部に2孔穿孔するが、下方で繋がっている。色調は褐色を呈する。

2号住居跡（図版20-1、第54図）

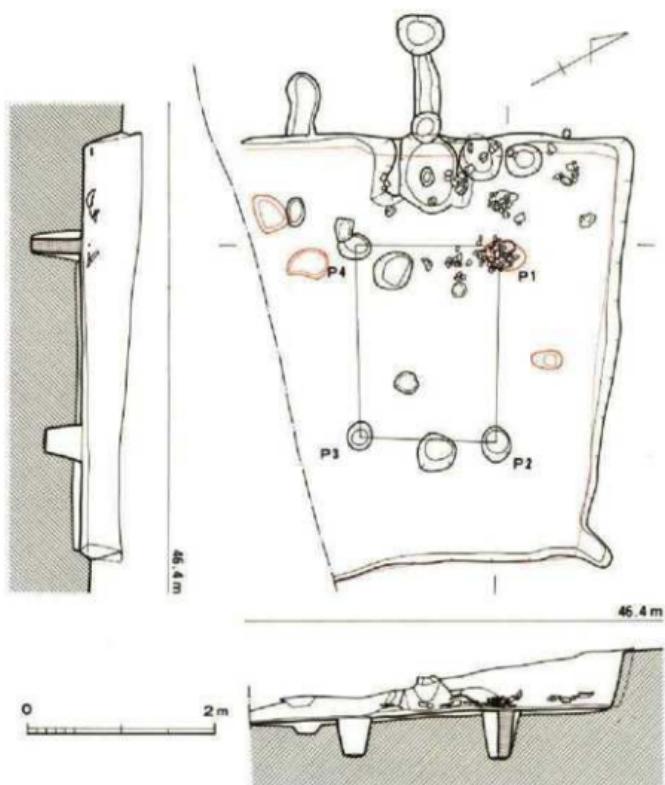
1号住居跡の3m西側で検出した住居跡で、南壁は削平により喪失する。北東壁長4.45m、北西壁は残存長4.2mであるが、長方形の柱配置から平面形は長方形を呈すると考えられる。壁高は北東壁側で0.6mを測る。主柱穴はP1~4で、柱間はP1~2間2.1m、P1~4間1.62mを測る。柱掘形は径0.3~0.45mの円形を呈し、径16cmの柱痕跡を確認した。カマド前面には土師器片が散乱していた。

カマド(図版20-2、第55図)

I a類で、北西壁中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖部と煙道底部を留めるにすぎない。袖部は暗茶灰色粘質土で構築しており、焚口幅50cm、壁体長75cmの規模を有する。右袖は長さ73cm、基部幅21cm、残高25cmで、左袖は長さ73cm、基部幅34cm、残高22cmを測る。カマド床面中央には支脚の抜取り穴があり、その前面が火床で、25×40cmの範囲で赤変していた。煙道は長さ85cm、幅27cm、深さ3cmと辛うじて遺存するが、先端部のビットは後世のもの。カマド内から土製品が出土している。

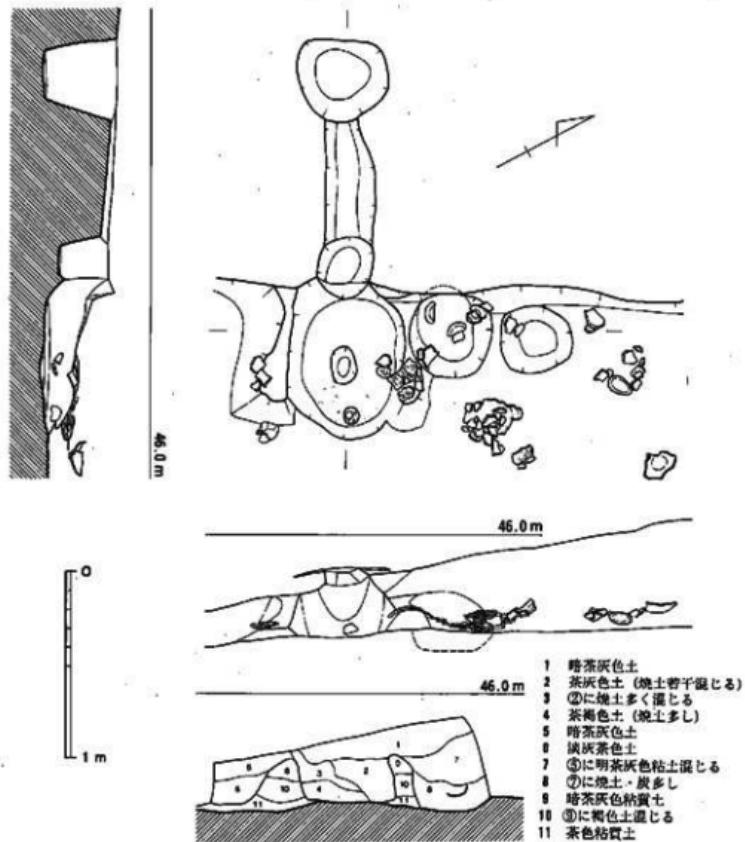
出土遺物(図版22-1-22-2、第53-56-57-61図)

須恵器(12~23・36) 12~17は坏蓋の資料で、大・小がある。12~14は小型品で、復原口径



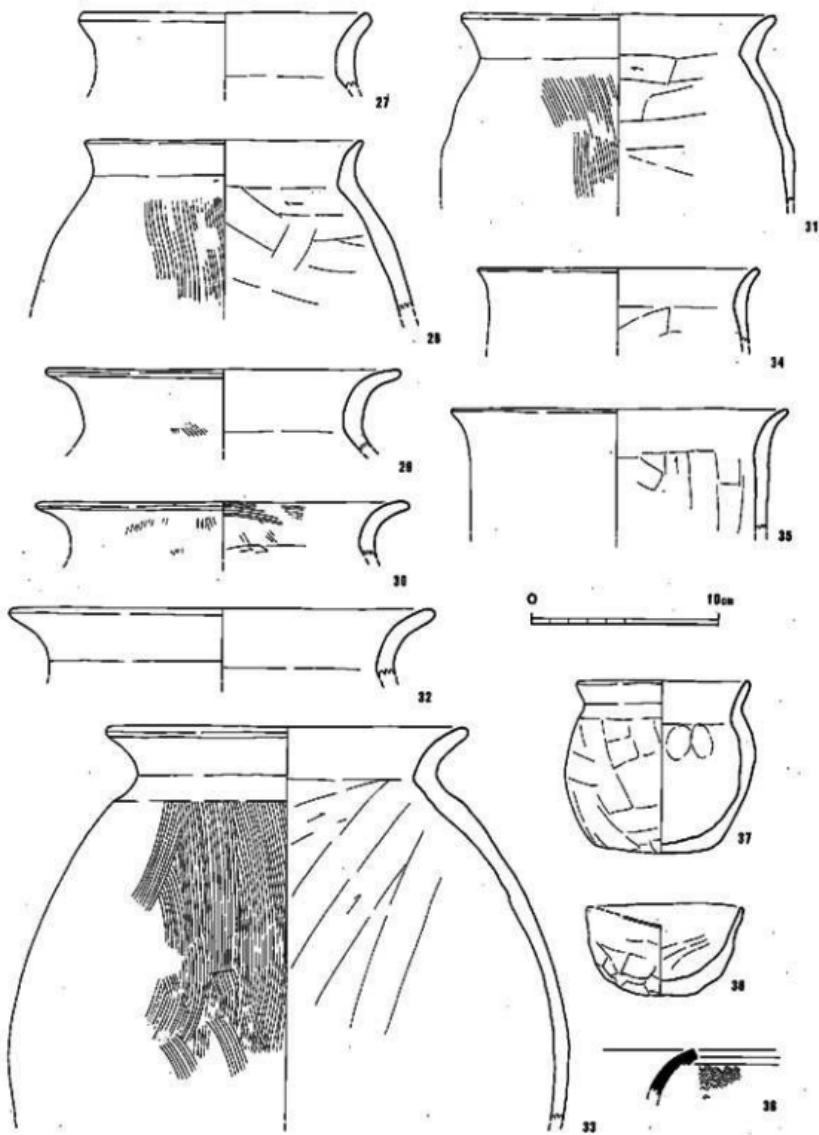
第54図 2号住居跡実測図 (1/60)

11.6~12cm, 16・17は大型品で15cmを測る。調整は天井部外面回転ヘラ削り、他は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。16の天井部内面にはタタキ痕が残されており、13の天井部外面にはヘラ記号が施されている。色調は淡灰色ないしは黒灰色を呈し、焼成はいずれも堅緻である。18~23は坯身の資料で、大・小がある。18・19は大型品で、復原口径13cm前後。20~23は小型品で、復原口径は9.6~10.6cmを測る。調整手法は底部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外ロクロヨコナデで仕上げである。36は小型甕の口縁部付近の小破片で、口頸部外面には櫛描き波状文が施されている。

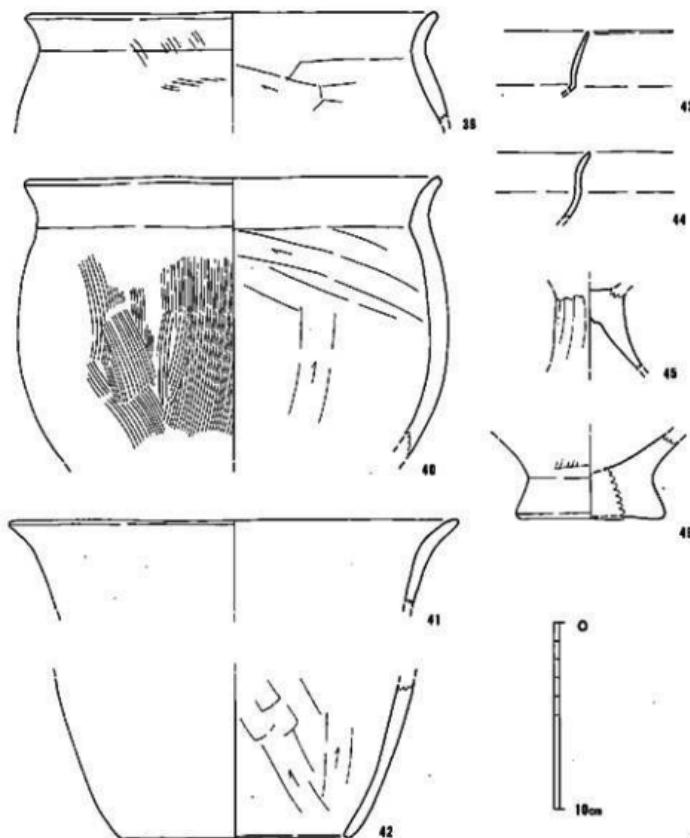


第55図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

土師器(24~35·37~45) 24は天井部が平坦な环蓋で、調整は天井部外面手持ちヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。復原口径は14cm、器高4.8cmを測る。25は蓋受け部が弱い环身の小破片で、内外ともヨコナデで仕上げている。26は蓋受けのない环身の資料で、口径15.6cm、器高6.5cmを測る。調整は体部内外ヘラ削りのあとナデ、口縁部内外はヨコナデで



第56図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第57図 住居跡出土土器実測図④ (1/3)

仕上げている。

27~35・39・40は甕の資料で大・小あるが、口縁部の形状により二つのタイプがある。口縁部が「く」字状に強く外反するもの(27~33・39・40)と緩やかに外反するもの(34・35)がある。調整手法は肩部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外ヨコナデ仕上げである。33の肩部外

面には煤の付着がみられる。復原口径は27が 15.6cm , 28が 14.8cm , 29が 19cm , 30が 20cm , 31が 16.8cm , 32が 22.8cm , 33が 19.4cm , 34が 15cm , 35が 18cm , 39が 22cm , 40が 22.4cm を測る。

37は小型の広口壺で、口径 9.3cm 、器高 9.2cm を測る。胴部外面へラ削り、内面ナデ、口縁部内外をヨコナデしており、内面には指頭圧痕が残っている。38は手握の椀で、体部外面へラ削り、内面ナデで仕上げている。

41・42は瓶で、41は口縁部付近、42は底部付近の破片資料である。調整は41が口縁部内外ヨコナデ、42は胴部外面ナデ、内面へラ削りしている。復原口径は41が 24cm 、復原底部径は42が 12.2cm を測る。

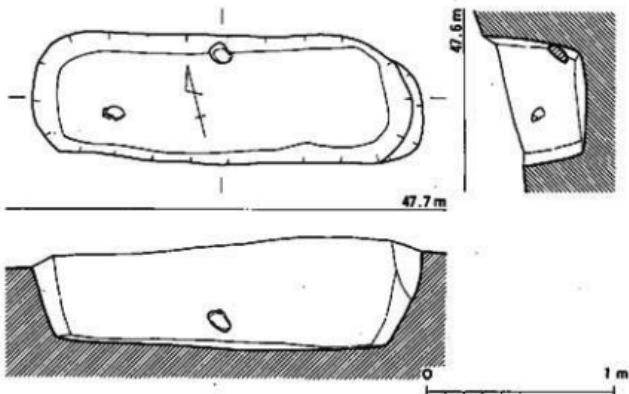
43～45は高環で、43・44は坏部、45は脚部の破片資料である。43・44は体部外面に不明瞭ながらも屈折縫を有す坏部である。45は柱状部が短い脚部で、外面はヘラ削りで面取りしている。

網文土器(46) 外底部が強く張り出した底部付近の破片資料で、内外ともナデで仕上げている。復原底径は 8cm を測る。

土製品(第61図5・6) 5・6はカマド内出土の土製品で、5は残存長 3.1cm 、径 0.8cm で、「く」字形に屈曲する。6は残存長 2.8cm 、径 0.7cm を測り、先端部が屈曲し、やや扁平になっている。ともに人形の土製品で、腕を模したものであろう。色調は淡褐色を呈する。

(2) 土 坑

1号土坑(図版21-1、第58図)



第58図 1号土坑実測図 (1/30)

1号住居跡の2.3m北側に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ2.08m、幅0.68m、深さ0.6mを測る。底面はほぼ水平で、壁面は垂直気味に立上がる。浮いた状態で土師器壺と川原石が出土している。当土坑は形態的にみて土壙墓であり、墓とすると頭位はS76° Eを示す。

出土遺物（第60図）

土師器(47) 復原口径14.7cmを測る杭で、調整手法は器面の風化が著しく不明である。色調は淡橙色を呈し、焼成良好である。

2号土坑（第59図）

1号住居跡の0.7m北側に位置する。楕円形を呈し、長さ3.18m、深さ0.45mを測る。幅は段落ちに切られ不明。底面はほぼ水平で、北東側にテラスを有する。浮いた状態で土師器壺片が出土した。当土坑は3.2mと長大ではあるが、土壙墓になるか。主軸方位はN50° Wを示す。

出土遺物（第60図）

須恵器(48) 体部外面の屈折稜が不明瞭な壺蓋の小破片である。調整手法は天井部外面回転ヘラ削り、口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は淡灰色を呈し、焼成は堅緻である。

土師器(49) 小型壺の胴部上半の資料で、復原口径14cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外ヨコナデ仕上げである。

3号土坑（第59図）

2号住居跡の1.5m北側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.04m、短軸1.65m、深さ0.4mを測る。底面は水平で、中央西寄りに径28cm、深さ14cmのピットを有するが当土坑と関連するかは不明。土師器壺と土錐が出土した。

出土遺物（図版22-1、22-2第60・61図）

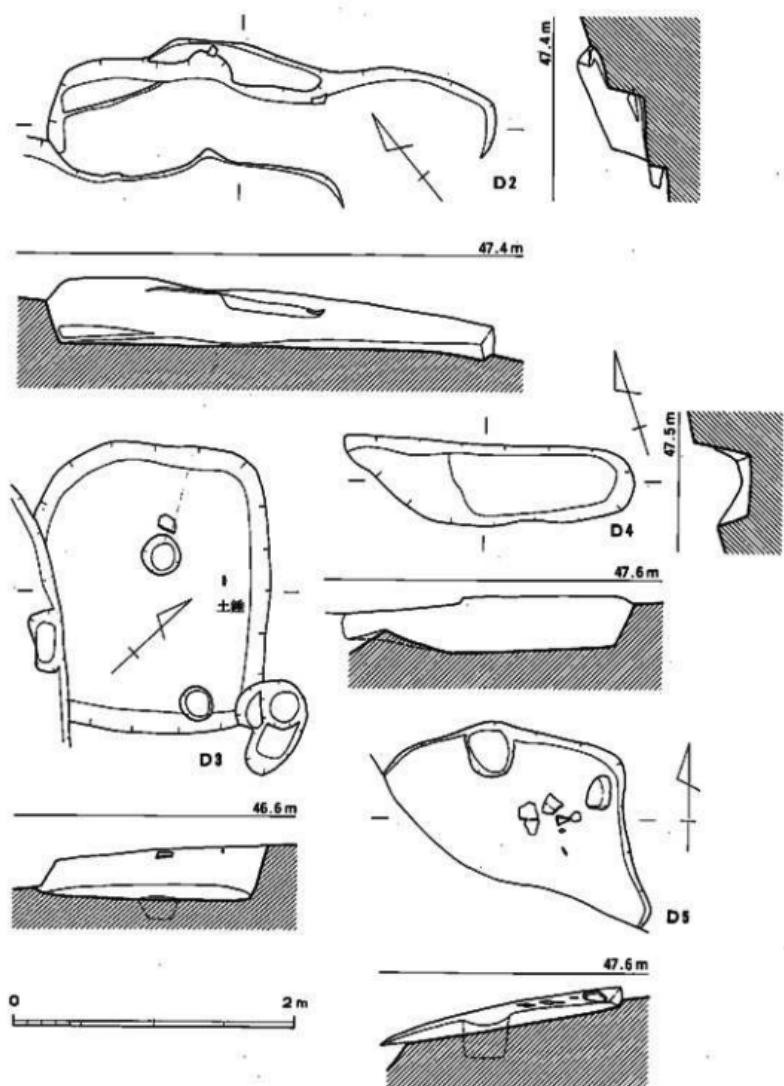
土師器(50) 蓋受け部の屈折が不明瞭な壺で、内外とも黒漆を塗布している。調整は口縁部内外ヨコナデ、体部内外はナデで仕上げている。復原口径12.2cm、器高4.1cmを測る。

土製品（第61図7） 7は大振りの管状土錐で、下端部を欠損する。長さ6.3cm、幅2cm、重さ20.5gで、0.8cmの孔を穿つ。胎土は割合良好で、橙褐色を呈する。

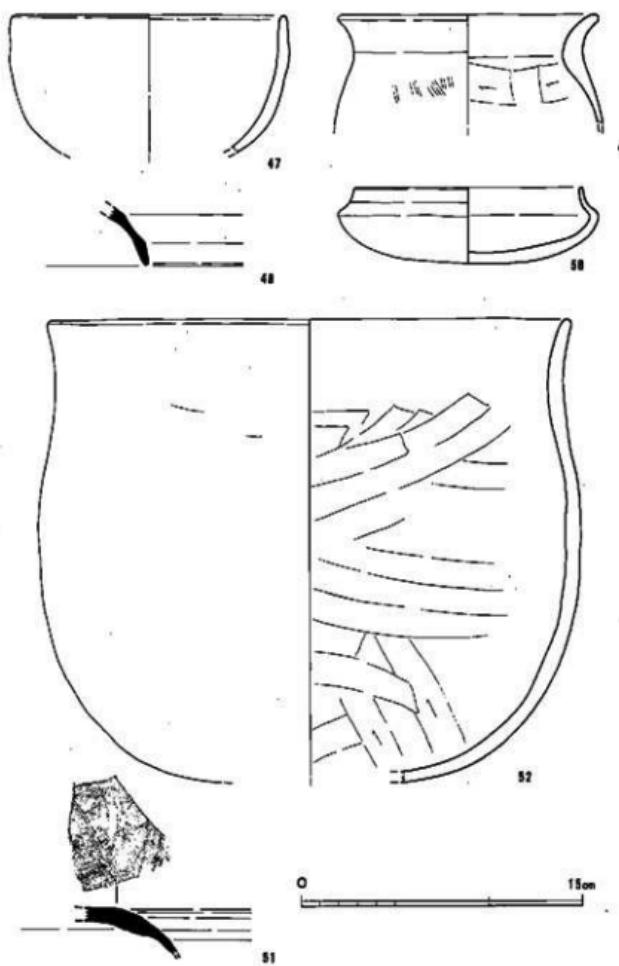
4号土坑（第59図）

1号住居跡の2m北側に位置する。平面形は楕円形を呈し、残存長2.05m、幅0.58mで、深さは0.38mを測る。底面は西側に高くなっている。当土坑も形態的にみて土壙墓になる可能性がある。主軸方位はN73° Wを示す。

出土遺物（第60図）



第 59 図 2-5 号土坑実測図 (1/40)



第60図 土坑出土土器実測図 (1/3)

須恵器(51) 壊壊の天井部破片で、外面にはヘラ記号が施されている。調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は内面灰色、外面灰

褐色を呈す。

5号土坑（図版21-2、第59図）

4号土坑の北西側に重複する。平面形は不整方形を呈し、北壁長1.72m、東壁長1.2m、深さ0.15mを測る。底面は西側に傾斜しており、北壁中央に径0.32m、深さ0.3mのピットを有する。底面から10cm程浮いた状態で土師器片が出土した。

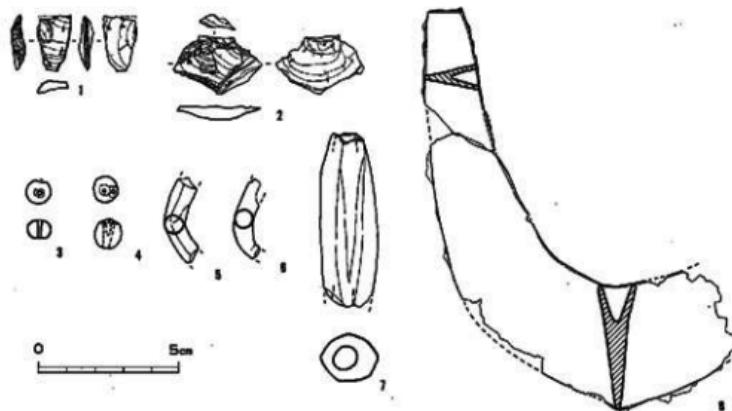
出土遺物（第60図）

土師器(52) 直口気味に緩やかに外反する広口の大型甕で、復原口径28cm、現存器高24.7cmを測る。調整手法は胴部外面工具ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内面はヨコナデである。色調は内外面とも橙褐色を呈し、焼成は良好である。

(3) その他の出土遺物

出土遺物（図版22-3、第61図）

鉄 器(第61図8) 8は西端トレンチ上層出土の鋤先で、旧石器包含層掘下げの際に壁面より出土した。古墳時代の造構に伴うものと思われるが、造構は検出できていない。半分を欠損し、鋸歯が著しいが、残高14.3cm、先端幅4.5cmを測る。先端部が尖っており、未使用品。



第61図 IV区出土石器・鉄器・土製品実測図 (1/2)

B. 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 包含層 (図版18, 第62図)

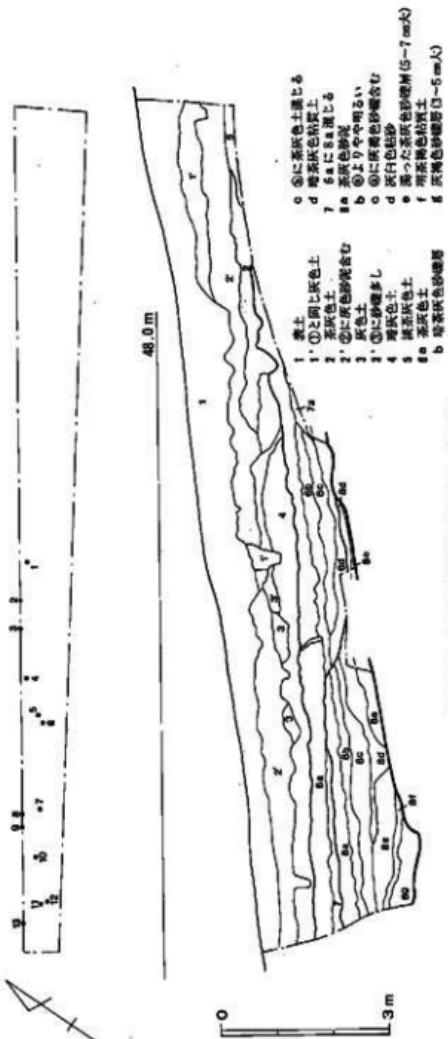
IV区の西端部には、暗茶褐色の黒変部がみられた。旧石器時代の包含層が存在する可能性があり、調査区の西壁に沿って長さ15m×幅1mのトレンチを設定し、深さ2.6m程掘り下げた。

層序は①表土、②茶灰色土、③灰色土、④暗茶褐色土、⑤淡茶褐色土、⑥茶灰色土、⑦茶灰色土(茶灰色砂泥混じる)、⑧茶灰色砂泥で、6・8層は1m程堆積している。地山のレベルは北東端で標高46.6m、南西端で標高43.5mを測り、南西側に傾斜している。6~8層が包含層で、特に6c層及び8b層に多く含まれる。レベル的には44.5~45mの幅である。

出土遺物 (図版18-3, 第61図)

石 器(1-2) 1は黒曜石の横長剝片を素材とした台形石器で、刃部の大半は欠損する。側縁は刃溝し加工を施している。長さ1.95cm、刃部幅1.1cm、厚さ0.5cmで、重さは0.85g。包含層の出土。

2はスクレイバーで、残長2.1cm、幅3.2cm、厚さ0.55cmで、重さ2.7g。黒曜石の横長剝片を使用しており、2号住居跡埋土の出土。



第12図 調査区北壁土質断面図 (1/100)

4. V 区 の 調 査

当該区は本陣山から伸びた丘陵の南裾部にあたり、柿園造成の際に階段状に8~9段削開されているため遺構の遺存状態は悪い。I区墳丘墓西側の丘陵斜面部において6世紀中~後半の住居跡10軒・落ち込み2基及び6世紀前半の円墳1基、近世墓3基を検出した。

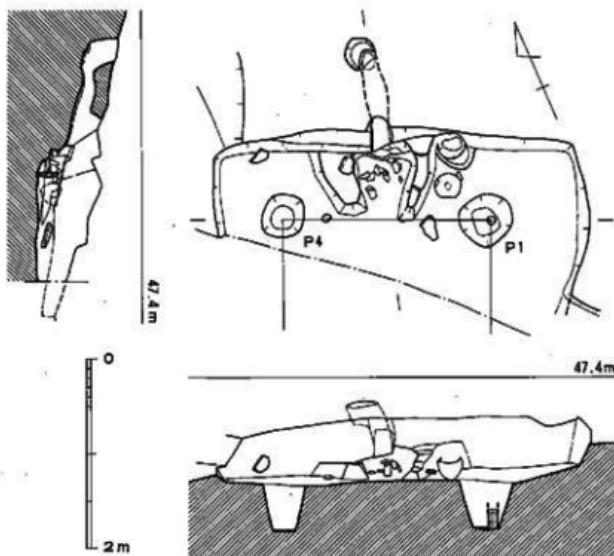
また、調査段階において1・2号土坑としていた遺構は、遺物整理中に近現代の遺物が出土していると判ったので除外した。

A. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 穴住居跡

1号住居跡（図版24-1、第63図）

調査区の中央部南端で検出した。1号墳石室攝形の6m北西側に位置し、墳丘径約13mの円墳に復原される1号墳の周溝を切る形となる。北壁長3.8mで、壁高はカマド側で0.65mを測る。



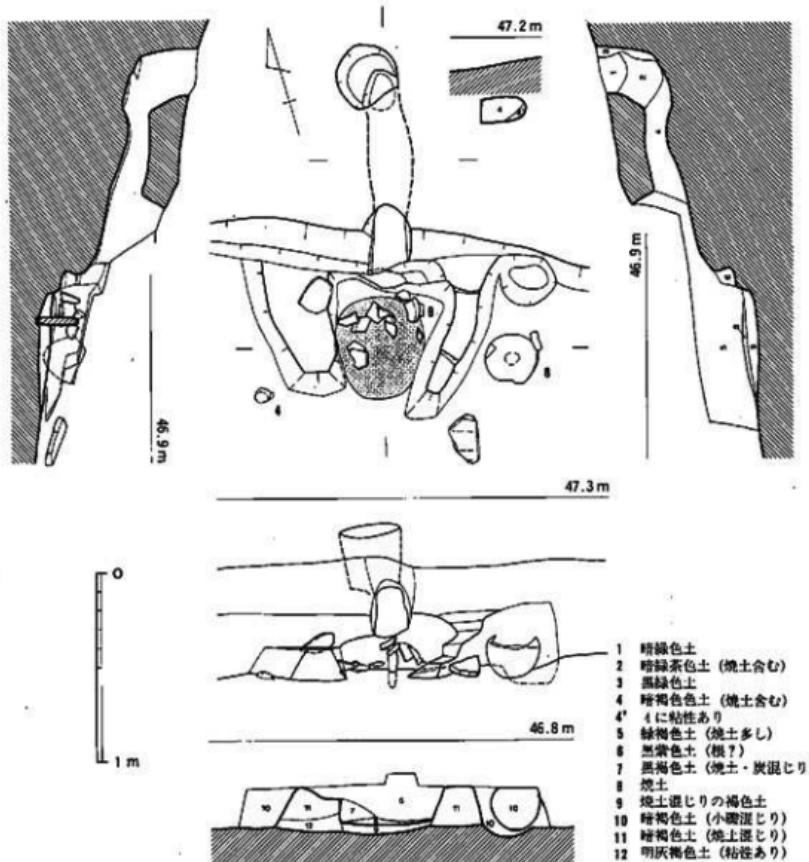
第63図 1号住居跡実測図 (1/60)

V区の調査

南部が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、4本の主柱穴を有するタイプで、P1・4が柱穴である。径0.45～0.55m、深さ0.5mで、柱間はP1～4間2.23mを測る。P1では径10cmの柱痕跡を確認した。

カマド（図版24-2・3、第64図）

I a類で、北東壁中央に付設する。袖部は暗褐色土で構築しており、焚口幅34cm、壁体長65



第64図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)

cmの規模を有する。右袖は長さ90cm、基部幅26cm、残高25cmで、左袖は長さ68cm、基部幅47cm、残高18cmを測る。支脚は川原石で、奥壁から13cmの箇所にある。焼土混じりの褐色土で埋められており、その上面が火床で、良く焼けていた。また、袖部積土には焼土・炭を含んでいることからカマド整体の作り直しが考えられる。煙道はトンネル式で、完存する。長さ120cm、中央部幅24cmで、煙出し部は径33cmの円形を呈する。煙道底面は16°の傾斜で登っているが、煙出し部付近で一段下がっており、雨水の流入対策を施している。主軸方位はN17°Eを示す。

カマド内からは土師器碗が口縁部を下にして出土した。右袖の横には床面を若干掘り窪めて土師器甕が据えられている。

出土遺物（図版31、第65・68図）

土師器(1~11) 1・2は甕の資料で、1は口縁部が内湾するタイプで、2は緩やかに外反するタイプである。調整は1が体部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ。2は体部外面下半は粗いヘラ削り、他は内外ともナデで仕上げている。色調はいずれも黄褐色を呈し、焼成も良好である。口径は1が15.2cm、2が13.6cmを測る。

3~5は小型丸底甕で、3は胴部上半、4・5は胴部下半の資料である。いずれも器面が風化しているものの胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ調整で仕上げている。3は復原口径10cm、現存器高7.5cmを測る。

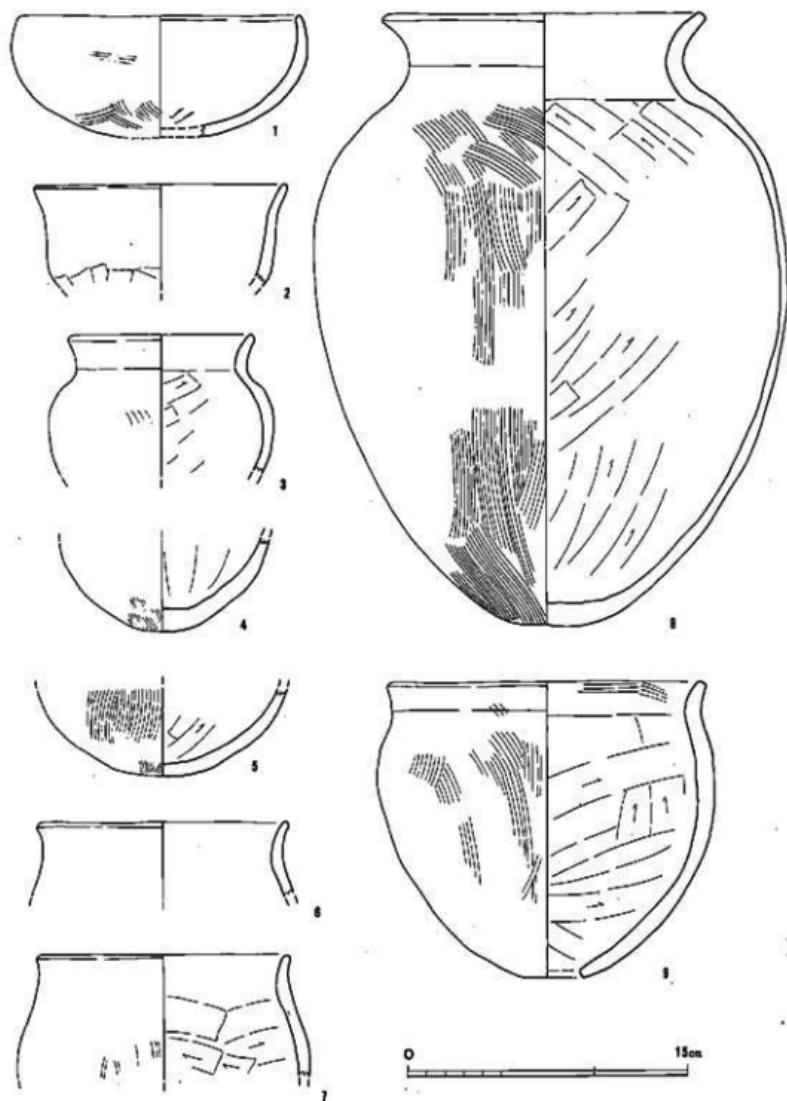
6~8・10・11は甕の資料で、6・7・10・11のように口縁部が緩やかに外反する小型の甕と8のような「く」字状に強く外反するものがある。調整は風化しているものもあるが、胴部外面刷毛、内面はヘラ削りのものが大半で、11のようにさらにナデで仕上げているものもある。口縁部は11が外面に刷毛を残すが、いずれもヨコナデしている。復原口径は6が13.4cm、7が13.6cm、10は17.8cmを測る。8は卵形の胴部に強く「く」字状に外反する口縁部がつく甕で、調整手法は小型甕と同様である。口径は17.2cm、胴部最大径25.3cm、器高32.75cmを測る。

9は復原口径17cm、器高15.8cmの小型の瓶で、底部は焼成前に穿孔されている。調整は胴部外面刷毛、下半はさらにナデ、内面はヘラ削り、口縁部内面は刷毛のあと内外ともヨコナデで仕上げている。

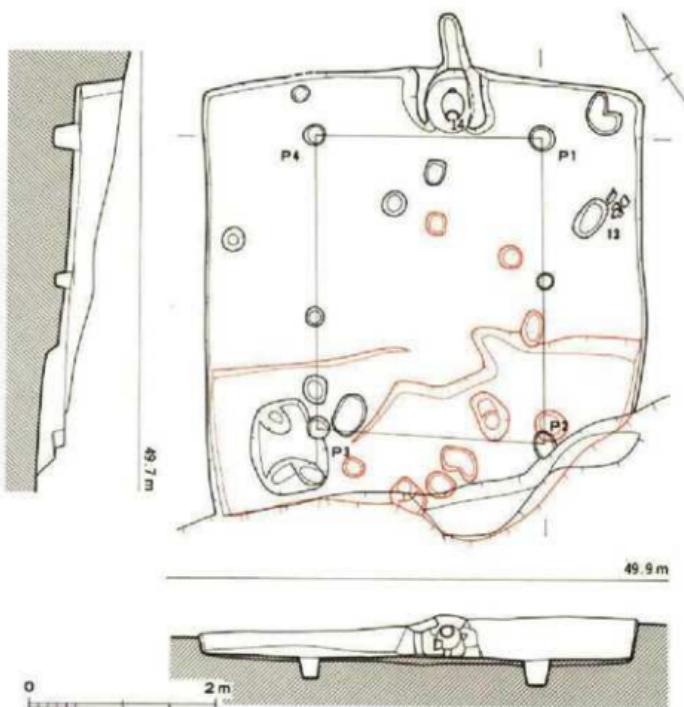
2号住居跡（図版25-1、第66図）

調査区東端下段のややフラットな面（標高49m）で検出した住居跡で、1号墳周溝の10m北東側に位置する。ここで問題となるのが、3号住居跡との位置関係である。両者は4mしか離れていないが、床面で2.3mもの比高差を有する。この段落ちが柿園造成時のものとすると、2号住居跡は丘陵の傾斜状況からみて既に削平されて然るべきレベルに位置するが、カマドの煙道部を残している。このことから、両者間の段落ちは住居築造当初のものとみなすことができ、階段状に平坦面を造成し、そこに当住居を構築したと考えられる。

V区の調査



第65図 住居跡出土土器実測図① (1/3)



第66図 2号住居跡実測図 (1/60)

南西壁は後世の段落ちにより失われるが、北東壁長4.7m、壁高はカマド側で0.45mで、北西壁は長さ4.55m遺存する。柱配列は長方形を呈するが、P1~4は北東壁から0.5m、南東・北西壁からは信の0.8~1mの位置にあることから平面形は方形に復原できる。主柱穴はP1~4で、径0.25m前後、深さ0.3mを測る。柱間はP1~2間3.25m、P1~4間2.42mの間隔である。床面は平坦で、10cm程の貼床を施していた。貼床下部でピット・段落ちを検出した。遺物はカマド西側と南東壁側で土師器が出土している。

カマド (図版25-2、第67図)

I a類で、北東壁中央に付設する。遺存状態は割合良好で、掛口部を欠く程度である。袖部は暗褐色土で構築しており、焚口幅34cm、壁体長58cmの規模。右袖は長さ72cm、基部幅25cm、

V区の調査

残高32cmで、左袖は長さ68cm、基部幅30cm、残高40cmを測る。カマド内からは完形の土師器が支脚に乗った状態で出土しているが、前後に傾いでいる。支脚は長さ22cmの川原石を埋設している。

床面全体がよく焼けていたが、全体はそれ程でもない。煙道は長さ59cm、中央部幅24cmを測り、煙道底面は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN17°Eを示す。

出土遺物（図版31、第68図）

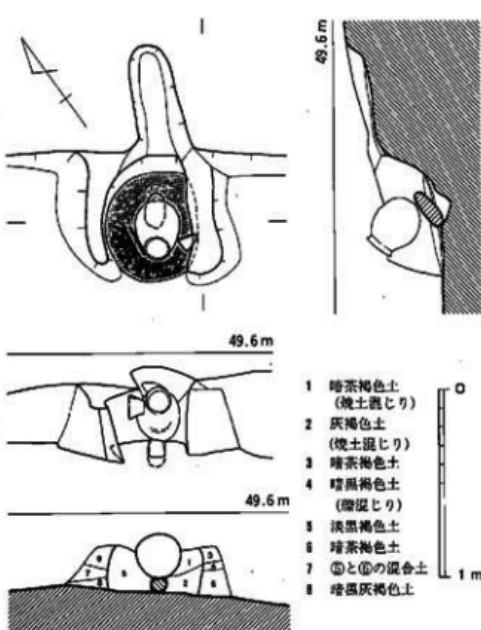
土師器（12～15） 12は壊蓋の破片資料で、外面には黒漆の塗布が見られる作りの良い土器である。体部内外面ともナデ、天井部内面はヘラ磨きで仕上げている。

13は小型の丸底壺の胴部上半の資料で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は14.2cmを測る。

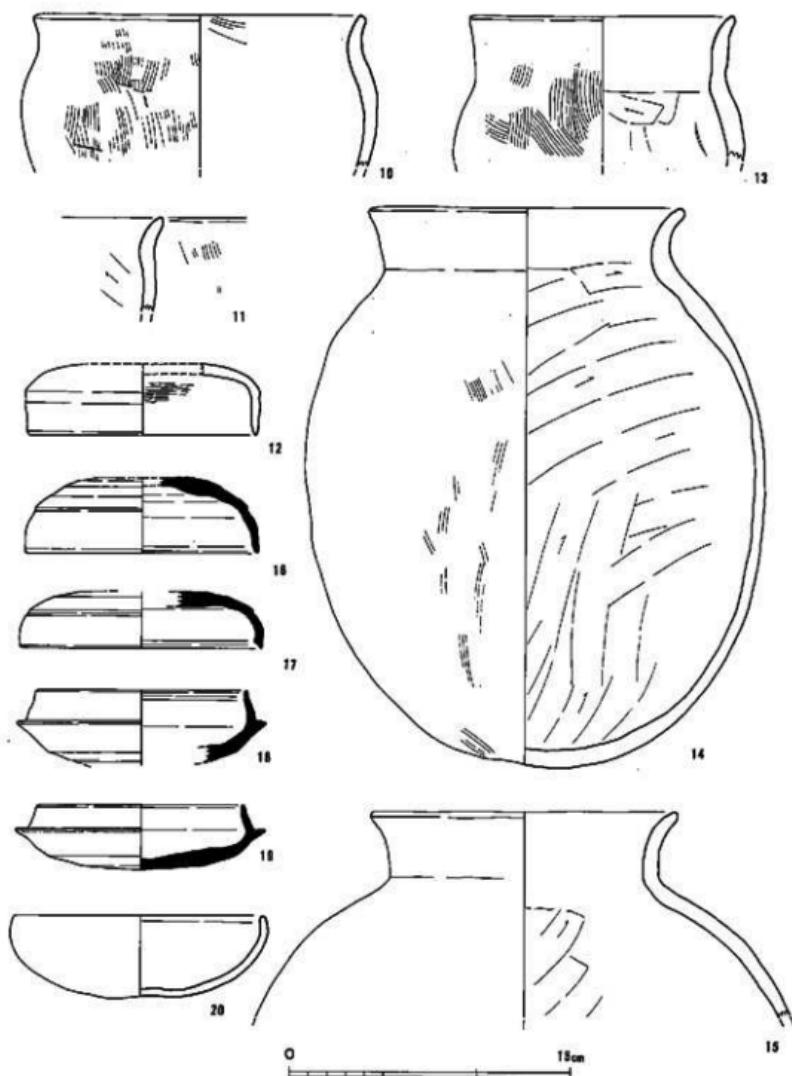
14・15は大型の壺で、器面は風化しているものの胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ調整である。14の底部付近には煤の付着がみられる。口径は14が16.8cm、15は16.2cm。器高は14が29.6cmを測る。

3号住居跡（図版26-1、第69図）

調査区の東端斜面部で検出した住居跡で、2号住居跡の4m北東側に位置する。検出当初はカマドが右側に偏っていることから2軒重複しているものと考え、右側を3A号、左側を3B号としたが、両者の床面に段差はなく、3A号の主柱穴が判然としないことから一軒の住居とみなしした。北東壁長5.5m、壁高は北側コーナー一部で0.7mを測る。南西壁は失われるが、方形を呈しよう。北西壁は長さ3.6m遺存する。主柱穴はP1～4で、径0.2～0.3m、深さ0.5mを測るが、P4のみ10cmと浅い。貼床下部でも妥当なピットは存在せず、一応柱穴とした。柱間はP1～2間



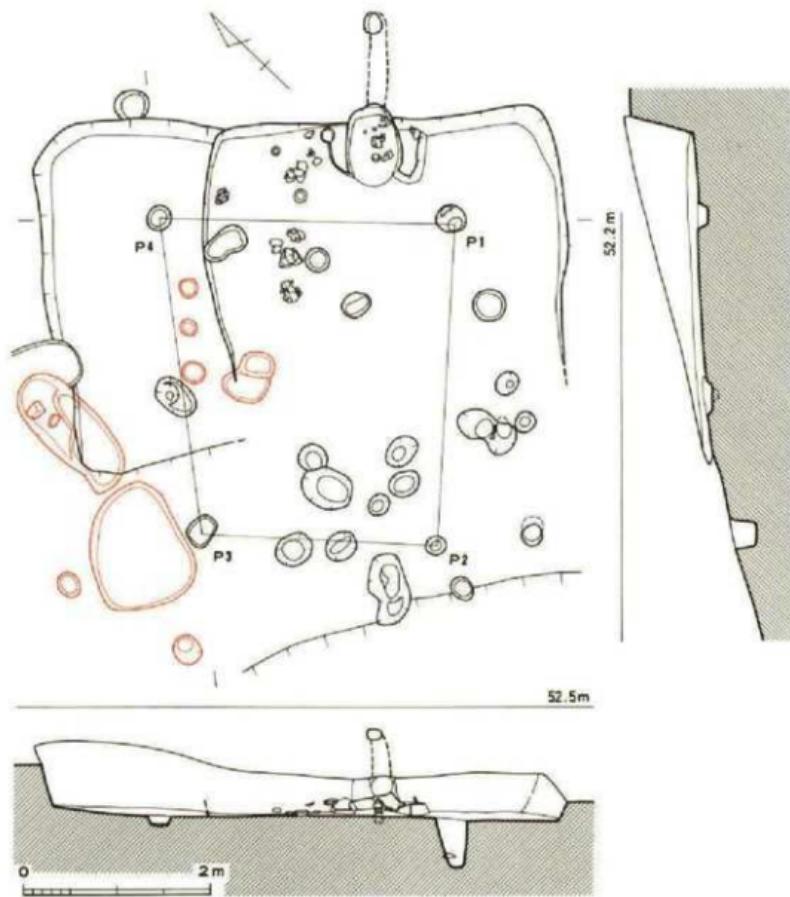
第67図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)



第88図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

V区の調査

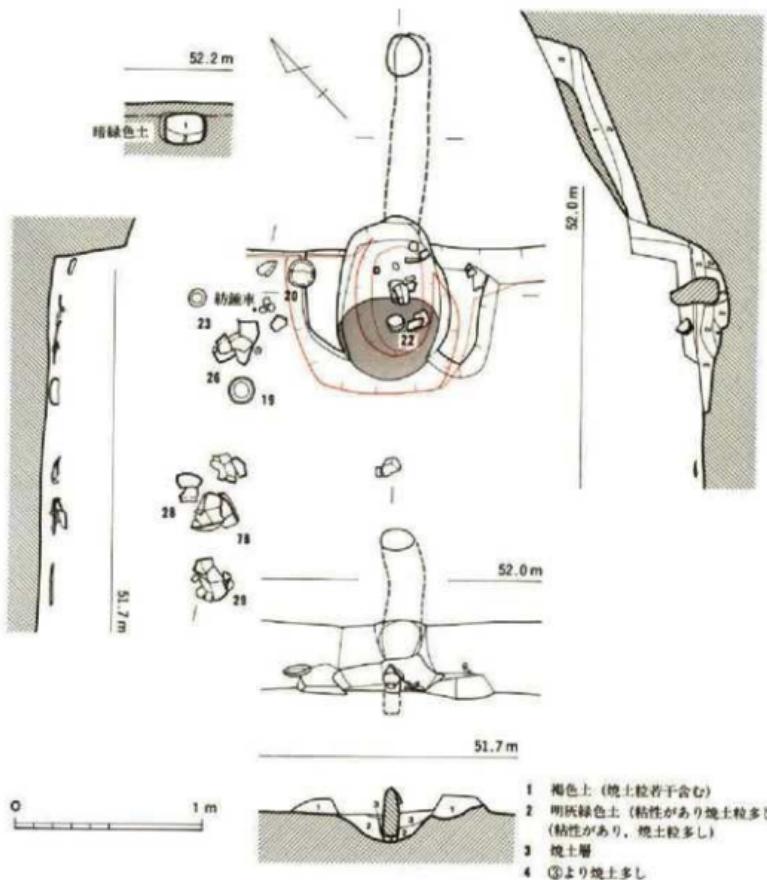
3.43m, P1-4間3.15mの間隔を有し、主柱穴間は逆台形を呈する。床面はほぼ水平で、若干の貼床を施している。貼床下部でピット・土坑を検出した。カマド西側の床面から土器器坏・甕・瓶、紡錘車が出土している。



第68図 3号住居跡実測図 (1/60)

カマド（図版26-3、第70図）

住居壁を15cm程掘り込んだII a類で、北東壁の右寄りに付設する。煙道部の遺存状態は割り良好であるが、袖部の残りが悪いのは、左袖には土師器環が乗っていることから故意に破壊されたものと考えられる。袖部は褐色土で構築され、右袖は長さ57cm、基部幅33cm、残高10cmで、左袖は長さ56cm、基部幅30cm、残高12cmを測る。支脚には長さ26cmの川原石を用いているが、



第70図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)

焼土混じりの明灰綠色土で埋められていることから築造当初のものではなく、火床面の作り直しが考えられる。支脚前面から焚口部にかけての床面・壁体は良く焼けていた。

煙道は長さ100cm、中央部幅20cmで、煙出し部は22cmの円形を呈する。煙道底面は24°の傾斜角で立ち上がる。煙道の断面形は長方形を呈し、板面には線状圧痕（第218図）がみられることから①煙道を開削し、②壁面に粘土を貼り、土止め板を当て、③天井板を被せ、上部を粘土で被覆したものと想定される。カマド内からは祭祀に伴うミニチュアの椀・土玉・不明土製品が出土している。主軸方位はN45°Eを示す。

出土遺物（図版31・32・35-1・2、第68・71・91図）

須恵器（16～19） 16・17は壺蓋の破片資料で、復原口径は16が12.8cm、17は13cm。現存部での復原器高は16が4cm、17が3cmを測る。調整は天井部外表面へラ削り、内部は16がナデ、他はヨコナデで仕上げている。色調は灰青色ないしは灰色を呈し、焼成は堅緻である。

18・19は壺身の破片資料である。調整は外底部回転へラ削り、内底部ナデで、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。復原口径は18が11.4cm、19は11.2cmを測る。

土器器（20～29） 20～22は壺で、口縁部が内湾気味に立ち上がる特徴を持つ。調整は風化しているものの、内外ともナデ仕上げである。色調は20が橙灰色、21が内面淡褐色、外表面灰色、22が淡橙色を呈し、焼成はいずれも良好である。口径は20が13.6cm、21が13.2cm、22が12.5cm。器高は20が4.4cm、21が4.3cm、22が5.2cmを測る。

23～25は椀の破片資料で、23は大型、24・25は小型品である。いずれも調整は内外ともナデ仕上げで、25の外底部には木の葉痕が残されている。口径は24が9cm、25が8.9cm、器高は24が4.8cm、25が7.3cm、底径はいずれも5cmである。

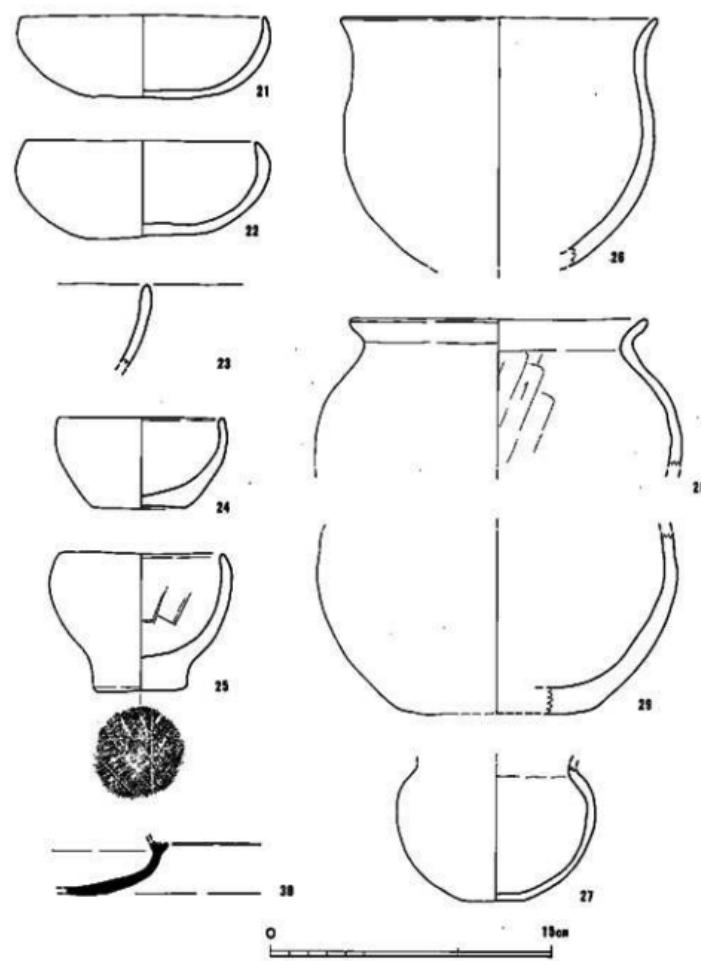
26は鉢の破片資料で、復原口径17cm、現存器高13.2cmを測る。調整手法は内外とも丁寧にナデ仕上げている。

27は小型丸底壺の胴部資料で、底部は僅かに平底状を呈す。胴部内外はナデで仕上げている。胴部最大径は10.6cmを測る。色調は淡橙色を呈し、焼成は良好である。

28・29は体部が壺の甕で、28は胴部上半、29は胴部下半の破片資料である。調整は胴部外表面ナデ、内面は28がへラ削り、29はナデ仕上げである。口縁部内外はヨコナデである。29の外底部は平底気味である。

石製品（第91図9） 9は滑石製の紡錘車で、カマド左側土器群中の出土である。断面は台形を呈し、下端径4cm、厚さ1.3cm、重さ29.3gを測る。中央に0.7cmの円孔を設ける。側縁は鉄工具による面取り調整で、上面には線状痕がみられる。

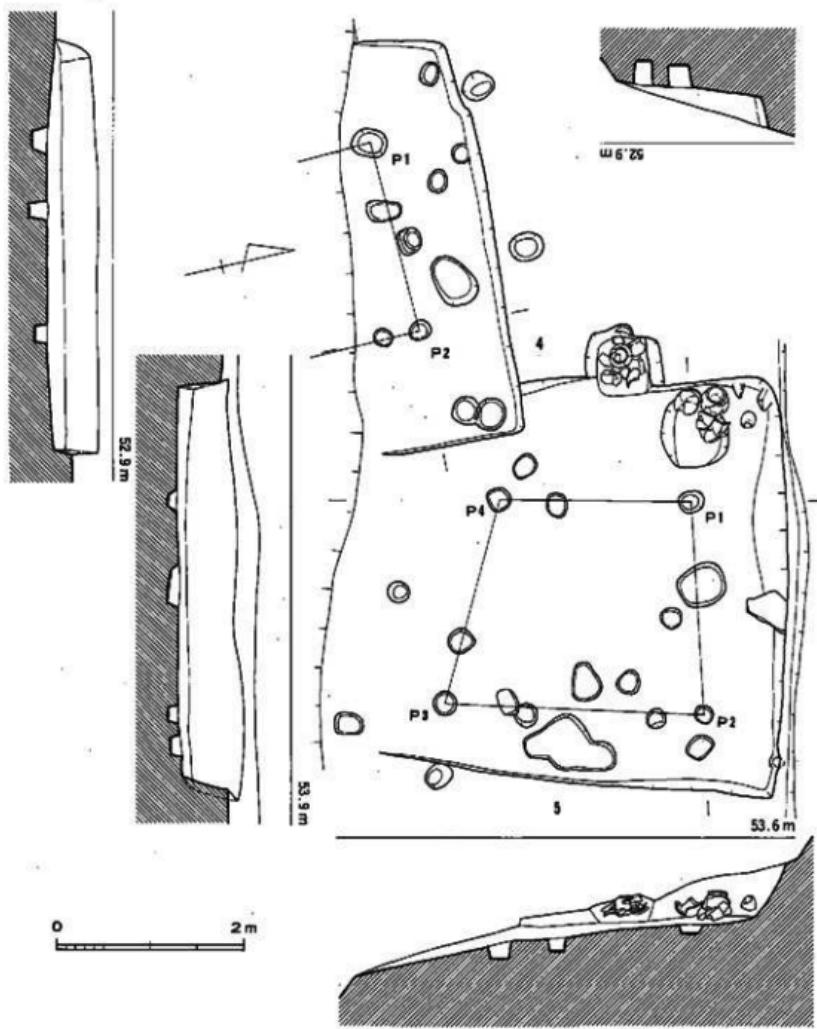
土製品（第91図15～19） 15は模造鏡で、背面に凹形の瘤みを設ける。径3cm、厚さ1.2cm。16は形状不明の土製品で、カマド内の出土。17は器高2.2cm、口径2.8cmを測り、頭部に穿孔を施していることから龜を模したものであろう。土器群中の出土。18はカマド内出土の手捏ね品で、



第71図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)

器高2.6cm、口径3.7cm。19は貼床下層出土のミニチュア土器で、割に丁寧な作り。器高4.1cm、口径3.5cm。

V区の調査



第72図 4・5号住居跡実測図 (1/60)

4号住居跡（図版27-1, 第72図）

調査区東側の中段で検出した住居跡で、3号住居跡の7m北西側に位置する。5号住居跡を切っているが、後世の段落ちに掘削され北壁を残すのみである。北壁長4.2m、残高0.36mを測る。柱穴はP1・2の2個が遺存し、径0.2~0.3m、深さ0.15mで、柱間は2.08mの間隔である。カマドは残存部位において認められないが、5号住居跡同様西壁に付設するか。

出土遺物（第71図）

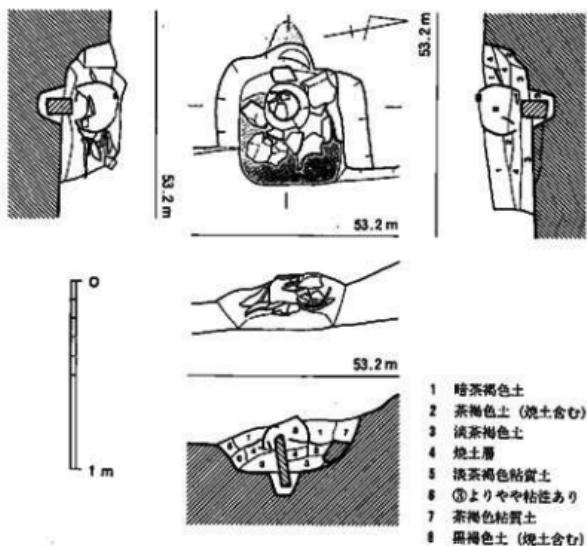
須恵器(30) 壊身の体部破片資料で、外底部回転ヘラ削り、内底部ナテ、体部内外はロクロヨコナナ調整である。

5号住居跡（図版27-1, 第72図）

4号住居跡の東側に位置し、同住居跡に南西コーナー一部を切られる。北壁長4.5m、東壁は長さ4.15m遺存する。南壁を欠くが、平面形は方形になろう。壁高は北壁中央で0.55mを測る。主柱穴はP1~4で、主柱穴を結ぶ線は台形を呈する。柱穴は径0.2~0.25mで、深さは10cmと何れも浅い。柱間はP1~2間2.3m、P1~4間2.05mを測る。北西コーナー部床面には土師器甕2個体・瓶・鉢があり、その下層から焼土が入った径0.7mの土坑を検出した。

カマド（図版27-2, 第73図）

III a類で、西壁中央に付設する。遺存状態は悪く、壁体の掘り込みを留めるのみ。カマド壁



第73図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)

体はコ字形を呈し、幅80cm、奥行き48cmで、壁高は30cmを測る。支脚は柱状石を埋設しており、奥壁から23cmの箇所にある。支脚の前面が火床で、良く焼けていた。支脚の上には完形の土師器甕が乗っかり、その周囲には別個体の甕片が浮いた状態で出土しており、故意に入れたような感がある。煙道は遺存しないが、奥壁中央の突出部上面が焼けており、煙道の始まりになる。主軸方位はN79°Wを示す。

出土遺物（図版32・33、第75～77図）

土師器（31～40） 31は壺身で、内外とも器面が風化しているため明瞭ではないが、ナデ調整と思われる。口径は12.2cm、器高は5.2cmを測る。

32は長頸壺の口頭部の破片資料で、復原口径10cmを測る。調整は風化のため不明である。

33～38は甕で、34は小型、33・35～38は大型甕の資料である。大型甕にも二つのタイプがあり、球形の胴部に「く」字状の口縁部がつくもの（35・37）と長い胴部に強く外反する「く」字状口縁部がつくもの（38）がある。調整は36の胴部外面ナデの他は刷毛。内面は粗いヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げで、37の頭部外面と38の頭部内面には刷毛の痕跡が残されている。37の外底部付近には煤の付着がみられる。34の頭部最大径は18cm。口径は33が19cm、35が18cm、37が20cm、38が20.4cm。胴部最大径は35が26.2cm、36が25cm、37が27.1cm、38が25.5cm。器高は35が27.6cm、37が31.34cmを測る。

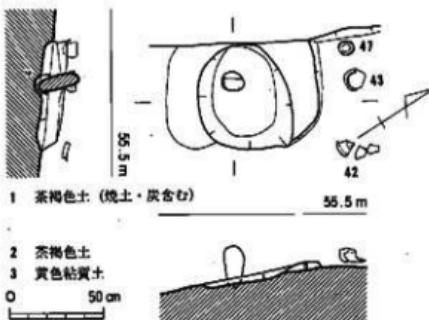
39は小型の鉢で、調整は体部外面刷毛のあとナデ、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は15.2cm、現存部で器高12.5cmを測る。色調は内外とも黄橙褐色から暗茶褐色を呈し、焼成も良好である。

40は牛角把手がつく瓶で、口径は28cm、器高は26.6cmを測る。調整は胴部外面粗い刷毛。内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げで、内面には刷毛の痕跡が見られる。色調は橙褐色を呈し、焼成も良好である。

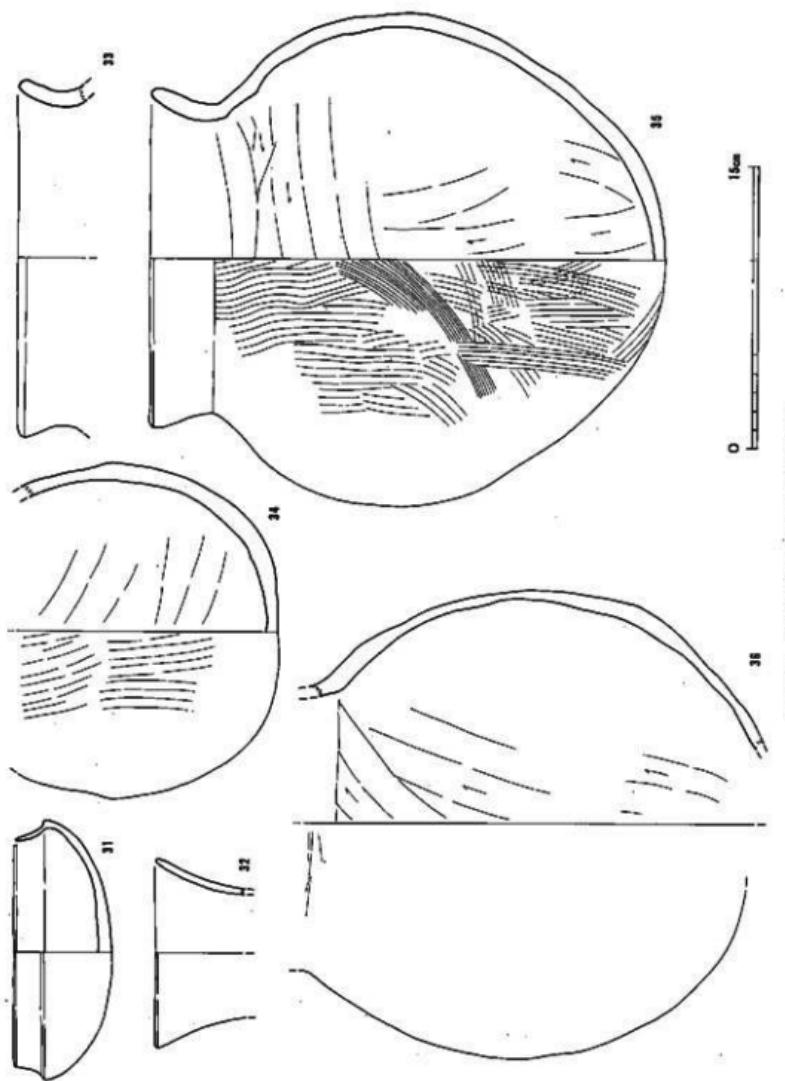
6号住居跡（図版28-1、第78図）

調査区中央の上段緩傾斜面（標高55m）で検出した小型の住居跡で、4号住居跡の21.5m北西に位置する。

当住居も南壁を失うが、北壁長3.1mで、東壁は長さ1.5m遺存する。壁高は25cmであり、著しい削平を受ける。主柱穴はP1-4で、4本を結ぶ線は長方形を呈する。柱間はP1-2間1.84m、P1-4間1.38mを測る。柱穴は円

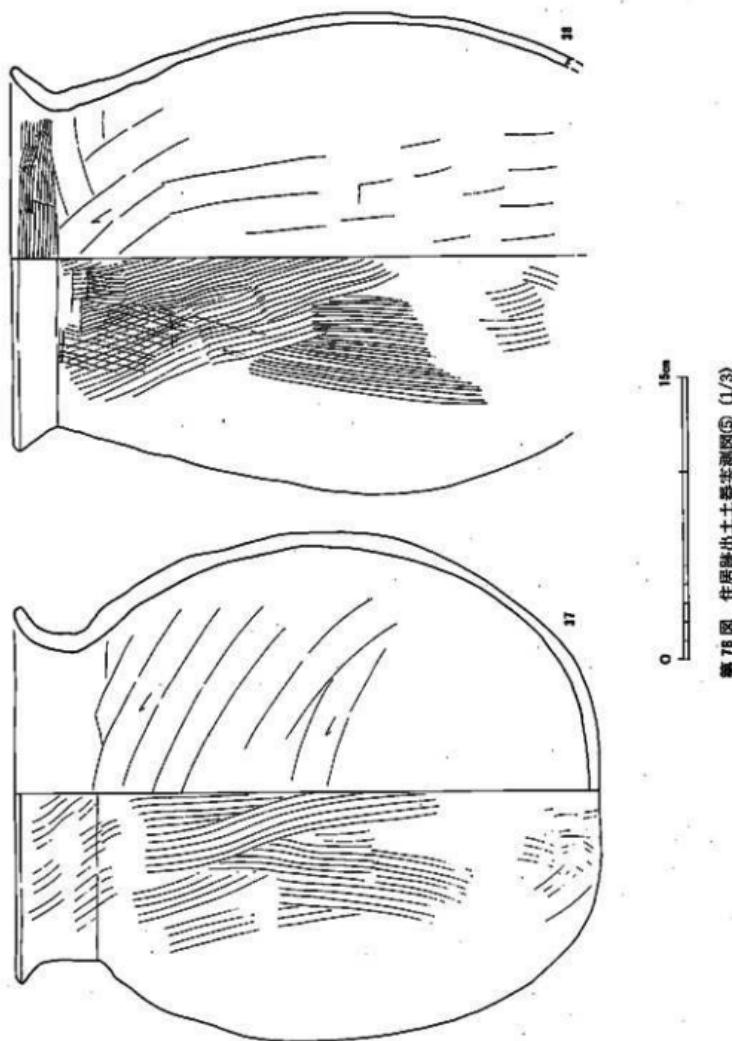


第74図 6号住居跡カマド実測図 (1/30)

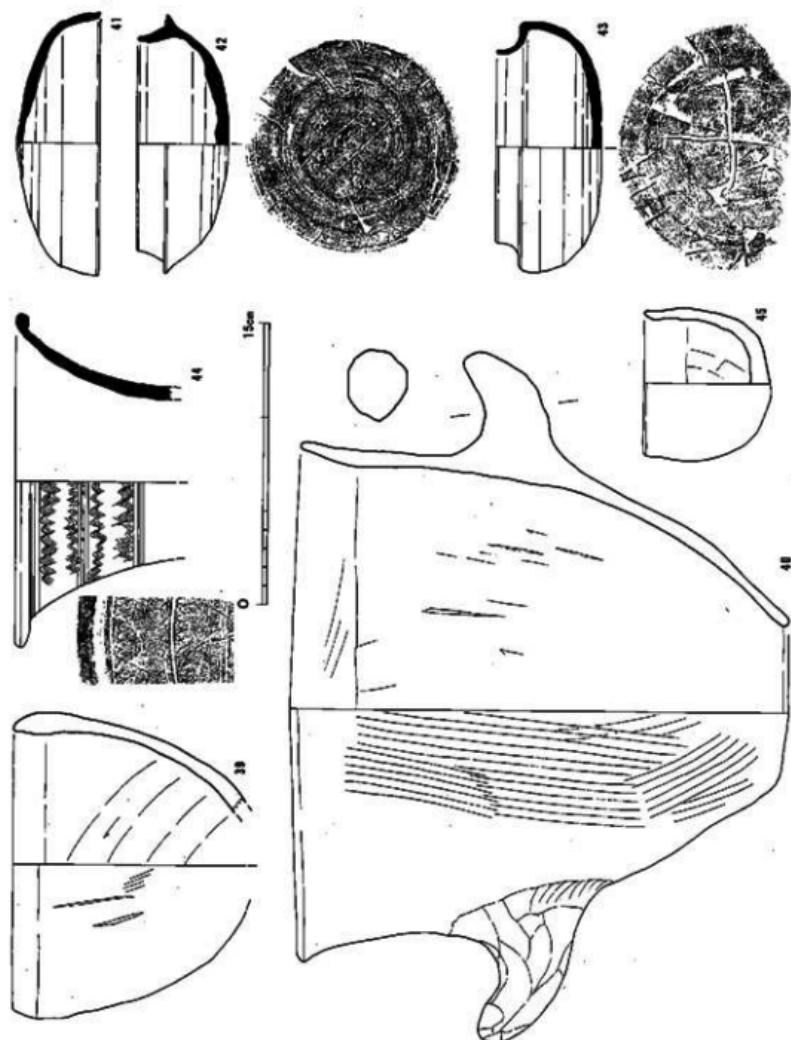


第75図 住居跡出土土器実測図④ (1/3)

V区の調査



第76図 住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)



第77図 住居跡出土器実測図⑤ (1/3)

V区の調査

形を呈し、径0.2~0.3mで、深さは15cmと浅い。床面には土器類が散在していた。

カマド（図版28-2、第74図）

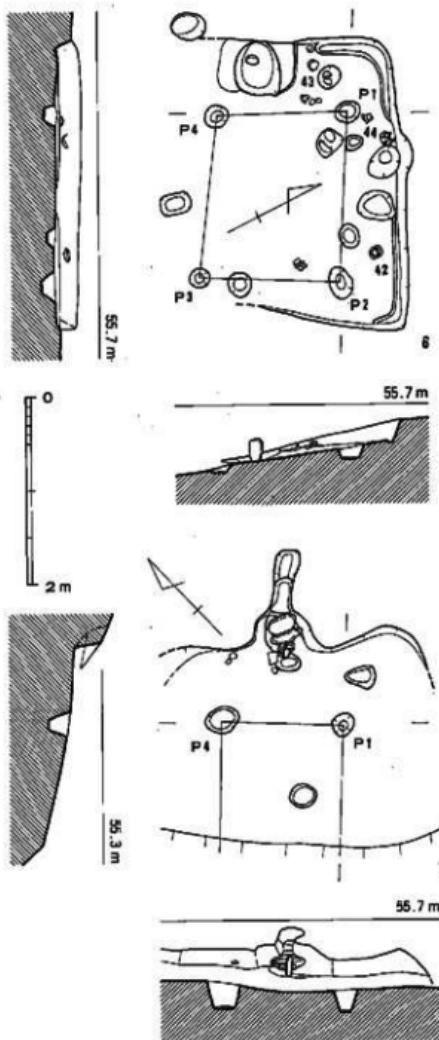
I a類で、西壁に付設する。遺存状態は極めて悪く、支脚を留める程度である。袖部は基底部を残すのみであるが、規模を復原することは可能で、焚口幅40cm、壁体長57cm。支脚には長さ22cmの川原石を埋設する。主軸方位はN57°Wを示す。

出土遺物（図版33、第77-82図）

須恵器(41~44) 41は壺蓋で、調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面と体部外面ロクロヨコナデで仕上げている。復原口径は14cm、器高は4.5cmを測る。色調は灰色で、焼成も堅敏である。

42は壺身で、外底部回転ヘラ削り、他は内外ともロクロヨコナデ調整である。外底部にはヘラ記号が施されている。口径は11.4cm、器高は4.9cmを測る。

43は短頸壺、44は長頸壺の破片資料である。43は体部外面回転ヘラ削り、さらに外底部はナデ、他は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。外底部にはヘラ記号が施されている。復原口径は10.4cm、器高は5.6cm。色調は灰色を呈し、焼成は堅敏である。44は長頸壺の口頸部破片で、頸部外面には沈線間を櫛描き波状文で飾っている。復原口径は17.8cm。



第78図 6・7号住居跡実測図 (1/60)

土器器(45~47) 45は小型椀で、体部内面ヘラ削りの他はナデで仕上げている。口径は7.8cm、器高は6.7cmを測る。色調は黄褐色を呈し、焼成も堅敏である。

46は甕の口縁部資料で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は19cmを測る。47は甕の底部付近の破片資料で、復原底径9cmを測る。調整は外面ナデ、内面ヘラ削りである。色調は黄褐色を呈し、焼成も良好である。

7号住居跡 (図版29-1, 第78図)

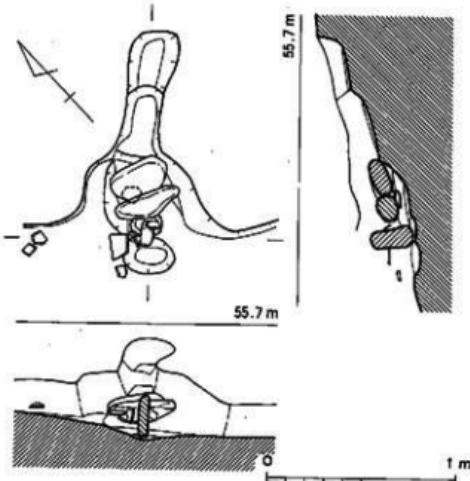
6号住居跡の3m北西側で検出した小型の住居跡で、標高55mの緩傾斜面に構築される。北東壁長2.7mで、壁高は0.3m遺存する。主柱穴はP1~4の2個を検出したが、南北半部を失うため4本柱になるかは判らない。柱穴は径0.25~0.35m、深さ0.25mで、P1~4間は1.3mを測る。

カマド (図版29-2, 第79図)

III a類で、北東壁中央に付設する。遺存状態は悪く、袖部を留めない。壁体幅60cm、壁体長40cmを測る。支脚には長さ23cmの川原石を用いており、奥壁から30cmの箇所に埋設している。支脚の後ろには長さ30~35cmの川原石が二箇並んでいるが、VII区17号住居跡カマド例からして煙道部の蓋石が落ち込んだものと考えられる。煙道は長さ67cm、幅25cmで、二段に掘っている。主軸方位はN44°Eを示す。カマド内からは土器片が出土したのみ。

出土物 (第82図)

土器器(48) 丸底の甕の底部付近の破片である。調整は胴部外面刷毛のあとナデ、外底部はナデ、内面はヘラ削りで仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。



第78図 7号住居跡カマド実測図 (1/30)

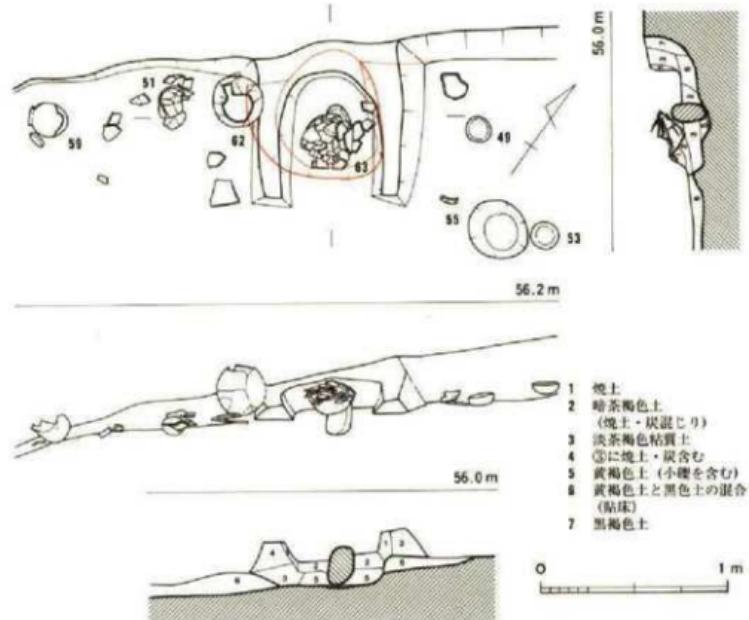
8号住居跡（図版30-1、第81図）

調査区西側の上段緩傾斜面（標高55.5m）で検出した住居跡で、7号住居跡の4.3m北西に位置する。当住居も南北壁を失うが、北東壁長4.25m、壁高は北東壁中央で0.7m、北西壁は3.9m遺存する。主柱穴はP1~4で、4本を結ぶ線は不整長方形を呈する。柱穴は径0.25~0.4mで、深さは0.3mを測る。柱間はP1~2間2.27m、P1~4間1.75mの間隔を有する。遺物はカマドの両脇床面から土器が出土している。

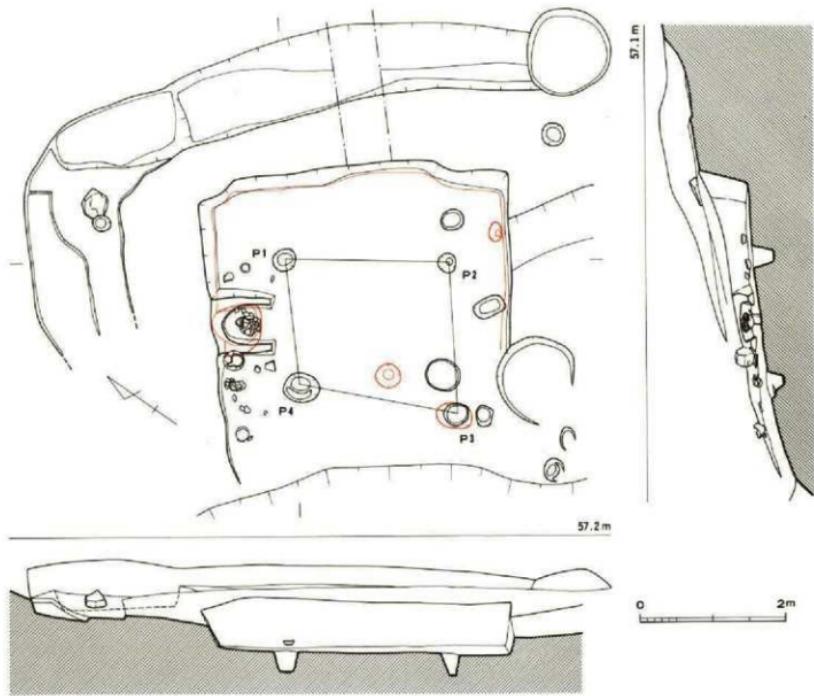
当住居跡は竪穴部から1.1mの距離をおいて山側に幅1.3mの外周溝を巡らせており、現状でL字形を呈する。また、斜面部に構築される3号住居跡にも外周溝が存在する可能性があり、3方向にトレンチを設定し掘り下げたが、外周溝は確認できなかった。

カマド（図版30-2、第80図）

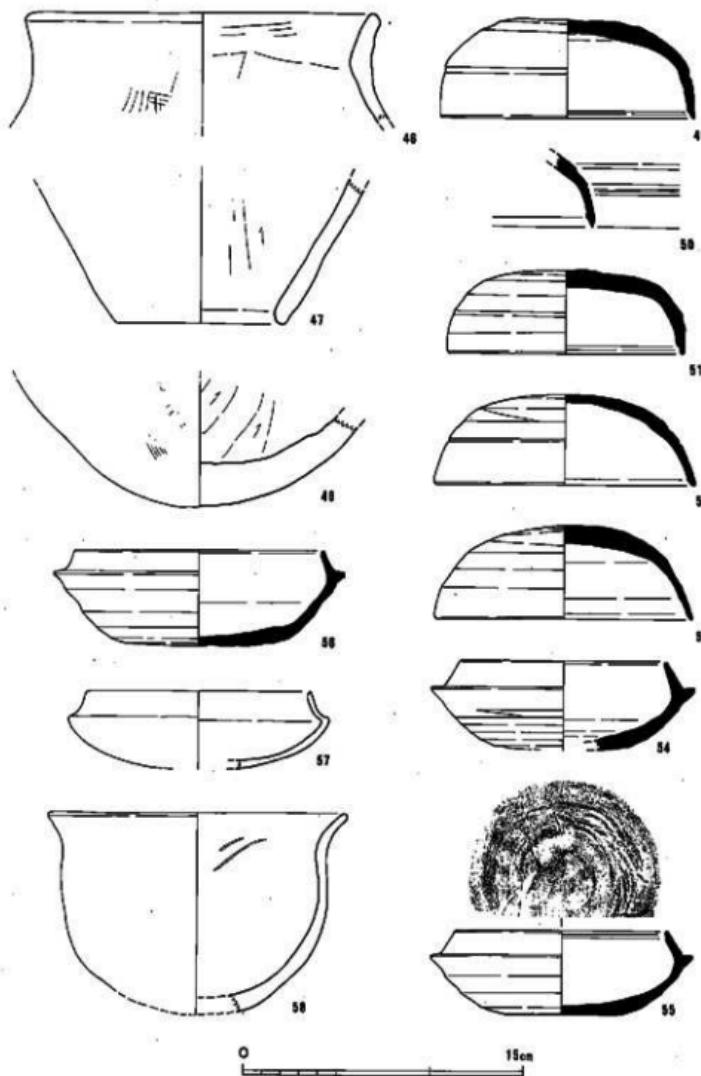
I a類で、北西壁中央に付設する。遺存状態は悪く、袖部を留める程度。壁体下部に幅70cm



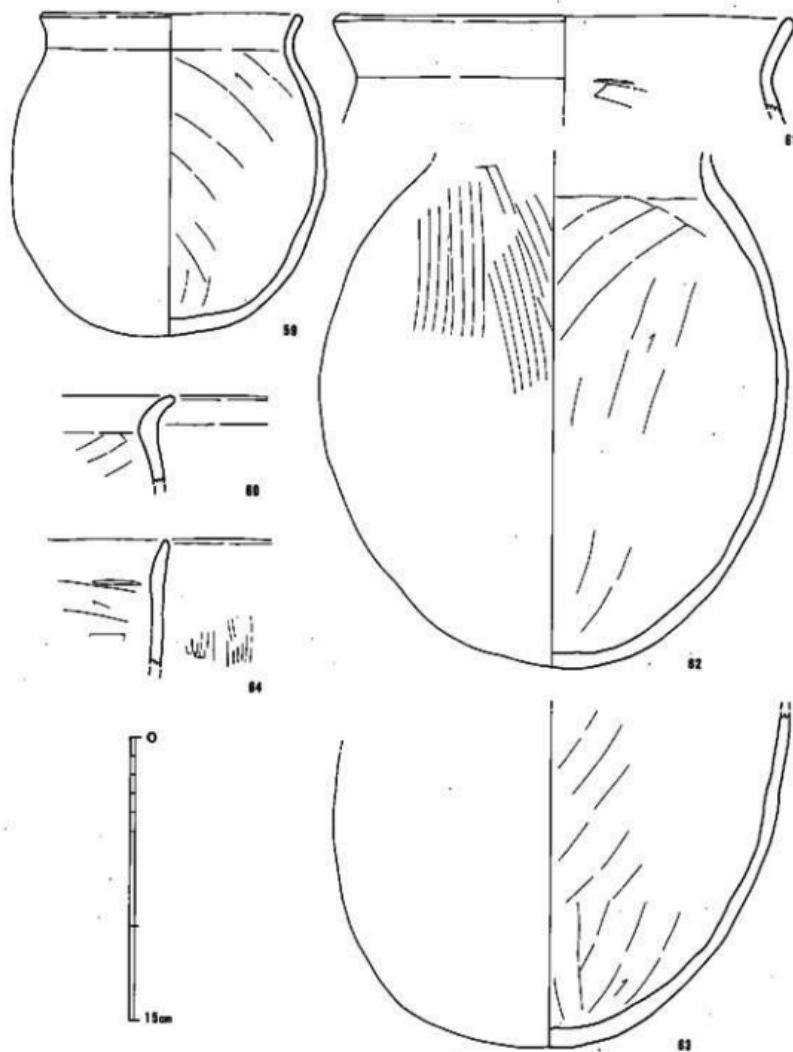
第80図 8号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 81 図 8号住居跡実測図 (1/60)



第82図 住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)



第 83 図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

の掘り込みを有し、黄褐色土・茶褐色土で壁体を構築している。右袖は長さ88cm、基部幅28cm、残高24cmで、左袖は長さ78cm、基部幅21cm、残高18cmを測る。支脚には長さ20cmの川原石を埋設しており、土師器甕が支脚に乗った状態で出土した。縁道は削平により遺存しない。主軸方位はN35°Wを示す。カマド内から土玉3個が出土した。祭祀に伴うものであろう。また、左袖の脇には土師器甕が置かれ、その横からは須恵器环身・土師器甕なども出土している。

出土遺物（図版33・34・35-2・3、第82・83・86・91図）

須恵器(49~56・66) 49~53は壺蓋で、体部の屈折稜が明瞭なもの（49~52）と不明瞭なもの（53）がある。調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は49・53が白灰色の他は灰色ないしは暗灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。口径は49が13.6cm、51が12.8cm、52・53が14cm、器高は49が5.2cm、51が4.45cm、52は4.8cm、53は4.95cmを測る。

54~56は壺身の資料で、大・小があり、復原口径が11cm前後（54・55）のものと13cmをこすもの（56）である。調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。55の内底部には同心円のタタキ痕が残されている。復原口径は54が11.2cm、55が11.4cm、56が13.6cm、器高は54が残存高4.7cm、55が4.5cm、56が5.1cmを測る。

66は大型甕の胴部破片で、外面は平行タタキとカキ目、内面は同心円タタキで調整している。色調は外面青灰色、内面淡灰色を呈し、焼成は堅緻である。

土師器(57~65) 57は杯身の破片資料で、復原口径は12.1cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

58は鉢の破片資料で、復原口径16cm、現存部器高10.8cmを測る。調整は胴部内外を工具ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成も良好である。

59~63・65は甕の資料で、大・小がある。59・60は緩やかに外反する「く」字状口縁の小型の甕で、59は復原口径14cm、器高は17.1cmを測る。調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。61~63・65は卵形の胴部に「く」字状の口縁部がつく大型の甕である。調整は胴部外面刷毛のもの（62）とナデのもの（61・63・65）、内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。63の胴部外面には全体に煤の付着が見られる。復原口径は61が24.6cm、65が30cm、62は胴部最大径25cm、胴部長27.1cmを測る。

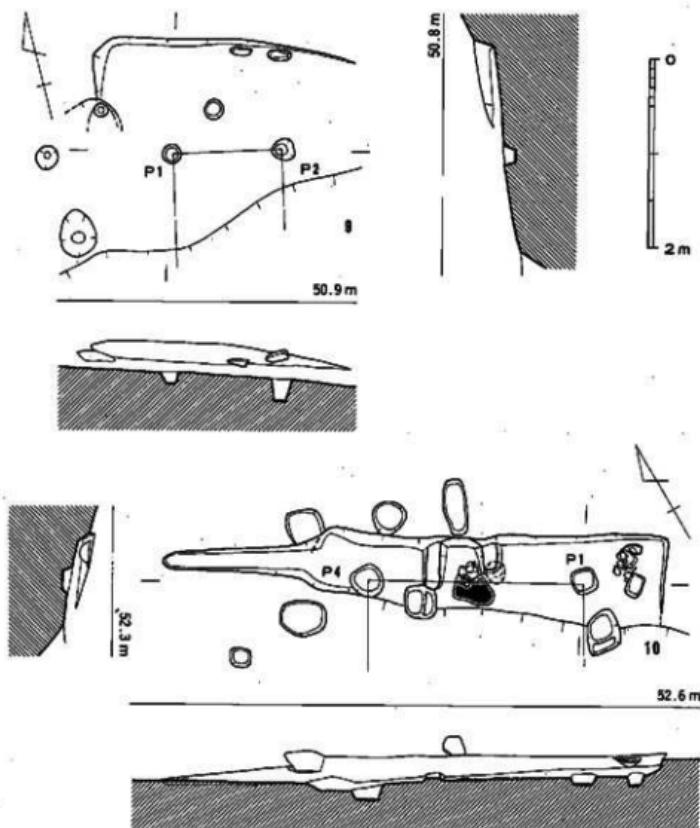
64は瓶の口縁部付近の小破片で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胴部外面には煤の付着が見られる。色調は黄褐色を呈し、焼成も良好である。

鉄器(第91図11) 11は鐵鎌の身部破片で、残存長5.15cm。断面長方形で、厚さ0.5cm。

土製品(第91図20~22) 20~22はカマド内出土の扁平な土玉で、径1.4~1.5cm、厚さ0.75~0.9cm、重さ1.6~2.15gを測る。中央には2mm程の孔を空けている。

9号住居跡（図版29-3、第84図）

調査区中央のややフラットな面（標高50.5m）で検出した住居跡で、1号住居跡の11m北東側に位置する。削平により北壁長2.8m、壁高0.2m遺存するが、平面形は3m程の方形を呈しよう。主柱穴はP1・2の2個が遺存し、径0.2m前後、深さ0.15~0.25mで、柱間は1.16mを測る。カマドは全くその痕跡を留めていない。



第84図 9・10号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物（図版35-2、第86・91図）

土師器(67・68) いずれも瓶の口縁部付近の小破片である。調整は器面の風化が著しいため明確ではないが、胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成も良好である。

土製品(第91図23) 23は縦羽口の先端部破片で、径6.4cm、孔径2cmを測る。先端部にはガラス状物質が熔着している。

10号住居跡（第84図）

調査区西端の緩斜面（標高52m）で検出した住居跡で、8号住居跡の9m南西側に位置する。後世の掘削により北東壁付近を留めるにすぎないが、北東壁長3.7m、壁高0.22mを測る。主柱穴はP1・4の2個が遺存し、径0.26~0.35m、深さ0.15m前後で、柱間は2.3mの間隔を有する。西側コーナー付近から土師器甕が出土した。

カマド（第85図）

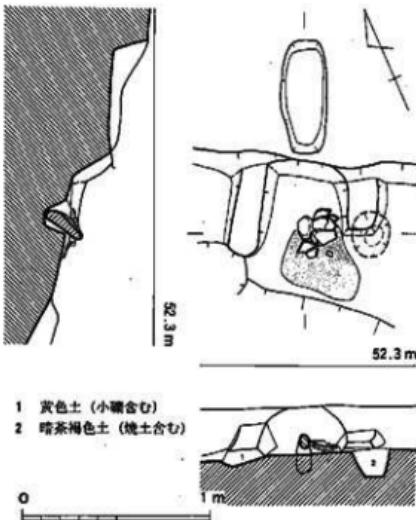
I a類で、北東壁中央に付設する。遺存状態は良好ではないが、煙道は留めている。袖部は黄色土で構築しており、右袖は長さ31cm、基部幅28cm、残高8cmで、左袖は長さ49cm、基部幅25cm、残高14cmを測る。

支脚には長さ24cmの川原石を埋設しており、その前面が火床で、40×40cmの範囲で良く焼けていた。煙道は長さ63cm、幅24cmで、底面はほぼ水平である。主軸方位はN24°Eを示す。

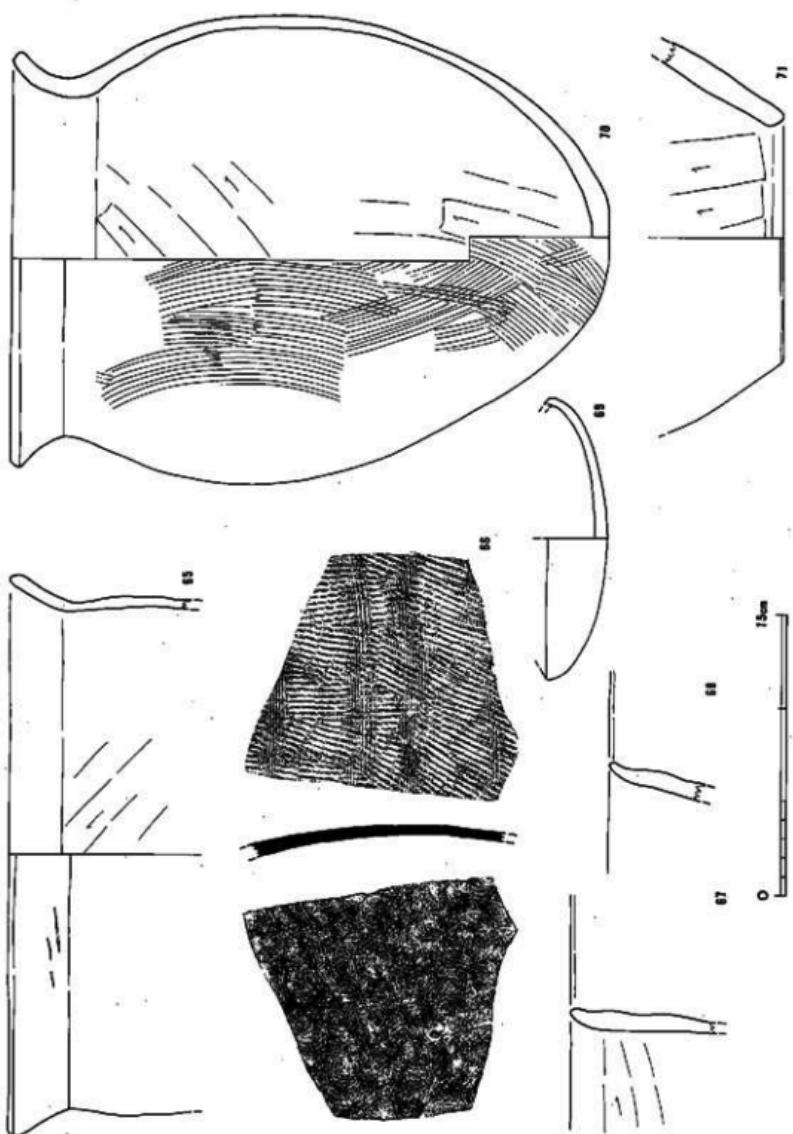
出土遺物（図版34、第86図）

土師器(69~71) 69は壊身の体部資料で、内外ともナデで仕上げおり、体部最大径は15cmを測る。

70は卵形の胴部に「く」字状口縁がつく甕である。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内面はヨコナデで仕上げている。胴部外面には煤の付着がみられる。色調は橙褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は22cm、胴部最大径24.8cm、器高は32cmを



第85図 10号住居跡カマド実測図(1/30)



第16図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

測る。71は瓶の底部付近の破片資料で、復原底径は13.4cmを測る。調整は外面ナデ、内面はヘラ削りで仕上げている。

(2) 落込み

1号落込み（第88図）

調査区の東端部で、3号住居跡の3m南東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈するが、床面は平坦ではなく、ピット1個があるだけなので落込みとした。東壁長5m壁高0.1mで、北壁は5.5m遺存する。埋土は黒褐色土であり、砥石・釘が出土した。

出土遺物（第91図）

石製品(8) 8は砥石の小破片で、現状で3面を砥面としている。粘板岩製。

鉄器(10) 10は頭部を欠損するが、鉄釘であろう。残長3.15cm、先端幅0.3cmを測る。

2号落込み（第87図）

調査区の東端部で、1号落込みの4m北側で検出した。現状で三角形を呈するが、本来は方形を呈していたものであろう。東壁長6.5mで、壁高は0.6m遺存する。底面は南西側に下がっており、東側には幅0.5mのテラスを設けている。

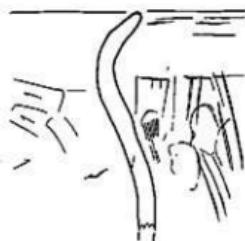
出土遺物（第87図）

土師器(72・73) 72は甕の破片資料で、調整は胴部外面刷毛のあと粗い工具によるナデ、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。

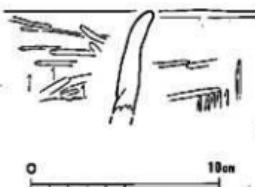
73は甕の口縁部付近の小破片で、調整は胴部外面刷毛のあとヘラ磨き、内面はヘラ削りのあとヘラ磨きで仕上げている。調整はいずれも橙褐色を呈し、焼成も良好である。

(3) その他の出土遺物

第89図の1号溝出土の甕74は、1号境周溝出土であり、外之限遺跡Iで報告すべきであったが、掲載するのを落としており、ここで報告しておく。また、1号小溝からは新期の遺物が出土しており、溝そのものの報告は行っていないが、集落と同時期の遺物であり、参考までに掲載した。



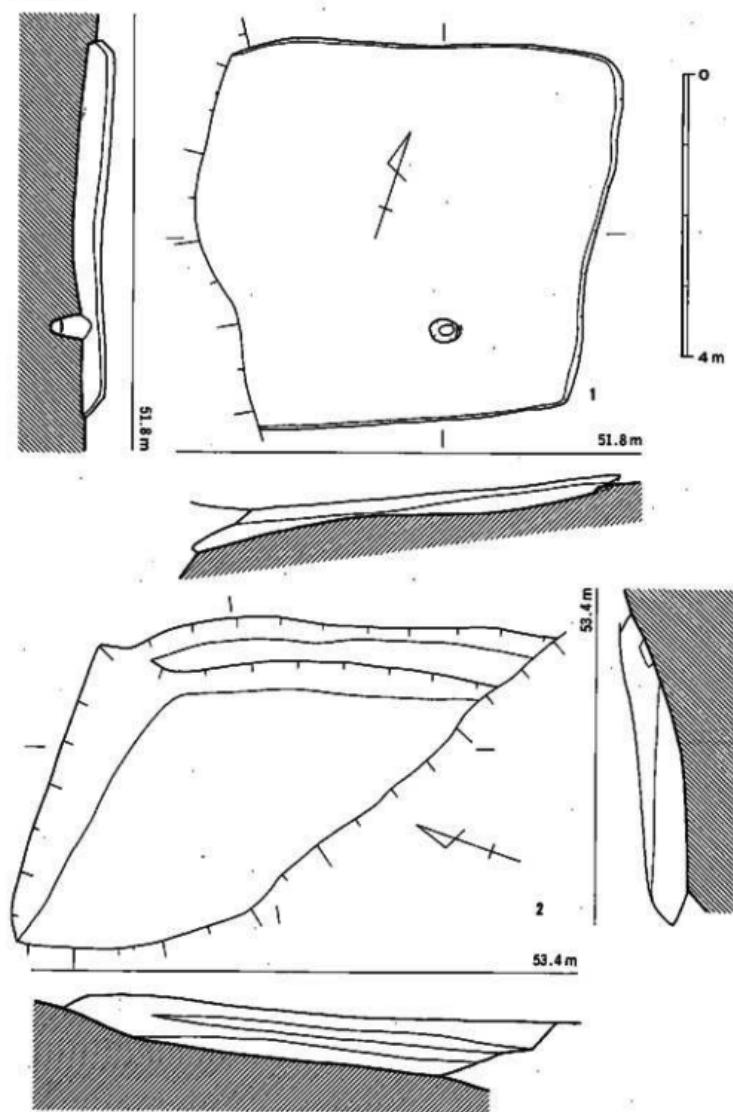
72



73

第87図 落込み出土土器実測図 (1/3)

V区の調査

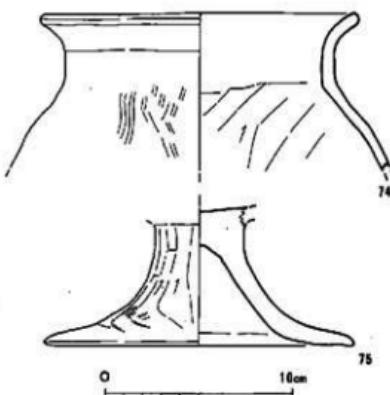


第88図 1・2号落込み実測図 (1/80)

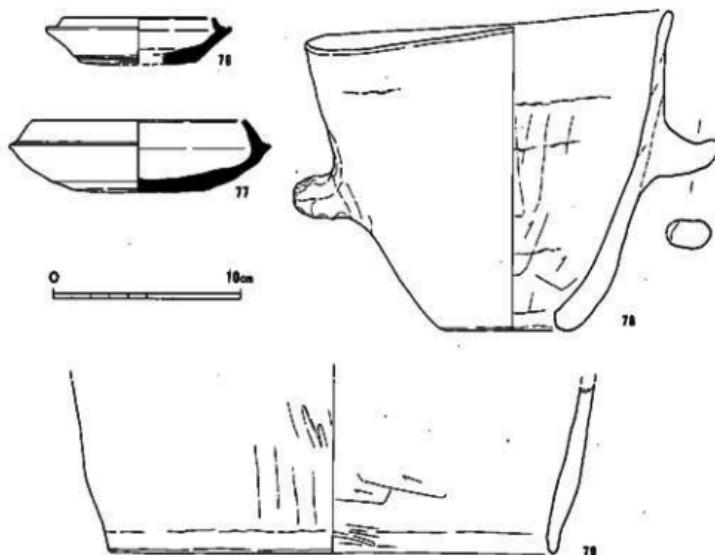
出土遺物 (図版34-1, 第89図)

土師器 (74・75) 74は壺の胸部上半の資料で、復原口径は17cmを測る。調整は胸部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗褐色を呈し、焼成も良好である。

75はラッパ状に拡がる脚部の資料で、裾部径は16.5cmを測る。調整は裾部外面縦ヘラ削り、裾部内外はヨコナデ、坏部内底部はナデ仕上げである。色調は外面橙色、内面橙褐色を呈し、焼成も良好である。



第89図 濃出土土器実測図 (1/3)



第90図 遠構検出時出土土器実測図 (1/3)

第90図は遺構検出時に出土した土器で、76・77・79は柿畠による段落ちの出土。78は3号住居跡から出土した瓶であるが、注記の混乱により所在場所が不明になっていたものであり、ここで報告しておく。また、第91図の鉄器と石製品も柿畠の段落ちから出土したものである。

出土遺物（第90・91図）

須恵器(76・77) いずれも壺身の資料で、大・小がある。76は小型で、口径は8.2cm、器高は2.5cm。77は大型で、復原口径は11.6cm、器高は3.8cmを測る。調整手法は76が外底部ナデ、体部内外はヨコナデ、77が外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はヨコナデで仕上げている。色調は76が淡黄灰色、77が黒灰色を呈し、焼成良好である。

土師器(78・79) いずれも壺の資料で、大・小がある。78は牛角把手がつく壺で、口縁部に歪みが見られるが、口径は19~20cm、底径は7cm、器高は15~17.1cmを測る。調整は器面の風化が著しいが、胴部外面ナデ、内面はヘラ削りと思われる。79は壺の胴部下半の破片資料で、復原底径は24cmと大型である。調整手法は胴部外面粗い工具によるナデ、内面はヘラ削り、裾部はヨコナデし、一部にヘラ磨きの痕跡も残っている。

鉄 器(第91図12~14) 12は鉄鎌の頭部破片。13・14は身部破片で、残長は13か2.9cmで、断面は長方形。14は残長5.3cmで、断面は方形。6号住居跡の1m北東側段落ち下端で検出した。

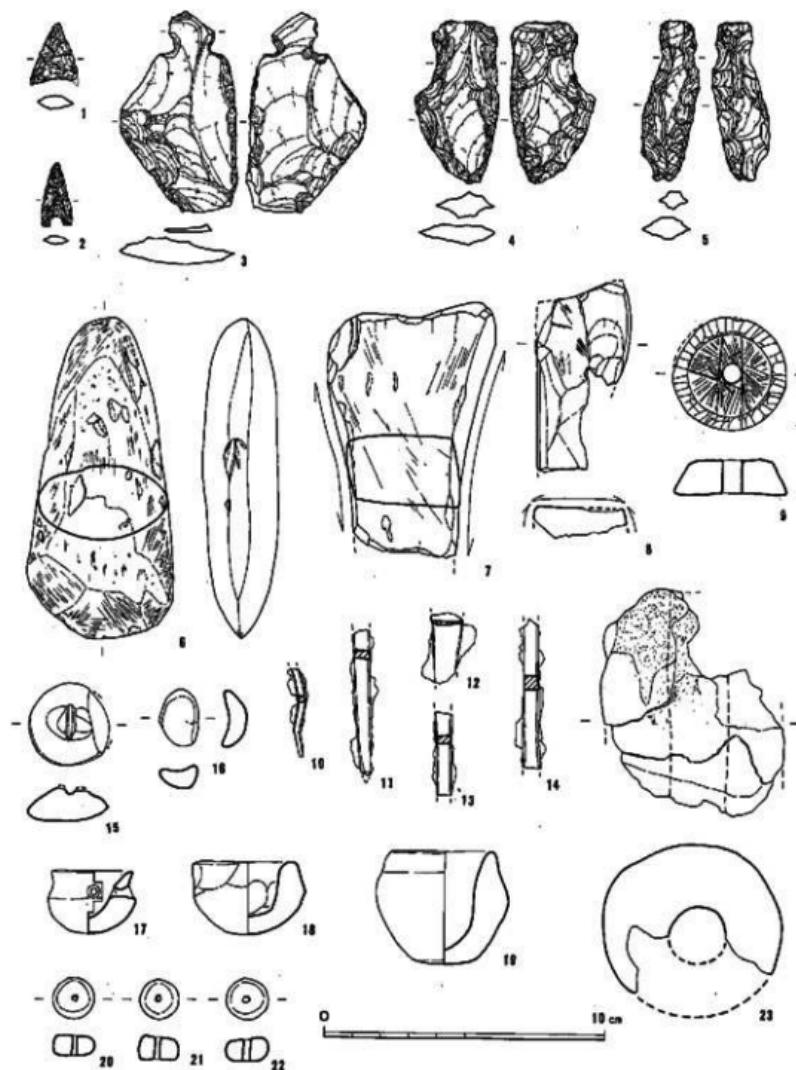
石製品(第91図7) 7は砂岩製の砥石で、残長9.1cm、中央部幅3.6cm、厚さ2.5cm。断面は長方形を呈し、四周を砥面としている。杭No23北側の段落ち出土。

B. 繩文時代の遺物

V区では縄文期の遺構は検出されていないが、住居跡埋土中、段落ち等から石斧・石鎌・石匙などの石器類が出土している。

出土遺物（図版35-1、第91図）

石 器(1~6) 1は安山岩製の三角鎌で、長さ2.05cm、幅1.7cm、重さ1.3gを量る。3号住居跡カマド左袖の積土内から出土した。2は黒曜石製の石鎌で、凹基式。長さ2.25cm、幅1.15cm、重さ0.55gを量る。8号住居跡西側の遺構検出時に出土した。3~5は安山岩製の石匙で、3は先端部を欠損する。綫長の剥片を素材とし、先端部から打点を加える。残長7.1cm、幅4.2cm、抉り部幅1.25cmで、重さは26.5g。杭No22付近の出土。4は椎型石匙の完形品で、長さ5.75cm、幅2.9cm、重さ18.5g。5も椎型石匙の完形品で、長さ9.7cm、幅1.8cm、重さ10g。8号住居跡外周溝西側の出土。6は8号住居跡埋土上位出土の磨製石斧で、長さ11.35cm、刃部幅5.2cm、厚さ2.7cm、重さ206gを測る。石材は安山岩であろうか。



第 81 図 V 区出土石器・鐵器・土製品実測図 (1/2)

5. VI区の調査

当該区はV区の北側で、VII区の東隣にあたる。急傾斜地であったが、標高70m付近に若干の平坦面がみられたので念のために表土を剥いでみたところ、6世紀後半の竪穴住居跡2軒と土坑1基を検出した。

A. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡 (図版37-1, 第92図)

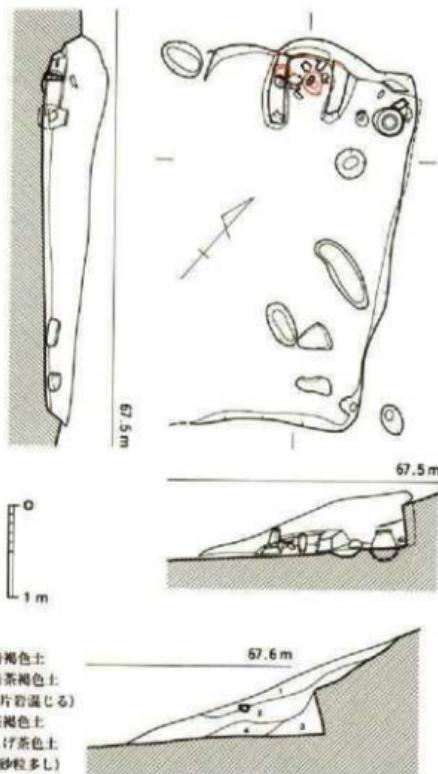
調査区の西端部で検出した住居跡で、標高67mの斜面部に構築される。北東壁長3.85m、北東壁側での壁高0.65mで、南壁は削平により喪失するが長方形を呈しよう。床面はほぼ水平であり、床面を一段掘り下げたが、柱穴は検出できなかつた。また、竪穴外部周辺にもそれらしいピットは存在しない。

北側コーナー部には床面を15cm程掘り窪め土師器甕を据えており、その南隣には土師器柄が伏せた状態で置かれていた。

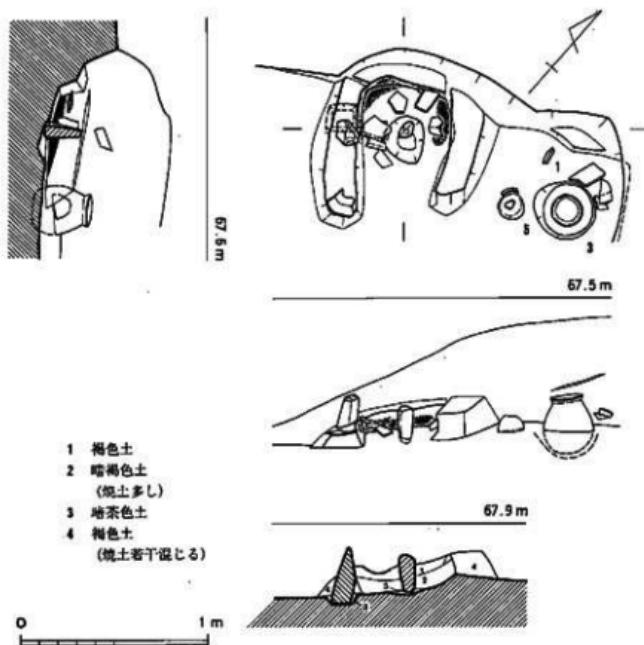
カマド (図版37-2, 第93図)

I a類のカマドで、北西壁に付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留める程度。袖部は褐色土で構築しており、焚口幅35cm、壁体長70cmの規模。右袖は長さ65cm、基部幅30cm、残高20cmを測る。

左袖は長さ80cm、基部幅29cm、残



第92図 1号住居跡実測図 (1/60)



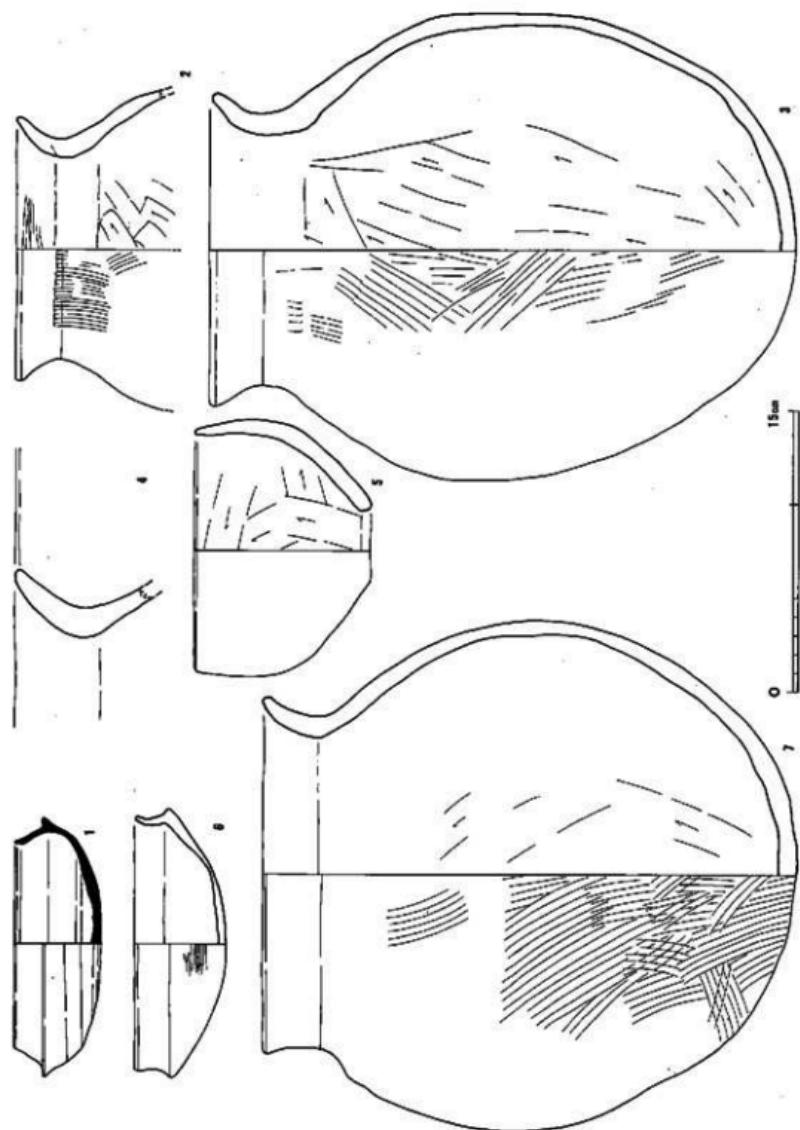
第93図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)

高14cmで、住居壁寄りに片岩の柱状石を立てているが、焚口から奥まっていることから袖石ではなく、袖の補強として埋設したものと考えられる。カマド床面中央には川原石を埋設し、支脚としている。火床は余り焼けていないが、支脚より後ろの壁面は良く焼けていた。煙道は遺存しない。主軸方位はN36°Wを示す。

出土遺物 (図版38-2、第94図)

須恵器(1) 壊身の資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、他は体部内外ロクロヨコナデで仕上げている。内底部には同心円のタキの痕跡を残している。色調は灰色から灰褐色を呈し、焼成は普通である。口径は11cm、器高4.6cmを測る。

土師器(2~5) 2~4は壺で、大・小がある。調整手法は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。2の口縁部内面には刷毛の痕跡を残している。3の胴部外面には煤の付着が見られる。色調は2が淡橙褐色、3が暗黄茶褐色、4が橙黄色を呈し、焼成は良好



第94図 住居跡出土土器実測図 (1/3)

である。口径は2が14cm, 3が16.6cm, 器高は3が31.6cmを測る。

5は小型の瓶で、外面ナデ、内面ヘラ削りで仕上げている。色調は赤橙色を呈し、焼成も良好である。口径は13cm、器高は9.4cmを測る。

2号住居跡（図版38-1、第95図）

1号住居跡の30m東側で検出した住居跡で、標高74mの斜面に構築される。カマド付近を残すのみで規模は測り得ない。壁高は北東コーナー一部で0.32mを測る。床面は南北側に緩傾斜している。床面を一段掘り下げたものの柱穴は検出できなかつた。また、竪穴外部周辺にもそれらしきピットは存在しない。

カマド（第96図）

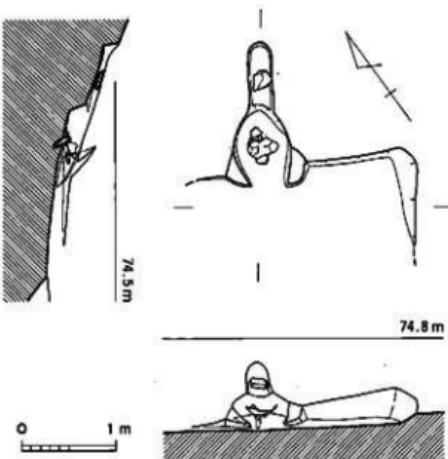
III a類のカマドで、北東壁に付設する。遺存状態は悪く、両袖・煙道部を留める程度であった。袖部は暗茶褐色粘質土・黄褐色土で構築しており、焚口幅35cm、壁体長80cmの規模を有する。

右袖は長さ42cm、基部幅25cm、残高16cm、左袖は長さ41cm、基部幅22cm、残高23cmを測る。カマド床面中央には長さ20cmの川原石を埠設し支脚としており、支脚の周囲は46×33cmの範囲で焼けていた。また、支脚に据えた状態で土師器壺底部が出土しているが、手前の土師器壺は浮いた状態であり、現位置を留めていない。主軸方位はN37°Eを示す。

出土遺物（図版38-2、第94図）

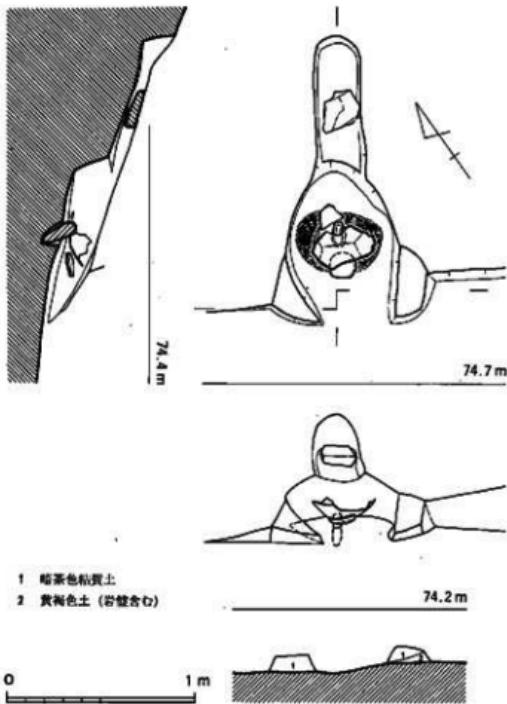
土師器(6-7) 6は壺身の資料で、調整は一部器面が風化しているため明確ではないが、体部内外はヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は赤橙色を呈し、焼成も良好である。口径は13.5cm、器高は4.9cmを測る。

7は球形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつく壺で、胴部外面粗い刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は内面橙褐色、外表面黄褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は19cm、胴部最大径は27.2cm、器高は28.6cmを測る。



第85図 2号住居跡実測図 (1/60)

第
96
図
2号住居跡カマド実測図
(1 / 30)

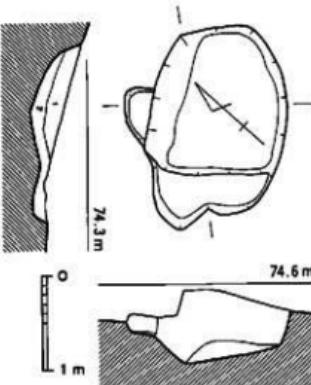


(2) 土坑

1号土坑 (図版36-2, 第97図)

2号住居跡のすぐ西側で検出した。平面形は不整長方形を呈し、長軸2.0m、短軸1.46m、壁高0.55mを測る。底面は南西側に下がっており、奥行き0.3mのテラスがある。埋土中から土師器小片が出土しているが、実測に耐えない。

1. 墓茶色土
(片岩混じる)
2. 黄褐色土
(片岩と黄褐色土塊混じる)



第97図 1号土坑実測図 (1/60)

6. VII区の調査

当該区は、本跡の区分中最も広い面積を有するが、柿畠の階段状開削を受けて遺構密度は割合低い。住居跡は大きく上段（標高60～65m）・中段（標高55m前後）・下段（標高47～50m）に構築される。3～5軒程で一群を成し、7群を構成する。6世紀後半を主体とする住居跡37軒、建物跡4棟、丘陵を縦横に連なる柵列、土坑、溝等の遺構を検出した。

A. 古墳時代以降の遺構と遺物

（1）竪穴式住居跡

1号住居跡（図版41-1, 第98図）

調査区の東端部で、VII区から下りてきた標高57mの丘陵裾部で検出した。南西壁は失われているが、北東壁長5.15m、壁高は東コーナー部で0.45mを測る。北東壁は長さ3.7m遺存する。北壁側には楕円形の穴があり、カマド煙道部を壊している。主柱穴はP1～4で、2.5m間隔の方形に配される。径0.4～0.5mで、深さ0.4mと割合しっかりしている。床面は平坦で、北東壁の中央で土師器が出土した。丘陵緩斜面に位置するが、外周溝は検出されなかった。

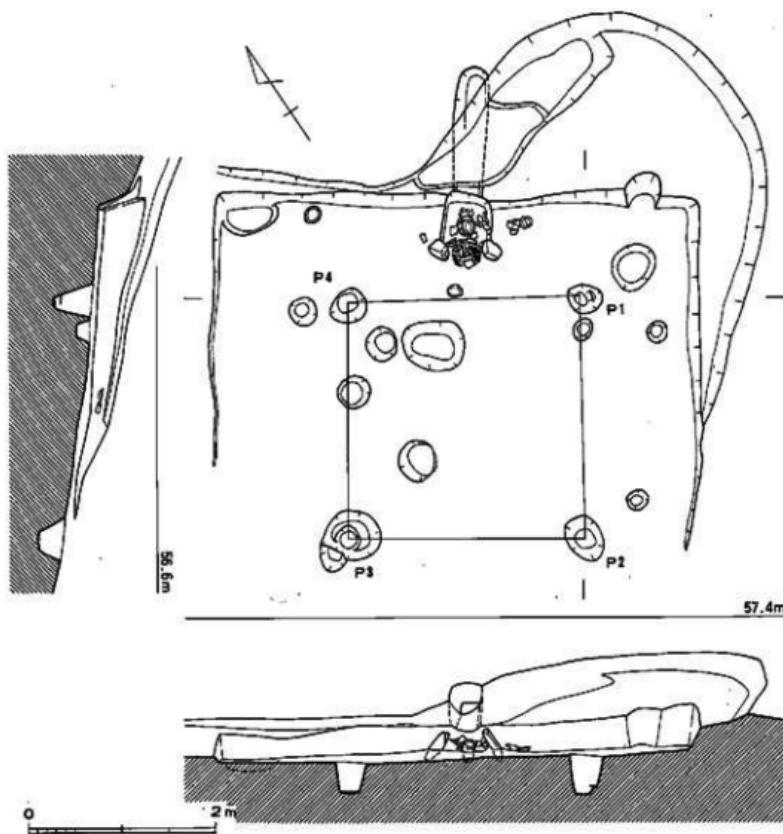
カマド（図版41-2・3, 第99図）

I b類で、北東壁中央に付設する。袖部が欠失しているのは掘り過ぎたためで、検出当初には存在していた。しかしながら、袖石の存在により復原することは可能で、推定長50cm前後、基底部幅30cm程になる。壁体幅は50cmを測る。袖部先端には長さ40cm程の石をハ字形に立てて袖石としている。焚口幅は55cmを測る。奥壁から19cmの位置に石製支脚が埋設されており、その周囲から土師器片が出土した。支脚の前面は30cm程丸く焼けて、硬化していた。煙道は長さ135cm、幅35cmと割合長大なものであった。煙道底面は14°程の傾斜角度で登っている。カマド主軸は東に36°傾いている。右袖の横には須恵器壺蓋・横瓶が置かれていた。

出土遺物（図版77・88, 第100・190図）

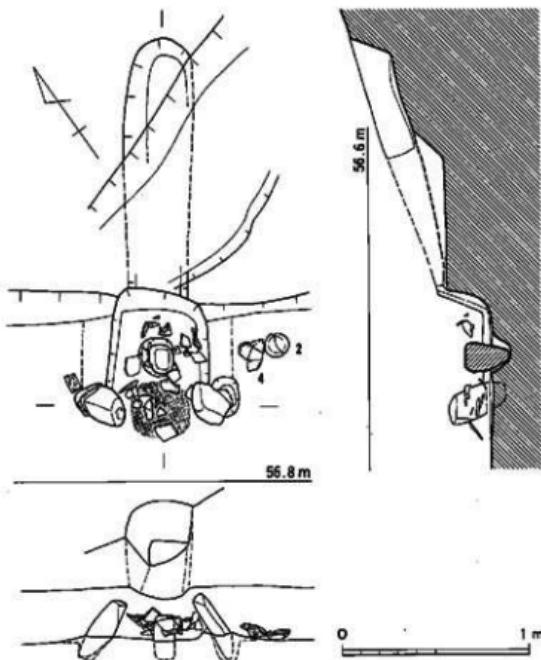
須恵器（1～4） 1・2は壺蓋で、1は体部外面の屈折線が不明瞭なタイプである。調整は1が体部内外ロクロヨコナデ、2は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。

3は甕の口縁部の小破片で、口縁端部は肥厚している。調整は内外ともロクロヨコナデ仕上げである。4は提瓶の胴部破片で、底部側は回転ヘラ削り、胴部側はカキ目、内面はロクロヨコナデのあとナデ仕上げている。胴部側は回転カキ目のあと8条のカキ目を十字に施している。色調は内面灰褐色、外表面灰色を呈し、焼成は普通である。



第98図 1号住居跡実測図 (1/60)

土師器(5~7) 5は小型丸底壺の胴部上半の資料で、復原口径は11cmを測る。調整は器面風化が著しいため明確ではないが、ナデ仕上げと思われる。色調は橙色を呈し、焼成も良好である。6は小型壺の胴部上半の小破片の資料で、胴部内面ヘラ削り、口縁部と胴部外面上半はヨコナデで仕上げている。



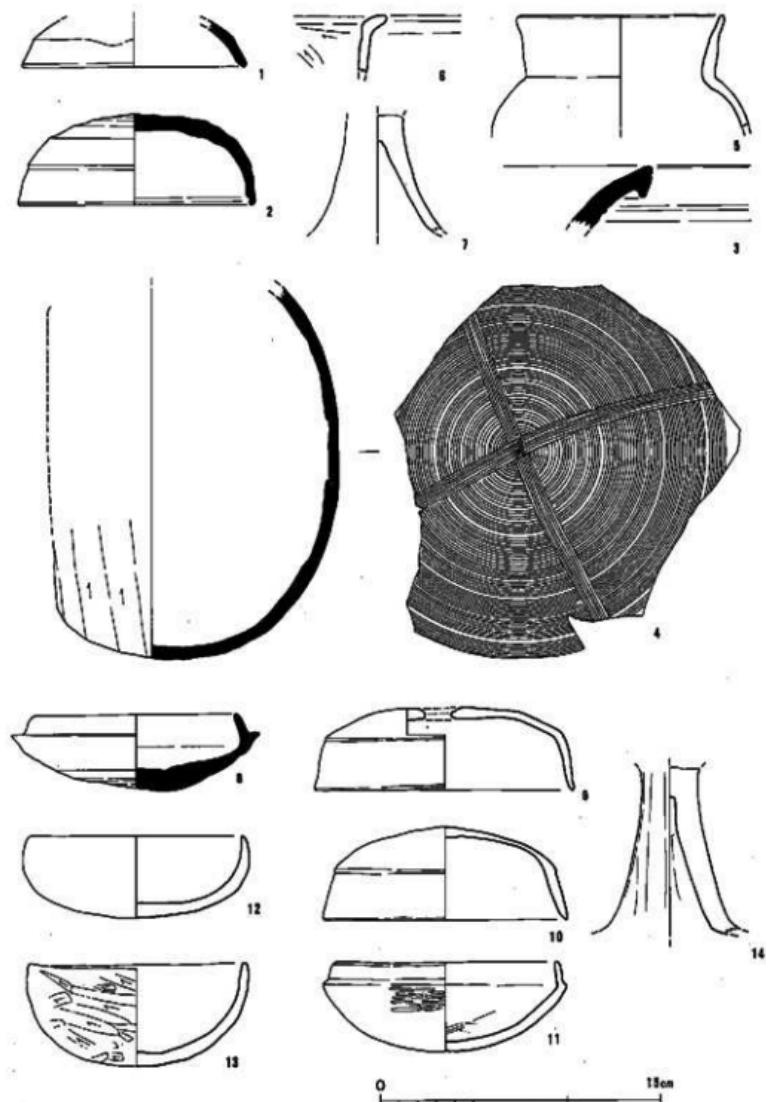
第99図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)

7は高壊の脚部資料で、調整手法は器面の風化が著しいため不明である。

土製品(第190図32) 32は埋土中出土の管状土錐で、長さ2.2cm、径1.55cmを測る。中央に0.4cmの孔を穿っている。胎土に砂粒を多く含む。

2号住居跡 (図版42-1, 第101図)

調査区中央北端のコーナー部に位置し、VII区とIX区の中間点にあたる。平面形は南北に若干長い方形を呈し、東壁長2.6m、北壁長2.45m、壁高は東コーナー部で0.6mを測る。小型の住居跡で、床面にはピットが2個あるのみで、主柱穴は不明。カマド左側と南コーナー付近から土器が出土している。また、南辺は方形の土坑に切られている。



第100図 住居跡出土土器実測図① (1/3)

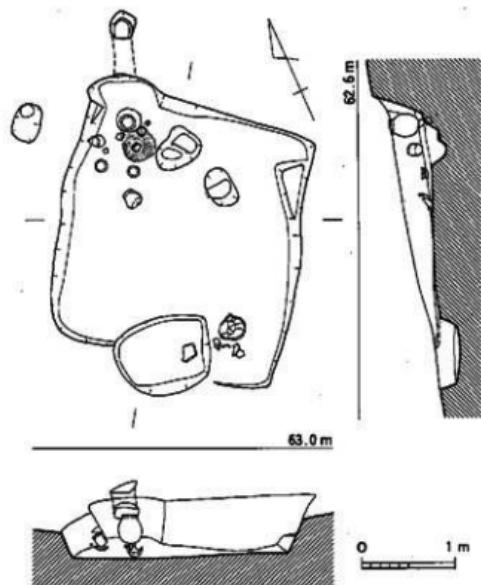
カマド（図版42-2、第102図）

IV a類で、住居北側コーナー部に設けられた突出型のカマドである。検出当初はコーナー部に存在するとは思っておらず、カマド左側の須恵器坏身・坏蓋が乗っていた焼土・壁体片をカマドとしていた。

壁体規模は、下端で奥行き25cm、壁体幅60cmを測る。カマド底面中央には川原石の支脚を埋設しており、小型甕が支脚に突き刺さった状態で出土した。

煙道はトンネル式で、長さ67cm、幅20cm、内径10cmで、先端部に径25cmの突出穴を設けている。煙道底面は15°の傾斜角で登っている。カマド内から土製品が出土している。

また、カマドの左脇から土師



第101図 2号住居跡実測図 (1/60)

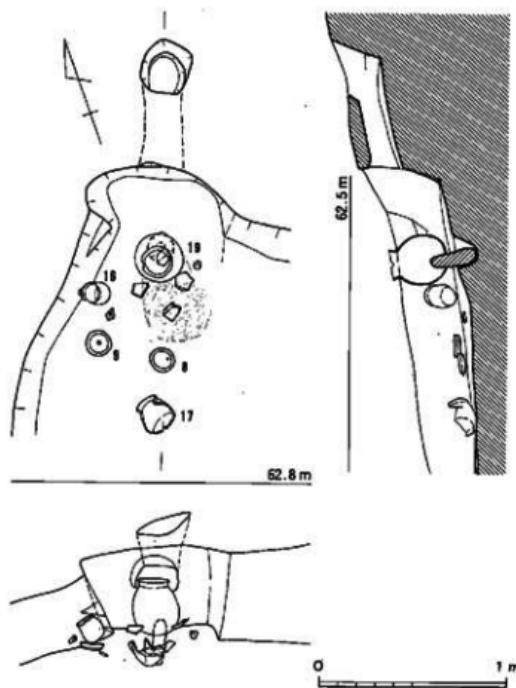
器小甕2個体と須恵器坏身・坏蓋が出土した。カマド主軸は東に20°振っている。

出土遺物（図版77・78・87-3・88、第100・103・104・190図）

須恵器(8) 坏身の資料で、外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。内底部には同心円のタタキの痕跡が残されている。口径は10.9cm、器高は4.1cmを測る。色調は内面緑灰色、外面淡灰色を呈し、焼成は堅鐵である。カマド内出土の資料である。

土師器(9~21) 9~10は坏蓋の資料である。調整は器面の風化が著しいため不明である。9の天井部は穿孔されている。口径は9が11.9cm、10が13cm。器高は9が4.5cm、10が5cmを測る。

11は須恵器模倣の坏身である。11は体部内外をヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器で、内外とも黒漆を塗布している。12・13は碗で、口縁部は直立気味に立ち上がる。13の調整は体部外面ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ仕上げで、12は器面が風化しているため調整は不明である。口径は11が12.1cm、12が11.4cm、13が11.7cm、器高は11が4.7cm、12が4.3cm、13が5.5cmを測る。

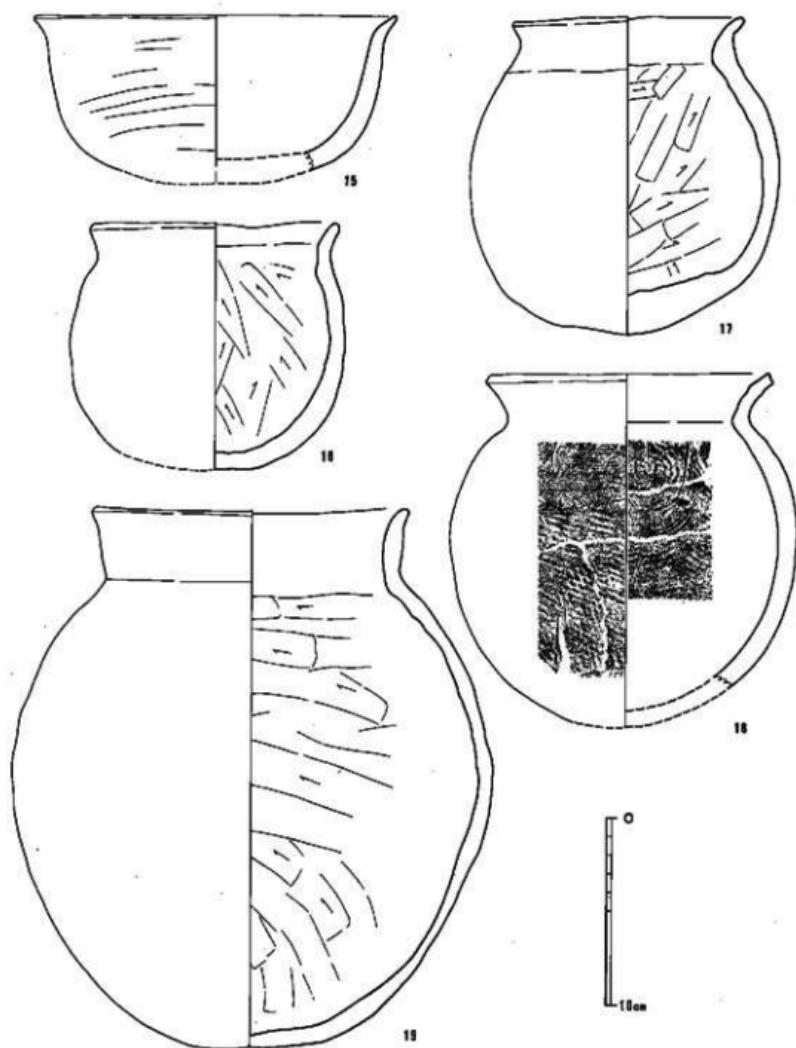


第182図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

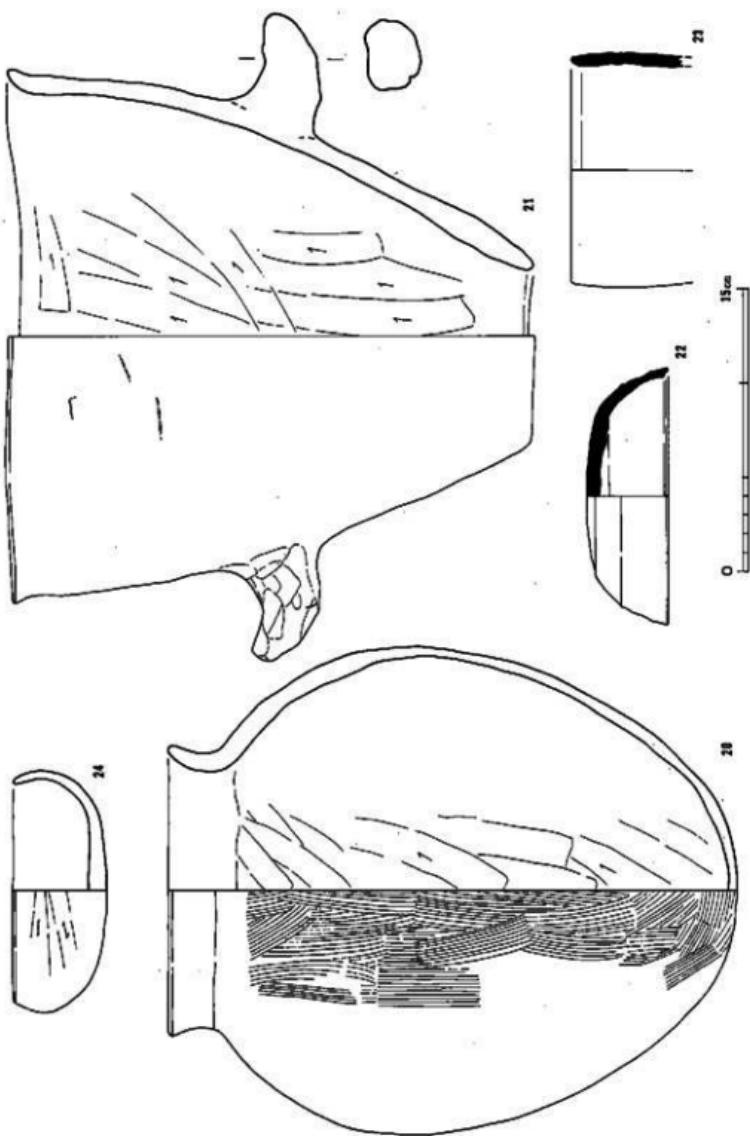
14は高環の柱状部の資料で、外面タテヘラ削り、内面ヨコヘラ削りで仕上げている。色調は黄橙褐色を呈し、焼成も良い。

15は復原口径19.5cmを測る鉢で、内外ともナデで仕上げている。

16~20は甕の資料で、大・小がある。16~18は小型の甕で、調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。16の胴部外面には一部刷毛の痕跡が残っている。18は胴部外面平行タタキ、内面同心円のタタキ、口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げた土師質の土器である。調整手法としては須恵器の製作手法である。19・20は大型の甕で、卵形の胴部に立ち気味の口縁部がつく甕である。調整手法は19の胴部外面が工具によるナデ、20が刷毛。内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。19の胴部外面には煤の付着が見られる。口径は16が 13.4cm 、17が 12.4cm 、18が 15.4cm 、19が 17.1cm 、20が 15.6cm 。



第103図 住居跡出土土器実測図② (1/3)



第104図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)

器高は16から13.1cm, 17から16.9cm, 18から18.5cm, 19から28.8cm, 20から30.4cmを測る。19はカマド内から出土したものである。

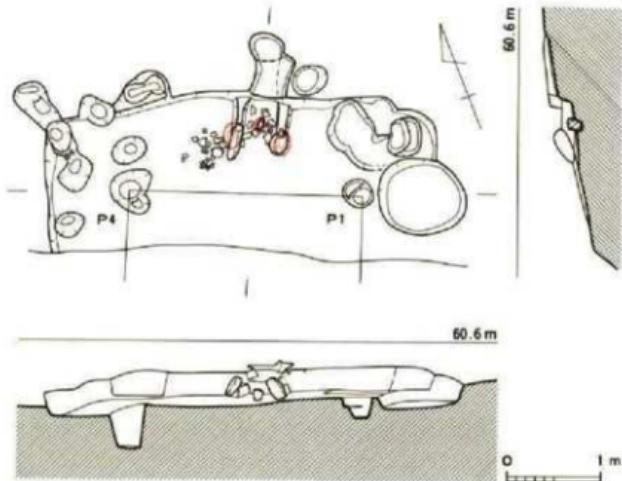
21は牛角把手のつく瓶の資料である。調整は胴部外面工具によるナデ、内面はヘラ削り口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は28.4cm、底径は9.6cm、器高は28.3cmを測る。カマド内出土の資料である。

鉄器（第190図10） 10は残存長2cm程の鉄器片で、残存幅0.8cm、厚さ0.4cmを測り、断面長方形を呈することから刀子の茎先端部分であろうか。

土製品（第190図22～25・27） 22～25は土玉で、径は22・23から0.75cm、24は0.85cmを測る。25は管玉で、残長1.5cm、径0.6cmで、2mmの孔を空けている。何れも小豆色を呈し、カマド左側床面の出土。27は手捏ねの土製品で、指頭圧痕が生々しい。楕を模したものであろう。器高4cm、口径4cmを測る。カマド内の出土である。

3号住居跡（図版43-1、第105図）

2号住居の7m下段側で検出した住居跡で、大半が掘削されている。北壁はピットと切合うが、長さ4.16mを測る。柱穴はP1・4が遺存し、径0.3～0.4mで、深さはP1が20cm、P4は46cmと深い。P1～4の柱間は2.5mである。カマド周辺から土器が出土している。



第105図 3号住居跡実測図 (1/60)

カマド(図版43-2, 第106図)

1 b類で、北壁中央に付設する。袖部先端には長さ35cmの川原石を立てているが、左袖石は若干動いている。焚口幅35cm、奥壁から袖石までの長さ55cmを測る。

袖部は暗褐色土で構築されており、右袖長32cm、基底部幅15cm、残高12cmを測る。支脚は川原石で、奥壁から17cmの箇所に埋設するが、床面から10cmの高さで折損している。

煙道はピットに切られるが、長さ66cm、幅22cmを測り、先端部が円形をなすことからトンネル式に掘ったものであろう。カマド内から土器片が浮いた状態で出土した。また、左袖の脇から須恵器环蓋等が出土している。カマド主軸は東に26°振っている。

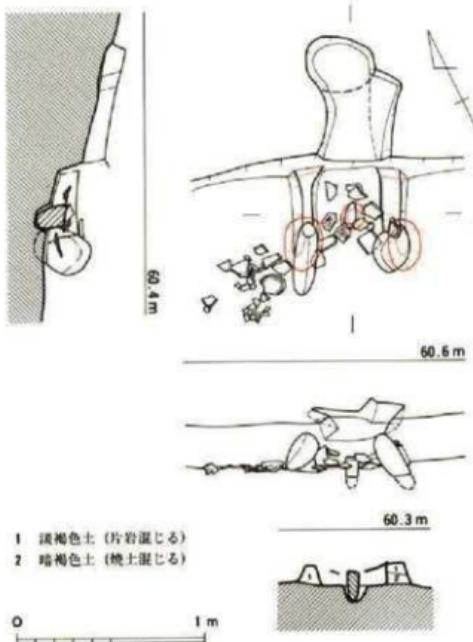
出土遺物(図版78, 第104・107図)

須恵器(22・23) 22は復原口径13.6cm、器高4.35cmを測る坏蓋の資料で、天井部外面は回転ヘラ削り、他はロクロヨコナデ調整である。色調は内面白灰色、外面淡灰色を呈し、焼成も良好、堅緻である。

23は直口する口縁を有す椀の破片資料で、復原口径12cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナデ仕上げである。

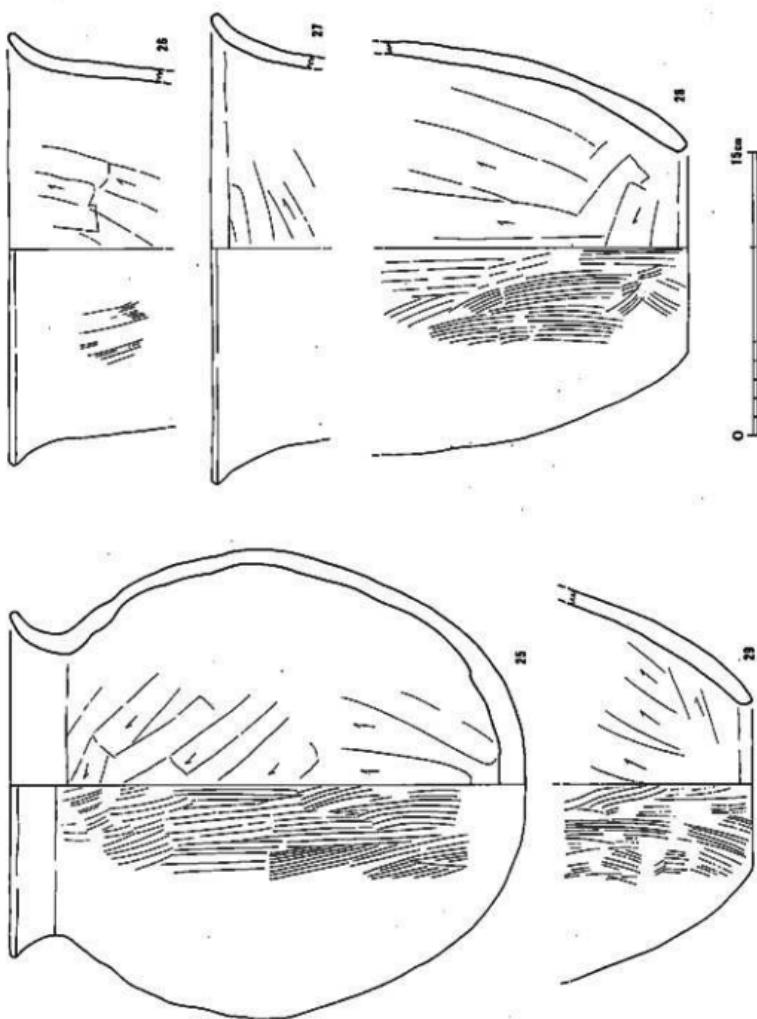
土師器(24~29) 24は内湾する口縁部を有す椀で、調整は体部外面ヘラ削りのあとナデ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。

25は卵形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつく甌で、口径は18.4cm、器高は27.7cmを測る。調整は胴部外面粗い刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデしている。底部付近はさらにナデで仕上げている。



第106図 3号住居跡カマド実測図(1/30)

第107図 住用跡出土土器実測図④ (1/3)



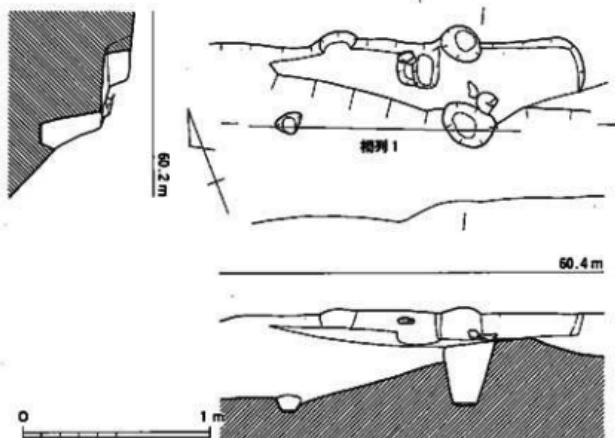
26~29は瓶の破片資料である。調整手法は肩部外面刷毛のもの(26~29)とナデのもの(27)があり、内面はいずれもヘラ削り。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は26が11.5cm、27が12.5cm。復原底径は28が11cm、29が9.2cmを測る。色調はいずれも橙褐色を呈し、焼成も良好である。

4号住居跡（図版43-3、第108図）

3号住居跡の東隣に位置し、北壁の一部3m程を辛うじて残す程度である。壁高は北壁側で0.26mの遺存。1号櫛列と重複するが、当住居跡床面の土器が櫛列に切られていることから、櫛列が後出する。

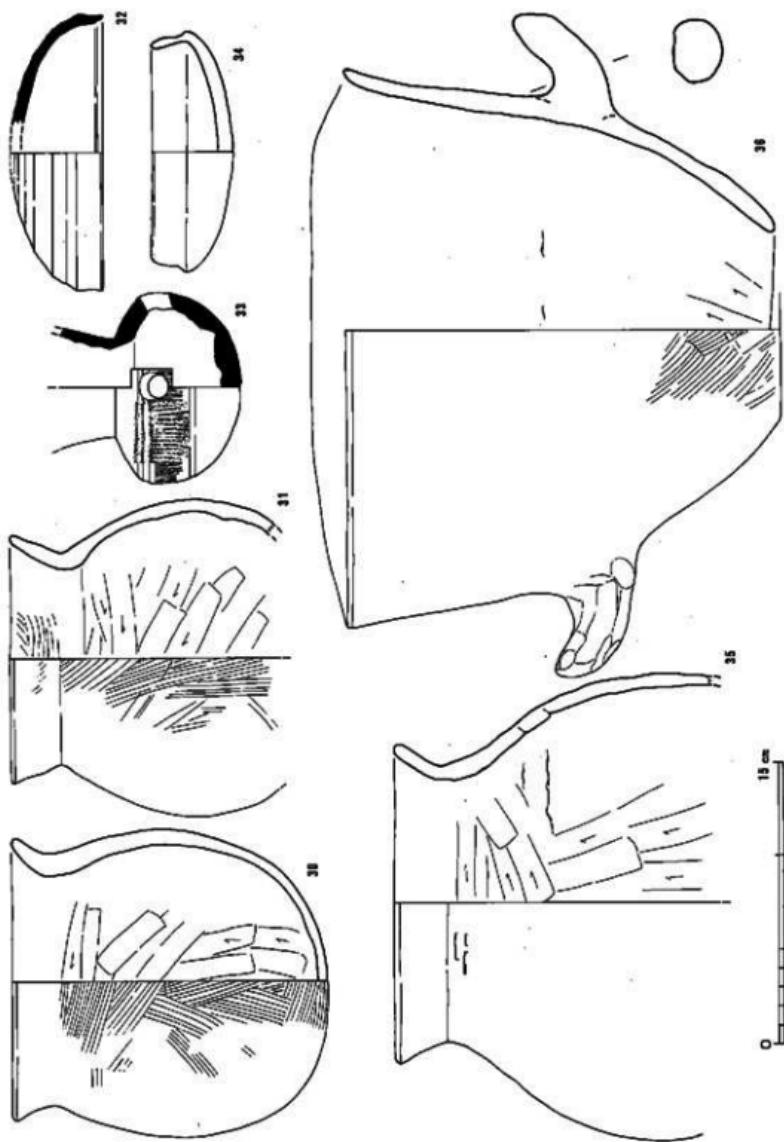
出土遺物（図版78、第109図）

土師器(30~31) いずれも小型の甕で、調整は肩部外面刷毛。内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げで、31の口縁部内外には刷毛の痕跡を残している。色調は暗黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。



第108図 4号住居跡実測図 (1/60)

第109図 住居跡出土器物断面図⑤ (1/3)

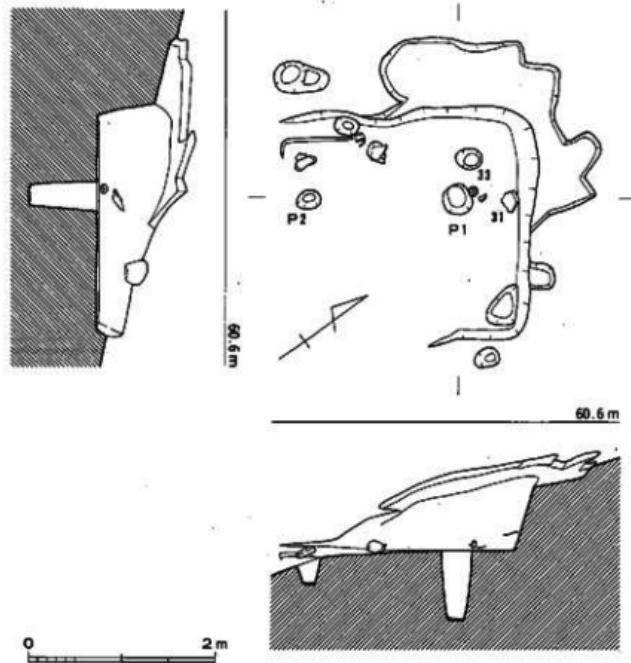


5号住居跡（図版44-1, 第110図）

調査区の中央部上段で、2号住居跡の10m南東に位置するが、削平により南壁を失う。隅丸長方形を呈し、北西壁長2.7m、短辺2.45mで、壁高は北側コーナー一部で0.8m遺存する。床面には30cm程のピット2個が西壁寄りに存在するが、深さはP2が30cm、P1は70cmと極端に差があり、柱穴として良いか疑問が残る。ちなみに柱穴間は1.6mの間隔を有する。床面には焼土すら存在せず、カマドが付設されていたかは不明。床面から須恵器・土器が出土した。

出土土器（図版79, 第109図）

須恵器(32・33) 32は体部外面の屈折線が不明瞭な壊蓋の破片資料で、復原口径14.8cm、復原器高4.8cmを測る。調整は天井部外回転ヘラ削り、内面ナデ。体部内外はロクロヨコナナシでいる。



第110図 5号住居跡実測図 (1/60)

33は口縁部を欠く甌の資料で、扁球形の胴部には上に2条、下に1条の沈線が巡り、その間は櫛状の刺突文が施され、中央には円孔が穿たれている。調整は外底部が回転ヘラ削りのあとナデ、内面ナデ、他は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。色調は淡緑灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

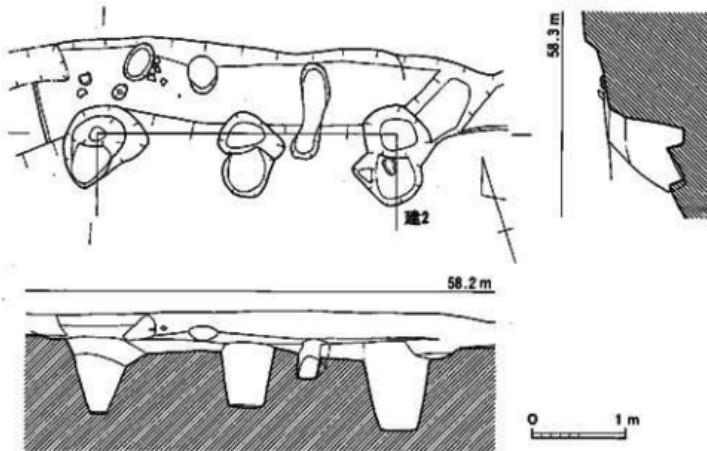
土師器(34-36) 34は环身で、調整は体部外面ヘラ削りのあとナデ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は11.5cm、器高は4.4cmを測る。

35は復原口径17.1cmを測る甌の胴部上半の破片資料である。調整は胴部外面工具によるナデ、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

36は牛角把手がつく甌で、調整は胴部外面刷毛のあと上半はさらにナデ、内面はヘラ削りで仕上げている。色調は内面白黄茶色、外面淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。口縁部は歪みがあるが、口径は54.8cm、底径は10.5cm、器高は25cmを測る。

6号住居跡（図版44-3、第111図）

3~5号住居から一段下がった崖面際に位置し、地山の雲母片岩まで掘り込んでいる。2号建物跡と重複しているが、前後関係はつかめなかった。当住居跡が後出するか。北壁の一部を残すのみであり、残存長3.9m、壁高は0.3m遺存する。床面に焼土はみられないが、カマドは東・西壁の何れかに付設していたものと思われる。北壁際床面から土器が出土している。



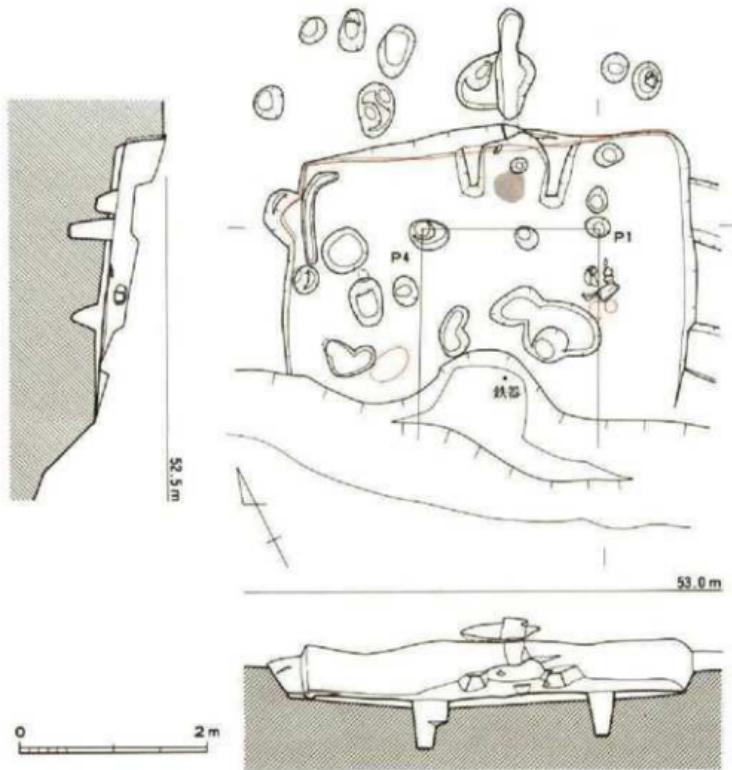
第111図 6号住居跡・2号建物跡実測図 (1/60)

出土遺物（図版79、第115図）

土器器(37~39) 37は壺蓋の資料で、調整は天井部外面ヘラ削りのあとナデ、内面ナデ、体部内外は風化のため不明である。口径は14.0cm、器高は4.5cmを測る。色調は内面橙褐色、外面赤褐色を呈し、焼成も良好である。

38は瓶と思われるものの口縁部付近の小破片で、調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

39は高环の短い脚部の資料である。調整は柱状部外面をタテヘラ削り、内面はヘラ削りのあとナデ、据部内外はヨコナデで仕上げている。

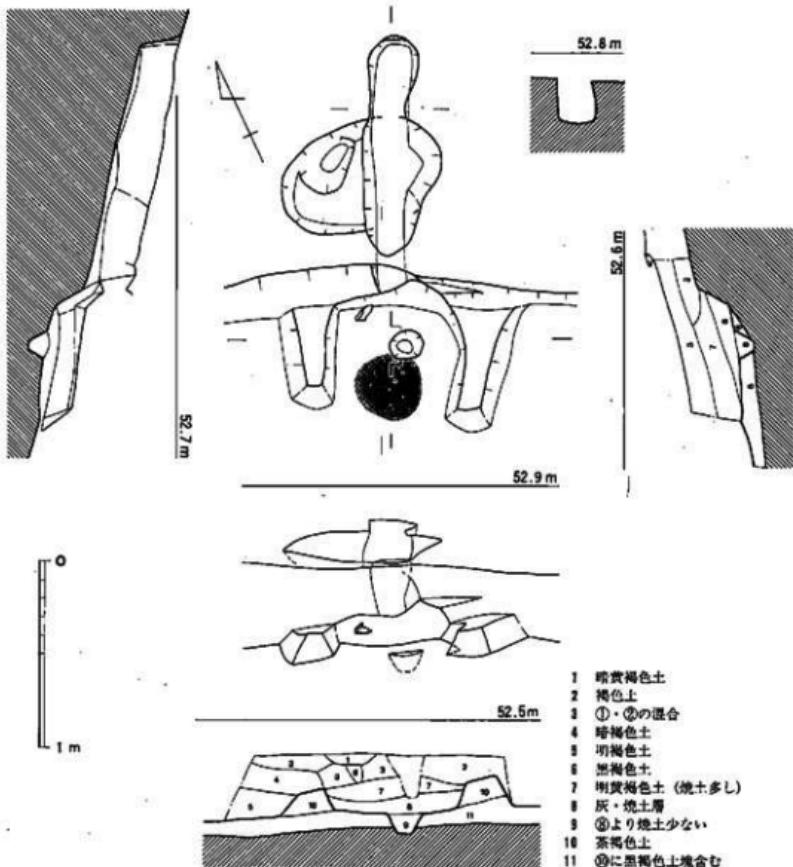


第112図 7号住居跡実測図 (1/60)

7号住居跡（図版45-1、第112図）

調査区の中央で検出した住居跡で、単独で位置する。当住居跡も南半部を失うが、柱穴は長方形に配していたようであり、平面形は長方形を呈しよう。北壁長3.9mで、壁高はカマド側で0.4mを測る。床面にはピットが多くあるが、P1・4が主柱穴で、深さは0.5mと片腕程の深さ掘っている。西側コーナーで壁小溝がL字形に検出された。貼床中から鉄器が出土した。

カマド（図版45-2、第113図）



第113図 7号住居跡カマド実測図 (1/30)

北壁中央に付設する I a 類である。袖部・煙道部は遺存するものの削平を受けている。袖部には茶褐色土を盛っており、焚口幅60cm、壁体幅55cm、奥行き56cmを測る。右袖は長さ65cm、基部幅26cm、残高12cmで、左袖は長さ55cm、基部幅28cm、残高10cmを測る。奥壁から13cmの位置に支脚の抜取り穴があり、その前面が火床で、36cmの範囲で良く焼けていた。

煙道は中程を卵形の穴に切られるが、長さ137cm、幅19cmで、25cm程遺存する。煙道壁面・底面は直線的に掘られ、煙出し部も丸くならないことから掘抜き式と考えられる。底面は13°の傾斜角で登っている。また、カマド主軸は東に26°傾っている。

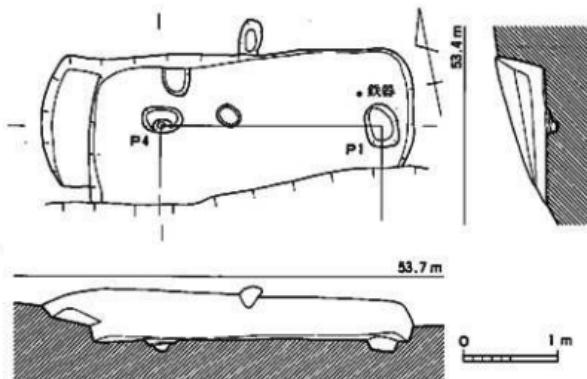
出土遺物(図版79・87-3、第115・190図)

須恵器(40・41) 40は復原口径14cmと大きい壺身で、調整は外底部回転ヘラ刷り、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。41は高环の裾部の破片資料で、復原裾部径は9cmを測る。調整は内外ともロクロヨコナデである。

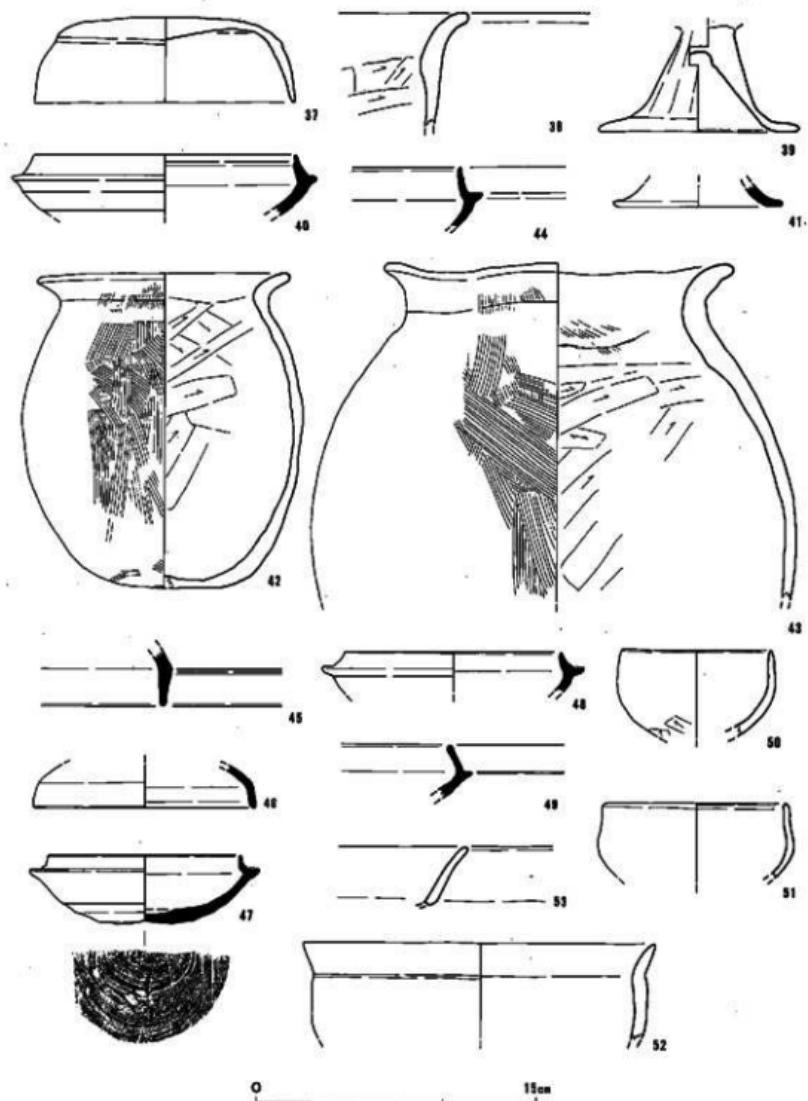
土器部(42・43) いずれも甕の資料で、大・小がある。42は小型品で、復原口径13.6cm、器高は16.8cmを測る。43は胴部上半の大型品の甕で、復原口径は18.75cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。42の内底部はさらにナデで仕上げている。

鉄器(第190図14) 14は貼床中出土の鉄釘残欠で、接合しないが推定長4.5cm程になろう。頭部は方形を呈する。

8号住居跡(第114図)



第114図 8号住居跡実測図(1/60)



第115図 住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

調査区の中央で、7号住居跡の12m西側に位置する。当住居も北辺を残す程度で、北辺長3.3m、壁高は北側で0.6mの遺存状況である。西壁側には幅50cmのテラスが付くが、当住居に間連するかは不明。主柱穴は2本が遺存し、柱間はP1~4間2.4mを有する。カマドは何れの辺に付されたものか不明。

出土遺物（第115・190図）

須恵器(44) 壊身の小破片の資料で、調整は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。

鉄器(第190図18) 18は両端部を欠損し、残長1.1cm程、幅0.4cmで、断面方形を呈する。鉄釘になるか。床面の出土である。

9号住居跡（図版46-2・47-1、第116図）

調査区の北西端部で、VII区との境側に位置する。方形を呈し、南東コーナーは16号住居跡に切られる。平面形は方形を呈し、北壁長5.28m、東壁長5.1mで、壁高は東壁側で0.4m遺存する。主柱穴はP1~4とP5~P8が対応し、建替えを行っている。柱穴の配置状況からみてP1~4が新期住居の柱穴になろう。径30cm前後、深さ0.5mとしっかりした柱穴である。柱間はP1~2間2.7m、P1~4間3.16m、P5~6間2.5m、P5~8間2.9mを測る。床面はほぼ水平で、10cm弱の貼床を施している。埋土中から土製品が出土した。

カマド（図版47-2、第117図）

北壁のやや西寄りに付設する。遺存状態は悪く、袖部・煙道部は留めていないが、壁体両翼に袖石の抜取り穴があることからI b類である。左袖側の住居壁には25×5cmの三角形の突出部があり、そこに粘土を貼付け袖部を構築したものと考えられる。

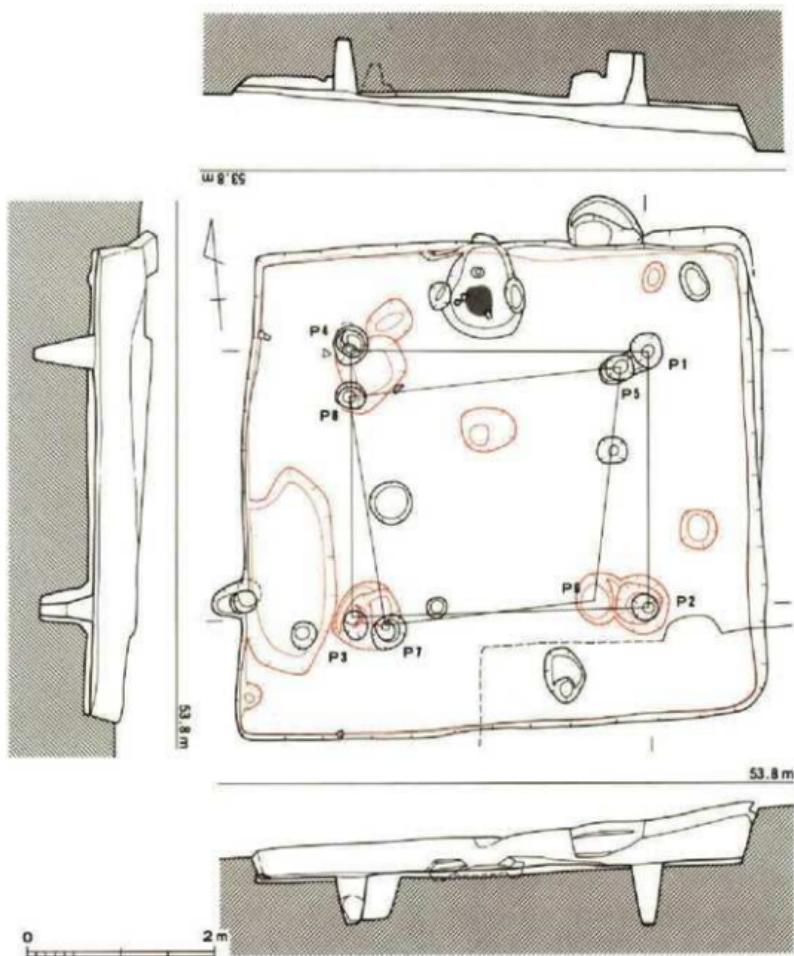
壁体は住居床面を一段掘り窪め、長さ100cm、幅80cmの洋梨型を呈する。奥壁から20cmの位置に支脚の抜取り穴があり、その前面が火床で、30cmの範囲で焼けていた。煙道は壁体からの立上がり部が半うじて遺存するのみ。カマド主軸は東に3°傾っている。カマド内からは土玉とミニチュア土製品が出土している。

出土遺物（図版79・88、第115・121・190図）

須恵器(45~49) 45・46は体部外面の屈折稜が不明瞭な壊蓋の小破片の資料で、46は復原口径12cmを測る。調整は体部内外回転ヨコナデである。色調は45が緑灰色、46が灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

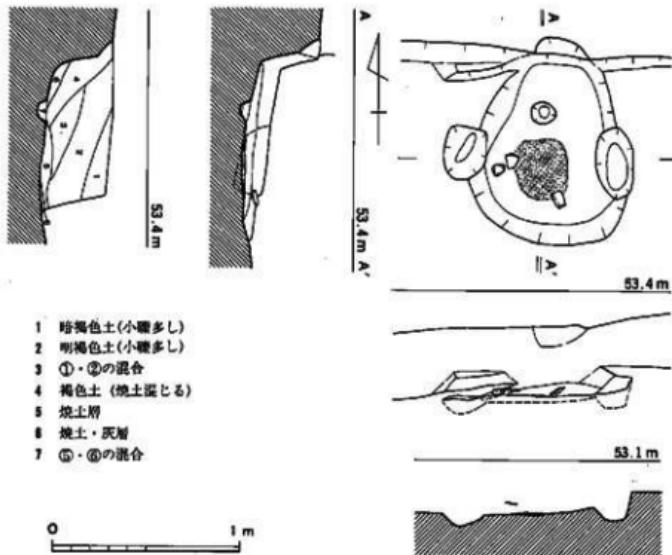
47~49は壊身の破片資料で、47の外底部にはヘラ記号が施されている。調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。復原口径は47が10.2cm、48が11.6cm。器高は47が3.7cmを測る。

土師器(50~57) 50・51は内湾気味に立ち上がる単口縁の小型の椀である。調整は体部外面ヘラ削りのあとナデのもの(50)、ナデのもの(51)、内面はいずれもナデ、口縁部内外はヨコ



第116図 9号住居跡実測図 (1/60)

ナデで仕上げている作りの良い土器である。色調は50が橙褐色、51が灰黄褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は50が8cm、51は9.6cmを測る。



第117図 9号住居跡カマド実測図 (1/30)

52は鉢の破片資料で、口縁部は短かく屈曲する。調整は胴部内外ともナテ、口縁部内外はヨコナナデである。復原口径は18.8cmを測る。53は高环の坏部の小破片で、内外ともヨコナナデ仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成も良好である。

54・55は甌の破片資料で、復原口径は54が16cm、55が21.7cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナナデ仕上げで、54は胴部外面をさらにナテで仕上げている。56・57は甌の口縁部の小破片である。調整手法は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナナデ仕上げている。56の傾きはもう少し起きよう。

土製品(第190図26・28) 26は大振りの土玉で、歪みがある。径1.95cm、重さ5.4gを量る。中央に焼成前穿孔の円孔(3mm)を空けている。11はミニチュア土製品で、柄を模したものか。共にカマド内の出土。

10号住居跡 (図版47-3、第118図)

9号住居跡の2m西側に位置し、農道の存在により大半が未掘となってしまった。東壁長2.1m

で、南壁は2.18mの検出であるが、長辺3m程度の小型住居となろう。壁高は東壁側で0.4mを測る。柱穴は不明であるが、小型の住居であることから当初より存在しなかった可能性がある。貼床下部で土坑・ピットを検出した。東壁コーナー部床面から土器が出土している。

出土遺物（図版88、第121図）

須恵器(58・59) 58は体部外面の屈折棱があまり明瞭でない壊蓋の小破片で、内外をロクロヨコナデしている。59は復原口径11.4cmを測る壊身の破片資料で、体部内外をロクロヨコナデで仕上げている。

土師器(60) 焼の胴部上半の資料で、復原口径16.4cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は内面茶褐色を呈し、焼成も良好である。

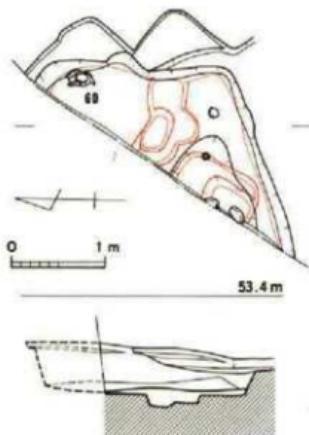
11号住居跡（図版48-1、第119図）

調査区の北西端で、9号住居跡の4m南側に位置する。西端部は掘削により遺存しない。東壁長4m、壁高0.56mで、北壁長は3.1mの遺存であるが、柱穴が輻位長方形に配されることから長方形を呈しよう。主柱穴はP1~4で、柱間はP1-2間2.2m、P1-4間1.8mで、深さは0.2~0.3mを測る。床面は平坦で、15cm程の貼床を施していた。貼床を掘り下げたところ落込み・ピットを検出した。埋土中から鉄器が出土した。

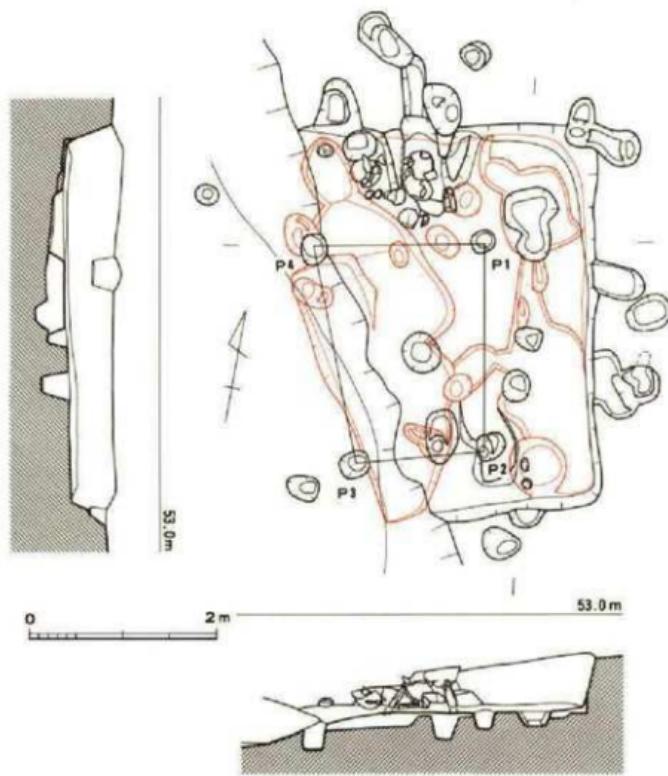
カマド（図版48-2・49、第120図）

袖部先端に石を立てたII b類で、北壁中央に付設する。袖部先端には長さ37cmの川原石をハ字形に立てており、中に落ち込んでいた石は焚口部の天井石になろう。壁体は焚口幅58cm、奥行き80cmで、袖部には褐色土を積んでいる。右袖は長さ62cm、基部幅42cm、残高25cmで、左袖は長さ62cm、基部幅65cm、残高20cmを測る。奥壁から40cmの位置に支脚を立てていた穴があるが、支脚は抜き去られていた。

カマド内には奥に懸、手前に土師器甕が、その間に須恵器壊身が入れられており、さらに土師器甕の中には土師器壊が入っていた。住居廃絶に際して故意に入れ込んだものと思われる。また、左袖の脇には土師器甕が置かれていた。埋道は長さ65cm、幅26cmで、9°の傾斜角で立ち上がる。長方形を呈することから掘抜き式になろう。カマド主軸は西に10°振っている。



第118図 10号住居跡実測図 (1/60)

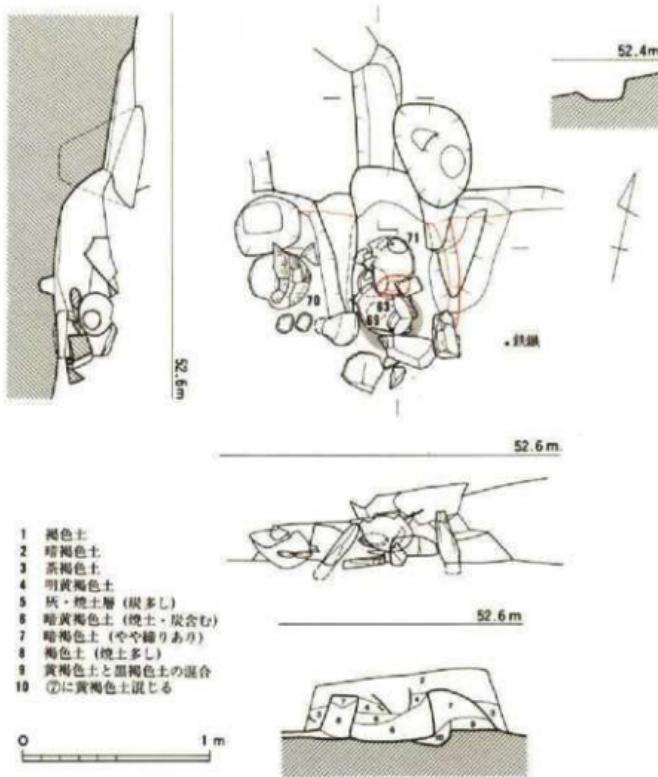


第119図 11号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版80、第121・122・124図)

須恵器(61) 壁身の資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は内面暗灰色、外面淡緑灰色を呈し、焼成は良好・堅致である。口径は13.7cm、器高は4.6cmを測る。

土師器(62~71) 62は土師質の壁蓋で、全体に器面の風化が著しいため明確ではないが、天井部外面は回転ヘラ削り調整で、須恵器の手法である。天井部外面には煤の付着が見られる。色調は内面淡橙色、外面黄褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は12.8cm、器高は4cmを測る。

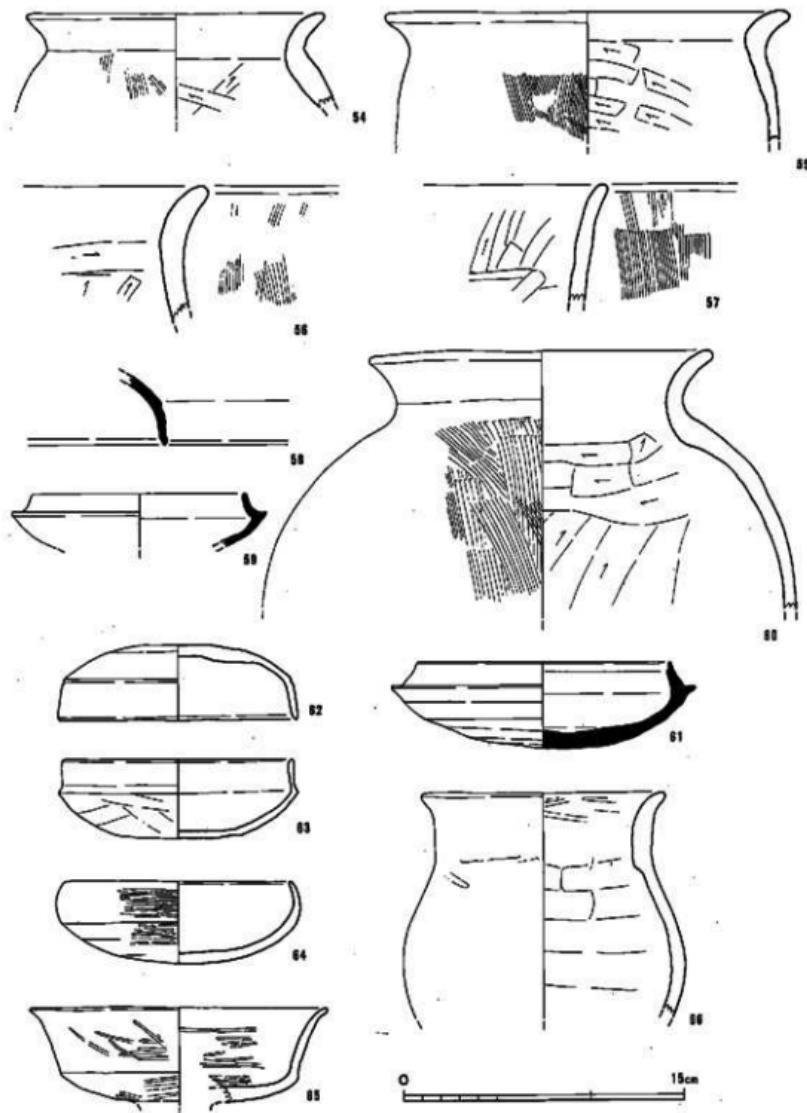


第120図 11号住居跡カマド実測図 (1/30)

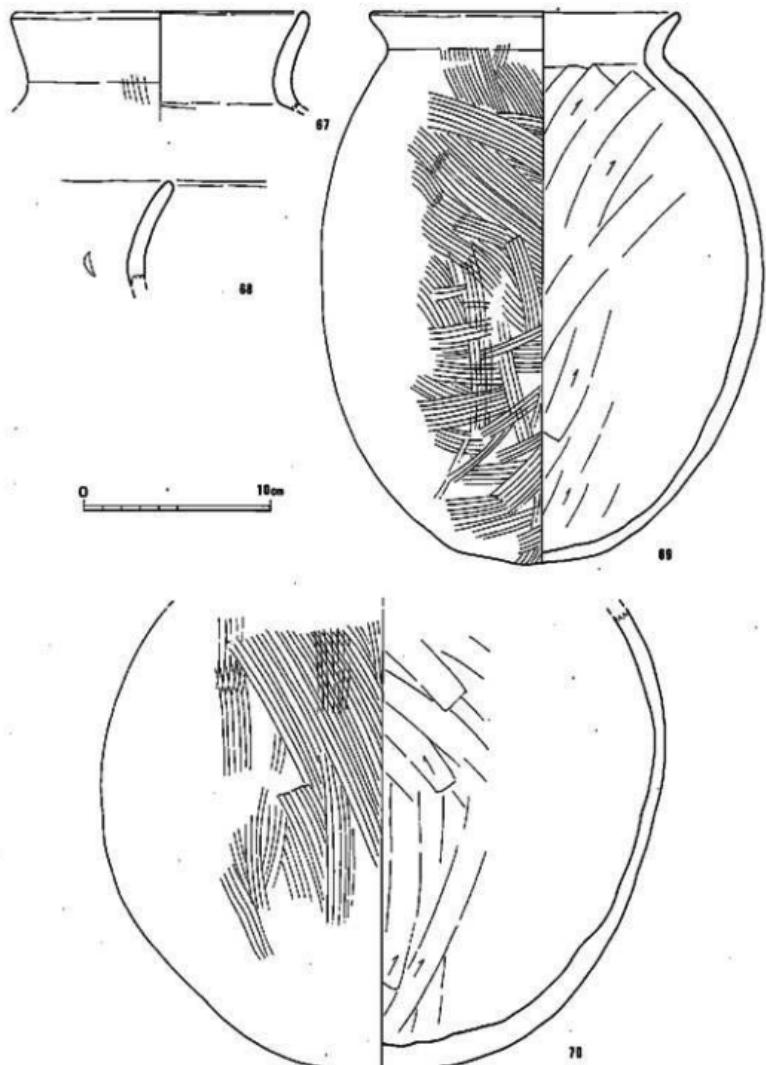
63・64は壊身の資料で、器受け部を有するもの（63）と内湾気味に立ち上がる口縁を有するもの（64）がある。調整は体部外面へラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ。64の体部外面上半はさらにヘラ磨きで仕上げている。いずれも作りの良い土器で、64の内外には黒漆の塗布が見られる。口径は63が12.4cm、64が12cmで、器高は63が4.2cm、64が4.3cmを測る。

65は高壊の壊部の資料で、口径16cmを測る。外底部はヘラ削りのあとヘラ磨き、内底部へラ磨き、口縁部内外はヨコナデのあとヘラ磨きで仕上げている。色調は内面淡橙色、外面橙黄色を呈し、焼成も良好である。

VII区の調査



第121図 住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)



第122図 住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)

66~70は甕の資料で、大・小がある。調整手法は胴部外面刷毛のもの（67・69・70）と刷毛のあとナデのもの（66）があり、内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。66の口縁部内面は刷毛、70の外底部はさらにナデで仕上げている。69の胴部外面には煤の付着が見られる。口径は66が13cm、67が16cm、69が16.6cm、器高は69が29.4cmを測る。

71は牛角把手がつく瓶の資料で、復原口径は24cm、底径9.9cm、器高は27.2cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し、焼成も良好である。

鉄 器（第190図9） 9は刀子の破片で、切っ先・茎部を欠く。残長3.9cm、刃部長1.6cmで、良く使い込まれている。

12号住居跡（図版50-1、第123図）

11号住居跡と3号大溝の中間で検出した小型の住居跡で、北東壁長2.5m、北西壁長2mの隅丸長方形を呈する。壁高は北東壁側で、0.3mを測る。南西壁には30cm幅のテラスを付設している。

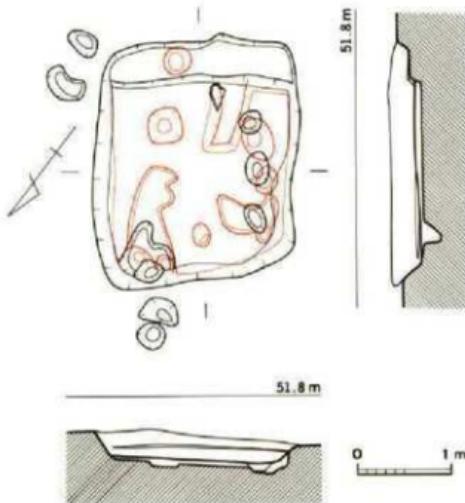
床面には柱穴は存在せず、貼床下部でもそれらしい穴は見当たらぬ。カマドはテラス側に付くものと思い掘り下げたが、カマドは存在しない。住居とするより竪穴が妥当であろう。

出土遺物（第124図）

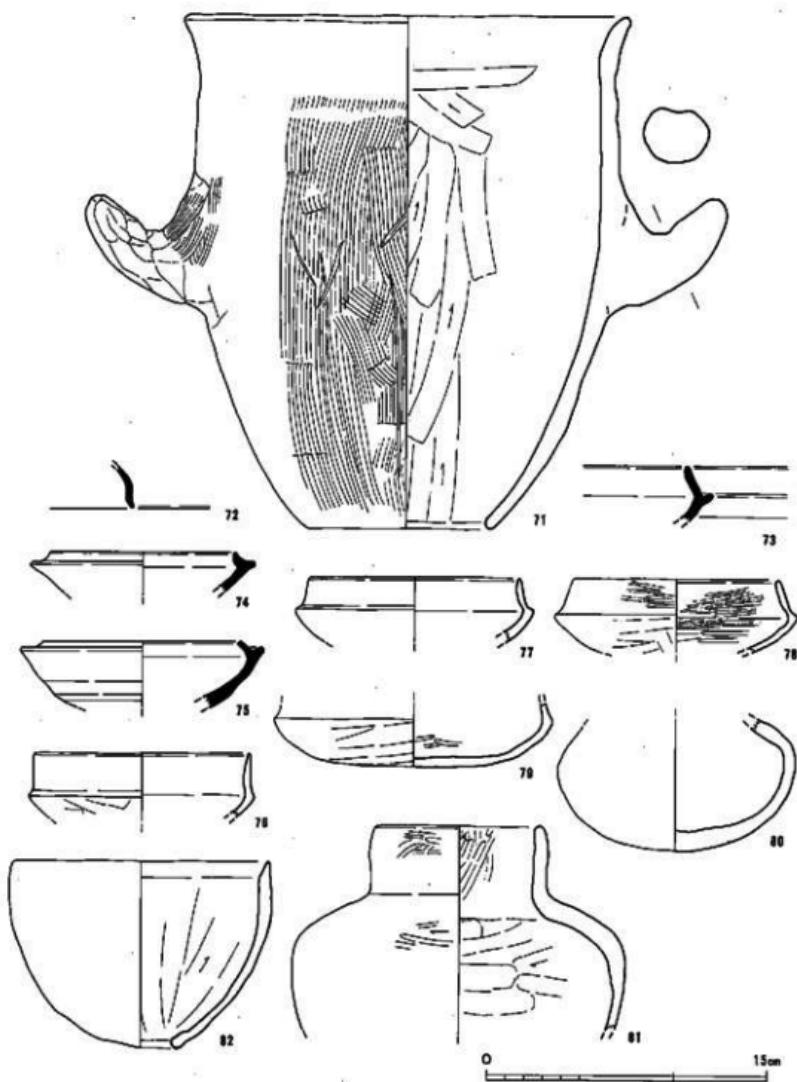
須恵器（72~75） 72は体部外面の屈折接が不明瞭な壊蓋の小破片で、内外ともロクロヨコナデで仕上げている。

73~75は壺身の破片資料で、口縁部の立上りが高いもの（73）と低いもの（74・75）がある。調整は外部回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はロクロヨコナデである。復原口径は74が10cm、75が10.6cmを測る。

土師器（76） 蓋受け部の小さい壺身の破片資料で、復原口径は11.6cmを測る。調整は体部外面ヘラ削り、口縁部内外と体部内面はヨコナデ。色調は淡橙色を呈し、焼成も良好。



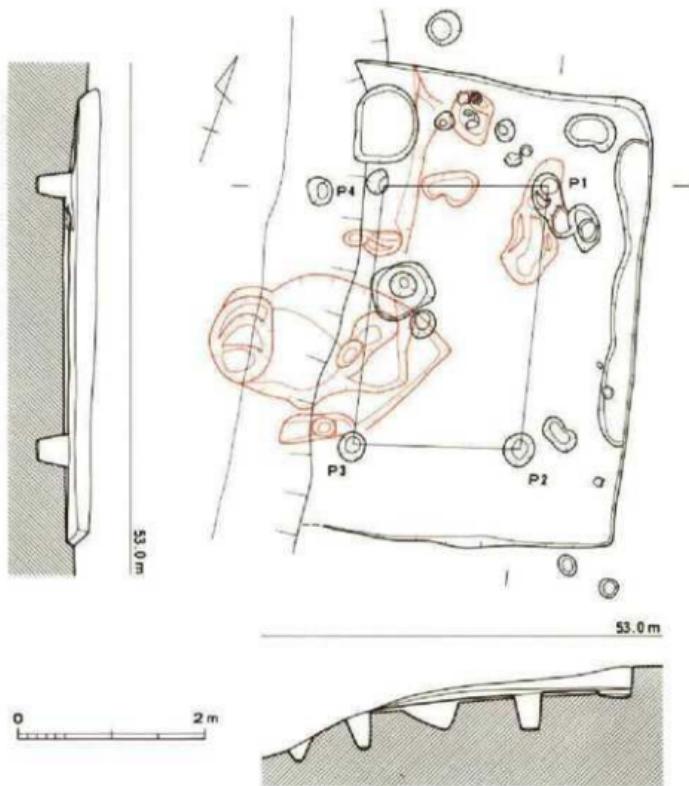
第123図 12号住居跡実測図 (1/60)



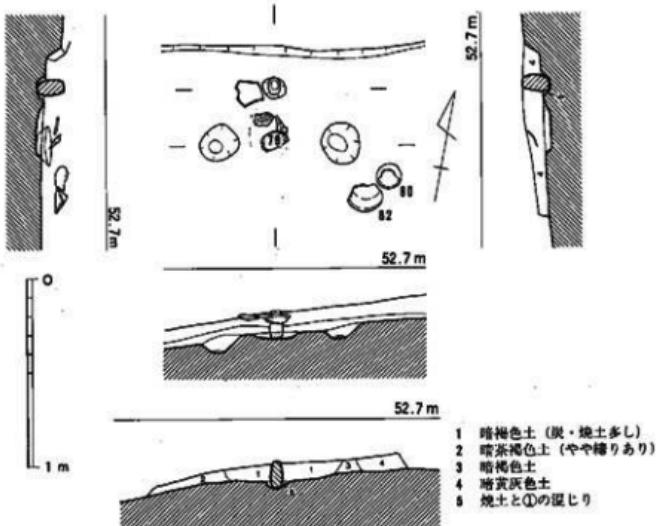
第124図 住居跡出土土器実測図⑨ (1/3)

13号住居跡（図版50-1・2、第125図）

調査区の西北端で、11号住居跡の3m南側に並ぶ形で位置する。当住居も西壁を喪失する。東壁長4.75m、壁高0.2mで、北壁は3.15m遺存するが、柱穴が長方形に配列することから平面形は長方形を呈するものと考えられる。主柱穴はP1～4で、柱間はP1～2間2.8m、P1～4間1.75mで、深さは0.4mとしっかりしている。床面は平坦であり、5cm程の貼床を施していた。貼床を掘り下げたところ土坑・ピットを検出した。遺物はカマド右側床面から土師器の小型壺と瓶が出土している。また、鉄器残片が出土しているが、鉄影れが著しく報告を割愛した。



第125図 13号住居跡実測図 (1/60)



第128図 13号住居跡カマド実測図(1/30)

カマド(図版50-3、第126図)

袖部・煙道部は遺存しない。支脚と袖石の抜取り穴を確認したにすぎないが、焚口幅45cm、壁体長60cm程に復原される。支脚は奥壁から10cmの位置にあり、長さ15cmの川原石を埋設していた。その前面が火床で、25cmの範囲で赤変している。カマド内及び周囲からは浮いた状態で土器が出土した。カマド主軸は西に11°傾っている。

出土遺物(図版80、第124図)

土器類(77-79) 77-79は蓋受け部の小さい环身の破片資料である。調整手法は体部外面がナデのもの(77)、ヘラ削りのもの(78)、ヘラ削りのあとヘラ磨きのもの(79)、内面はナデのもの(77)とヘラ磨きのもの(78・79)があり、口縁部内外はいずれもヨコナデで仕上げている。復原口径は77が11.4cm、78が11.1cm、体部最大径は77が12.8cm、78が13cm、79が15cmを測る。色調は77が淡橙色、78が暗褐色、79が淡橙褐色を呈し、焼成も良好である。

80・81は小型九底盃で、80が胴部、81が胴部上半の資料である。調整は80が胴部内外ナデ、81が胴部内面ヘラ削りの他はヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。復原口径は81が9cm、胴部最大径は80が12.7cm、81が17.8cmを測る。

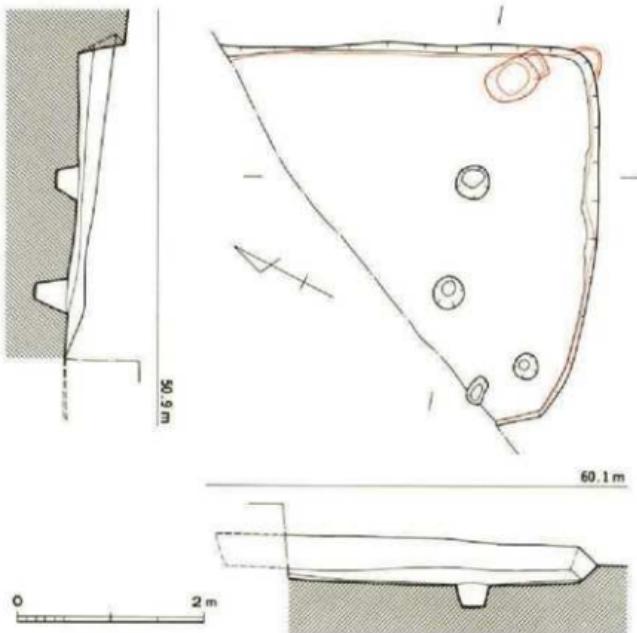
82は小型の瓶で、口径は13.8cm、器高は9.9cmを測る。調整は体部外面ナデ、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄橙褐色を呈し、焼成も良好である。

14号住居跡（図版51、第127図）

調査区の北西端で、11号住居跡の8m西側に位置する。大半が農道の下になるため詳細は不明。3号柵列と切合い関係にあり、柵列が後出する。南壁長3.9mで、隅丸長方形を呈するものと思われる。第127図の断面を切った穴を一応主柱穴としたが、深さは30cm前後であり問題はないが、間隔が1.2mとやや短いくらいがある。

出土遺物（第130図）

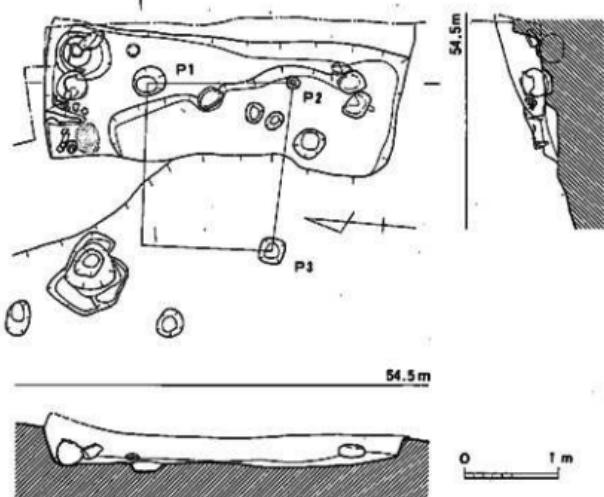
土師器(83) 壺の牛角把手で、ナデ仕上げている。色調は白黄茶色を呈し、焼成も良好である。



第127図 14号住居跡実測図 (1/60)

15号住居跡（図版52-1、第128図）

VII区との境の農道裾で検出した住居跡で、13号住居跡の2m南側に位置する。東壁を残す程度であり、西半部を欠損する。東壁長3.95mで、壁高はカマド側で0.5mを測る。P2は径10cm程で



第128図 15号住居跡実測図 (1/60)

柱穴とするのを躊躇したが、一応P1~3を柱穴とみなした。柱間はP1~2間1.55m, P2~3間1.8mを測る。カマド右袖側から土器が据わった状態で出土している。

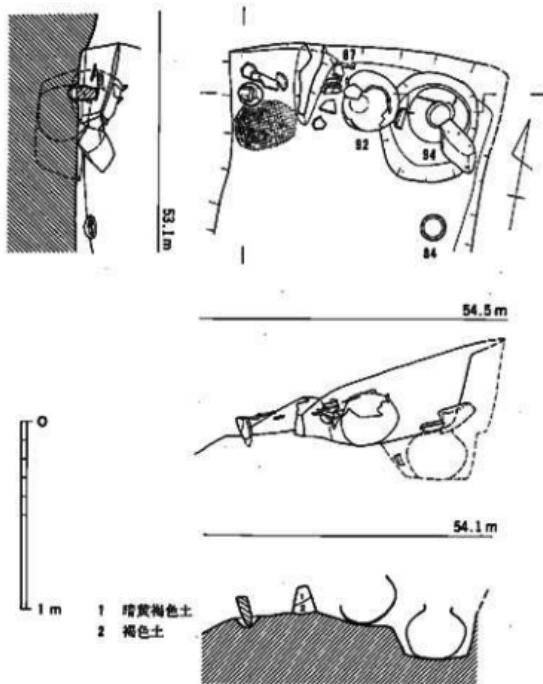
カマド (図版52-2, 第129図)

I a類で、北東壁中央に付設する。支脚と右袖を留める程度である。右袖は暗黄褐色土・褐色土を盛っており、長さ43cm、基部幅20cm、残高20cmを測る。支脚は奥壁から18cmの位置に川原石を埋設している。その前面が火床面で、25×35cmの範囲で焼けていた。カマドの右側には土師器甕が据えられており、コーナー部には床面を15cm程掘り窪めた径50cmの穴の中に土師器甕が安置してあった。水・穀物の貯蔵用であろう。カマド主軸は西に9°振っている。

出土遺物 (図版81, 第130・134図)

須恵器(84~86) 84は環身の資料で、調整手法は外底部回転ヘラ削りの他は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。口径は11.2cm、器受け部径13.9cm、器高4.3cmを測る。色調は内面灰色、外面暗灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

85・86は高环の脚の裾部の破片資料で、裾部がラッパ状に開くタイプ(85)と裾部が段状をなすもの(86)がある。86の柱状部にはカキ目が施されているとともに円孔が穿たれている。

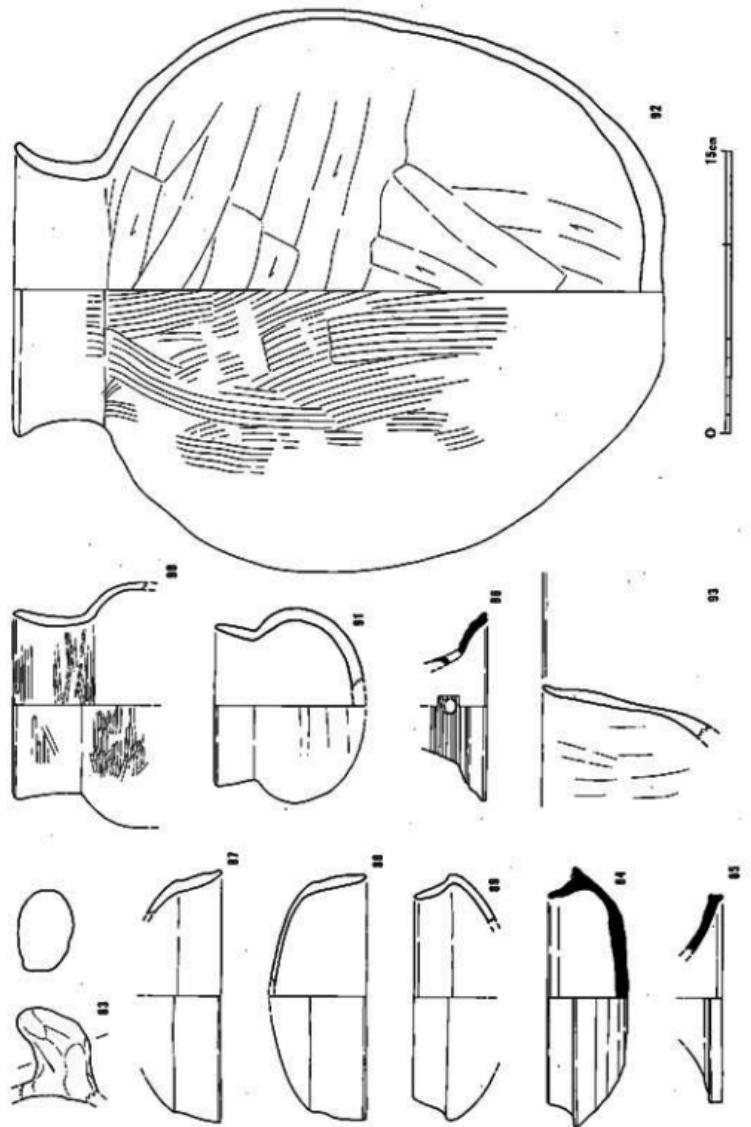


第128図 15号住居跡カマド実測図(1/30)

土師器(87~94) 87・88は壺蓋の破片資料で、復原口径は87が13.4cm、88が13cmを測る。調整は88が体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナナデ仕上げで、87は器面の風化が著しく不明である。色調はいずれも淡橙色を呈し、焼成も良好である。

89は壺身の破片資料で、復原口径は10.6cmを測る。調整は器面が風化しているため明確ではないが、体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナナデと思われる。

90・91は小型丸底壺の破片資料で、復原口径は90が10cm、91が8.6cm、器高は残存部で90が7.3cm、91が8cmを測る。調整は胴部外面ヘラ磨きのもの(90)、ナデのもの(91)、内面はいずれもナデ、口縁部内外はヘラ磨きのもの(90)とヨコナナデ仕上げのものとのがある。色調はいずれも黄褐色を呈し、焼成も良好である。



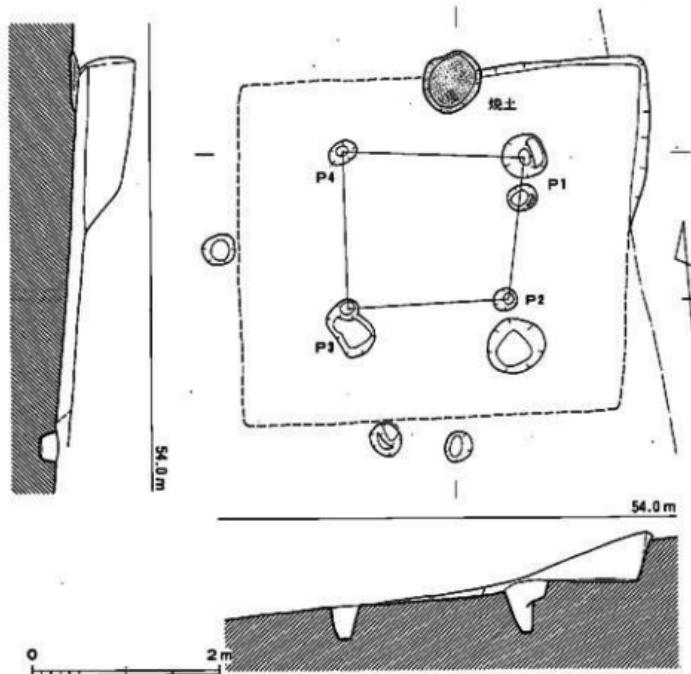
第130図 住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

92・94は球形の胴部に立ち気味に外反する口縁部がつく大型甌の資料である。調整は胴部外面粗い刷毛、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナナで、94の胴部下半はさらにナデで仕上げている。92・94の胴部下半には煤の付着が見られる。色調はいずれも黄褐色を呈し、焼成も良好である。口径は92が15.6cm、94が16cm、胴部最大径は92が29.9cm、94が27.9cm、器高は92が34.3cm、94が29.3cmを測る。

93は瓶の胴部上半の小破片で、外面ナデ、内面ヘラ削りで仕上げている。色調は内面淡橙色、外面黄褐色を呈し、焼成も良好である。

16号住居跡（第131図）

9号住居跡の南東コーナー部に焼土が存在し、当住居の存在に気づいた次第である。北東コーナー部は農道の裾部を拡張して検出した。主柱穴はP1~4で、径0.3~0.5m、深さ0.5mを測る。柱間はP1~2間1.5m、P1~4間1.95mの間隔を有する。



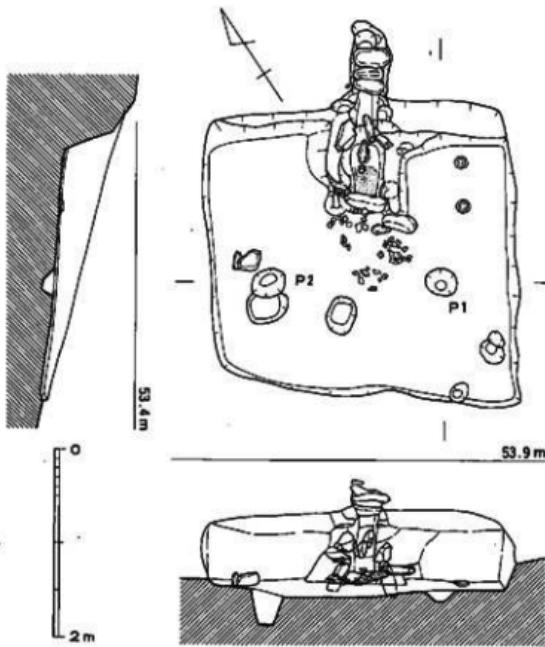
第131図 16号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物（第134図）

須恵器(95) 壊身の体部破片である。調整は外底部回転ヘラ削り、内面ロクロヨコナデで、内底部にはタタキ目の痕跡が残されている。色調は内面灰褐色、外面暗灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

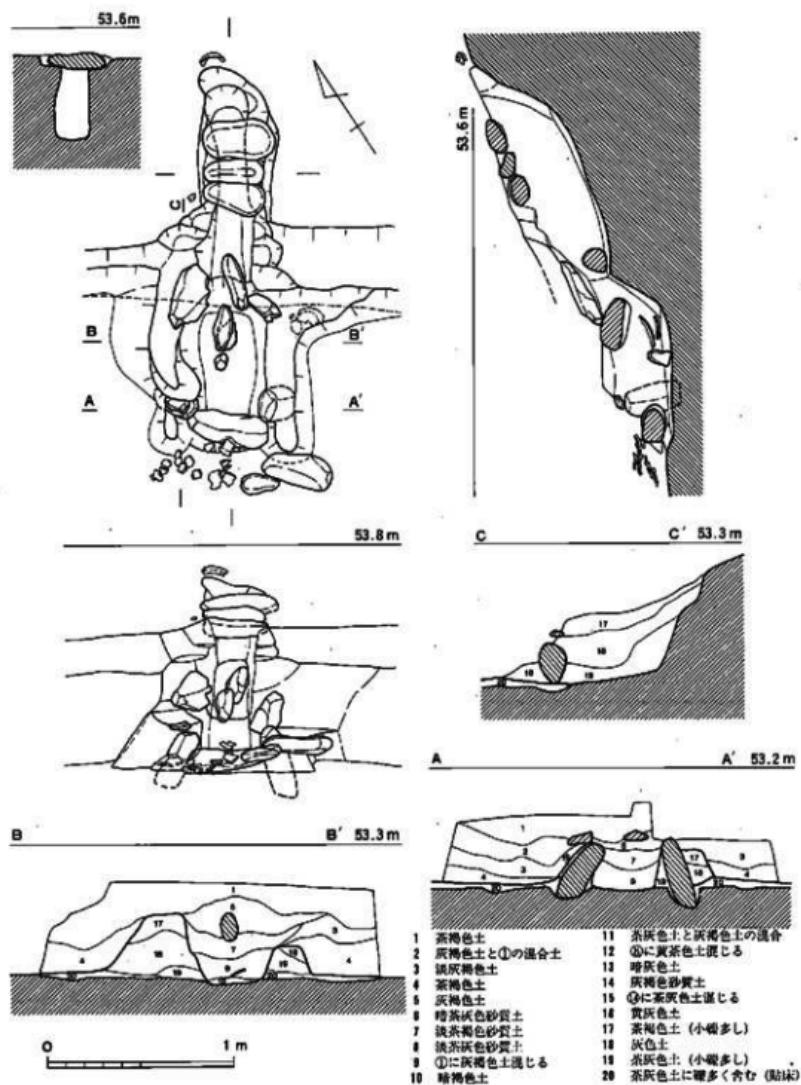
17号住居跡（図版53-1, 第132図）

調査区の中央やや西側の丘陵張出し部に位置し、8・18・19・24・33号住居跡と一群を成す。当住居は比較的残存状況の良好な住居跡で、壁高はカマド側で0.7mを測る。平面形は方形を呈し、北壁長3.2m、東壁長3.1mを測る。柱穴はP1・2で、中央やや南壁寄りに位置する。径0.35m、深さはP1が0.1mで、P2は0.4mを測る。床面は中央が窪み、須恵器・土師器が散在して出土した。



第132図 17号住居跡実測図 (1/60)

VII区の調査



第133図 17号住居跡カマド実測図 (1/30)

カマド（図版53-2・3、第133図）

北壁中央に付設されるI b類で、遺存状態は非常に良好で、カマドの基礎的資料の一つとなり得よう。袖部は小礫混じりの茶灰色土で構築され、焚口幅36cm、奥行き90cm、壁体内幅30cmを測る。袖部先端から奥壁側20cmの箇所には長さ35~40cm程の川原石をハ字形に立てており、その間に火口部の天井石が落ちていた。支脚は土製品で、奥壁から25cmの箇所に立てている。

煙道は掘抜き式で、長さ110cm、幅17cm、深さ30cmを測る。煙道部天井には33~40cmの川原石を並べて蓋としており、現状で3個残っているが、本来5個並べていたものと思われる。カマド内に落ち込んでいる石がそれに該当しよう。底面は直線的に下がるのではなく、若干起伏があり、傾斜角は20°程を測る。また、煙道先端部には土師器壊があり、加熱こそ受けていないが、煙出し部の上部構造に関連するものであろう。カマドの主軸方位は32°東に振っている。

出土遺物（図版81・82、第134・135・190図）

須恵器(96~98・106) 96は体部外面の屈折縫が不明瞭な坏蓋の破片資料で、復原口径は12cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナデ仕上げである。

97・98は坏身の資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面は98がナデ、他は体部内外をロクロヨコナデ仕上げである。97の内底部にはタタキ目の痕跡が残されている。色調はいずれも綠灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。口径は97が10.5cm、98が11.8cm、器高は97が5cm、98が5.2cmを測る。106は復原口径23cmを測る壺の口縁部付近の破片資料で、外面には櫛描き波状文が施されている。色調は内面綠灰色、外面淡黒灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

土師器(99~108) 99~101は蓋受け部が小さい坏身の資料で、調整は体部外面ヘラ削りのもの(100)とナデのもの(99・101)、内面はナデのもの(99・100)とヘラ磨きのもの(101)、口縁部内外はヨコナデで、101はさらにヘラ磨きで仕上げている。復原口径は99が11.3cm、100が11.8cm、101が12.6cmを測る。102は直口の広口壺で、口径10.5cm、器高6.6cmを測る。調整は体部外面ヘラ磨き、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。坏部外面には黒漆の塗布が見られる作りの良い土器である。

103~105は小型壺の資料である。調整手法は胴部外面刷毛のもの(103・105)とナデのもの(104)があり、内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデである。復原口径は103が13.8cm、104が12.9cm、105が14.8cm、器高は104が12.8cm、現存部で103が7cm、105が6.2cmを測る。107・108とも壺の胴部下半の資料で、107は牛角把手がつく壺である。調整は胴部外面粗い刷毛、内面はヘラ削りで仕上げている。色調は107が暗黄茶褐色、108が内面淡茶褐色、外面暗黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。

鉄器(第190図20) 20は埋土中出土の鉄器で、長さ9.3cm。頭部は緩くカーブし、先端を環状に曲げている。円環径2.3cm。轡の引手金具になるか。

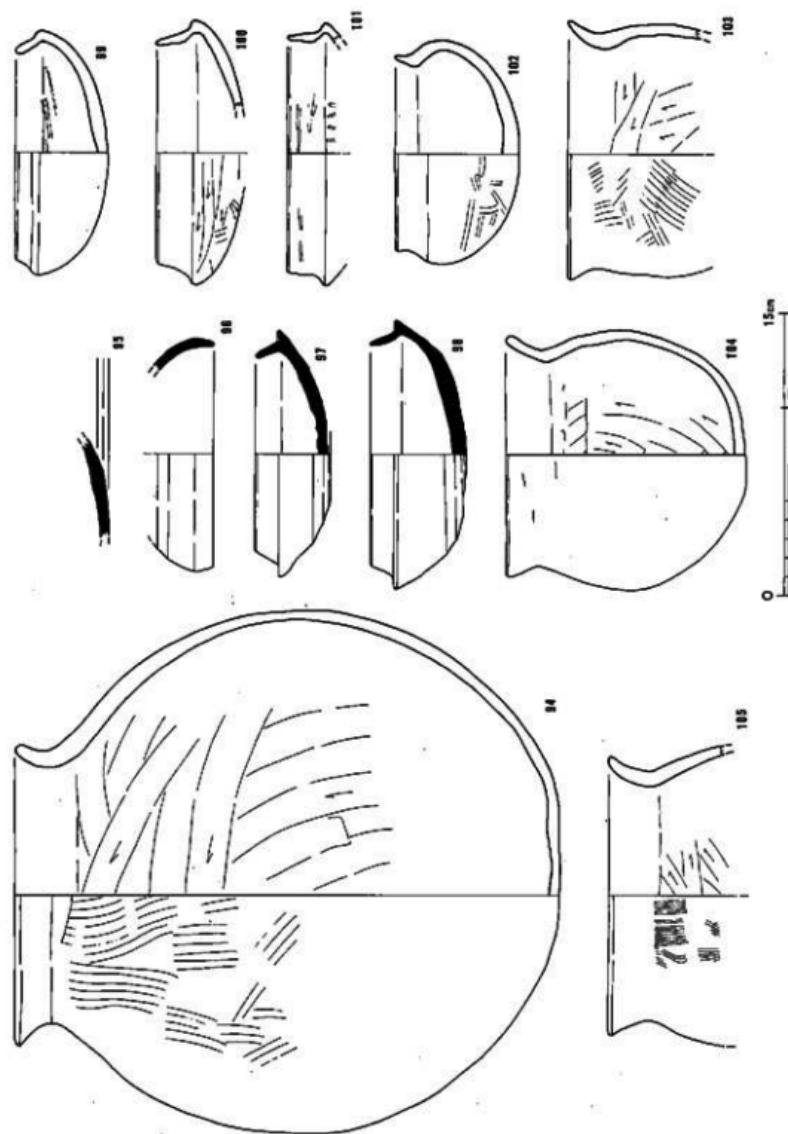
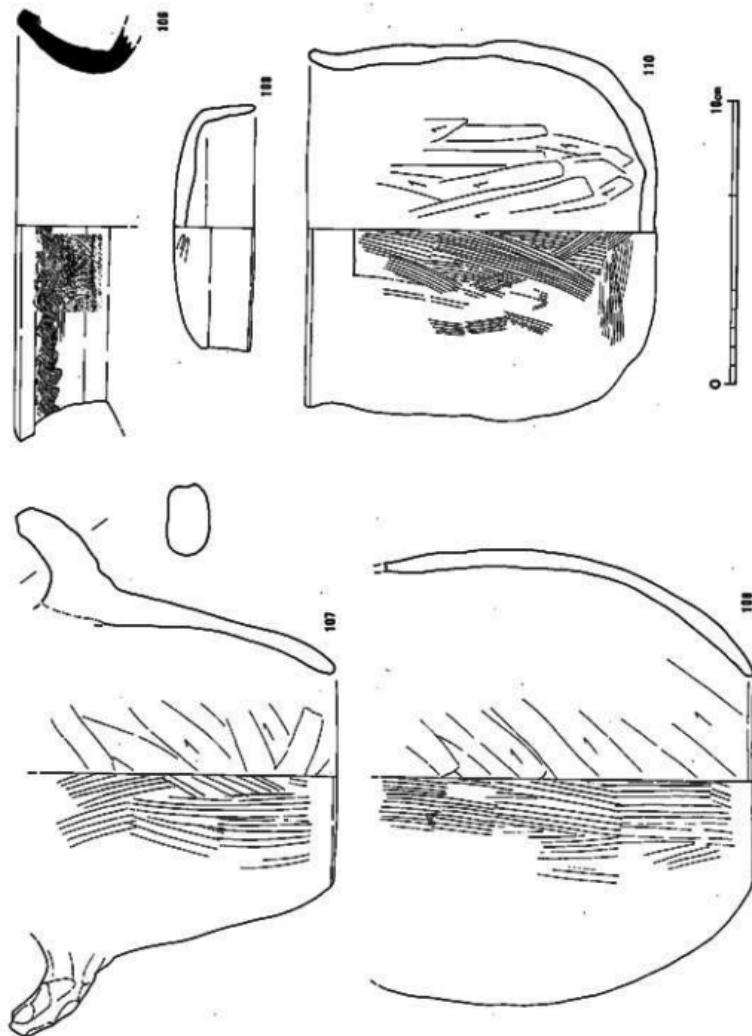


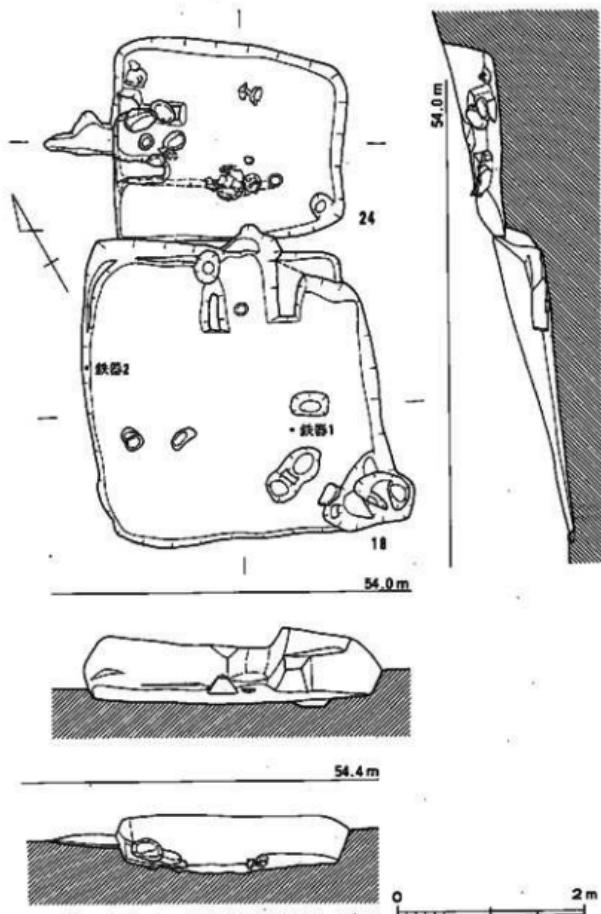
図 134 住居跡出土土器実測図① (1/3)



第135図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

18号住居跡（図版54-1、第136図）

17号住居跡の1m西側に位置し、24号住居跡を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、西壁長3.1m、南壁長2.9mで、北東コーナー部は掘り残している。床面にはピットが4個あるものの積極的に柱穴とすべき穴は見当らない。2本柱の住居と仮定して、第136図の断面を切った穴を柱穴とみなしても対になるべき穴はない。埋土中から鉄器が出土している。



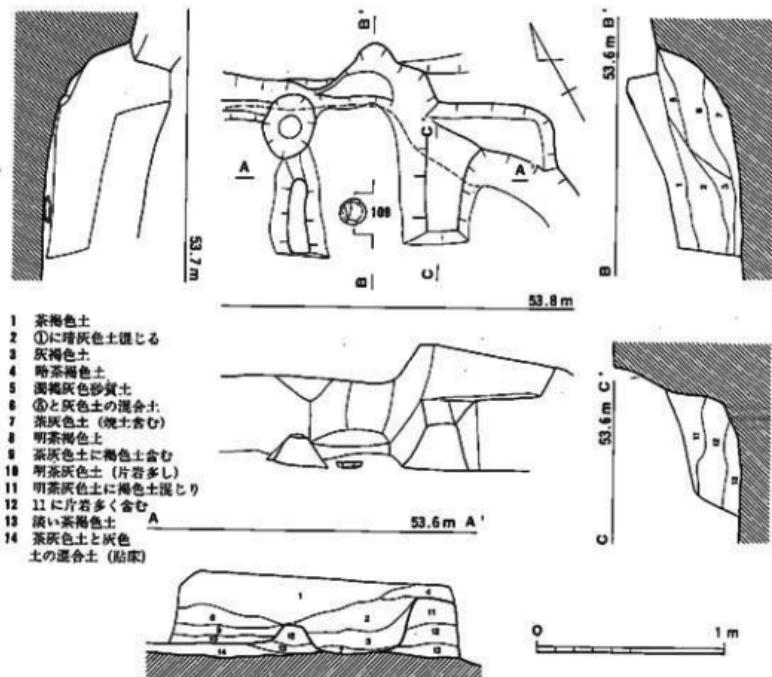
第136図 18・24号住居跡実測図 (1/60)

カマド（第137図）

I a類で、北壁中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留める程度。袖部は明茶灰色土で構築しており、焚口幅40cm、奥行き80cm、壁体内幅46cmの規模である。右袖は長さ63cm、基部幅45cm、残高37cmで、左袖は長さ75cm、基部幅30cm、残高16cmを測る。支脚は存在しないが、支脚石埋設のピットがみられないことから、土製支脚若しくは土器転用支脚が用いられたものと考えられる。煙道は遺存しないが、奥壁に幅40cm、奥行き13cmのテラスがあり、煙道部の立上がりとみられる。カマド内から土器器坏が1点出土した。

出土遺物（図版82・87-3、第135・190図）

土器器（109・110） 109は壊蓋の資料で、調整は天井部外面へラ削りのあとヘラ磨き、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は白黄茶色を呈し、焼成も良好である。



第137図 18号住居跡カマド実測図 (1/30)

110は口縁部の外反が弱いすん胴の甕で、口径は19cm、胴部最大径20.2cm、器高は18.6cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胴部外面には煤の付着が見られる。色調は焦茶色を呈し、焼成も良好である。

鉄 器 (第190図17) 残長2.6cm、幅0.9cm、厚さ0.15cmの短冊形を呈する。両側縁とも刃部ではなく、用途は不明。

19号住居跡 (図版54-2、第138図)

18号住居跡の1m東側に位置し、2号柵列に切られる。平面形は竪位長方形を呈し、南壁長3.4m、東壁長3.26mで、壁高は北壁側で0.5m遺存する。

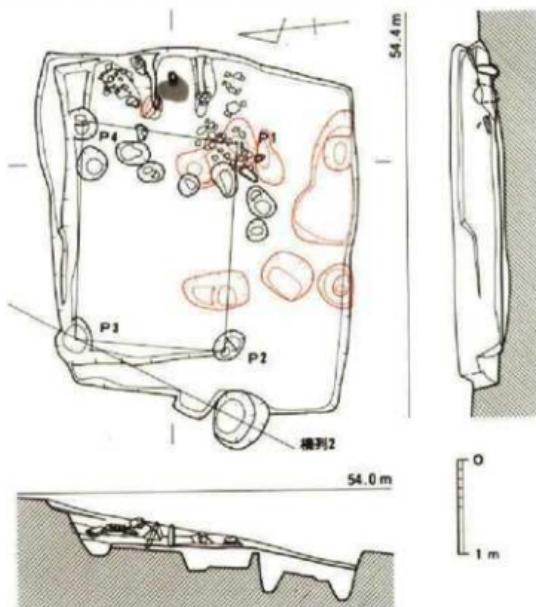
主柱穴はP1~4の4本であるが、P3は柵列と重複しているとみなしても、P3・4は北壁際に位置している。柱穴の深さは20cm前後であり、P1~4間のはば中央にカマドが位置することを考えるとあながち無理な線引きではなかろう。

柱間はP1~2間2.15m、P1~4間1.68mを測る。

カマドの周辺には土器片が散乱していた。

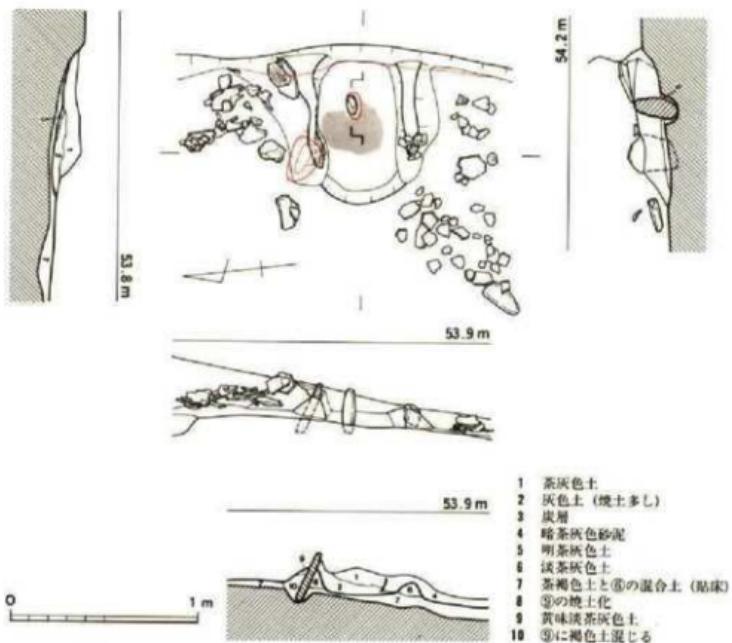
カマド (図版54-3、第139図)

1b類で、東壁の北寄りに付設している。壁体は住居床面を一段掘り立てており、焚口幅45cm、奥行き65cm、壁体内幅45cmを測る。袖部には茶灰土を盛っており、左袖部の先端には扁平な片岩を立てて袖石としている。右側の袖石には掘形がなく、壁体の中に袖石を埋め込んだ状態である。ま



第138図 19号住居跡実測図 (1/60)

た、左右袖石のレベルが異なり、右袖石は10cm下がっている。奥壁から12cmの位置に川原石の支脚を埋設しており、その前面が火床である。火床は30cmの範囲で良く焼けていた。カマドの



第139図 19号住居跡カマド実測図 (1/30)

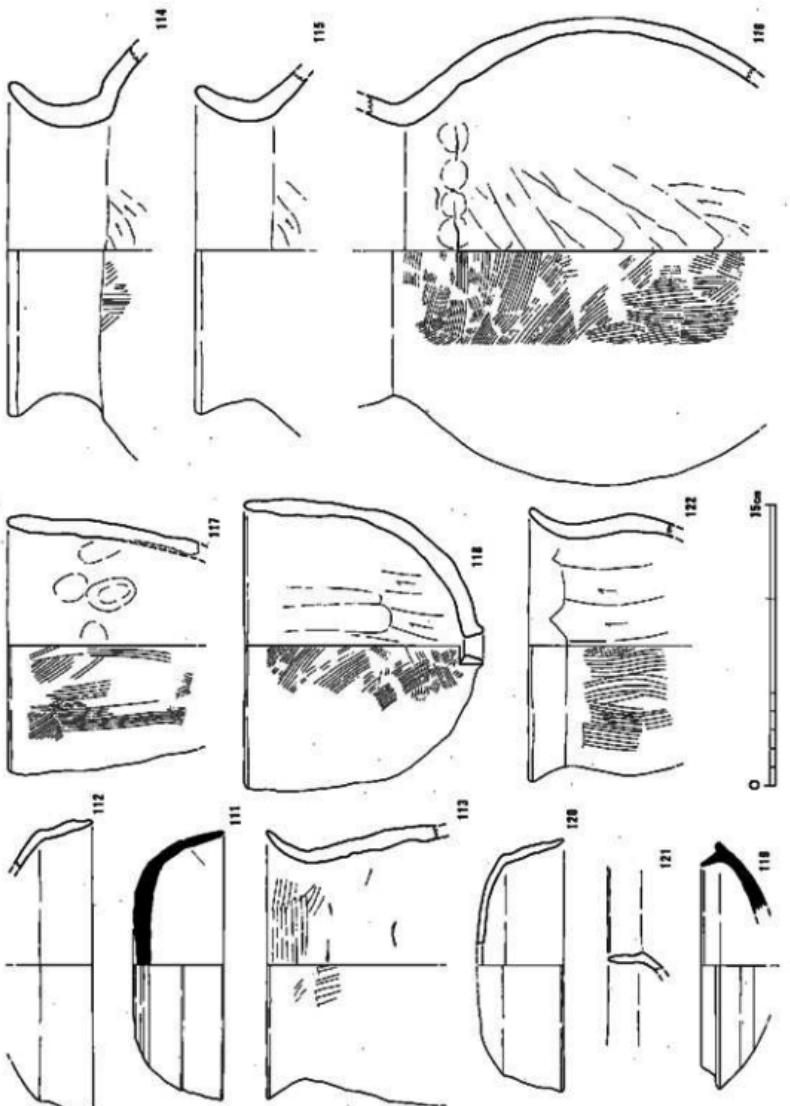
両脇からは土師器片が出土しているが、床面より4~10cm程浮いていた。

出土遺物 (図版82, 第140図)

須恵器(111) 坏蓋の資料で、調整は天井部外回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は11.2cm、器高4.8cmを測る。

土師器(112~118) 112は坏蓋の破片資料で、調整は口縁部内外ヨコナデ仕上げである。復原口径は15.4cmを測る。色調は茶褐色を呈し、焼成も良好である。

113~116は甕の破片資料で、大(114~116)・小(113)がある。調整は胴部外面刷毛のもの(113・114・116)とナデのもの(115)があり、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。116の内面には指頭圧痕が残されている。復原口径は113が12.2cm、114が17.8cm、115が17.4cm、116は胴部最大径24.9cmを測る。117・118は小型の瓶である。調整は体部外面刷毛、内面は117がナデ、118がヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は117が12.8cm、118が15.4cmで、器高は117が現存部で10.2cm、118が12.8cmを測る。



第146図 住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

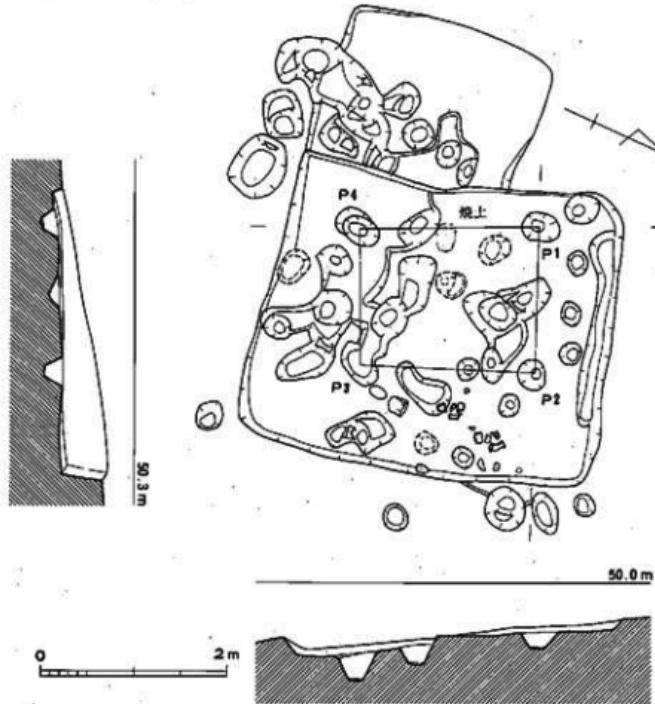
20号住居跡 (図版55-1, 第141図)

14号住居跡の2m南側に位置する。平面形は隅丸の横位長方形を呈し、西壁長3.5m、北壁長3.15mで、壁高は東壁側で0.45m遺存する。床面にはピットが数多くあるが、P1~4を柱穴とみなした。P1~4は西壁に寄っているが、柱間はP1~2間1.55m、P1~4間1.90mを測り、柱穴を結んだ線は長方形を呈する。東壁側から土器が出土した。

カマド P1~4間に $20 \times 32\text{cm}$ の火床面を残すのみで、整体は全く遺存していない。住居壁面を掘り込んでいないのでIa類である。

出土遺物 (図版82・87-3, 第140・145・190図)

須恵器(119) 口縁部の立上りが低い坏身の破片資料で、復原口径は 12.8cm を測る。調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナテ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成も良好・堅穀である。



第141図 20号住居跡実測図 (1/60)

土器(120~123) 120は壺蓋の破片資料で、復原口径は13.4cm、器高は4.6cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は橙色を呈し、焼成も良好である。121は壺身の小破片で、体部内外ともヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈す。

122・123は小型の壺で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。123の口縁部内面には刷毛調整の痕跡が残されている。口径は122が14.6cm、123が16cm、器高は現存部で122が7.7cm、123が14.5cmを測る。

鉄器(第190図11) 11はP北側の住居壁際で出土した鉄鎌の切先部破片で、残存長8.2cm、幅2.7cmを測る。錯影れが著しいため刃部厚は不明。

21号住居跡(第142図)

20号住居跡の1m南に位置する。当住居から22・23号住居跡付近にかけてはピットが無数にあり、住居の検出もおぼつかない状況であった。

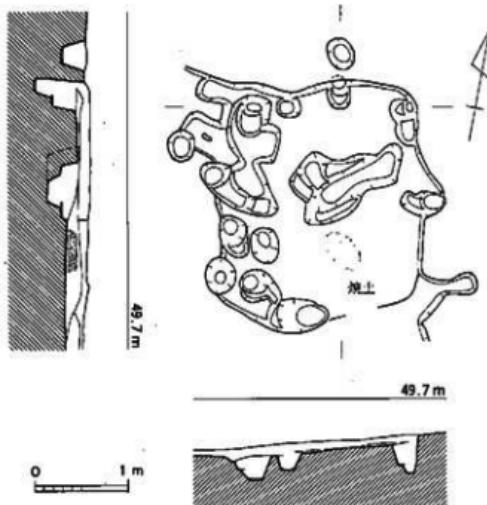
隅丸方形を呈し、長軸2.5m、短軸2.15mを測り、壁高は東壁側で12cm程と残りが悪い。床面にはピットは有るもの柱穴を確定し得ない。また、竪穴内にある焼土は床面から浮いており、場所的にもカマドとは成り得ない。住居とするより竪穴とした方が妥当であろう。ピット内から蛇文岩製の石斧が出土した。

出土遺物(第145図)

須恵器(124) 壺身の体部破片で、内外ともロクロヨコナデ調整で仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

22号住居跡(図版55-2、第143図)

20号住居跡の南東側で、23号住居跡と重複するも造存状態が悪く、前後関係はつかめていない。また、南半部は工事用道路の下になっていたのを反転したもので、レベル的に若干誤差が



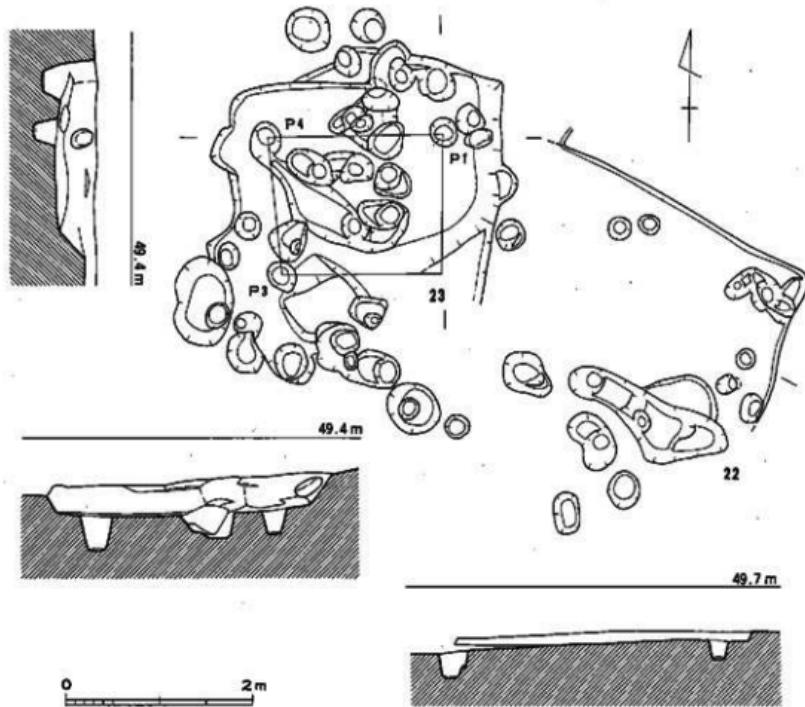
第142図 21号住居跡実測図(1/60)

生じてしまった。北東壁長3.05m、南東壁長1.65m、壁高0.12mの遺存状況である。長方形を呈するかと思われるが、詳細は不明。床面には積極的に柱穴とし得るピットはない。また、カマドは存在せず、住居とすべきでないものか。

出土遺物（図版87-3、第145・190図）

須恵器(125) 环身の口縁部付近の小破片で、内外ともロクロヨコナデで仕上げている。色調は内面緑灰色、外面灰色を呈し、焼成も良好である。

鉄 器(第190図19) 19は鉄線状の鉄器で、中程は何かにはまっていたかの如くΩ形をなす。断面は0.5cmの方形。用途は不明。



第143図 22・23号住居跡実測図 (1/60)

23号住居跡（図版55-3、第143図）

22号住居跡の北西側に重複して位置する。長軸3.05m、短軸2.9mを測る隅丸方形を呈し、壁高は北壁側で0.32m遺存する。柱穴は4本であろうが、P2は検出し得ていない。径30cm前後で、深さは25~35cmと割合しっかりしている。柱間はP1~4間1.86m、P3~4間1.48mの間隔を有する。床面には焼土さえみられず、カマドについては不明。

出土遺物（第145図）

土師器(126) 壁蓋の小破片で、口縁部内外はヨコナデ調整で仕上げている。

24号住居跡（図版56-1、第136図）

18号住居跡の北東隣で、同住居のカマド煙道に切られている。隅丸長方形を呈し、北東壁長2.4m、北西壁長2.1mで、壁高は0.5m遺存する。当住居は小型であり、竪穴部に柱穴は存在しない。また、竪穴部外の周辺にもそれらしきピットは見当たらない。床面からは須恵器坏身、土師器高坏・甕・瓶が出土している。

カマド（図版56-2、第144図）

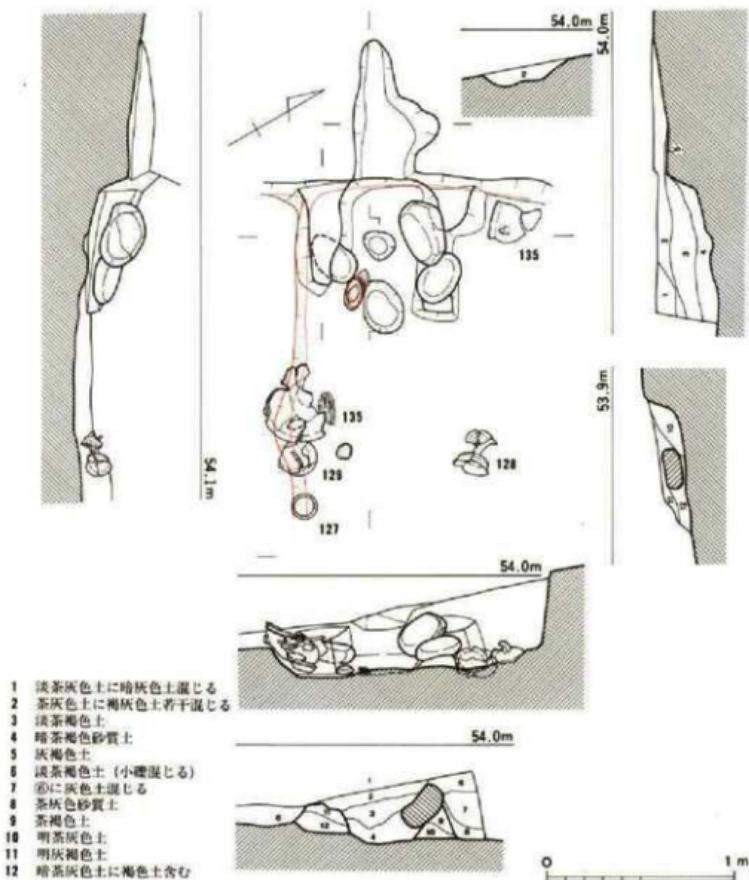
袖石を有するI b類で、北西壁中央に付設する。焚口幅43cm、奥行き68cm、壁体内幅37cmを測る。袖部は茶灰色土で構築しており、先端には横円形の川原石を立てているが、右袖のそれは倒れている。また、壁体内には長さ36cmの川原石が落ち込んでいるが、天井石であろう。奥壁から23cmの位置に支脚の埋設穴がある。火床面はそれ程焼けていなかった。煙道は長さ73cmで、立上がり部の幅32cm、先端部での幅15cmで、先端は細くなっている。底面は緩やかに登っており、傾斜角度は9°を測る。右袖の脇から甕が横倒れた状態で出土した。

出土遺物（図版82・83、第145・150図）

須恵器(127) 壁身の資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。蓋受け部には重ね焼きの痕跡を残している。外底部にはヘラ記号が施されている。色調は内面灰紫色、外面黒灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

土師器(128・129・135) 128はラッパ状に開く脚部に、体部外面の屈折線が不明瞭な坏部がつく高坏である。調整は坏部外底部ヘラ削りのあとナデ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ、脚部外面タテヘラ削り、内面ヘラ削り、裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡橙色を呈し、焼成も良好である。復原坏部径は18cm、裾部径14.4cm、器高16.6cmを測る。

129は小型甕の資料で、調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ。胴部外面には煤の付着が見られる。口径は14cm、胴部最大径17.9cm、器高18.6cmを測る。色調は内面暗褐色、外面橙黄褐色を呈し、焼成も良好である。135は牛角把手がつく甕で、胴部外面刷毛、底部付近はナデ、内面はヘラ削り、下半はさらにナデ、口縁部内外はヨコナデ。色調は淡橙褐色を呈し、焼成も良好である。口径は30.4cm、器高は24.3cmを測る。

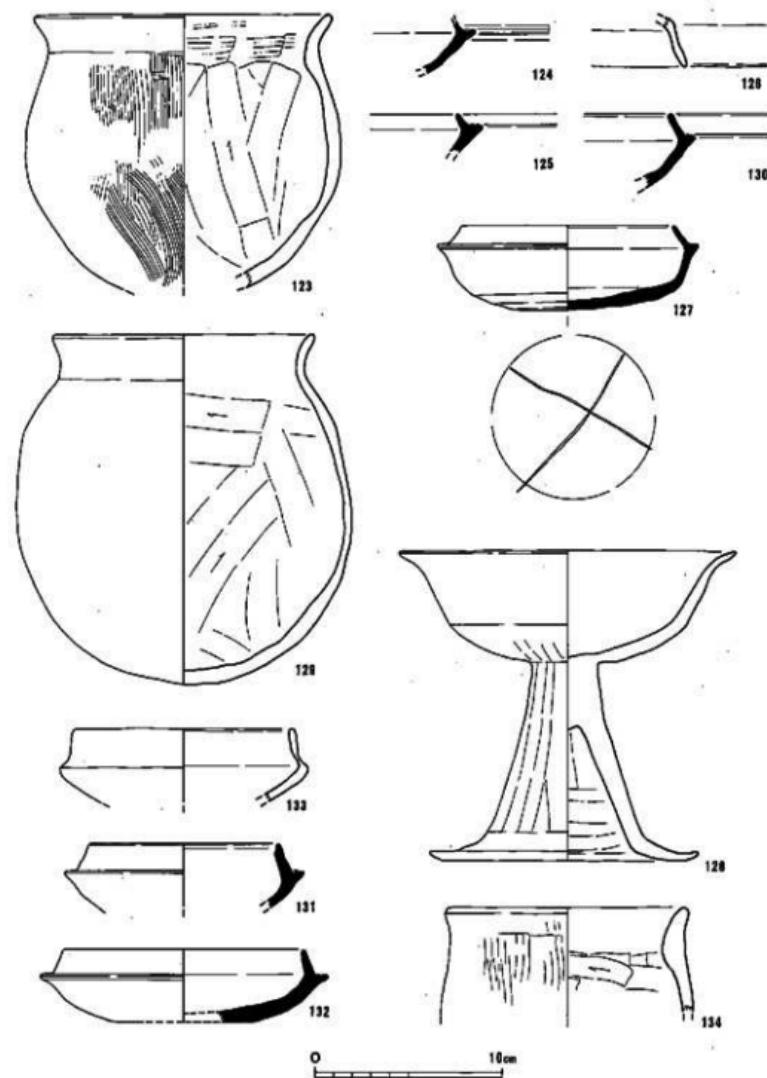


第144図 24号住居跡カマド実測図 (1/30)

25号住居跡 (図版57-2, 第146図)

17号住居跡の2m北西に位置する。削平により不整形を呈するが、床面に焼土がみられたことから住居とした。平面形はおむすび形を呈し、長軸2.75m、短軸2.6mで、壁高は0.44m遺存する。床面は平坦で、ピットが3個あるが、柱穴には成り得ない。遺物の出土はなかった。

VII区の調査



第145図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

カマド 焼土が北壁際に $20 \times 35\text{cm}$ の範囲でみられ、これがカマドである。また、奥壁から 10cm の位置にある小ピットが支脚を立てていた穴になろう。とすると、当カマドは I a 類ということになる。

25号住居跡（第146図）

17号住居跡の北隣に位置し、椿円形の土坑に切られる。東壁長 2.6m 、壁高 0.5m で、東壁を残すのみであるが、24号住居跡などの例から小型の住居跡とした。カマドは削平されて遺存しないと思われるが、柱穴は当初より掘られていないかたと推測される。埋土中から須恵器坏身片が出士している。

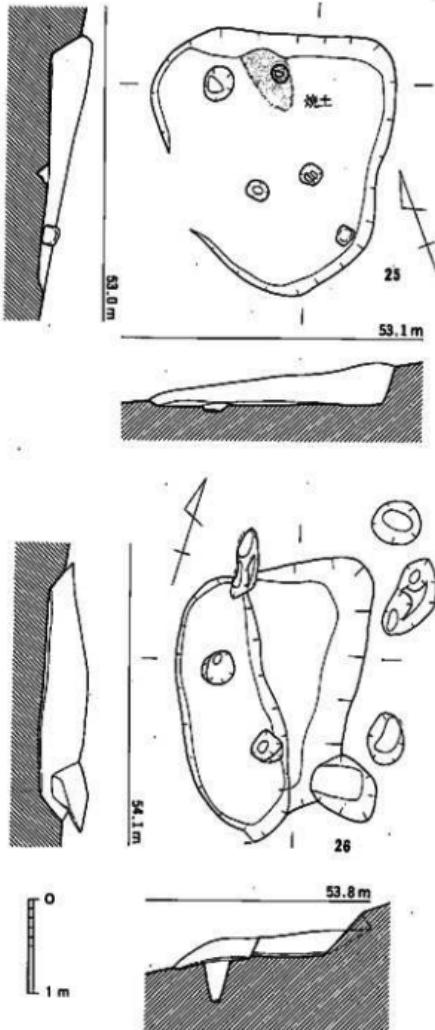
出土遺物（第145図）

須恵器(130) 坯身體部上半の小破片で、内外ともロクロヨコナデ調整で仕上げている。色調は緑灰色を呈し、焼成も良好である。

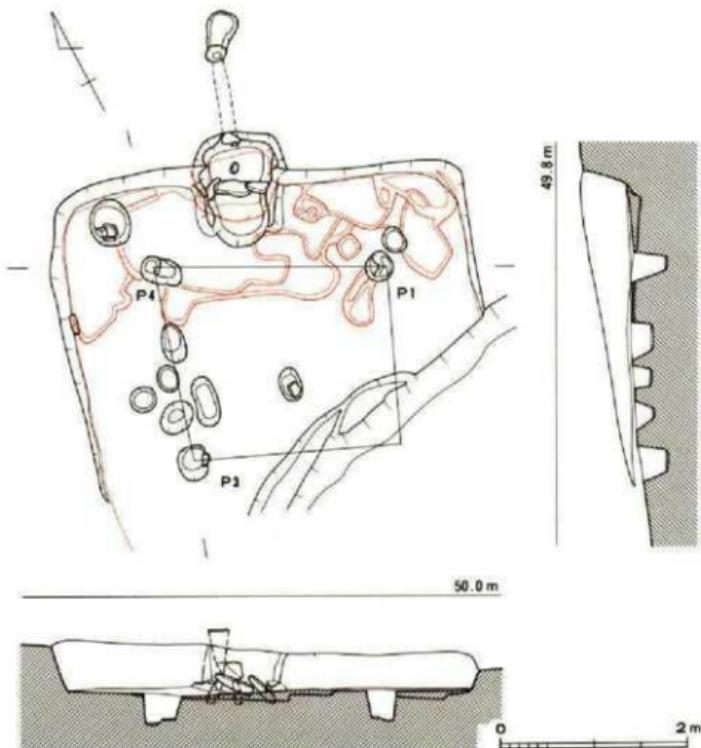
27号住居跡（図版58-1、第147図）

調査区東側下段に位置し、南壁を4号大溝に切られる。北壁長 4.4m 、壁高 0.45m で、西壁長は 3.9m の遺存であるが、柱穴の配置からみて長方形を呈しよう。

主柱穴は4本であるが、P2は溝に切られて残っていない。径 0.3m 、深さ 0.35m 前後を測る。柱間はP3-4間 2.1m 、P1-4間 2.5m の間隔を有



第146図 25・26号住居跡実測図 (1/60)

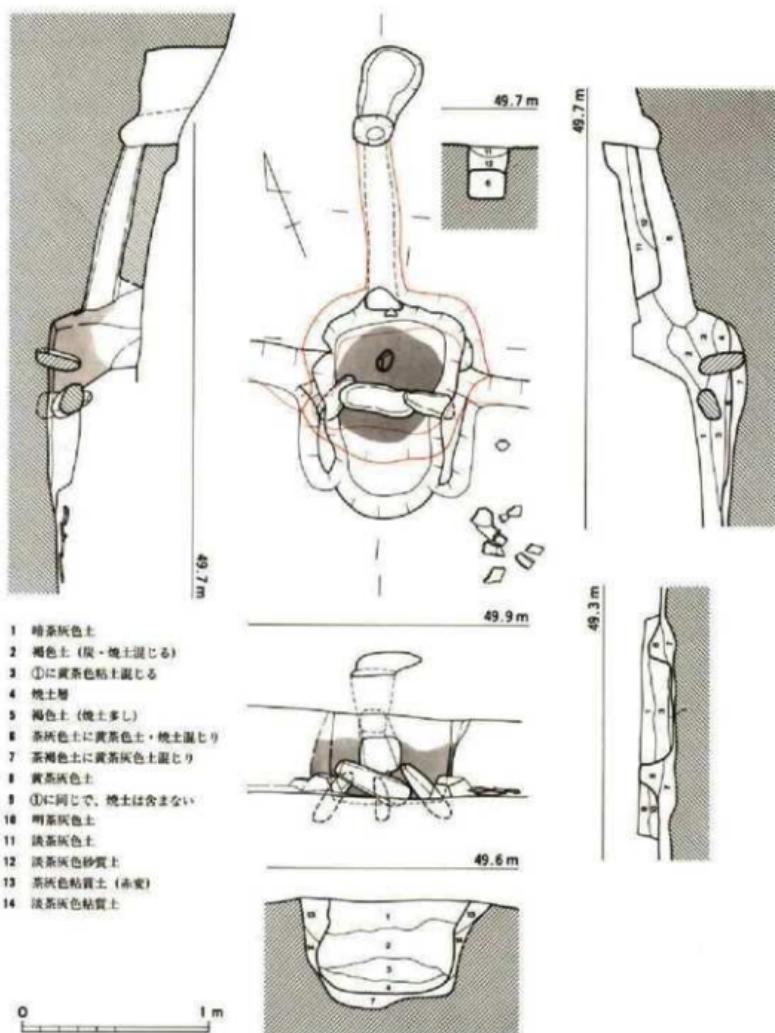


第147図 27号住居跡実測図 (1/60)

する。床面は平坦で、5~10cm程の貼床を施していた。貼床を掘り下げるところ落込み・ビットを検出した。

カマド (図版58-2, 第148図)

住居壁を掘り込んだIII b類で、北壁のやや西寄りに付設する遺存状態の良好なカマドである。壁体は住居床面を一段掘り窪めており、焚口幅52cm、奥行き80cm、壁体内幅65cmを測る。当カマドは袖石を有するが、先端に立てるのではなく、袖の付け根に立てており、焚口天井石が落ちた状態で検出された。袖部は茶灰色土で構築され、右袖は長さ55cm、基部幅25cm、残高12cmで、左袖は長さ58cm、基部幅25cm、残高10cmを測る。奥壁から15cmの位置に川原石の支脚を埋



第148図 27号住居跡カマド実測図 (1/30)

設しており、周囲が強い加熱を受け赤変していた。カマド内からは土器片が出土したのみ。

煙道は先端部がピットに切られるものの長さ104cm、中央幅20cmを測る。壁面には板目圧痕がみられることから掘込み式である。底面は12°の傾斜角で登っており、煙出し部は底面より若干下がっており、流水対策を施している。カマドの主軸方位は東に22°振っている。

出土遺物（図版83、第145・150図）

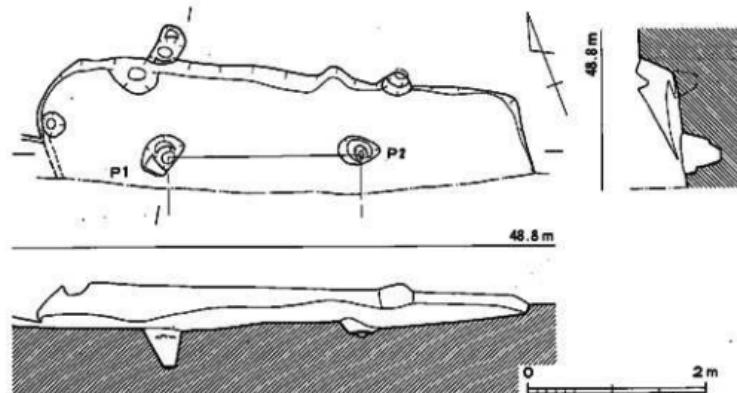
須恵器(131・132) 壊身の破片資料で、大(132)・小(133)がある。調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はロクロヨコナデである。132は内面灰褐色、外面灰黄色を呈し、焼成はあまり良くない。復原口径は131が10.2cm、132が12.9cm、器高は現存部で131が3.4cm、132が4cmを測る。

土師器(133・134) 133は壊身の破片資料で、調整は器面が風化しているため明確ではないが、体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は12cmを測る。

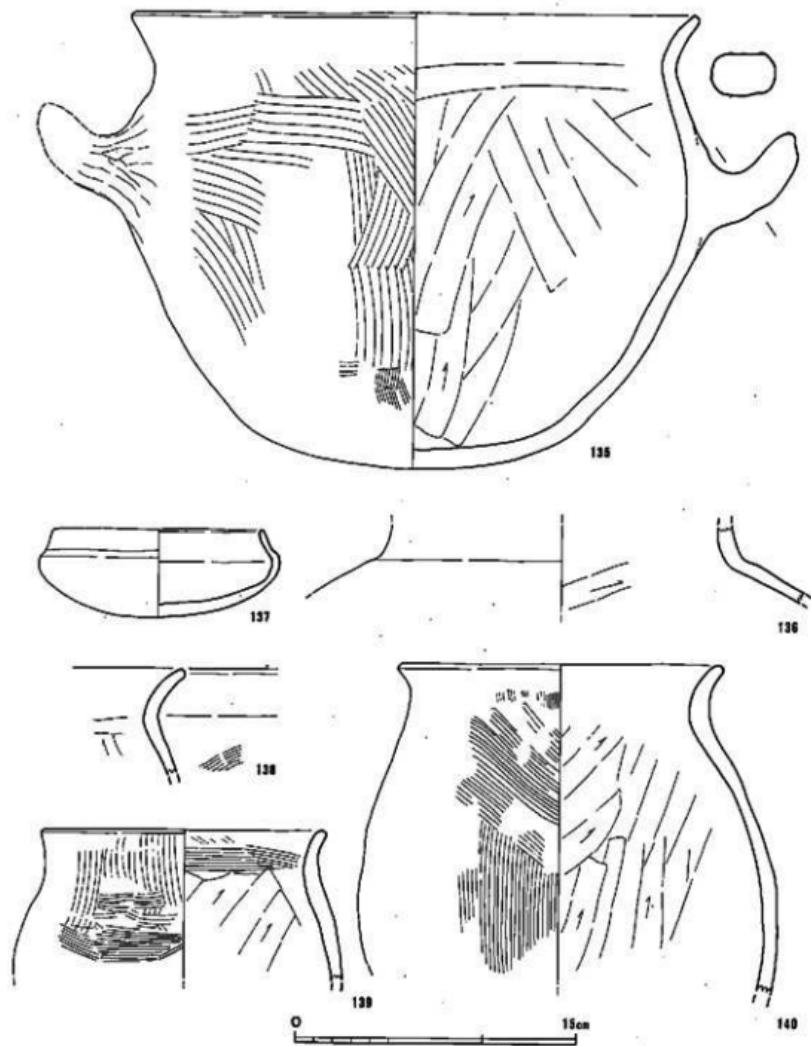
134は口縁部の外反が弱い小型の甕で、復原口径は13cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

28号住居跡（図版59-1、第149図）

27号住居跡の3m南西側に位置する。北壁を検出したのみで、大半は調査区外に伸展する。北壁長5.15mで、壁高は0.4m遺存する。P1・2が主柱穴で、径35cm前後。深さはP1が40cmで、P2は15cmと浅く、両者に差がある。柱間は2.06mを測る。カマドは東西何れかの壁に付設されていたものであろう。



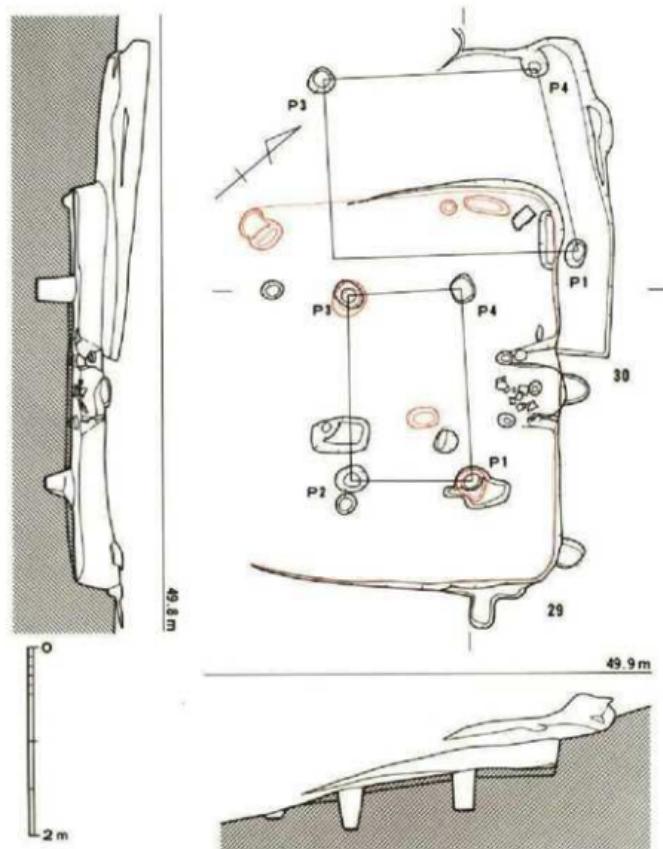
第149図 28号住居跡実測図 (1/60)



第158図 住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)

出土遺物（第150図）

土器器(136) 大型甌の肩部の破片資料で、調整は器面が風化しているため明確ではないが、胴部外面ナデ、内面ヘラ削りである。色調は焦茶色を呈し、焼成も良好である。



第151図 29・30号住居跡実測図 (1/60)

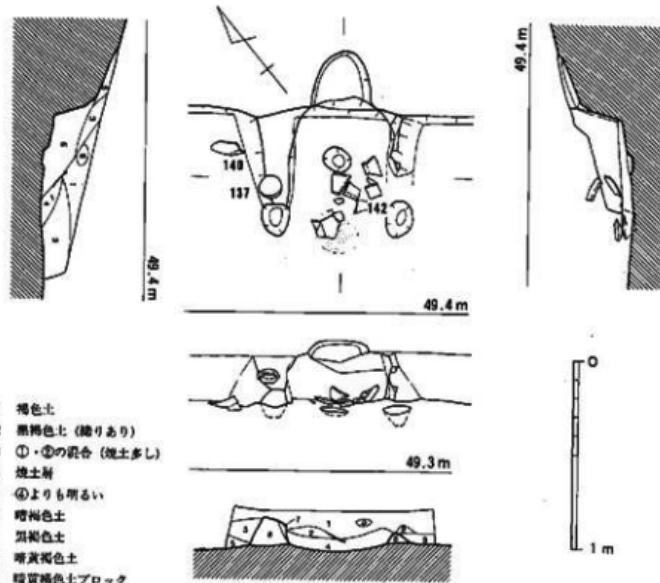
29号住居跡（図版59-2, 第151図）

7号住居跡の10m南に位置し、30号住居跡を切っている。横長の長方形を呈し、北東壁長4.3m、南東壁長は3.3m遺存する。壁高はカマド側で0.36mを測る。主柱穴はP1~4で、径0.3m、深さ0.3~0.4mとしっかりした穴である。柱間はP1~2間1.3m、P1~4間2.04mを測り、柱穴を結ぶ縁も平面形同様の横長長方形を呈する。床面は南側に下がっている。

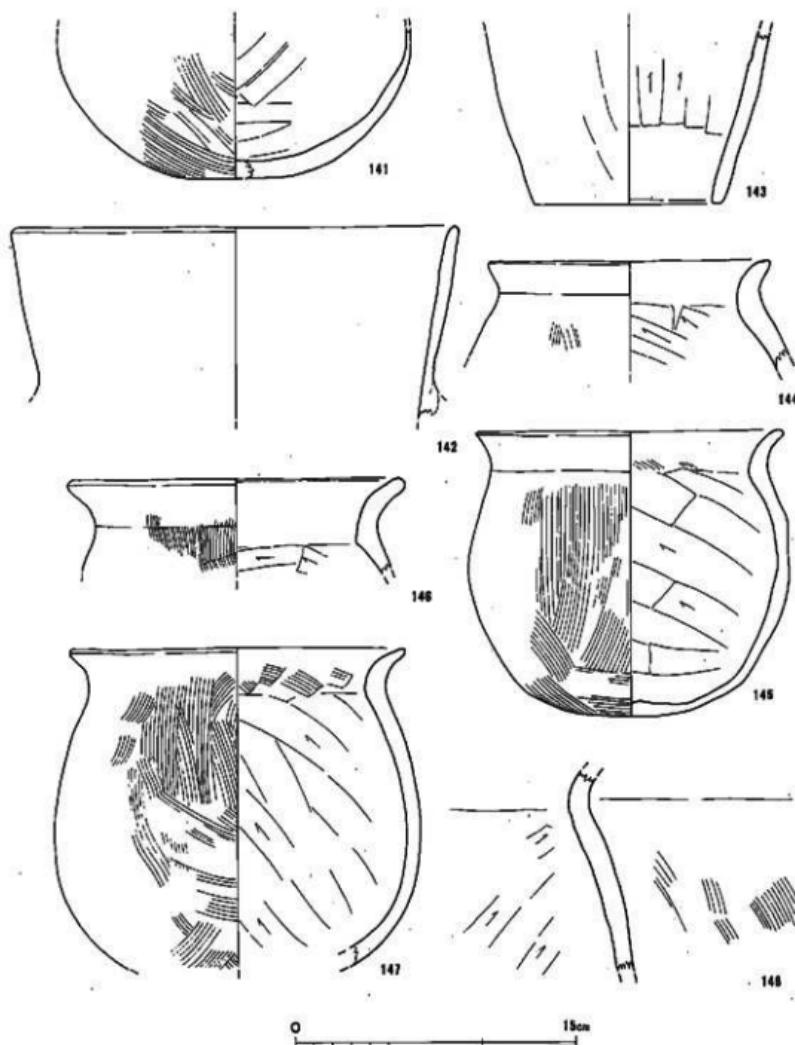
カマド（図版59-3, 第152図）

I b類で、北東壁中央に付設している。遺存状況は悪く、両袖部と煙道の底面を残す程度である。袖部は暗黄褐色土で構築しており、右袖は長さ33cm、基部幅19cmで、左袖は長さ47cm、基部幅36cmで、残高はともに25cmを測る。袖部先端には袖石を立てていた穴があり、焚口幅は50cmに復原できる。その間は良く焼けており、火床面となる。また、支脚の穴は奥壁から18cmの位置にあるが、火床はさらに20cmも離れており、袖部は火床の先まで延びていたものと推定される。

煙道は長さ25cm、立上り部幅32cmで、幅に比して長さが短いことから本来はもっと長かったものであろう。底面は20°の傾斜角で登っている。カマド内からは土器片が出土した。



第152図 29号住居跡カマド実測図 (1/30)

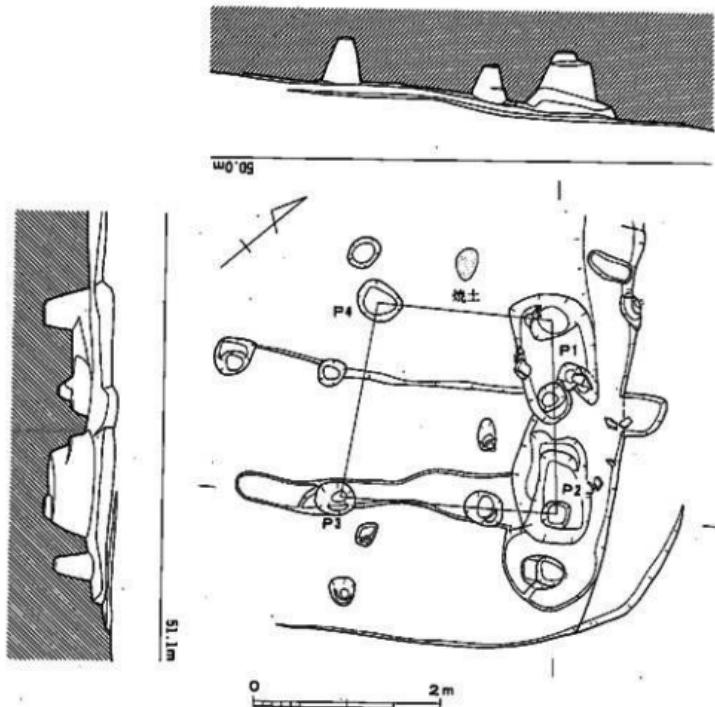


第153図 住居跡出土土器実測図② (1/3)

出土遺物 (図版83、第150・153図)

土師器 (137~143) 137は蓋受け部の小さい环身の資料である。調整は体部外面風化のため不明だが、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄灰色を呈し、焼成も良好である。口径は11.2cm、器高は4.7cmを測る。

138~141は壺の破片資料で、大・小がある。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。139の口縁部内面には刷毛の痕跡を残している。口径は139が15.2cm、140は17.4cmを測る。142・143は瓶の破片資料で、142は把手のつくタイプである。調整は胴部外面がナデのもの (142) とヘラ削りのあとナデ、内面は142がナデ、143がヘラ削りのあと底部付近をナデで仕上げている。143の胴部下半には煤の付着が見られる。色調はいずれも内面黄褐色、外表面褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は142が24cm、143が底部径10cmを測る。



第154図 31号住居跡実測図 (1/60)

30号住居跡（図版60-1, 第151図）

29号住居跡の直ぐ北側に位置し、同住居跡に南壁を切られる。北東壁長3.4mで、北西壁は1.45mの遺存である。P1~4を柱穴としたが、P2は29号に切られ遺存しない。また、P3・4は西壁際にあるが、片方の柱穴が壁際に寄る19号住居跡と同規模であることから無理な線引きではなかろう。カマドは残存部位においては検出できず、南東壁に付設していたものか。埋土中から土師器小片が出土しているが、図示に耐えない。

31号住居跡（図版60-2, 第154図）

29号住居跡の2m東に位置する。溝状の造構に切られているが、北東壁長4.35m、南東壁長3.2m遺存する。壁高は15cmと著しい削平を受ける。柱穴はP1~4で、径0.3~0.4m、深さ0.5mとかなりしっかりしたものである。柱間はP1~2間2.3m、P1~4間2.1mを測り、柱穴を結んだ線は台形を呈する。北東壁側で土器が出土した。

カマド P1~4間の30cm北西に焼土面があり、そこにカマドを付設しているものの壁体は全く留めていない。支脚・袖石の穴が見当たらないことから3類であるが、詳細は不明。

出土遺物（図版83, 第153図）

土器（144・146~148） いずれも壺の資料で、大・小がある。調整は胴部外面刷毛、内面へラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁部内面には刷毛の痕跡を残している。復原口径は144が15cm、146・147が18cm。

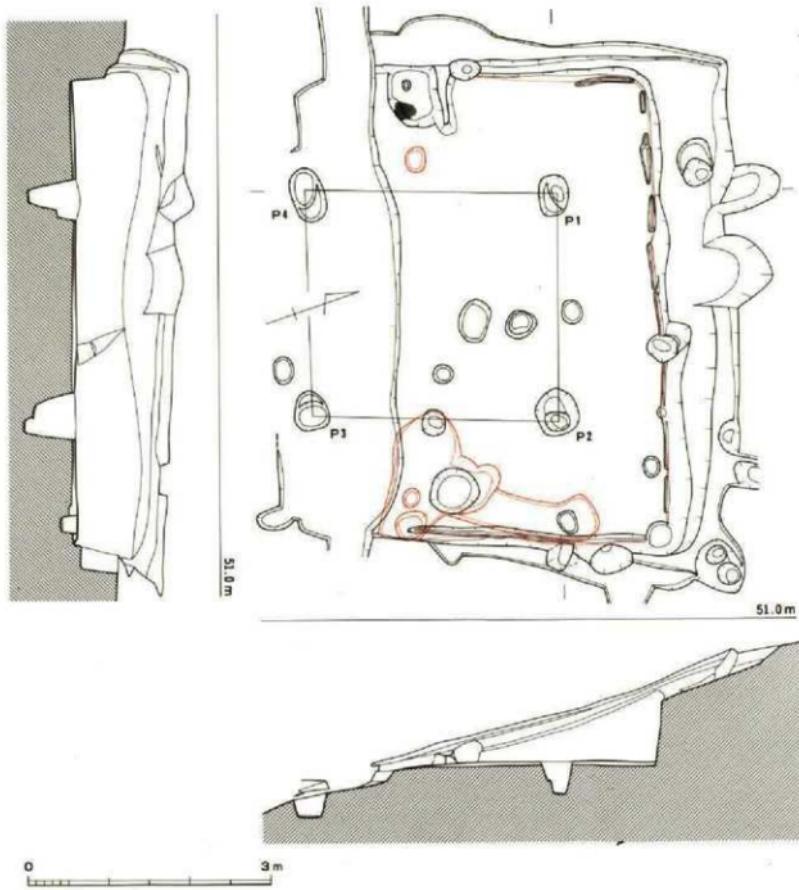
32号住居跡（図版60-3・61-1・2, 第155図）

30号住居跡の3m北西に位置し、11号小溝に南壁を切られる。北壁長は6.6mで、東壁は4.45m遺存する。壁高はカマド側で0.9mを測る。北東側には住居壁に沿って0.2~0.6mのテラスが方形に巡り、当住居跡に関連するものであろう。主柱穴はP1~4で、径0.4~0.5m、深さ0.4~0.6mと片腕程の深さ掘っている。何れのピットも柱穴の中程に三日月形のテラスを有し、柱を抜き去ったものであろう。柱間はP1~2間2.8m、P1~4間3.1mを測り、柱穴を結ぶ線は方形を呈する。床面は平坦でなく、南側に下がっている。

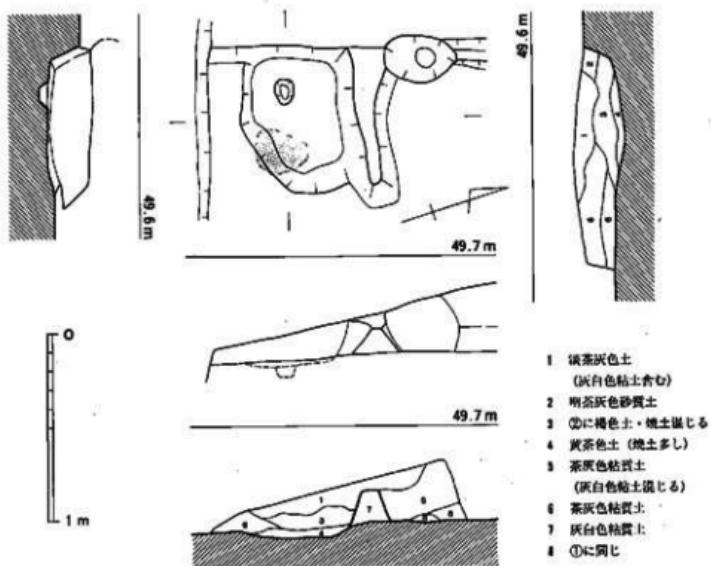
カマド（図版61-3, 第156図）

I a類で、西壁中央に付設する。当カマドは白灰色粘土混じりの茶灰色粘土で故意に埋められており、粘土を除去して右袖を検出した。住居床面を一段掘り下げて壁体を構築しており、焚口幅は50cm程であろうか。右袖は長さ85cm、基部幅35cm、残高20cmを測る。袖部には灰白色の粘質土を盛っており、本跡のカマドにおいては珍しい。奥壁から10cmの位置にある小ピットが支脚の埋設穴で、その前面は赤変していた。

出土遺物（第157図）



第155図 32号住居跡実測図 (1/60)



第156図 32号住居跡カマド実測図 (1/30)

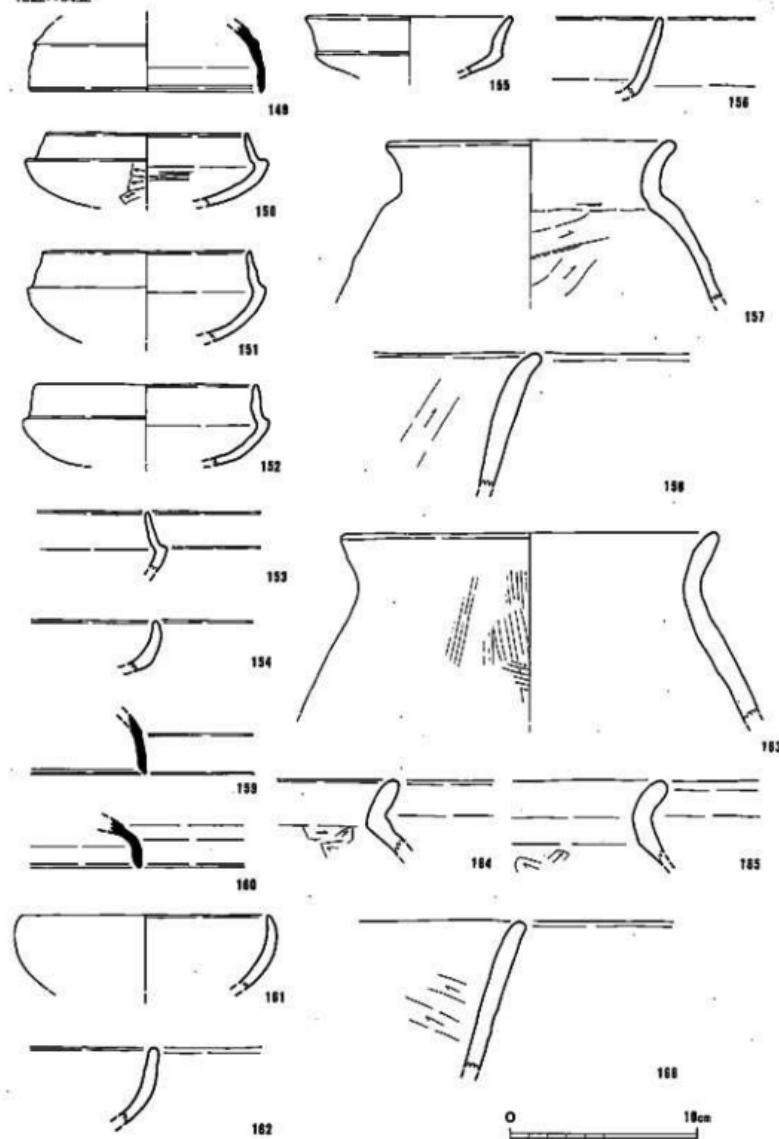
須恵器(149) 復原口径が12.6cmを測る深目の環蓋で、調整は体部内外ロクロヨコナデで仕上げている。色調は内面青灰色、外面灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

土師器(150~158) 150~154は環身の資料で、150~153は蓋受け部を有するものである。154は内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ壺である。調整は体部外面ヘラ削りのもの(150)とナデのもの(151~154)、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。150の体部内面には一部ヘラ磨きの痕跡を残している。復原口径は150が10.9cm、151が11cm、152が11.8cmを測る。

155~156は高壺の環部の破片資料で、大(156)・小(155)がある。調整は体部内外ナデ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は155が灰黄褐色、156が茶褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は155が11cmを測る。

157は甕の胴部上半の資料で、調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。158は甕の体部上半の小破片である。外面は風化が著しく調整は不明であるが、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

VII区の調査



第157図 住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)

33号住居跡（図版62-1・2、第158図）

調査区の中央部下段で、8号住居跡の3m南側に位置する。検出当初は大きな土坑と考えていたが、北西コーナー部で突出型のカマド検出し、住居と判明した次第である。北辺長6mを測る。床面にはピットが数多くあり、それを当住居の柱穴にして良いものか判断が付かない。また、貼床を掘り下げたところ精円形の落込みを検出した。つまり、落込みに土を30cm程埋めたてて床面を作っている。

カマド（図版62-3） 北西コーナー部で検出したIIIa類のカマドで、両袖部を残す程度である。焚口幅56cm、奥行き50cm、壁体内幅75cmを測る。袖部には茶褐色土を盛っており、右袖は長さ43cm、基部幅46cm、残高14cmで、左袖は長さ25cm、基部幅40cm、残高18cmを測る。床面中央にはピットがあるが、支脚の埋設穴ではない。煙道部は幅70cm、奥行き46cmの方形に突出するが、煙道自体は削平により遺存しない。カマド主軸は西に72°振っている。

出土遺物（図版83、第157・161図）

須恵器（159・160） 159は深目の坏蓋の小破片で、体部外面の屈折縁は明瞭である。調整は口縁部内外ヨコナデである。色調は内面暗灰色、外面灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。160は体部外面の屈折縁が不明瞭な坏蓋の小破片で、内外ともロクロヨコナデ仕上げである。色調は緑灰色を呈し、焼成良好である。

土師器（161～169） 161・162は坏の破片資料で、体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は161が茶褐色、162が灰黄褐色を呈し、焼成も良好である。

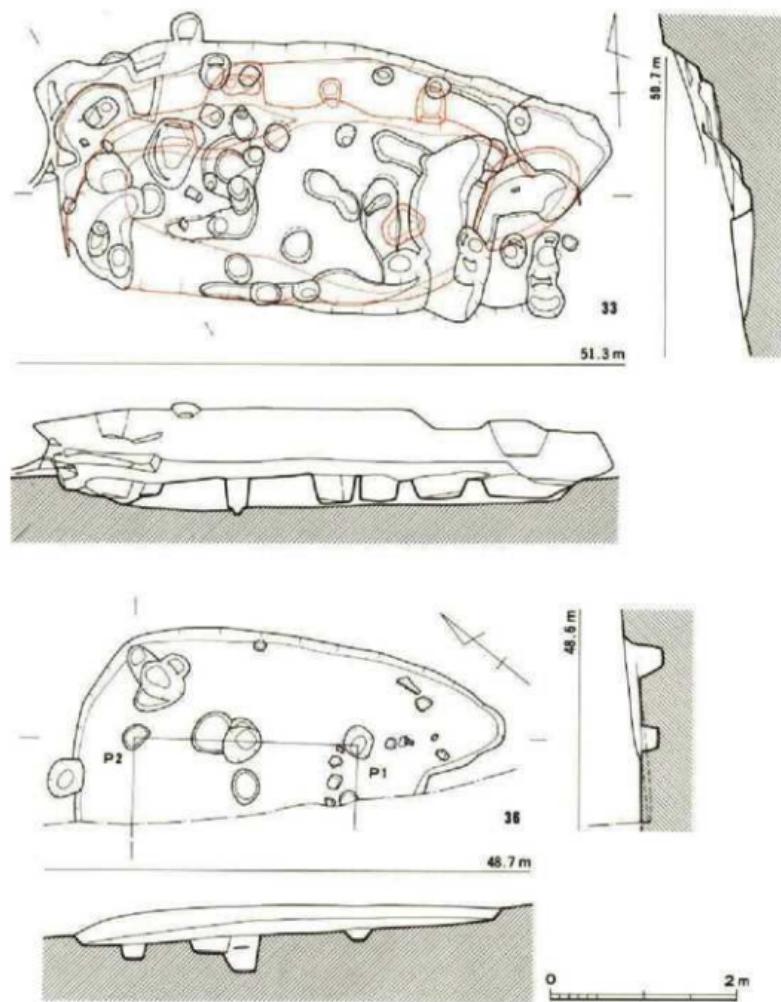
163～165は「く」字状口縁の壺の破片資料で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は163が内面灰黄褐色、外面橙褐色、他は内外とも黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。163の復原口径は20.2cmを測る。

166～169は壺の小破片で、166～168は口縁部付近、169は底部付近の資料である。調整は胴部外面ナデ、内面ヘラ削りのあとナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

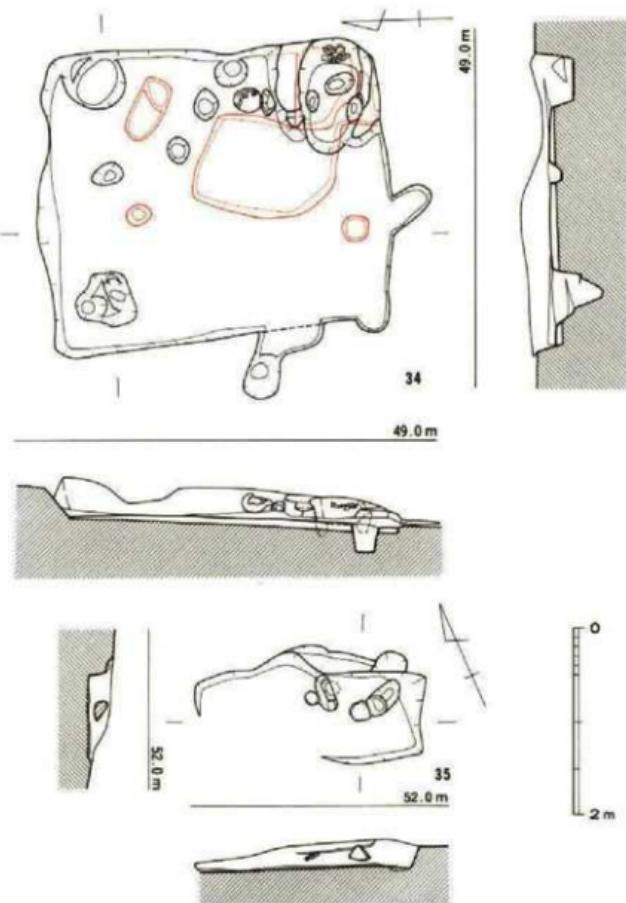
34号住居跡（図版63-1・2、第159図）

調査区の西端隅部で、23号住居跡の5m南側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、東壁長3.5m、北壁長3.2mで、壁高は北壁側で0.3mを測る。カマドが住居コーナー部に付設されるので、どの様な柱配列を呈するか判らないが、第159図の断面を切ったピットを柱穴と考えておく。ピットの深さは30～50cmで、柱間は2.3mの間隔を有する。また、左袖の脇から横倒しの状態で土師器甕が出土している。

カマド（図版63-3、第160図） 南東コーナー部に付設されたカマドで、袖石の埋設穴の存在によりIVb類とした。壁体は住居床面を一段掘り下げ、焚口幅42cm、奥行き122cm、壁体内幅は下端で48cmを測る。袖部は茶灰色土をベースに盛っており、右袖は長さ100cm、基部幅32cm、残

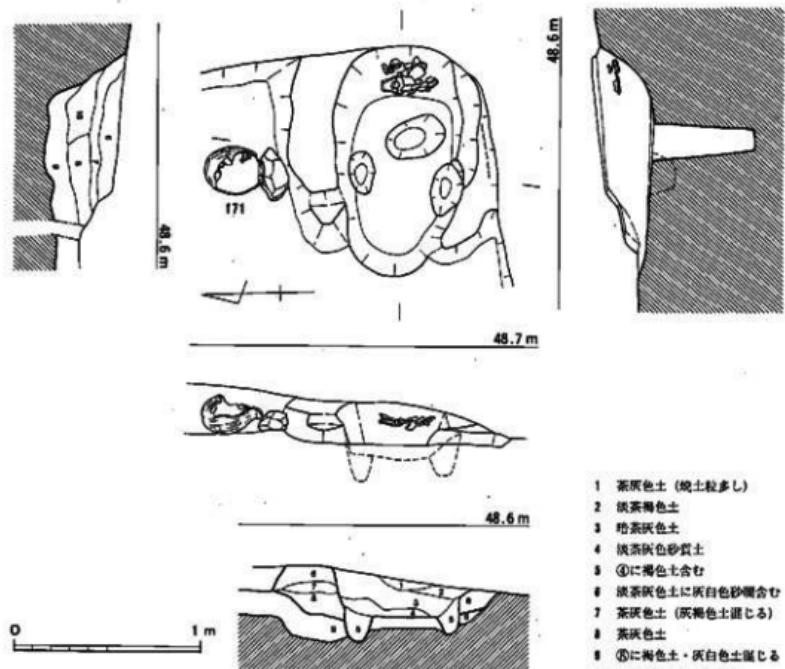


第158図 33・36号住居跡実測図 (1/60)



第159図 34・35号住居跡実測図 (1/60)

高11cm、左袖は長さ105cm、基部幅50cm、残高22cmを測る。袖石は先端部ではなく、整体の中程に立てていたことが埋設孔により知られる。カマド床面にある穴は支脚の穴ではなく、新期のもの。煙道は削平により遺存しない。また、奥壁際から浮いた状態で土器が出土している。



第160図 34号住居跡カマド実測図 (1/30)

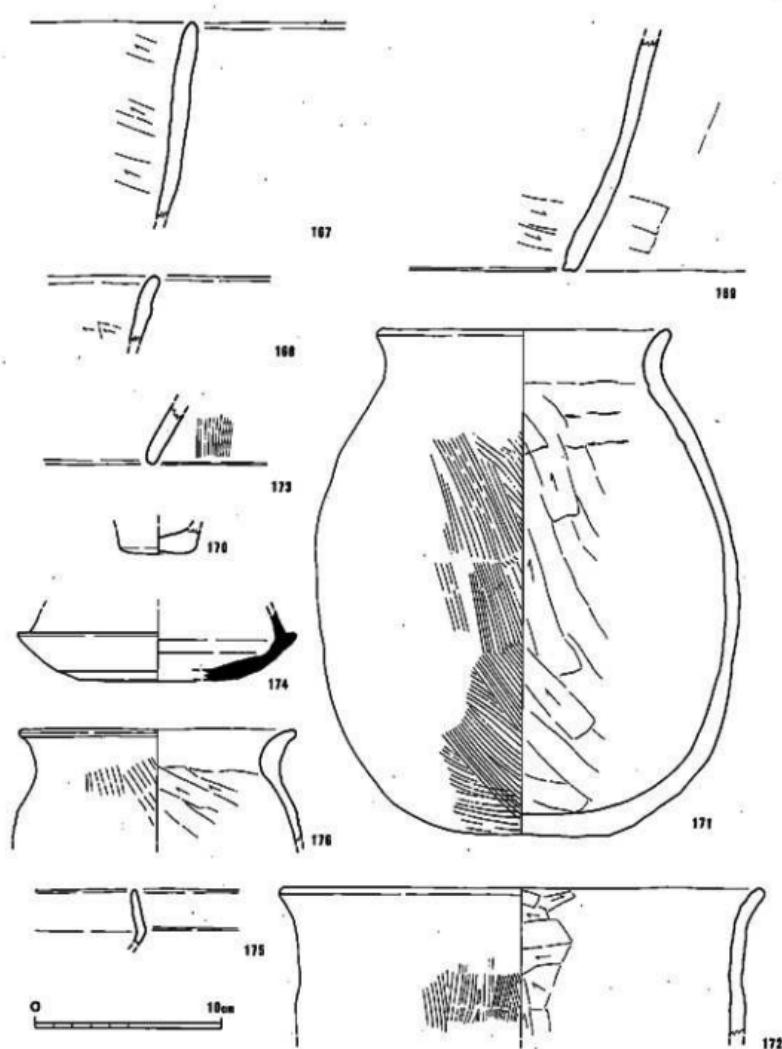
出土遺物 (図版83、第161図)

土師器 (170~173) 170は小型椀の底部の資料で、底部は平底である。内外ともナデで仕上げている。色調は内面白黄褐色、外面灰黄褐色を呈し、焼成も良好である。

171は寸胴な胴部を有す甌で、底部は平底気味の丸底である。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は内面白黄褐色、外面白黄茶色を呈し、焼成も良好である。口径は15.8cm、胴部最大径22.5cm、器高27.1cmを測る。

172・173は甌の破片資料で、172は胴部上半、173は底部付近の資料である。調整は胴部外面刷毛、内面は172かへら削り、173はナデで仕上げている。172は復原口径26cmを測る。

- 1 茶質色土 (焼土粒多し)
- 2 淡茶褐色土
- 3 咖素灰土
- 4 淡茶灰土砂質土
- 5 ④に褐色土合む
- 6 淡茶灰土に灰白色砂礫含む
- 7 茶灰色土 (灰褐色土混じる)
- 8 英灰土
- 9 ⑤に褐色土・灰白色土混じる
- 10 ⑩に淡黄茶色土混じる



第161図 住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)

35号住居跡（第159図）

調査区の中央南側で、17号住居跡の8m南西に位置する。北壁長は2.45mで、小型の住居と考えた。壁高は北壁側で、26cm遺存する。柱穴は存在せず、詳細は不明。

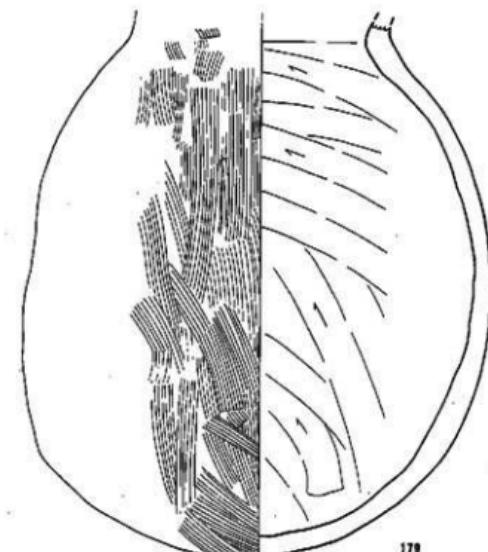
出土遺物（図版87-3、第161・190図）

須恵器（174） 环身の体部資料で、器受け部径15cmを測る。調整は外底部回転ヘラ削り、他は内外ともロクロヨコナデである。色調は内面緑灰色、外面灰色を呈し、焼成も良好である。

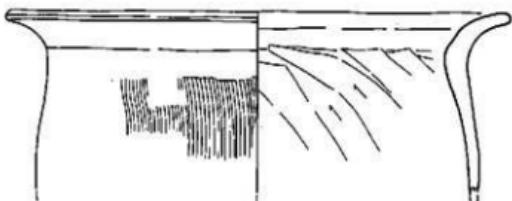
鉄器（第190図15） 15は鉄釘で、残長4cm、頭部幅0.8cm。断面形は方形。

36号住居跡（図版64-1、第158図）

調査区の西端隅部で、34号住居跡の2m南東に位置する。西半部は農道の下に入るため未掘。北東壁は長さ4.5mで、南側が突出するが、これは別遺構と重複しているため本来3.7m程の規模を呈するものである。P1・2が柱穴で、径30cm、深さ15cm前後で、柱間は2.4mを測る。P1の南側で土器等が出土した。



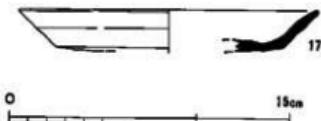
159



161



177



178

第162図 住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)

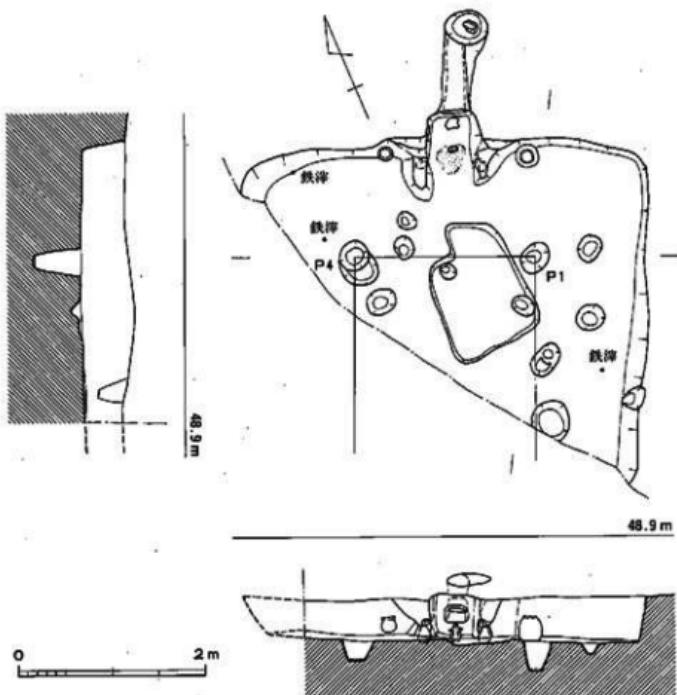
出土遺物（第161図）

土師器(175・176) 175は蓋受け部の小さい坏身の口縁部付近の小破片で、内外ともヨコナデ調整で仕上げている。色調は橙灰色を呈し、焼成も良好である。

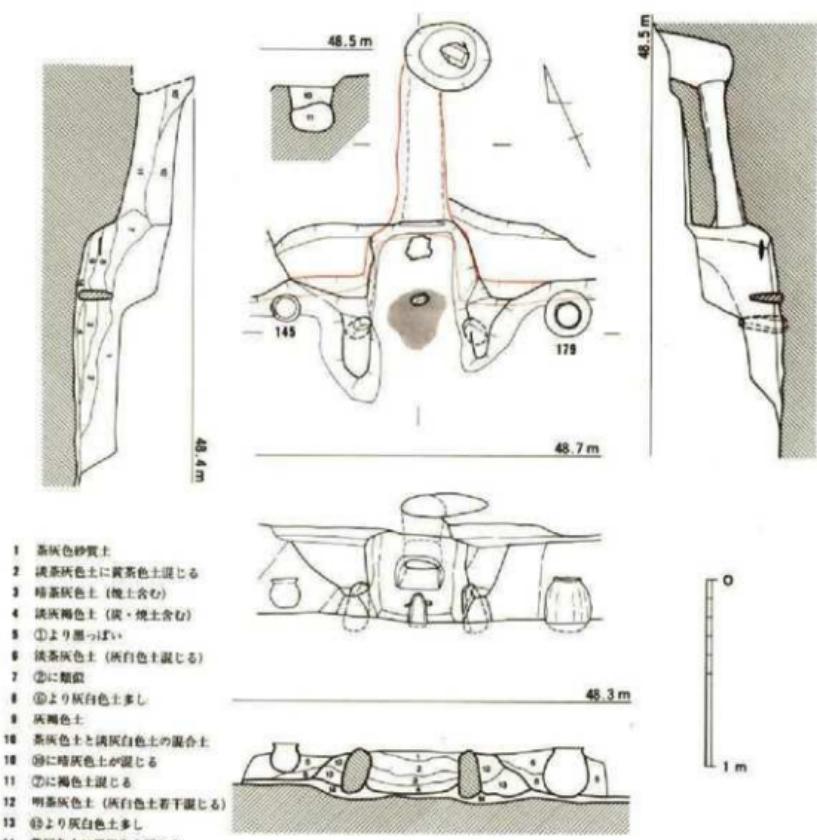
176は復原口径14.8cmを測る小型の甌で、調整は胴部外面粗い刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。

37号住居跡（図版64-2、第163図）

調査区の西端隅部で検出した住居跡で、34号住居跡の3m北西に位置する。農道の存在により南西半部は未掘となった。北壁長4.3m、東壁長3.5mで、壁高はカマド側で0.45mの遺存状況である。主柱穴は4本であろうが、P2・3は農道の下に存在するものとみられる。P1・4は径0.3~0.



第163図 37号住居跡実測図 (1/60)



第164図 37号住居跡カマド実測図 (1/30)

4m、深さ0.2~0.3mと割合しっかりしている。袖部の両脇から土師器甕が出土した。

カマド (図版64-3、第164図)

北壁中央に付設する突出型で、袖石を有することからIII b類に分類できる。袖部は灰白色土混じりの茶灰色土で構成され、焚口幅45cm、奥行き85cm、壁体内幅40cmを測る。右袖は長さ50cm、基部幅45cm、残高40cmで、左袖は長さ66cm、基部幅30cm、残高42cmを測る。

煙道先端はピットに切られるが、長さ105cm、中央部幅27cmの掘り込み式で、断面形は長方形を呈する。底面は13°の傾斜角で登る。右袖脇から中型甕が、左袖脇から小型甕が立った状態で出土している。

出土遺物（図版84、第162・190図）

須恵器（177・178） 177は壺の破片資料で、調整は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。色調は内面淡橙色、外面灰色を呈し、焼成も良好、堅硬である。178は復原口径16cm、器高2.2cmを測る皿で、外底部回転ヘラ削り、内底部ナデ、口縁部内外はロクロヨコナデ調整で仕上げている。混入品であろう。

土師器（145・179・180） いずれも甕の資料で、145は小型品。器高15.2cm、口径16.4cm。179は寸胴な胴部；180は胴部より口径の大きい胴部上半の資料である。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。180の胴部外面には煤の付着が見られる。色調は179が黄褐色、180が内面橙褐色、外面橙黄褐色を呈し、焼成も良好である。

石製品（第190図4） 4は砥石で、長さ3.8cm、幅2.4cm、厚さ2cmを測る。欠損品を再利用しており、全周が砥面となっている。頁岩製。

（2）掘立柱建物跡

1号建物跡（図版65-2、第165図）

1号柵列の北側に並行して位置する。4号土坑と重複し、柿穴に壊されるも梁行1間（2.1m）×桁行2間（4.33m）規模で、桁行方位はN56°Wを示す。柱穴は円形を呈し、径30~50cm、深さ50~60cmを測る。遺物の出土はなかった。

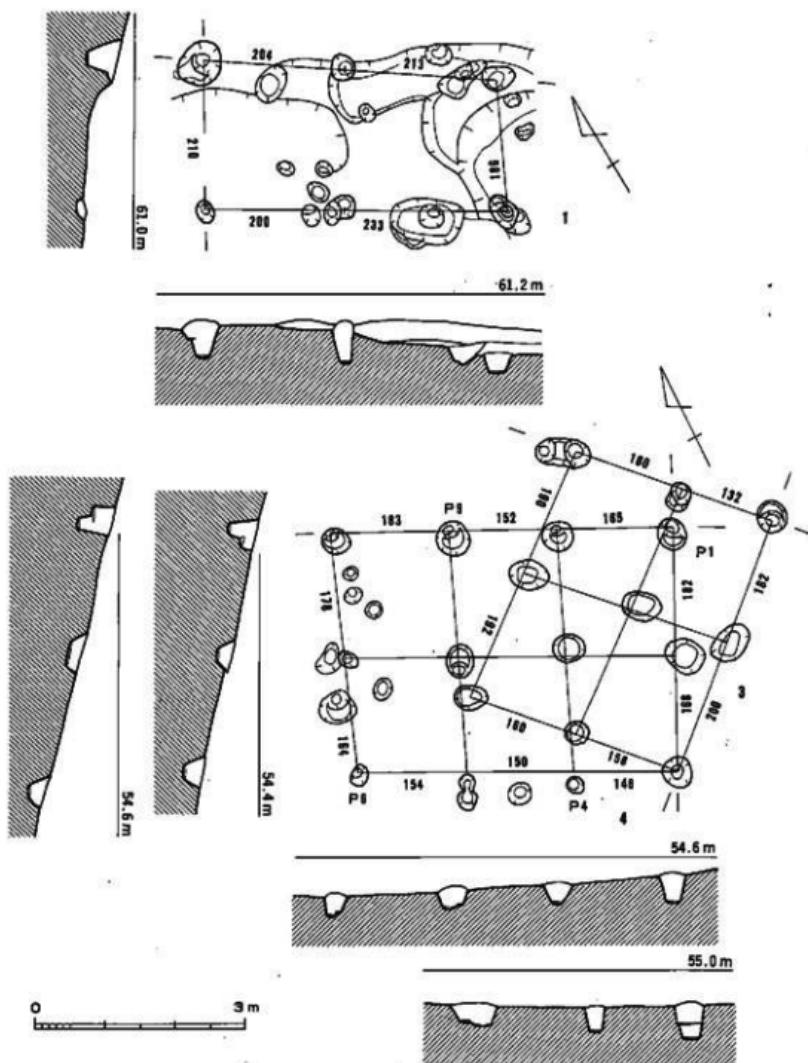
2号建物跡（図版44-3、第111図）

6号住居跡と重複して位置する。前後関係はつかめなかったが、当建物跡が後出するか。北側2間（3.2m）を残すのみで詳細は不明。柱穴は径70~80cmで、深さは70~95cmを有し、割合大きめの柱穴である。何れの柱穴も南側にテラスを有し、柱を抜き去ったものか。

3号建物跡（図版66-1、第165図）

7号住居跡北側の標高55mの緩傾斜面に位置し、4号建物跡と重複する。梁行1間（3.18m）×桁行1間（3.82m）の純柱倉庫で、桁行方位はN49°Eを示す。柱穴は円形を呈し、径30~50cm、深さ30~50cmを測る。当建物と後述の4号建物跡は平坦面の確保を行なわず構築している。谷地形に立地することを考慮すると、斜面をカットしない方が雨水は自然に排水され、流水対策を施す手間が省け、合理的である。柱穴から遺物は出土していない。

VI区の調査



第165図 1・3・4号建物跡実測図 (1/80)

4号建物跡（図版66-1、第165図）

3号建物跡と重複するが、前後関係は不明。梁行2間（3.5m）×桁行3間（4.9m）の純柱倉庫で、梁行方位はN20°Eを示す。柱穴は径20~50cm、深さ20~50cmを測る。P1・4・6・9からは土器が出土している。

出土遺物（第166図）

須恵器（181） 壱壺の体部

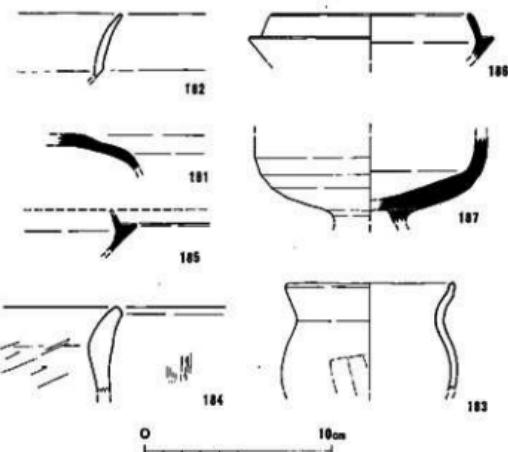
資料で、調整は天井部外面ナデ、他は体部内外ヨコヨコナデである。色調は灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。P4内出土。

土器（182~184） 182は

高壺の口縁部付近の小破片で、内外ともヨコナデで仕上げている。色調は淡橙色を呈し、焼成も良好である。P1内出土。183は小型丸底壺、184が壺の口縁部の小破片である。

調整は183が胴部外面ヘラ削

りの後ナデ、184は刷毛。内面は183がナデ、184がヘラ削り、口縁部内外は何れもヨコナデで仕上げている。色調は183が淡黄灰色、184が橙色を呈し、焼成も良好である。183はP9、184はP6内出土。



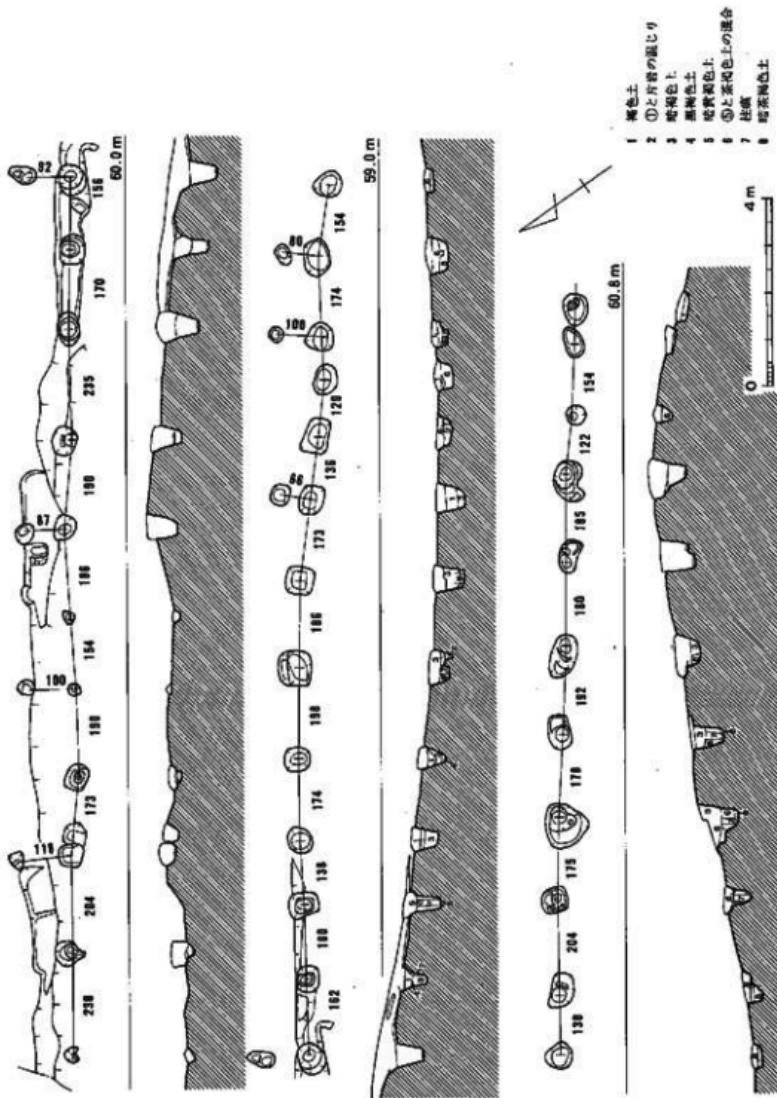
第166図 建物跡・柵列出土土器実測図(1/3)

(3) 柵列

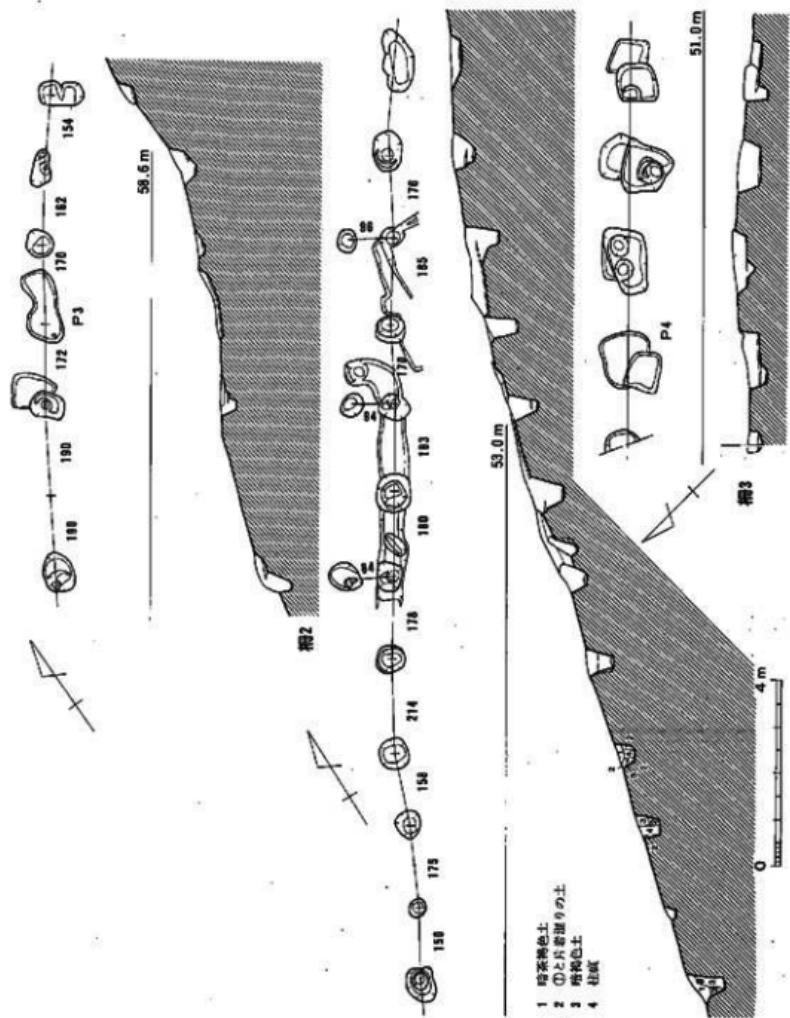
1号柵列（図版65-1・66-2、第167図）

調査区の北縁で検出した柵列で、4号住居跡を切っている。地形の起伏に沿って丘陵を横断し、直線にして54m連なる。2号構の埋土は切っておらず、それより東側には延びない。また、VII区でも検出していない。柱穴は32個遺存し、柱間は心心距離にして90~235cmとばらつきがある。径40~90cmの円形・隅丸方形を呈し、深さは残りの良いもので90cmを測る。埋土は暗褐色土であり、15cm前後の柱痕跡を確認した。また、部分的ではあるが、山側にピットが対にあり、支柱の役目を果たしたものであろう。検出当初は、汚れた感じの土が入っており、新しい時期の所産かと思われた。P27からは須恵器壺身片が出土しているが、住居跡を切っているので消極的ではあるが、6世紀後半以降の所産としておく。柵列の方位はN55°~70°Wを示す。

VII区の調査



第167図 1号横列実測図 (1/120)



第16図 2・3号掘削実測図 (1/120)

出土遺物（第166図）

須恵器(186・187) 186は壺身の破片資料で、復原口径10.8cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナナ仕上げである。色調は淡灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。187は高壺の壺部の破片で、調整は壺部外面上半部回転ヘラ削り、下半部はロクロヨコナナ、内底部ナナ、口縁部内面ロクロヨコナナで仕上げている。色調は内面赤紫灰色、外面紫灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

2号柵列（図版67-1、第168図）

調査区中央や西側の丘陵張り出し部で検出した柵列で、19号住居跡を切っている。途中、柿畠の開削により柱穴を失うが、丘陵を継断して1号柵列に繋がる。柱穴は18個遺存し、長さにして調査区幅の40m分である。柱間は重心距離で150(5尺)~214(7尺)cmとばらつきがある。柱穴は径50~80cmの円形を呈し、残りの良いもので80cmの深さがある。当柵列は西側に補助柱穴を有することから1・2号柵列とでL形をなし、南東方向からの侵入に対して防衛を行ったものと考えられる。柵列の方位はN32°~35°Eを示す。P3から土器が出土した。

3号柵列（図版67-2、第168図）

調査区の西側に位置し、14号住居跡・3号大溝を切っている。検出当初は建物跡としていたが、柱筋が不揃いであることから柵列に変更した。柵形は80~110cmの方・長方形を呈し、深さは50cm遺存する。何れも柱穴が2個重複しており、建替えによるものと考えられる。方位はN45°Wを示す。P4からは耳環と土鍤が出土している。

出土遺物（図版87-3・88、第190図）

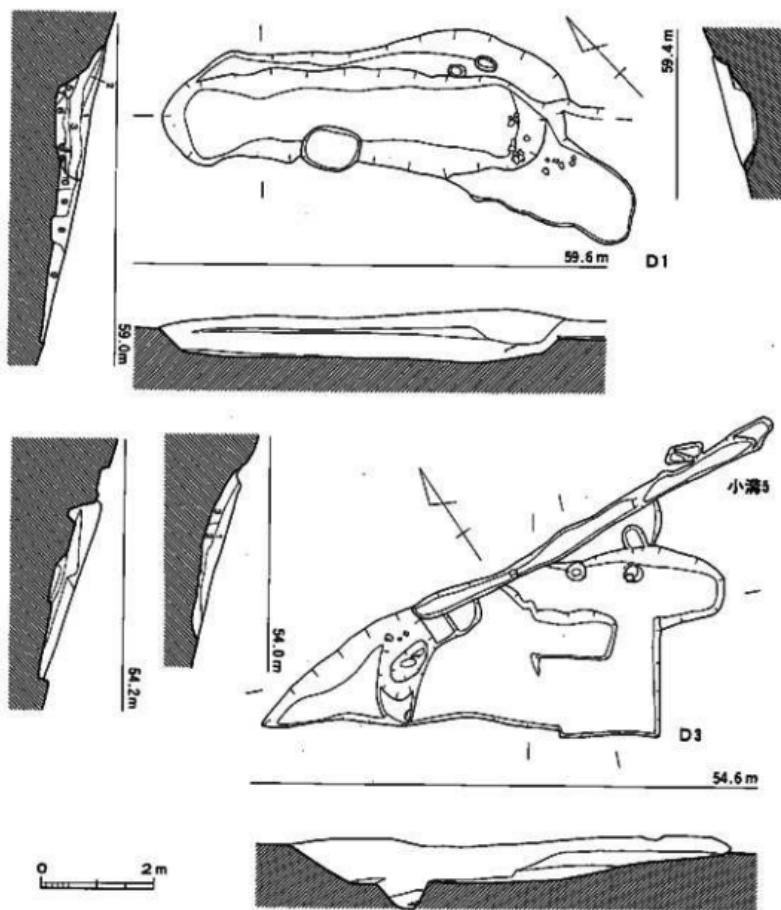
銅製品(第190図21) 耳環で、表面の腐食が著しい。径3.25cm、厚さ0.75cm、重さ18.9g。木米、古墳に伴なう遺物であり、V区1号墳墳丘は同区1号住居跡に破壊されており、或いは1号墳に伴なうものか。

土製品(第190図33) 33は長さ4.8cm、径1.55cm、孔径0.4cmを測る管状土鍤で、上部は若干欠損するが、下部は工具による切り離し。

(4) 土 坑

1号土坑（図版68-1、第169図）

調査区の北東部で、1号住居跡の10m北西の緩斜面(標高58m)に位置する。溝状を呈し、長さ7.2m、幅2.64mで、深さは0.9m遺存する。北側には幅0.4mのテラスがある。底面は平坦で、両端から割合多くの土器が出土した。

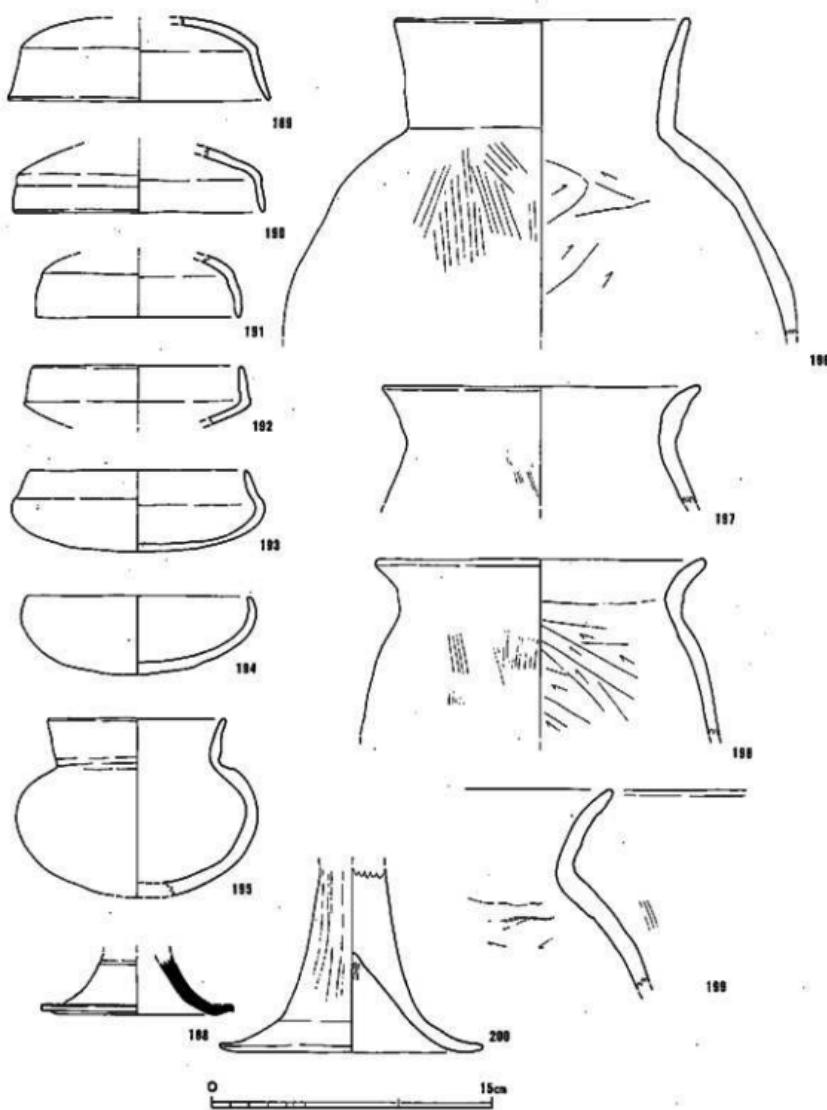


第188図 1・3号土坑、5号小溝実測図 (1/100)

出土遺物 (図版84、第170・171図)

須恵器(188) 高環脚部のラッパ状に開く裾部の資料で、柱状部には沈線が巡っている。裾部内外ともロクロヨコナデ調整で仕上げており、色調は灰色を呈し、焼成も良好である。

VII区の調査



第170図 土坑出土土器実測図① (1/3)

土師器(189~203) 189~191は壺蓋の破片資料で、大(189・190)・小(191)がある。いずれも体部外面の屈折縫が不明瞭で、調整は風化しているものが多く明確ではないが、189の天井部内外ナデ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。復原口径は189が14cm、190が13.4cm、191が11cmを測る。

192~194は壺身の資料で、器受け部の屈折縫が不明瞭なもの(192・193)と内湾気味に立ち上がる口縁部を有するもの(194)がある。調整はいずれも器面の風化が著しく不明である。口径は192が11.4cm、193が11.6cm、194が11.9cmで、器高は192が現存部で3.1cm、193は4.3cm、194が4.2cmを測る。

195~196は壺の資料で、195は小型丸底壺、196は大型の壺である。調整は195の胴部外面がヘラ削りのあとナデ、196は粗い刷毛、内面は195がナデ、196がヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は195が9.6cm、196が15.8cmで、器高は現存部で195が9.6cm、196が16.9cmを測る。

197~199・201は壺の破片資料である。いずれも器面が風化しているが、胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外ともヨコナデで仕上げている。色調は197~199が暗黄茶褐色、198が焦茶色、201が橙褐色を呈し、焼成も良好である。

200~202は高壺の破片で、200は脚部、202は壺部と脚部付近の資料である。200はラッパ状に開く脚部で、柱状部はタテヘラ削り、内面と裾部内外はナデで仕上げている。202は柱状部外面タテヘラ削り、内面ヘラ削り、壺底部内外ナデ、口縁部外面ヘラ磨き、内面ヨコナデで仕上げている。

203は瓶の破片資料で、胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は30.4cmを測る。

2号土坑(図版73-2、第174図)

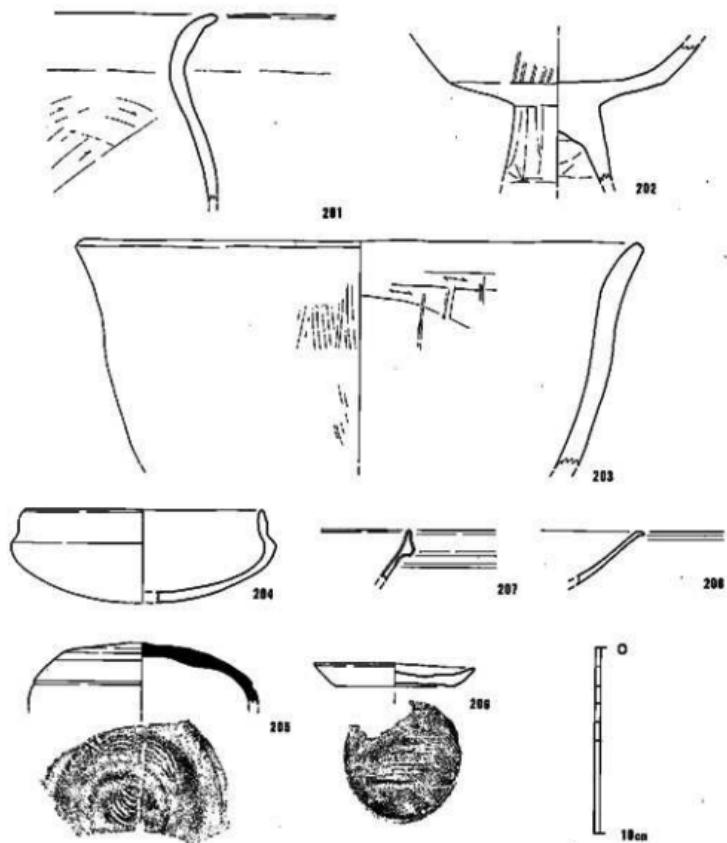
調査区中央やや東側の最下段に位置し、1号大溝を掘り込んでいる。隅丸長方形を呈し、長軸2.9m、短軸1.9mで、壁高は0.62mを有する。底面は平坦で、南壁側には25~45cm大の川原石を並べていた。埋土中から土師器が出土している。

出土遺物(図版84、第171図)

土師器(204) 蓋受け部の小さい壺身の破片資料で、復原口径は12.6cm、器高は現存部で5cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。

3号土坑(図版69-1、第169図)

調査区中段東側で、1号住居跡の11m西側に位置し、5号小溝に切られる。平面形は南側が尖った三角形を呈し、西壁長7.1m、東壁長4.3mで、壁高は溝側で、0.6mを測る。底面は南側に

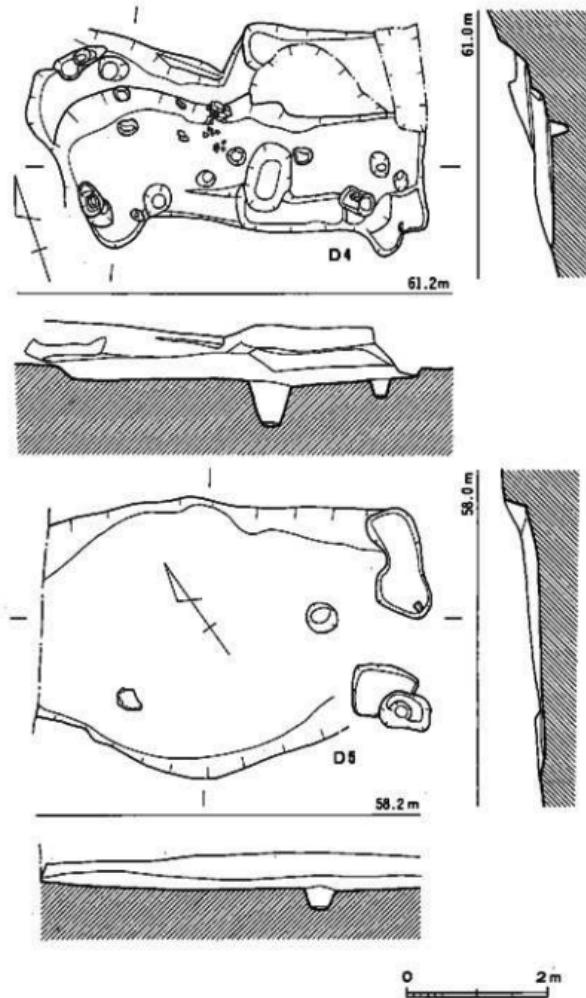


第171図 土坑出土土器実測図② (1/3)

傾斜し、土器が出土した。

出土遺物 (図版84、第171図)

須恵器 (205) 体部外面の屈折稜が明瞭な坏壊の資料で、天井部外面回転ヘラ削り、内面同心円のタタキのあとナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は内面灰色、外面暗灰色を呈し、焼成は良好・堅致である。



第172図 4・5号土坑実測図 (1/80)

土師器(206) 小皿の資料で、口径8.6cm、底径6.5cm、器高1.2cmを測る。調整は内底部ナデ、口縁部内外ヨコナデで、底部の切り離しは糸切りによる。

磁器(207・208) いずれも白磁碗の破片資料で、口縁端部をつまみ出し気味に細く仕上げたもの(208)と玉縁状に肥厚したもの(207)がある。

4号土坑(図版70-1、第172図)

調査区北側上段に位置し、1号建物跡と重複するが前後関係はつかめていない。不整長方形を呈し、長軸5.2m、短軸2.3m、壁高は北壁側で0.8m遺存する。北壁側には0.2~0.5m幅のテラスがある。底面は南側に若干下がっており、浮いた状態で土器が出土した。

出土遺物(図版84、第175図)

須恵器(209) 復原口径10.4cmを測る壺身の破片資料で、体部内外ともロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成も良好・堅敏である。

土師器(210~212) 210は内湾気味に立ち上がる口縁部を有す壺で、復原口径は12.8cm、現存部器高3.7cmを測る。調整は器面風化のため不明である。

211・212は壺の資料である。212は卵形の胴部に「く」字状口縁部がつく壺で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調はいずれも内面暗黄茶褐色、外面淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。

5号土坑(図版70-3、第172図)

調査区の北西端部中段に位置し、2号横列に切られる。楕円形状を呈し、黒褐色土で埋まっていた。長軸は北西~南東方向にあり、残存長5m程。短軸は4mで、壁高は0.5mの遺存である。底面は平坦であり、土器が出土している。

出土遺物(第175図)

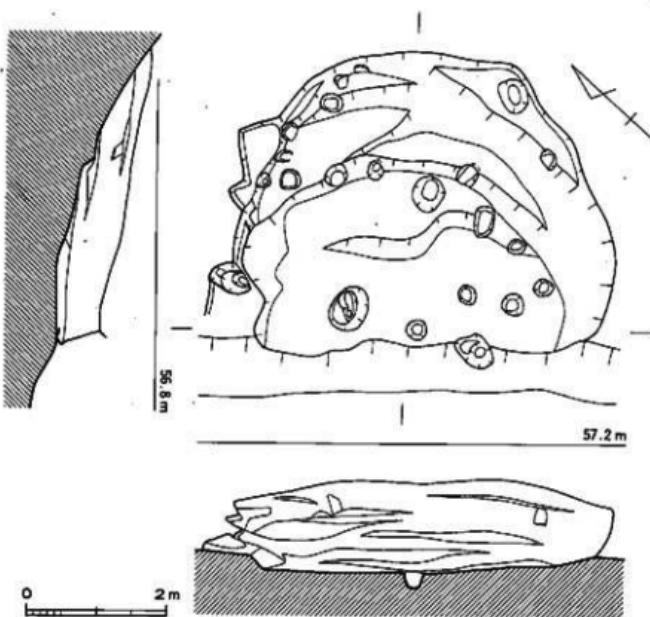
須恵器(213) 直口する短頸壺で、調整は肩部カキ目その他ロクロヨコナデ仕上げである。色調は賞灰色を呈し、焼成も良好・堅敏である。復原口径は9.9cmを測る。

6号土坑(図版71-6、第173図)

調査区の中央部緩斜面に位置する大型の土坑で、削平により南半部を失う。平面形は円形を呈し、短軸2.7m、深さは0.65m遺存する。北東側にはテラスが5段程あり、底面にもピットが数個穿たれている。埋土上位から角錐状石器が出土した。

出土遺物(図版85・86-2、第175図)

須恵器(214・215) 壺蓋の資料で、調整は天井部外回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。214の天井部内面にはタタキ目の調整痕が残されている。色調



第173図 6号土坑実測図 (1/80)

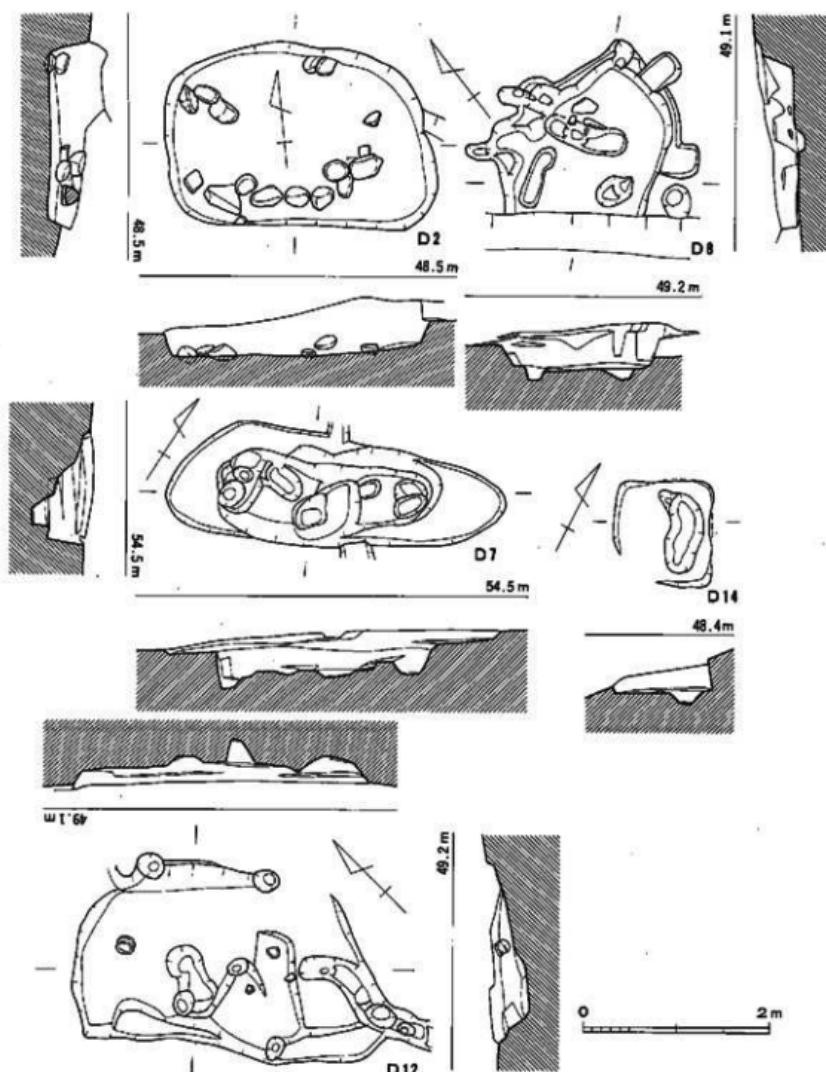
は214が淡灰色、215が灰黄色を呈し、焼成も良好である。復原口径は214が12.3cm、215が13.3cmで、器高は214が3.8cm、215が4.2cmを測る。

土師器(216-217) 216は蓋受け部の小さい环身の破片資料で、復原口径は12.8cmを測る。調整は体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成良好である。

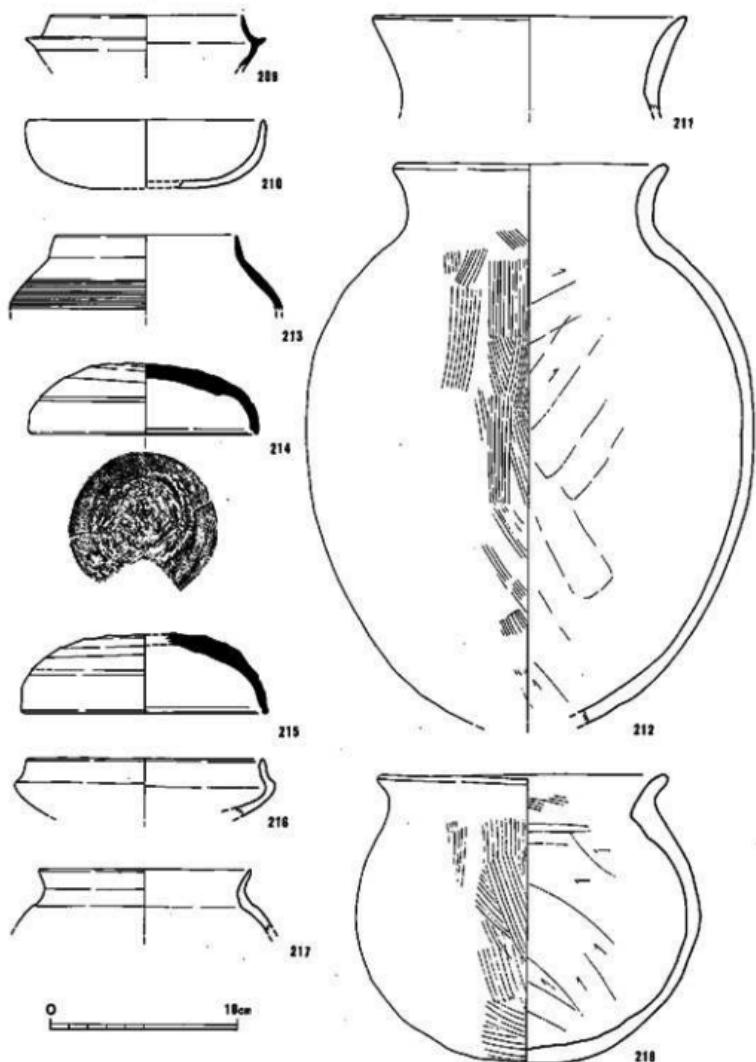
217は小型の甕の破片資料で、復原口径は11.4cmを測る。調整は風化のため不明である。

7号土坑 (図版71-3、第174図)

調査区の中央中段で、3・4号建物跡の7m北西側に位置する。長円形を呈し、長軸3.64m、短軸1.23mで、壁高は0.4m遺存する。中央で深くなり、底面には3箇所にはピットがある。埋土は黒褐色土で、上位から細石刃が出土した。



第174図 2・7・8・12・14号土坑実測図 (1/60)



第175図 土坑出土土器実測図③ (1/3)

8号土坑（第174図）

調査区の西端部で、23号住居跡の直ぐ西側に位置する。工事用道路の付け替えの関係上、南半部は後で反転したもので、レベル的に誤差が生じてしまった。長軸3.1m、短軸0.9mで、壁高は南壁側で0.2m遺存する。底面にはピット・テラスがあり、北西部から土師器甕が出土している。

出土遺物（図版85、第175図）

土師器(218) 球形の胴部に「く」字状に外反する小型の甕である。胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は15.7cm、胴部最大径18.5cm、器高15.6cmを測る。

9号土坑（図版72-1、第176図）

調査区の中央やや西側で、2号柵列の東側に位置する。後述の10・11号土坑も小型の土坑であり、三者は直線的に配されている。隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸0.56m、壁高0.4mを測る。埋土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

10号土坑（図版72-2、第176図）

9号土坑とは2号柵列を挟んだ西側に位置する。梢円形を呈し、長軸1.35m、短軸0.7mで、壁高は0.37m遺存する。埋土は9号土坑同様の暗褐色土であった。

11号土坑（図版72-3、第176図）

10号土坑の2m西側に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸1.65m、短軸0.8m、壁高0.25mを測る。底面は平坦である。図示可能な遺物の出土はない。

12号土坑（第174図）

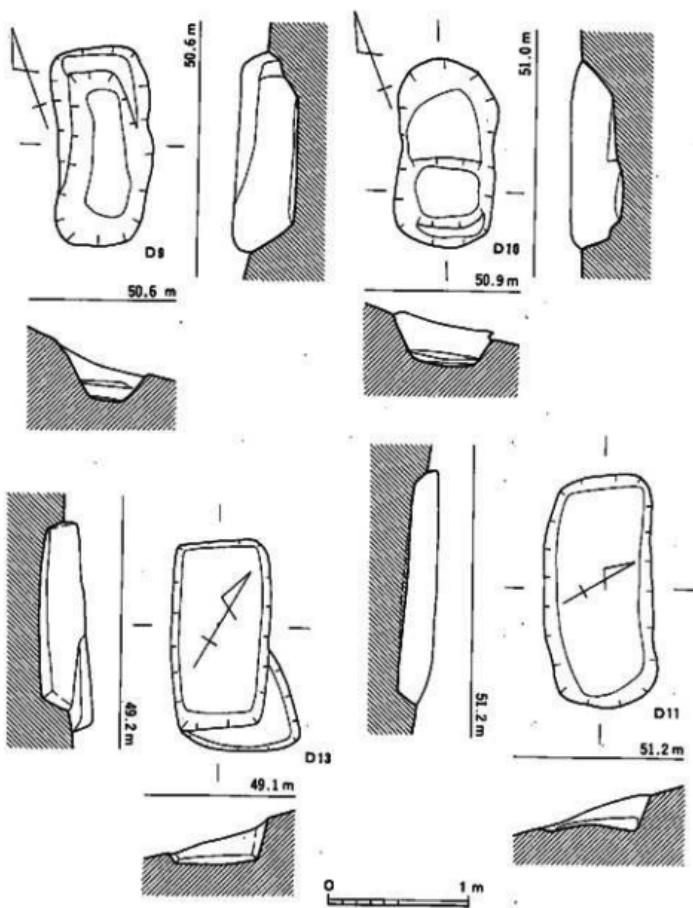
調査区の西側で、3号大溝南端付近に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.12m、短軸1.04m、壁高0.35mを測る。底面には長円形のピットがある。土師器小片が出土した。

13号土坑（第176図）

調査区の西側で、14号小溝の直ぐ東側に位置する。長方形を呈し、長軸1.32m、短軸0.7mで、壁高は0.32mを測る。底面は平坦である。図示可能な遺物は出土していない。

14号土坑（第174図）

調査区の西端部で、南西壁を13号小溝に切られて位置する。不整形を呈し、幅1.5m、壁高0.



第178図 9~11・13号土坑実測図 (1/40)

45mを測る。底面は平坦で、ピットが3個ある。柄杓形土製品が出土した。

出土遺物（図版88、第190図）

土製品(31) 31は柄杓形の土製品で、口縁部と握手部先端を欠く。器面調整はヘラによる面取り風のナデによる。胎土に砂粒を多く含み、全体に黒斑がみられる。

(5) 製鉄遺構

1号製鉄遺構 (図版73-1, 第177図)

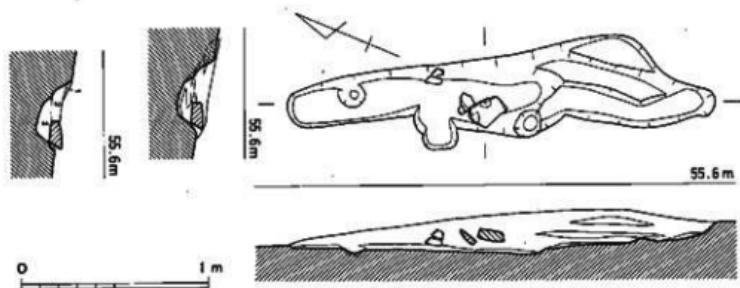
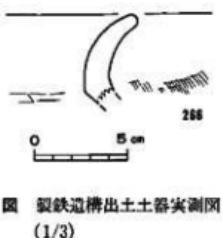
調査区の中央中段に位置する。溝状を呈し、長軸2.28m、短軸0.44m、壁高は0.22m遺存する。掘形の中程には鉄滓・炭が多く入っていたが壁面は焼けておらず、遺構内に投棄した状況であった。一応、製鉄遺構としたが疑問が残る。

出土遺物 (図版87-3・88, 第178・190図)

土器器(266) 266は「く」字状に外反する口縁部の小破片で、側部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナナド調整している。色調は内面淡橙褐色、外面淡橙色を呈し、焼成も良好である。

鉄器(第190図13) 13は長さ5.2cm、基部幅1.8cm、先端幅2.2cm、厚さ0.35cmのヘラ状鉄製品で、基部には木質が遺存する。 第178図 製鉄遺構出土土器実測図
側縁は刃部ではなく、先端は側縁よりも薄くなり、刃部として
いる。手斧として使用したものか。

土製品(図版88) 糊羽口の小破片で、復原径は7cmになろう。



第177図 1号製鉄遺構実測図 (1/30)

(6) 大 溝

1号大溝 (図版73-2, 第179図)

調査区の南東端部で検出した溝であるが、測道付け替え工事が迫っていたため部分的なトレチ調査とし、平面では長さ18m程確認したにすぎない。埋土は堅く締まっていた。

2号大溝（図版74-1、第179図）

調査区中央の製鉄遺構が位置する箇所は丘陵が張り出し、そこと3号土坑との間は浅い谷地形となっており、窪地に礫と土器の集積がみられた。その付近の土層を精査していると、まだ下に掘り下げられる状態であったので、南半部のみ掘り下げるのこととした。

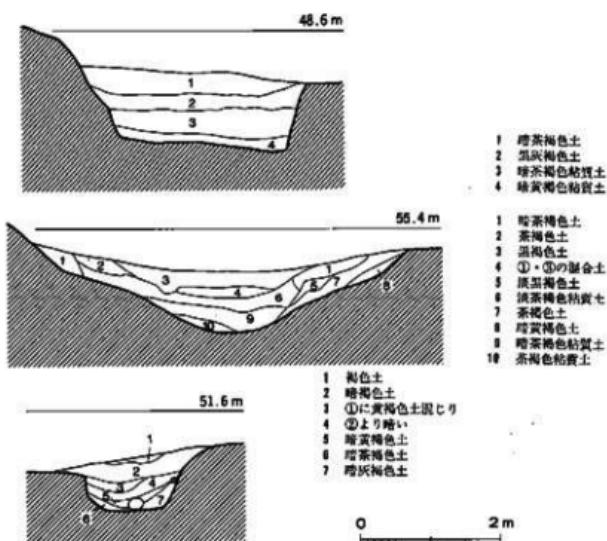
土層は茶褐色土を基調とし、下位に行くに従って粘性を増す。土層を切った場所での幅は5.5m、深さ1.3mを測る。南北方向に走り、長さは30mを越すものと思われる。埋土中から土器が出土した。

出土遺物（図版85、第180図）

須恵器(219・220) 219は坏身の破片資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外ロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。復原口径は12.4cm、器高4.7cmを測る。

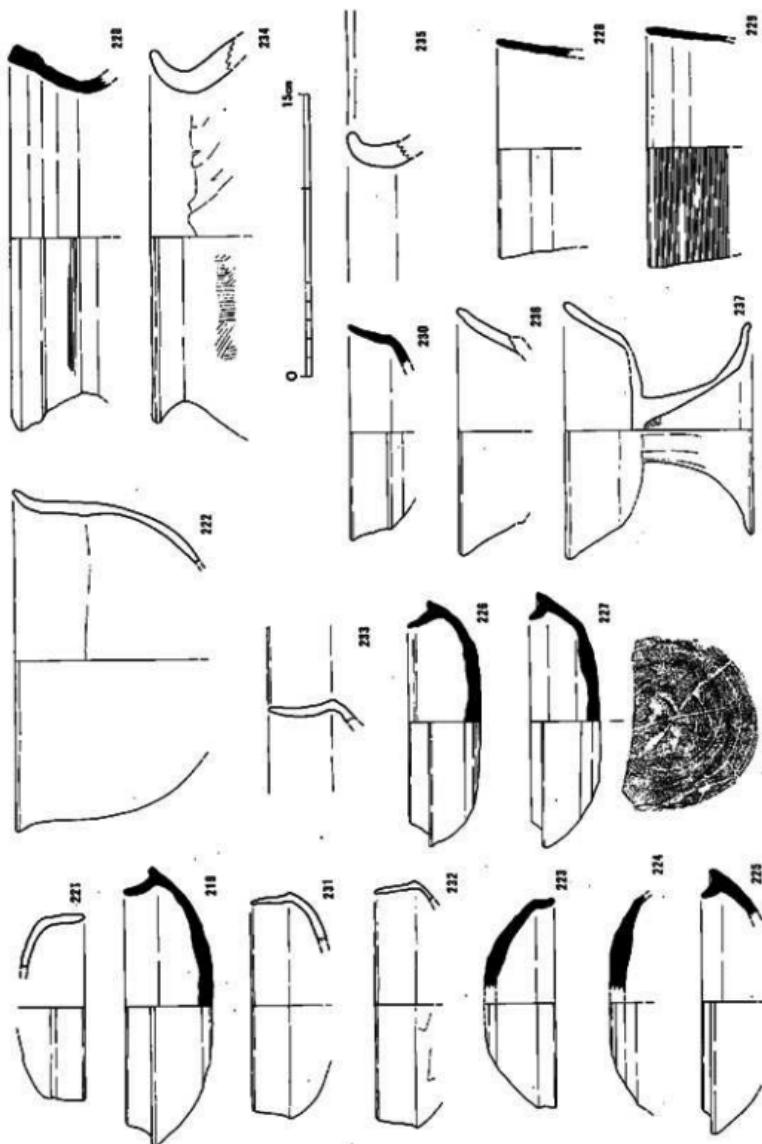
220は斐の口頸部破片で、口縁端部は肥厚している。調整は口頸部内外ロクロヨコナデ、頸部外面にはカキ目調整を残している。復原口径は20.6cmを測る。

土師器(221・222) 221は小型の坏蓋の破片資料で、調整は器面の風化が著しいため、不明で



第179図 1～3号大溝土層断面実測図 (1/80)

図110 大溝出土土器実測図① (1/3)



ある。復原口径は9.8cmを測る。

222は小型の鉢の破片資料で、復原口径18.4cmを測る。器面の風化が著しく調整手法は不明である。

3号大溝（図版75-1、第179図）

調査区の西端部に位置し、3号柵列に切られる。南北方向に走り、北西側に緩くカーブする。中央での幅1.7m、深さ0.9mで、長さ26mを確認した。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗褐色土を基調とし、北端から鐵錫・鐵錫が、中央部から土師器甕が出土している。

出土遺物（図版85・88、第180・181・190図）

須恵器（223～230） 223・224は壺蓋の破片資料で、調整は天井部外面回転ヘラ削り、他は体部内外ロクロヨコナデ仕上げである。色調は223が焦茶色、224が淡灰色を呈し、焼成も良好である。223は復原口径11.2cm、現存器高4.8cmを測る。

225～227は壺身で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。227の外底部にはヘラ記号が施されている。口径は225が11.4cm、226が10.6cm、227が10.8cm、器高は225が現存部で3cm、226が3.9cm、227が3.7cmを測る。

228・229はマリ形の土器で、胴部下半を欠失している。調整は体部内外ロクロヨコナデで、229の外面はカキ目調整している。色調は228が淡灰色、229が黒灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。復原口径は228が11.6cm、229が12.8cmを測る。

230は高壺の壺部の破片資料で、調整は体部内外ロクロヨコナデで、体部外面下半は回転ヘラ削り仕上げである。復原口径は11.2cmを測る。

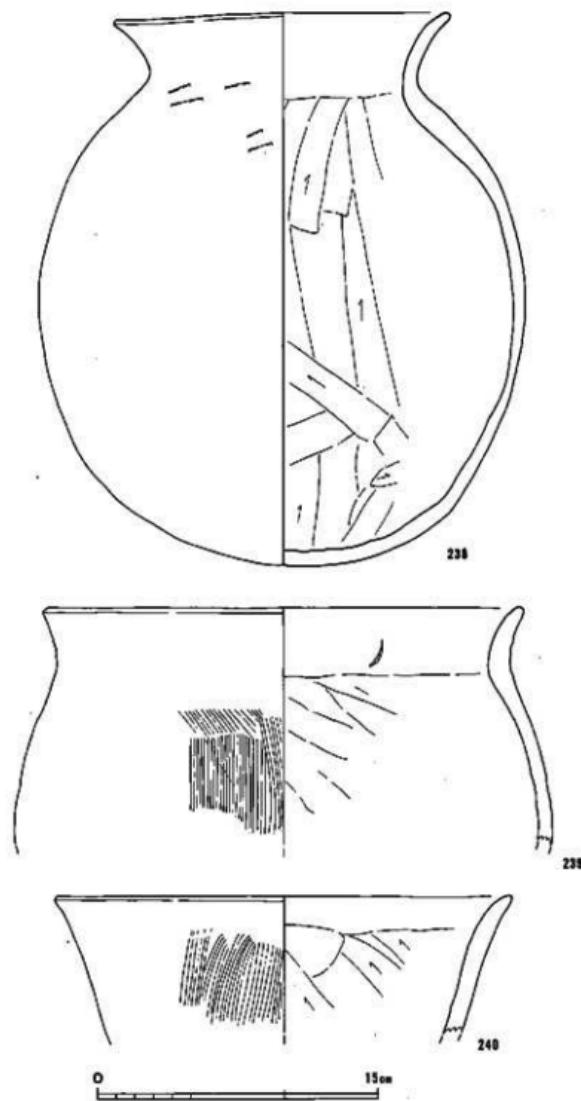
土師器（231～240） 231～233は蓋受け部の小さい壺身の破片資料で、233は大型品である。調整は体部下半ヘラ削りのもの（232）とナデのもの（231・233）、内面はいずれもナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は231が11.2cm、232が12.0cmを測る。

234・235・238・239は甕の資料で、調整は胴部外面刷毛のもの（234・239）とナデのもの（238）、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は234が19.8cm、238が18cm、239が25.8cmを測る。

236・237は高壺である。236は壺部の破片資料で、復原口径は13cm。237は復原口径13.6cm、裾部径11.2cm、器高10cmを測る。調整は口縁部内外ヨコナデ、脚部外面タテヘラ削り、内面ヘラ削り、裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は236が白黄褐色、237が暗黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。

240は甕の胴部上半の破片資料で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデしている。色調は橙褐色を呈し、焼成良好である。復原口径は24.4cmを測る。

鉄器（第190図5～8・12） 5は西端出土の鐵錫で、茎部を欠損する。残長11.4cm、頭部幅1.



第181図 大溝出土土器実測図② (1/3)

3cmを測る。6~8は溝I区土層ベルト下層出土の鉄鎌。欠損しており、3点は別個体。共に片丸造。12は北端出土の鉄鎌で、長さ18.1cm、基部幅4.9cm、背の厚さ0.8cmを測る。

土製品(第190図29・30) 29・30はミニチュア土製品で、器高は29が2.55cm、30は3.2cm。口径は29が2.3cm、30は3cmを測る。

(7) 小溝

1号小溝(図版73-2)

1号大溝の北側に位置し、2号小溝を切っている。長軸を東西方向に取り、長さ14m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。図示可能な遺物は出土していない。

2号小溝(図版73-2)

1号小溝に切られて位置する。長軸を東西方向に取り、長さ7.5m、幅2.8m、深さ0.8mを測る。埋土中から須恵器・土師器が出土している。

出土遺物(図版85、第182・183図)

須恵器(241・246) 高環の脚部の破片資料で、柱状部には長方形の透しがある。柱状部外面にはカキ目、内面ナデ、裾部内外はロクロヨコナデで仕上げている。復原口径は10cm、現存部器高9.1cmを測る。色調は灰色を呈し、焼成良好・堅緻である。

246は大型壺の胴部下半の破片資料で、調整は胴部外面平行タタキ、内面青海波文の叩きを施している。色調は淡黄褐色を呈し、焼成良好である。

土師器(242~245) 242は壺の胴部上半の破片資料で、胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は18.4cmを測る。

243・244は高環の壺部の破片で、体部外面の肩折継も明瞭で深い資料である。244の調整は器面風化が著しく不明だが、243は体部下半をナデとヘラ磨き、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は243が橙色、244が黄褐色を呈し、焼成良好である。復原口径は243が15cm、244が16.8cmを測る。

245は牛角把手がつく甌の破片資料で、内外ともナデで仕上げている。胴部最大径は29.7cmを測る。色調は内面橙黄色、外表面褐色を呈す。

3号小溝

3号土坑の5m北側で検出した溝で、長軸を北西~南東方向に取る。長さ9m、幅2m、深さ0.2mを測り、割合多くの須恵器が出土した。

出土遺物(図版85、第183・185図)

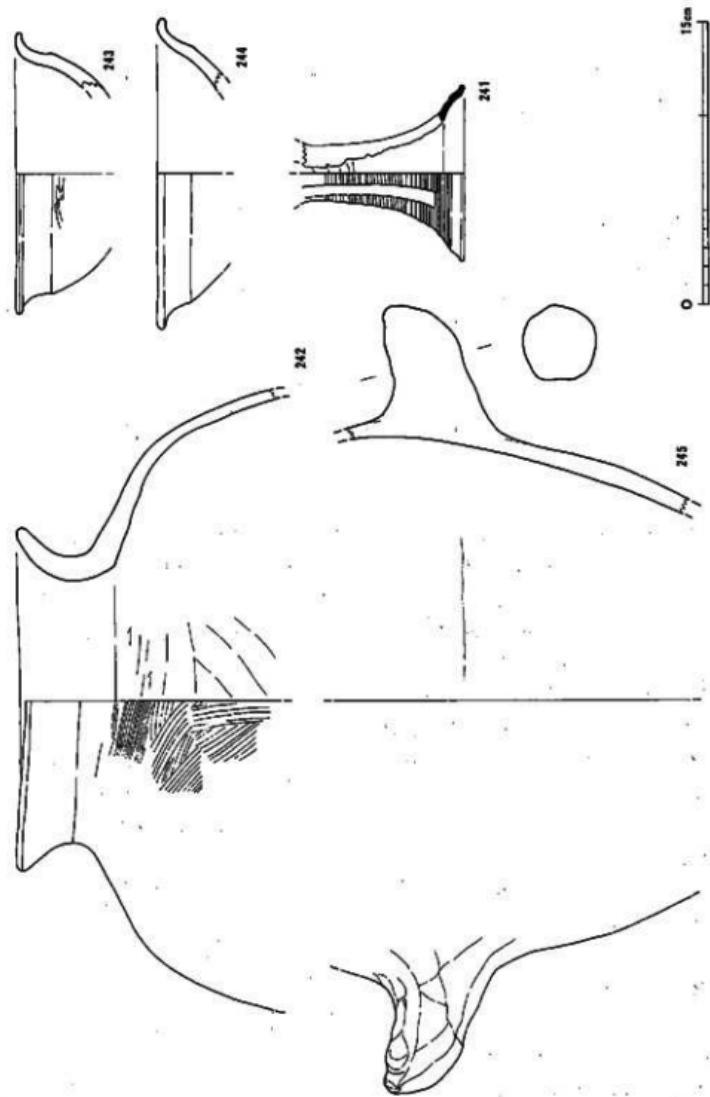
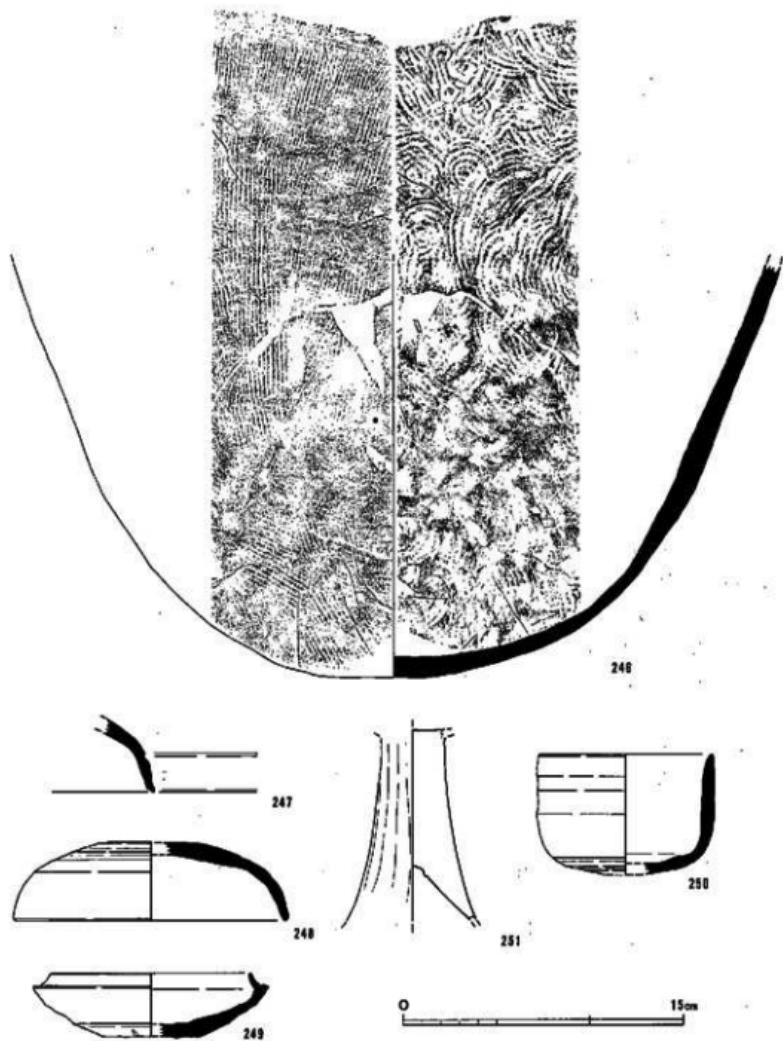


図112 図 小森出土土器実測図① (1/3)



第183図 小溝出土土器実測図② (1/3)

須恵器(247~250・252) 247・248は坏蓋で、体部外面の屈折稜が明瞭なもの(247)と不明瞭なもの(248)がある。調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は247が灰色、248が緑灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。復原口径は248が14.8cmを測る。

249は口縁部の立上りが低い坏身の破片資料で、外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。外底部にはヘラ記号が施されている。復原口径は10.8cm、器高3.4cmを測る。

250はマリ形の土器で、調整は底部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデしている。復原口径は9.4cm、器高6.5cmを測る。色調は淡灰色を呈し、焼成も良好である。

252は斐の脛部破片で、外面平行タタキ、内面青海波文の叩きで仕上げている。色調は内面灰色、外面黄灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。

土師器(251) 高坏の柱状部の資料で、外面タテヘラ削り、内面は風化のため調整は不明である。色調は淡茶褐色を呈し、焼成良好である。

4号小溝(第184図)

1号住居跡の北西側に位置する。長軸を北西—南東方向に取り、長さ8m、幅1.65m、深さ0.5mを測り、須恵器が出土している。

出土遺物(第185図)

須恵器(253・254) いずれも斐の破片で、253が肩部、254が口縁部の破片資料である。254の口縁部外面には櫛描き波状文が施されている。調整は253が外面平行タタキ、内面青海波文の叩きで、254は内外ともロクロヨコナデで仕上げている。

5号小溝(第169図)

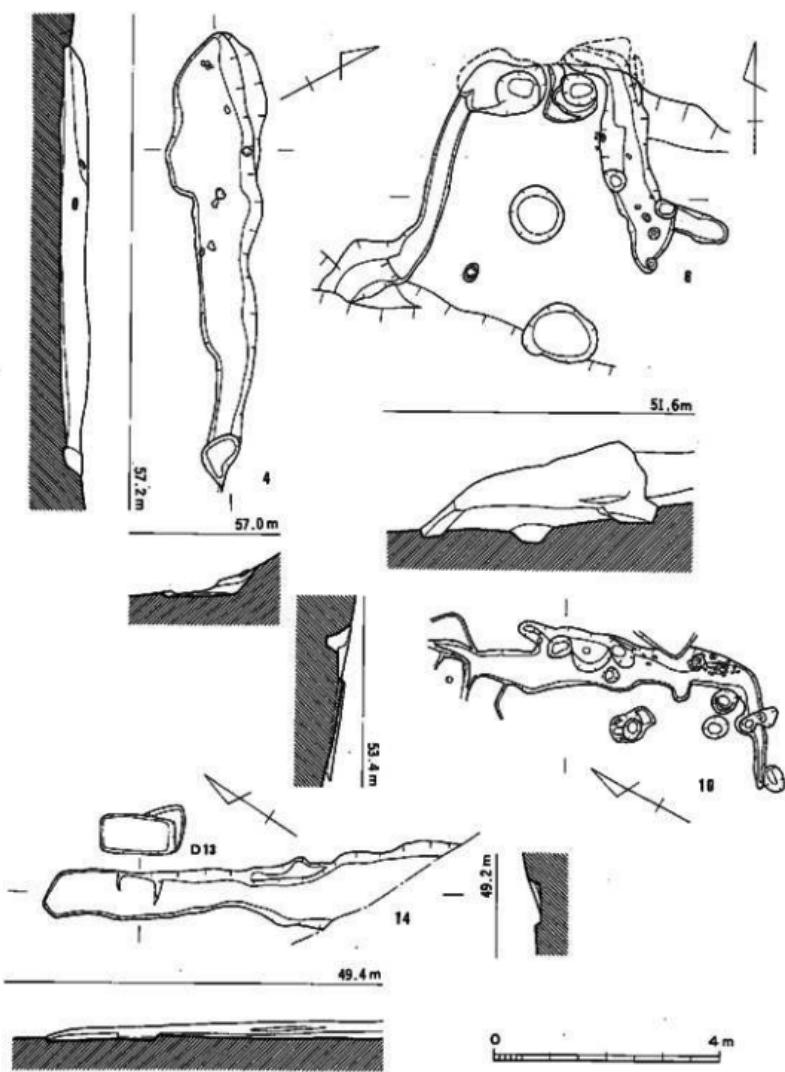
3号土坑の北側で、土坑を切って位置する。長軸を東西方向に取り、長さ7.2m、中央幅0.4mで、深さは0.18m遺存する。埋土中からは糸切り小皿が出土している。

出土遺物(第185図)

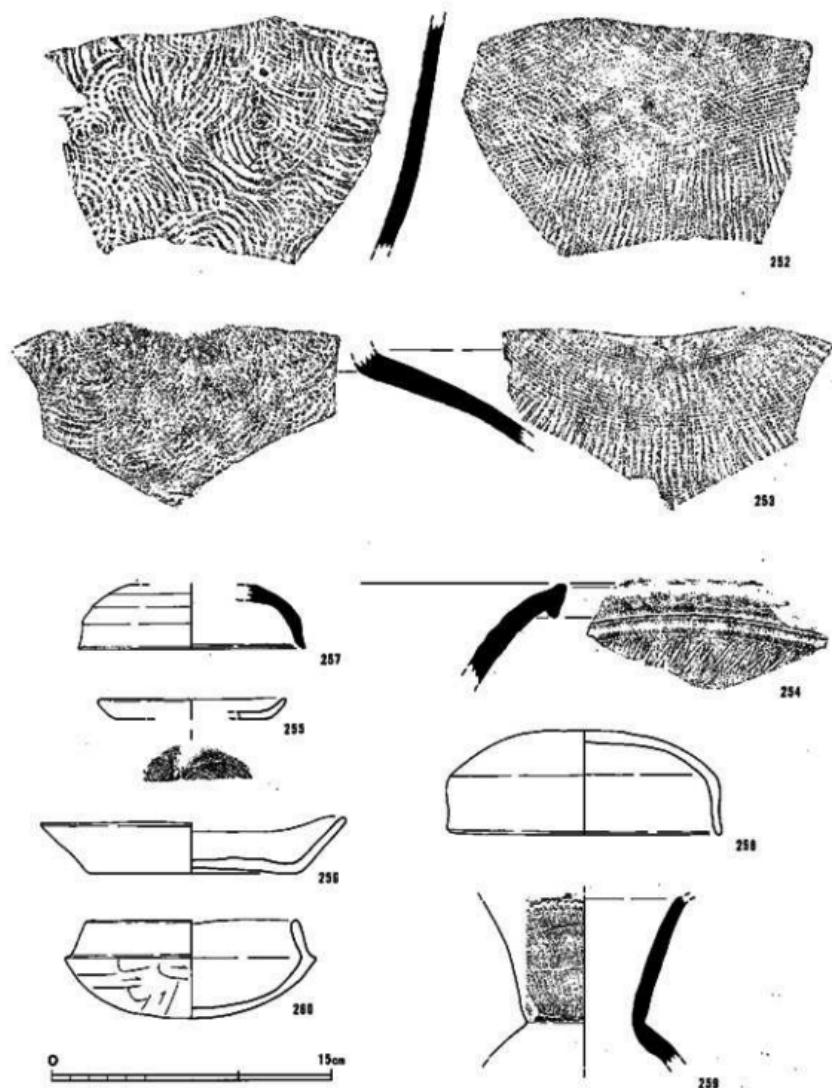
土師器(255・256) 255は小皿、256は坏の資料で、調整は器面風化しているものの体部内外ヨコナデ、底部の切り離しは255が糸切りである。復原口径は255が10.1cm、256が16.3cm、器高は255が1.2cm、256が3cmを測る。

6号小溝(図版76-1、第184図)

調査区の東端部に位置する。凸字形を呈し、北側はオーバーハングし、溝底には0.8m程の土坑2基がある。中央にある円形の穴は後世のもの。北側幅2.2m、深さ1.2m。



第184図 4・6・10・14号小溝実測図 (1/100)



第185図 小瀬出土土器実測図③ (1/3)

出土遺物（第185図）

須恵器(257) 体部外面の屈折稜が不明瞭な环蓋で、調整は天井部外面回転ヘラ削り、他はロクロヨコナデ仕上げである。色調は青灰色を呈し、焼成も良好である。復原口径は12cm、現存部での器高3.4cmを測る。

7号小溝

調査区の中央北端で、1号標列と重複する。主軸を南北に有し、長さ15m、幅1.4m、深さ mを測る。埋土中から土器が出土している。

出土遺物（第185図）

土師器(258) 体部外面の屈折稜が不明瞭な环蓋の資料で、口径は14.6cm、器高5.6cmを測る。調整は風化が著しく不明である。色調は内面橙色、外面橙褐色を呈し、焼成も良好である。

8号小溝

調査区の中央に位置し、7号住居跡に切られている。残長5m、深さ0.3mを測る。図示可能な遺物は出土していない。

9号小溝

調査区の中央で検出した溝で、7号住居跡の3.2m北側に位置する。長軸を東西方向に有し、長さ9.8m、幅0.4m、深さ0.4mを測る。図示可能な遺物は出土していない。

10号小溝（図版76-2、第184図）

調査区の北西端部で、9・10号住居跡に切られる。コ字形を呈し、東辺長4.8m、幅0.7m、深さ0.16mを測る。南コーナー部から土師器が出土した。

出土遺物（図版86-1-2、第185・186図）

須恵器(259) 長頸壺の破片資料で、頸部外面には櫛搔き波状文が施されている。調整は口頸部内面ロクロヨコナデ、胴部内外はナデで仕上げている。復原頸部径は6.3cmを測る。

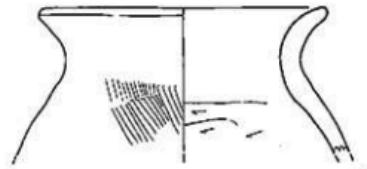
土師器(260～265) 260は蓋受け部の小さい环身で、内外とも黒漆を塗布した作りの良い土器である。調整は体部外面ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は11.4cm、器高5.2cmを測る。

261～265は壺の肩部上半の破片資料である。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。261・262・264の口縁部外面には刷毛の痕跡を残している。復原口径は261が15.6cm、262が18.4cm、263が18.1cm、264が20.6cm、265が18cmを測る。

VII区の調査

11号小溝

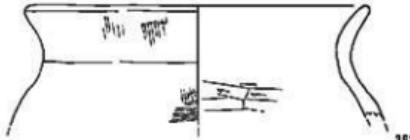
32号住居跡の南で、同住居を切って位置する。主軸を東西方向に取り、長さ13m、幅0.7m、深さ0.6mを測る。図示可能な遺物は出土していない。



281

12号小溝（図版76-3）

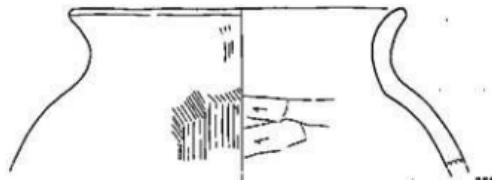
調査区の中央南端で、11号小溝の1.2m北西側に位置する。東西に軸を有し、長さ8m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。遺物の出土はなかった。



282

13号小溝

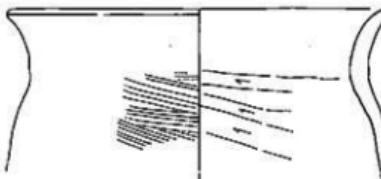
34号住居跡・14号土坑を切って位置する。南東一北西方に向に軸を有し、長さ13m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。砾石が出土した。



283

出土遺物（図版87-1、第190図）

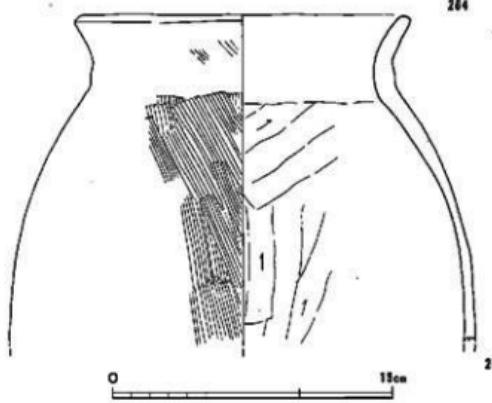
石器（第190図3） 3は西部出土の砾石半欠品で、幅4.9cm。上面を砥面とし、側縁は平滑にしている。粘板岩製であろう。



284

14号小溝（第184図）

調査区の西側に位置する。主軸を北西一南東に取り、残長7m、幅0.9mで、深さ0.25mを測る。図示可能な遺物は出土していない。



285

第186図 小溝出土土器実測図④ (1/3)

(8) その他の出土遺物

ここでは、ピット及び表採・遺構検出時に出土した遺物を挙げる。

出土遺物（図版86-2・87-1・88、第187・188図）

須恵器(267~274) 267は壺蓋の小破片で、内外ともロクロヨコナデ仕上げである。

268~272は壺身の資料で、調整は外底部を269・272が回転ヘラ削り、内面は272がナデ、他は体部内外ロクロヨコナデ仕上げである。復原口径は268が 10.4cm 、269が 11.6cm 、271が 10.3cm 、272が 10.1cm 、器高は現存部で272が 3.6cm を測る。

273は長頸壺の口頸部破片で、内外ともロクロヨコナデ調整で仕上げている。復原口径は 8cm を測る。色調は灰色を呈し、焼成も良好である。

274は高环の脚部の破片資料で、裾部径 12.8cm を測り、内外ともロクロヨコナデ調整で仕上げている。267はP47、268はP121、269はP105、273はP12の出土で、270~272は表採資料、274は1号土坑周辺の遺構検出時の出土。

土師器(275~287) 275は内湾気味に外反する壺の小破片である。調整は内外ともナデとヨコナデである。色調は黄灰色を呈し、焼成も良好である。

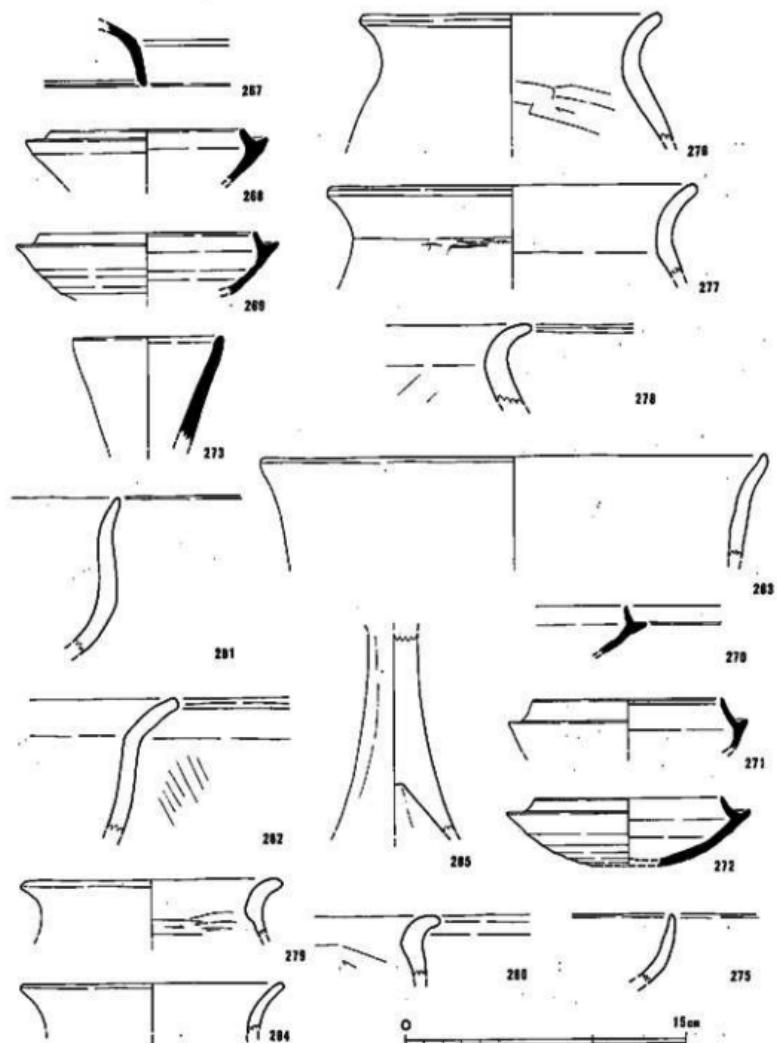
276~280・286は甌で、大・小がある。調整は胸部外面ナデのもの(276・277)と刷毛のもの(286)、内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。279と286の外面には煤の付着が見られる。復原口径は275が 16cm 、276が 19.8cm 、278が 14cm 、285が 12.4cm で、器高は現存部で285が 14.6cm を測る。

281~282・287は鉢の破片資料で、281~287は口縁部の外反が弱いタイプである。調整は風化のため不明なところもあるが、281は内外ともナデ、282は外面粗い刷毛、内面ナデで仕上げている。色調はいずれも淡橙色を呈し、焼成も良い。復原口径は286が 18cm 、器高は現存部で 8.5cm を測る。283・284は瓶の口縁部付近の破片資料で、大(283)・小(284)がある。284の外面には煤の付着が見られる。復原口径は282が 27.2cm 、283が 14cm を測る。285は高环の脚部の資料で、外面はタテヘラ削り、内面はナデ調整で仕上げている。

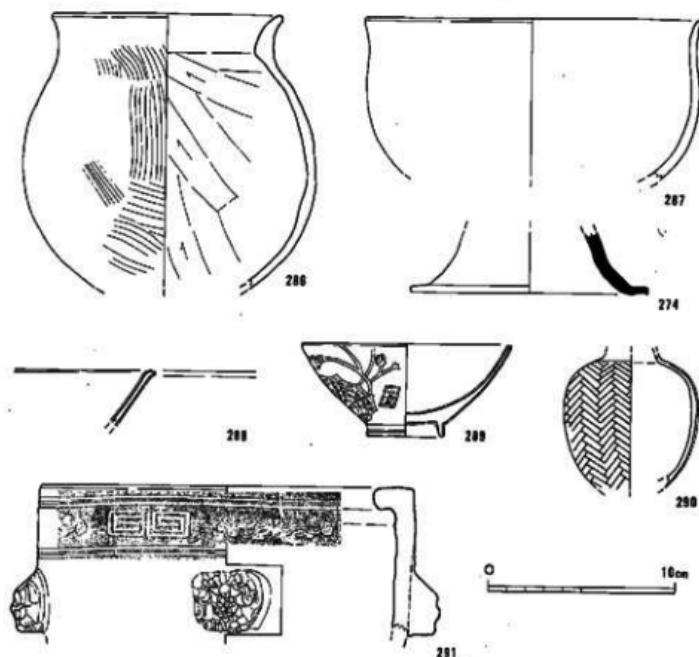
277はP75、278はP5、279はP101、280はP89、282・283はP75、284はP69、285はP45、286はP3、288はP34の出土で、276・281は表採資料で、287は出土地不明品。

磁器・陶器(288~291) 288は白磁の碗である。289は外面にツワ蔭の花のスタンプ文を施し、「山美製」印が押された茶碗である。290は青磁の一輪ざしの甌で、胸部には複線山形文が施されている。289は口径 11.2cm 、器高 4.9cm 、290の胴部最大径は 7.1cm を測る。

291は火鉢の体部上半の資料で、口縁下にはシシ頭の把手がつき、口縁部外面にはラーメン文と龍のスタンプ文が交互に連続して刻印されている。復原口径は 20cm を測る。287~291は近・



第187図 ピット・表様他出土土器実測図 (1/3)



第188図 表採土器実測図 (1/3)

現代のものと思われる。

鉄製品(第190図16) 16は5号土坑南側の段落ち出土の鉄製品で、鐵板を丸く合わせている。先端はスプーン状に抜がる。残長5.2cm, 径1.1cm。用途不明。

土製品(図版88) 糖羽口の破片で、復原径は6.5cmになろう。1号横列東端北側の出土。

B. 旧石器・縄文時代の遺物

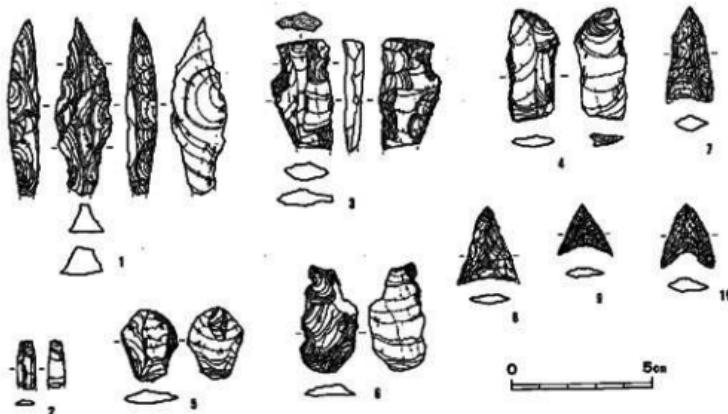
6号土坑周辺部においては、黒褐色土の堆積がみられ。旧石器時代の包含層が存在する可能性があり、6号土坑の下段において1×10mのトレンチを設定し掘り下げた。しかし、遺物は何ら出土しなかった。ここでは、住居、土坑、その他出土の旧石器・縄文時代の石器を紹介する。

出土遺物（図版86-2・87-1、第189・190図）

石 器（第189図1～10） 1は黒曜石製の角錐状石器で、残長6.2cm、幅2.0cm、厚さ1.2cm、重さ11.7gを測る。剥離は主要剥離面から行っている。6号土坑の出土。2は細石刃で、残長1.7cm、幅0.65cm。黒曜石製で、7号土坑の出土。3は縦型の石點で、先端を欠損する。15号住居跡カマド右袖付近の出土。残長4.0cm、幅2.25cm。4は黒曜石製のサイドスクレイパーで、両側縁を刃部とする。残長4.05cm、幅1.85cm。P108の出土。5・6は黒曜石の縦長剥片を素材としたスクレイパーで、両側縁を刃部とする。5がP71の出土で、6は37号住居跡埋土中の出土。

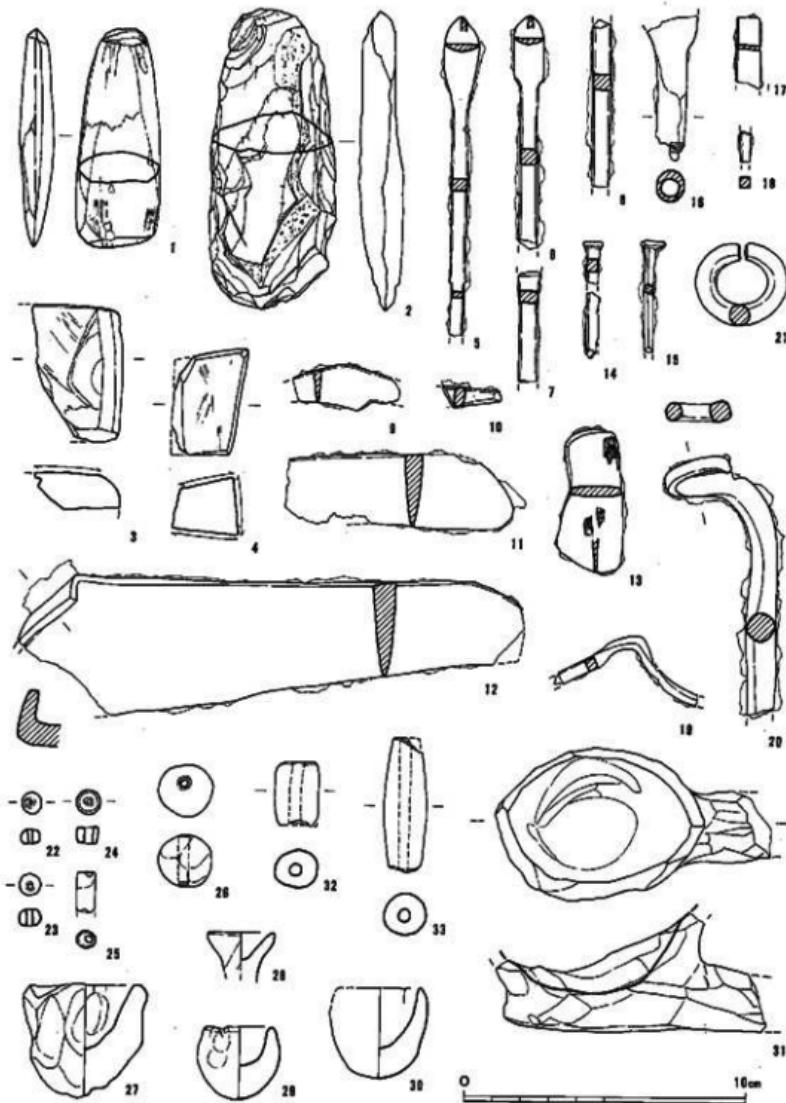
8・9は黒曜石製の石鎌で、長さは8が2.7cm、9は1.72cm、幅は8が2.2cm、9は1.83cmで、重さは8が1.45g、9が0.5gを測る。8は10号小溝、9は杭59南側の出土。10は安産岩製の凹基式石鎌で、P131の出土。長さ2.28cm、幅1.9cm、重さ1.5g。

第190図1は蛇紋岩製の磨製石斧で、長さ7.7cm、刃部幅2.7cm、厚さ1.1cm、重さ40.3gを測る。小型品であり、石鑿として使用したものであろう。刃部は刃こぼれが著しい。21号住居跡埋土中品。2は片岩製の打製石斧で、短冊形を呈する。長さ10.7cm、幅4.4cm、厚さ1.6cmで、重さは105.2gを測る。8号土坑より出土した。



第189図 VII区出土石器実測図 (1/2)

VII区の調査



第190図 VII区出土石器・鉄器・土製品実測図 (1/2)

7. VIII 区の調査

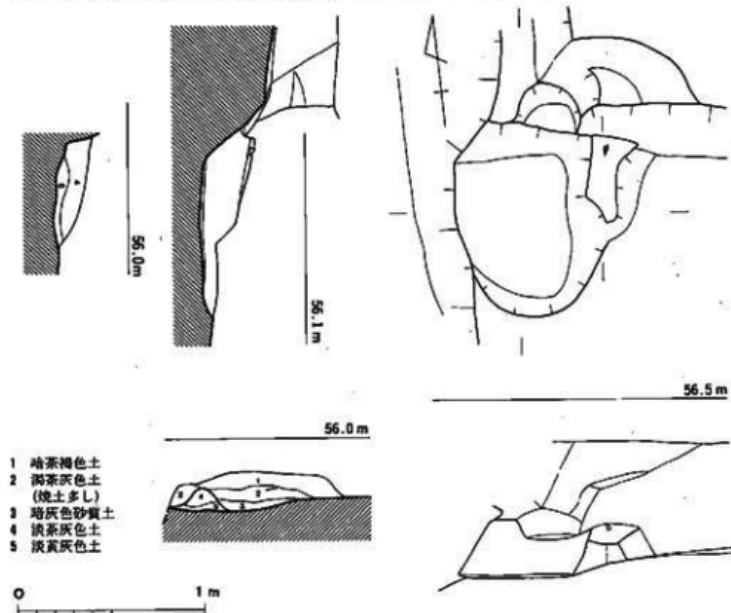
当該区はVII区の西北部にあたる。柿畠によって3段に開削される。6世紀後半代の竪穴住居跡5軒と土坑4基及び弥生時代中期前半の円形住居跡1軒を検出した。

A. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

2号住居跡 (図版91-1, 第192図)

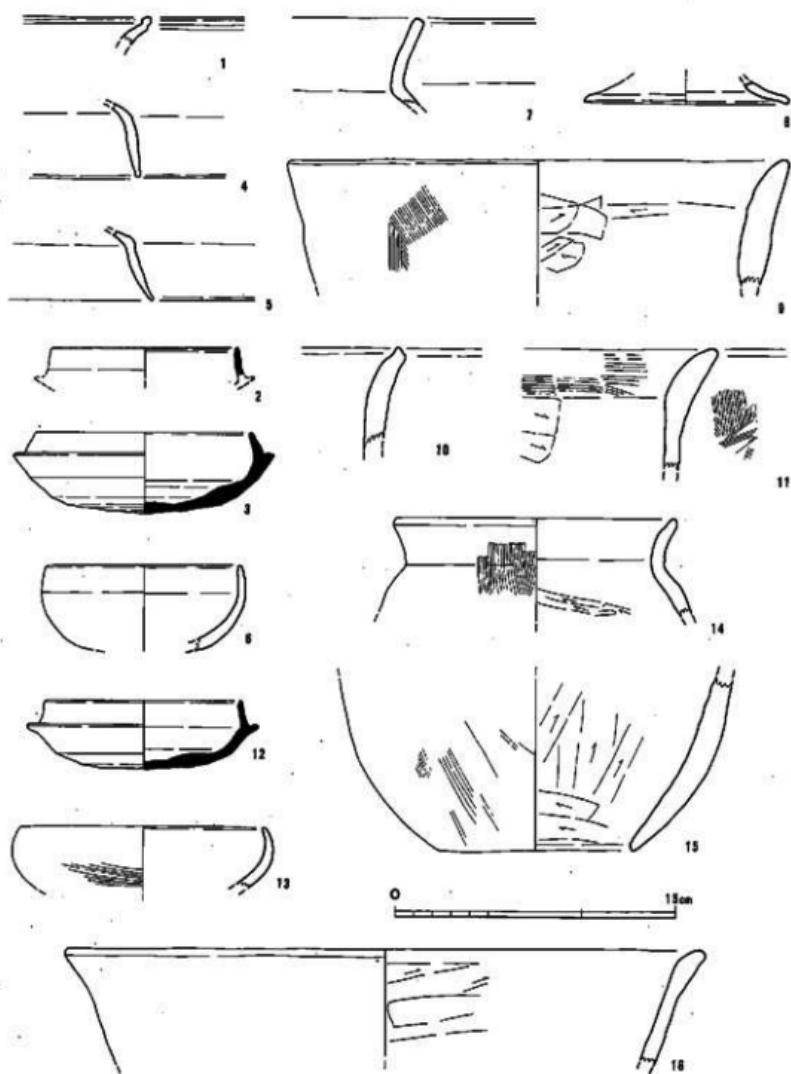
1号住居跡の中央部で、同住居跡を切って位置する。遺存状況は悪く、東壁を残す程度である。東壁長3.6m、壁高0.75mで、北壁は2.6m遺存する。柱穴はP1~4で、径0.25~0.45m、深さは0.4mを測る。柱間はP1~2間1.45m、P1~4間2.2mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。P1~4の中間に焼土がみられた。また、貼床下層にはL字形の掘り込みがある。



第191図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)



第192図 1~3号住居跡実測図 (1/60)



第183図 住居跡出土土器実測図① (1/3)

カマド（第191図）

I-a類で、北壁中央に付設する。遺存状態は悪く、右袖部を留めるにすぎない。整体は住居床面を掘り廻め構築する。袖部には茶灰色土を盛っており、長さ60cm、基部幅50cm、残高22cmを測る。煙道は全く遺存しない。

出土遺物（図版93-1、第193図）

須恵器(12) 壊身の破片資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成良好・堅緻である。復原口径は10.6cm、器高は3.7cmを測る。

土師器(13~16) 13は内済気味に立ち上がる口縁部を有す壺で、内外とも黒漆を塗布している作りの良い土器である。体部外面刷毛。他はヨコナデ調整している。復原口径は13.1cmを測る。

14は壺の胴部上半の破片資料で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は15.1cmを測る。

15・16は瓶で、15は胴部下半、16は上半の破片資料である。16は復原口径が34.4cmを測る大型品である。調整は16の胴部外面が刷毛。内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げている。

3号住居跡（第192図）

1号住居跡床面の北寄りに位置する。1号住居跡床面とは12cm程の段差があり、隅丸方形形状を呈することから別住居と考えた。しかし、柱配列は判然とせず、出土遺物もないことから住居とするには疑問が残る。詳細は不明。

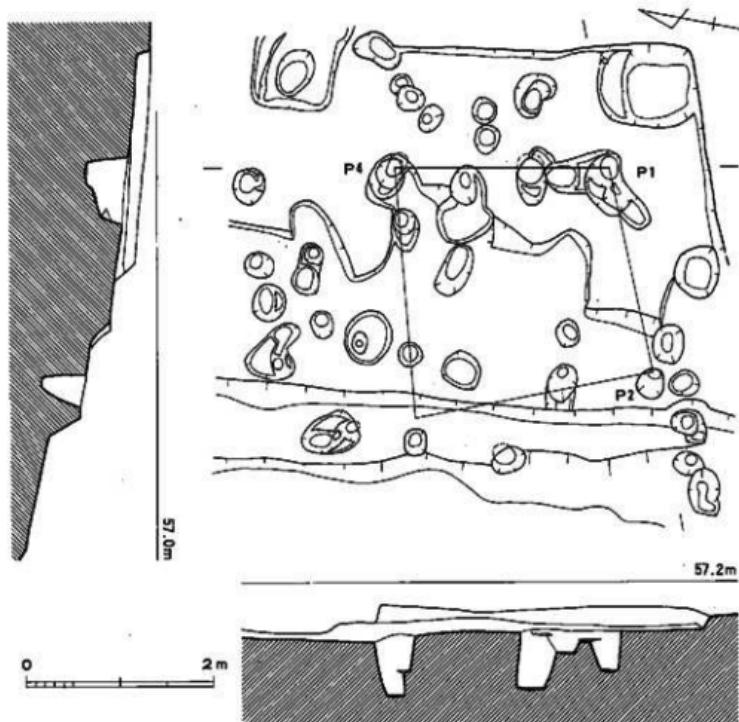
4号住居跡（図版91-2、第194図）

1号住居跡の直ぐ南側で検出した。東壁は長さ3.2mを残す程度であるが、柱配列からみて4.5m程の方形住居になるか。柱穴は4本であろうが、P3を失う。柱間はP1-2間2.24m、P1-4間2.3mを測る。カマドは残存部位においてみられないことから西壁に付設していたものと推測される。埋土上位から須恵器が出土している。

出土遺物（図版93-1、第195図）

須恵器(17~19) 17・18は壺身で、17の外底部にはヘラ記号が施されている。調整は外底部回転ヘラ削り、他は体部内外ロクロヨコナデで仕上げている。口径は17が107cm、18が12cm、器高は17が4.25cmを測る。

19は壺の底部資料で、調整は体部下半回転ヘラ削り、外底部ナデ、内面はロクロヨコナデである。復原底径は12cmを測る。色調は内面灰色、外側黒灰色を呈し、焼成も良好である。



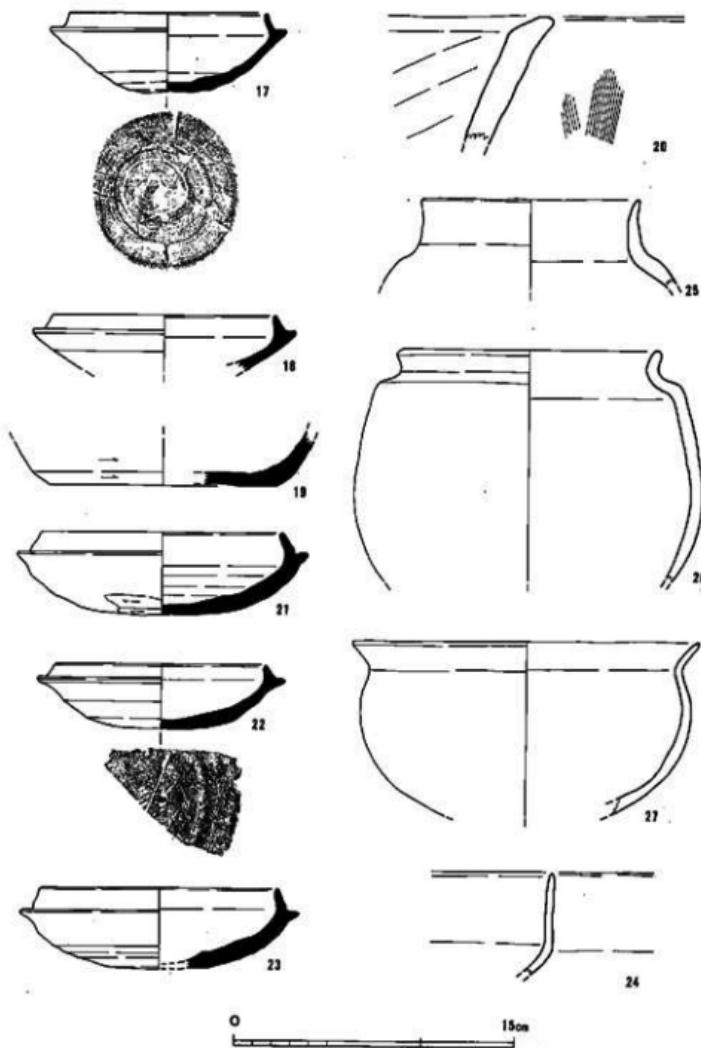
第194図 4号住居跡実測図 (1/60)

土器器(20) 甌の口縁部付近の小破片で、調整は体部外面刷毛、内面ヘラ刷り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。

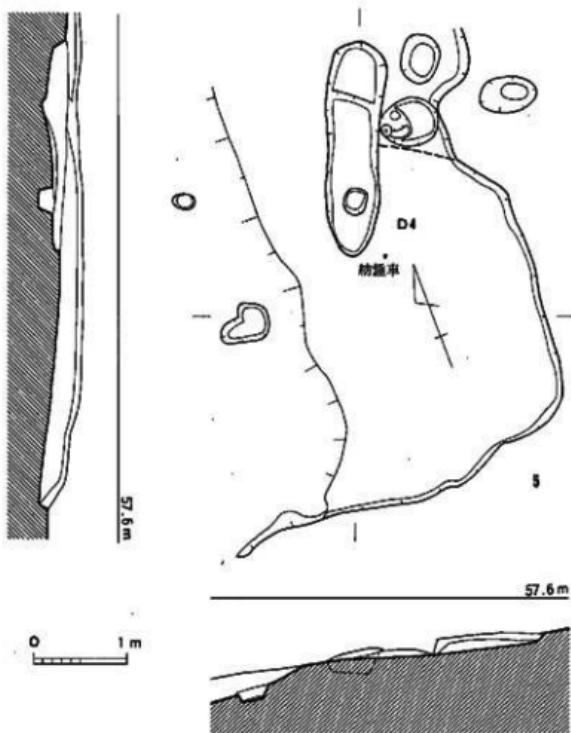
5号住居跡 (第196図)

調査区の中段南側で、4号住居跡の3m南側に位置する。北壁は4号土坑と重複している。東壁を残す程度で、西半部は失う。東壁長3.0m、壁高は80cmの遺存状態である。床面は西側に下がっており、カマド・柱穴もないことから住居とするよりは、竪穴とした方が妥当であろう。床面から須恵器・紡錘車が出土した。

出土遺物 (図版93-1-2, 第195・201図)



第185図・住居跡出土土器実測図② (1/3)



第198図 5号住居跡、4号土坑実測図 (1/60)

須恵器(21) 壁身の資料で、復原口径13cmを測る大型品である。調整は外底部手持ちヘラ削り、他は体部内外クロヨコナデ仕上げである。色調は灰色を呈し、焼成良好・堅緻である。
石製品(第201図3) 3は紡錘車の半欠品で、復原径3.7cm、厚さ1.3cmを測る。断面形は台形を呈し、裏面には放射状に線刻を施している。滑石製である。

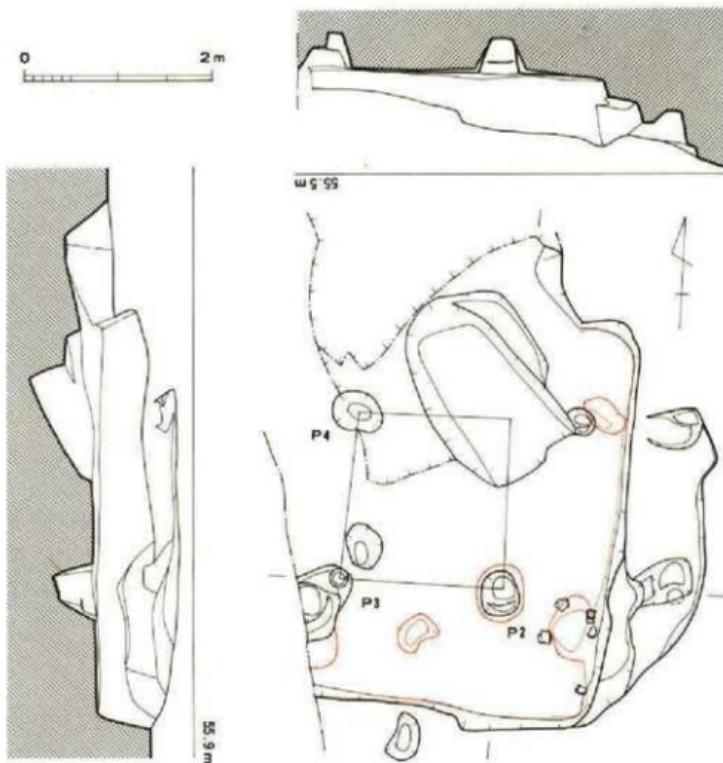
6号住居跡（図版92-1、第197図）

調査区の北西端で検出した住居跡で、VII区9号住居跡の4m北東に位置する。北壁は土取りにより失い、西壁は農道の下に伸びる。東壁長4.36m、壁高0.8mで、南壁は3m遺存する。柱穴はP1を欠くが、方形に配されることから平面形は方形を呈しよう。柱間はP2-3間1.75m、P3-4

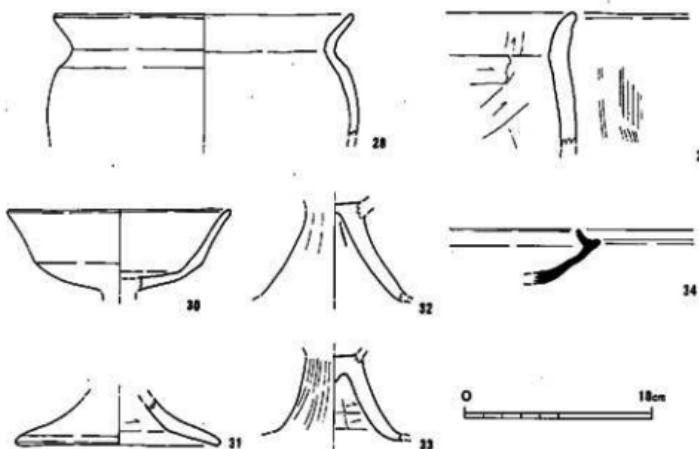
間1.8mを測る。カマドは北・西壁の何れかに付設していたものと推測される。埋土中から土器が出土した。

出土遺物（図版93-1、第195・198図）

須恵器(22・23) 22・23は壺身の破片資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げである。22の外底部にはヘラ記号が施されている。色調は22が内面淡緑灰色、23が淡灰色。外面は22が灰色、23が暗灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。復原口径は22が11.4cm、23が12.8cmで、器高は22が3.5cm、23が4.25cmを測る。



第197図 6号住居跡実測図 (1/60)



第198図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)

土器器(25~33) 24は大型の壺の口縁部付近の小破片で、内外ともヨコナデ調整で仕上げている。色調は淡橙灰色を呈し、焼成も良好である。25・26は肩の張った胴部に立ち気味に腰やかに外反する口縁部がつく短頸の壺である。調整は器面の風化が著しいため不明である。復原口径は25が11.7cm、26が14.2cmを測る。

27は鉢の破片資料で、調整は胴部内外ともナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は18.5cm、器高は現存部で9.3cmを測る。28は甕の胴部上半の資料で、調整は風化が著しく不明である。復原口径16cmを測る。29は壺の口縁部付近の小破片で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は内面黄茶褐色、外面焦茶色を呈し、焼成良好である。

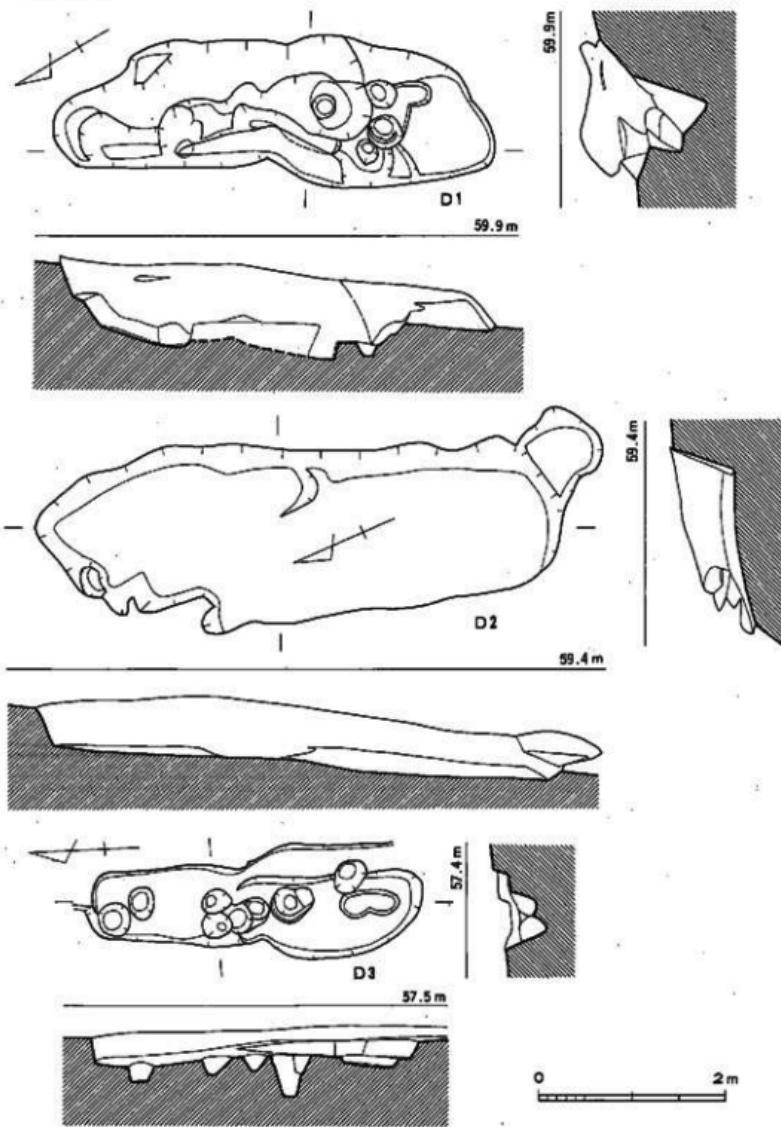
30~33は高壺で、30が壺部、31~33が脚部の破片資料である。30の壺部は体部外面の屈折線が不明瞭なもので、壺部も復原口径12cmと小さいタイプである。脚部の資料はいずれも短いタイプで、32・33の柱状部外面はタテヘラ削り、内面は31・33がヘラ削り、32はさらにナデで仕上げている。31の据部はヨコナデで仕上げており、復原底部径は11cmを測る。

(2) 土 坑

1号土坑 (図版92-2、第199図)

調査区の上段中央に位置し、2号土坑と並存する。平面形は不整長円形を呈し、長軸4.7m、短

IV区の調査



第198図 1~3号土坑実測図 (1/30)

軸1.38m、壁高0.62mを測る。底面にはピットがあり、両端部にはテラスを設けている。長軸方位はN30°Eを示す。図示可能な出土遺物はない。

2号土坑（図版92-2、第199図）

1号土坑の直ぐ西側に位置する。不整長方形を呈し、長軸5.62m、短軸1.75m、壁高0.64mを測るが、西壁は失われる。底面は平坦である。主軸方位はN24°Eを示す。当土坑も図示可能な出土遺物はない。

3号土坑（第199図）

調査区の中段で、4号住居跡の1m東側に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸3.6m、短軸1.2m、壁高0.3mを測る。底面にはピットが多くあるが、当土坑に関連するものは不明。主軸方位はN4°Eを示す。図示可能な出土遺物はない。

4号土坑（第196図）

5号住居跡と重複して位置する。長円形を呈し、長軸2.28m、短軸0.6m、壁高0.23mを測る。北側には幅0.47m、奥行き0.5mのテラスを有する。図示可能な遺物は出土していない。

（3）その他の出土遺物

1号住居跡埋土中出土の土器及び6号住居跡擾乱坑出土の土器他を採り挙げる。

出土遺物（図版93-1、第193・198・200図）

須恵器(2・3・34・36~39) 2・3は坏身の破片資料で、復原口径は2が10cm、3が11.3cm、器高は3が4.3cmを測る。調整は外部回転ヘラ削り、他は内外ロクロヨコナデで仕上げている。3の内底部にはタタキの痕跡がみられる。色調は何れも灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。1号住居跡埋土上位の出土。34は坏身の小破片で、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成も良い。出土地不明。

36・37は体部外面の屈折線が不明瞭な坏蓋の破片資料で、復原口径は36が12.6cm、37が12.9cmを測る。調整は口縁部内外がロクロヨコナデで、37の天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げている。36は中段遺構検出時の出土。37は擾乱坑の出土で、6号住居跡に帰属しよう。

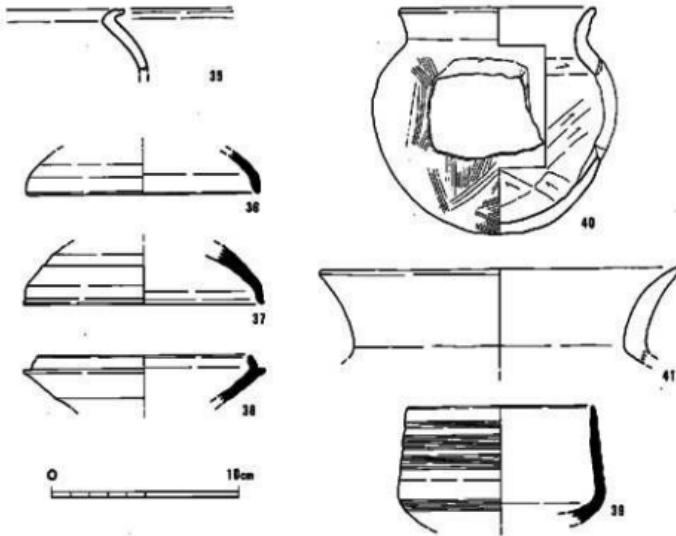
38は口縁部の立ち上がりが低い坏身の破片資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、他は体部内外ロクロヨコナデで仕上げている。復原口径11.4cmを測る。39はマリ形土器で、内外ともロクロヨコナデ調整しており、体部外面にはカキ目を顕著に残している。復原口径は5cm、器高は現

存部で6.3cmを測る。色調は内面淡灰色、外面綠灰色を呈し、焼成良好・堅緻である。38・39は擾乱坑の出土で、6号住居跡に帰属しよう。

土師器(4~11・40・41) 4・5は壺蓋の小破片で、内外ともヨコナデで仕上げている。6は内湾氣味に立ち上がる口縁部を有す小型の壺で、体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデ調整している。復原口径は10.5cm、器高は現存部で4.5cmを測る。色調は淡橙灰色を呈し、焼成も良好である。7は「く」字状に外反する口縁部を有す壺の小破片である。

8は高壺脚部の破片資料で、復原基部径11cmを測る。調整は風化のため不明である。9~11は瓶の破片資料で、調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。10は器面風化が著しいため調整は不明である。復原口径は11が27cmを測る。4~11は1号住居跡埋土中の出土。

40は小型で、胴部には焼成後に穿孔した穴が空いている。調整は胴部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は10.5cm、器高は12.05cmを測る。41は大型の壺で、復原口径は19.3cmを測る。調整は風化が著しく、不明である。40はP9の出土で、41は擾乱坑の出土である。



第288図 摆乱坑他出土土器実測図 (1/3)

B. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（図版90-1・2、第191図）

調査区の中央中段で検出した大型の円形住居跡である。西半部は開削により失われるが、東壁と円形に配される柱穴P1~7により径10mに復原される。柱穴は7個確認したが、10本柱の住居になろう。柱穴は径25~40cmで、深さは12~32cmを測る。また、▲印を付したピットは補助柱穴と考えられ、柱間間隔は3mである。中央には0.8m程の不整形土坑があるが、加熱を受けておらず炉ではない。

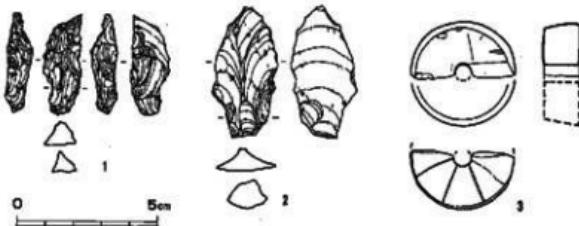
出土遺物は弥生土器よりも土師器片が多く、また、床面にはピットが数多く存在することから他にも古墳時代の住居が存在していた可能性が高い。当住居跡からは弥生土器甕の底部片が出土しているにすぎない。

C. 旧石器・縄文時代の遺物

出土遺物（図版93-3、第193・200・201図）

縄文土器（第193図1・第200図35）1は晩期の精製浅鉢形土器の口縁部小破片である。1号住居跡埋土中の出土。35は晩期精製浅鉢形土器の口縁部破片で、内外ともナデて仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し、焼成も良好な作りの良い土器である。遺構検出時の出土。

石 器（第201図1・2）1は黒曜石の横長剝片を素材とした角錐状石器。長さ3.65cm、幅1.4cm、重さ3.6gで、断面三角形を呈する。4号住居跡埋土上位の出土。2は剝片尖頭器で、黒曜石の縱長剝片を素材とする。長さ4.7cm、幅2.4cm、基部幅1.0cmを測る。3号住居跡の出土。



第201図 7区出土石器・石製品実測図 (1/2)

8. IX 区 の 調 査

当該区はVII区の北側にあたり、防災工事に伴い調査を行った発掘区である。緊急性によりトレンチ調査とならざるを得なかつたが、6世紀後半の竪穴住居跡3軒・土坑1基を検出した。便宜的に上方からA・B・Cトレンチとしておく。

A. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（図版95-1、第202図）

Bトレンチで検出した住居跡で、南北部を失う。当住居は標高67mの高所に営まれており、III区とは20mもの比高差を有する。北東壁長3.7m、壁高はカマド側で0.37m遺存する。柱穴はP1・2の2本を検出したが、P1は北東壁から1.4mの距離にあり、方形住居と仮定すると床面の中央に位置することになる。2本柱の小型住居としておく。柱間は1.75mを測る。西壁側には土器類の集積がみられた。

カマド（図版95-2）

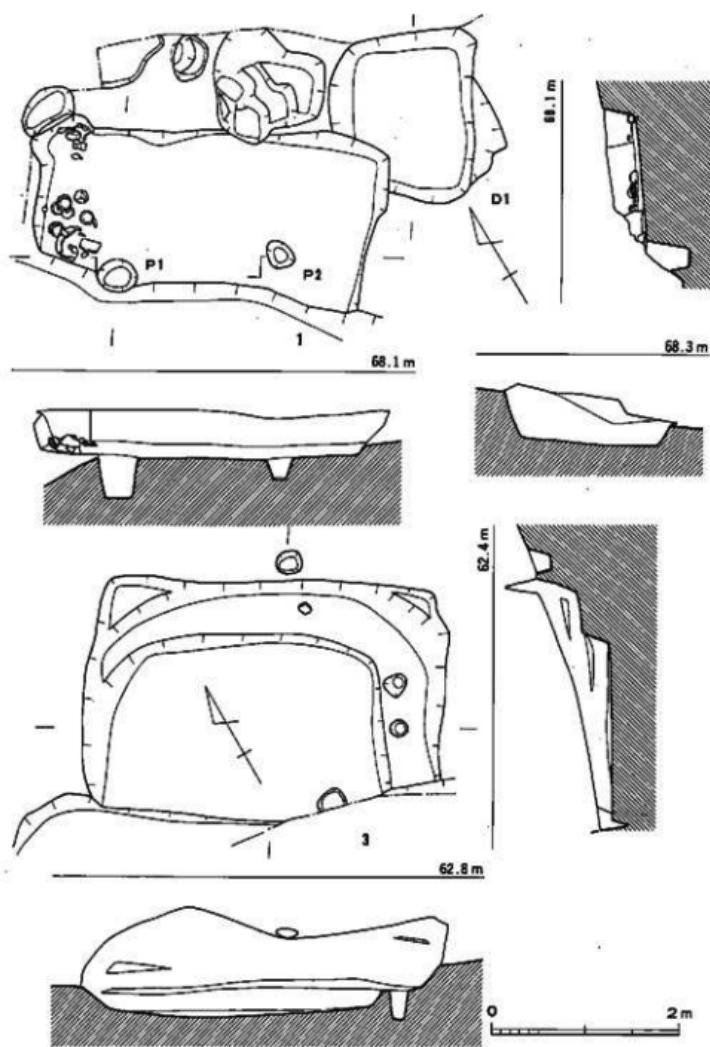
北壁コーナー部に付設するIVa類である。壁体の掘り込みを残すのみで、袖・煙道部は遺存していない。壁体は焚口幅48cm、奥行き35cmを測る。支脚には川原石を埋設しているが、奥壁から8cmと極端に近接する。支脚の前面は加熱によりやや赤変していた。カマド内から土師器が出土している。

出土遺物（図版98、第203図）

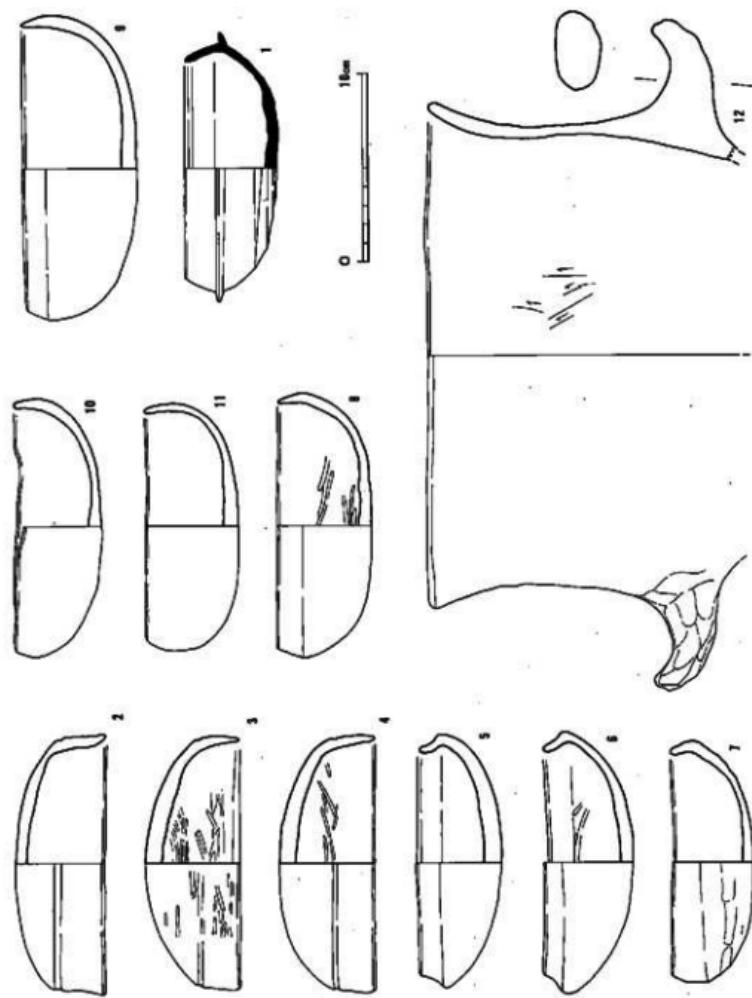
須恵器(1) 口縁部の立上りが高い坏身の資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、他は体部内外ロクロヨコナデ仕上げである。体部上半には灰かぶりが見られる。色調は内面灰黄褐色、外面灰色を呈し、焼成も良好である。口径は11.5cm、器高は5cmを測る。

土師器(2-12) 2~4は不明瞭ながらも体部外面に屈折稜をもつ壺蓋で、3・4は口縁部が内湾気味に立つのに対して、2は外反気味に立つタイプである。調整は2が器面風化のため不明だが、3・4は内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。3の内外面には黒漆の塗布が見られる。いずれも焼成は良好である。口径は2が13.9cm、3が13.2cm、4が14.8cm、器高は2が4.8cm、3・4が5.1cmを測る。

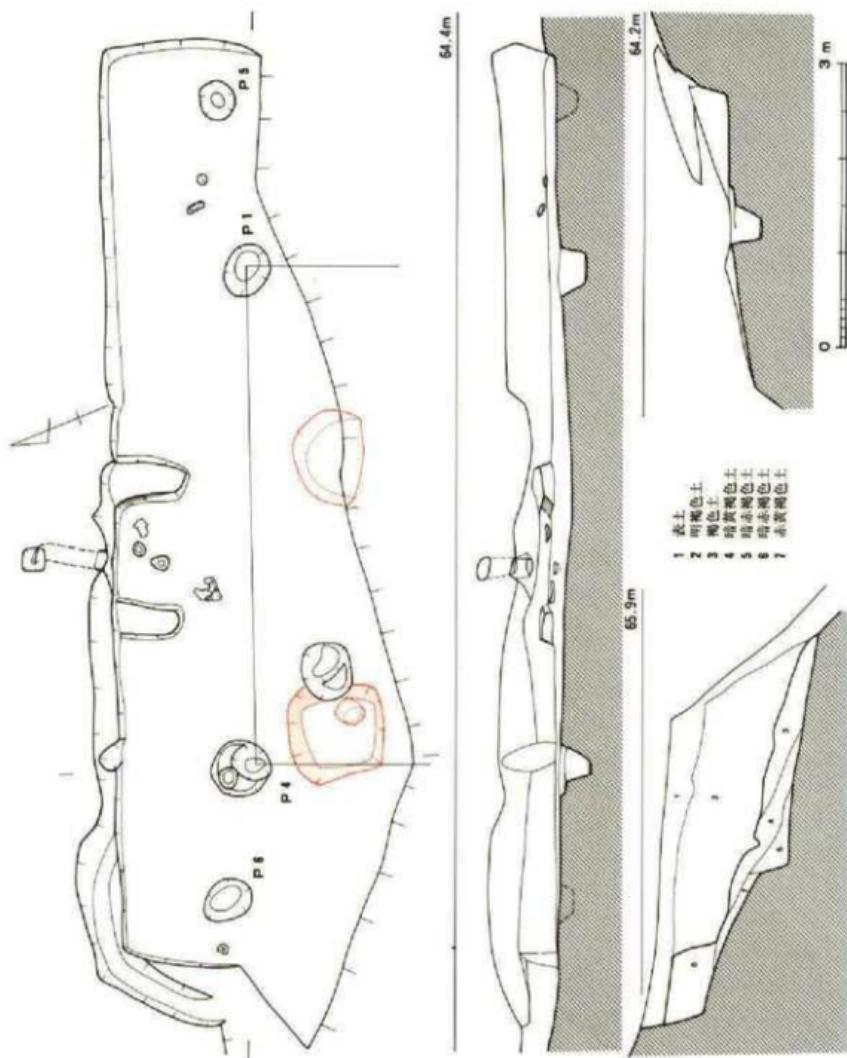
5~11は坏身の資料で、蓋受け部を残すもの(5・6)と蓋受け部の痕跡を残すもの(7~9)、痕跡も無く内湾気味の口縁のもの(10・11)に分けることができる。全体に風化しているもの



第202図 1・3号住居跡、1号土坑実測図 (1/60)



第203図 住居跡出土土器片測図① (1/3)



第204図 2号住居跡実測図 (1/60)

が多く調整手法は明確ではないが、残りの良い6~8からすれば、体部外面ヘラ削りのあとナデ、内面ナデないしはヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げているものが多い。7は内外とも黒漆の塗布が見られる。口径は5が11.8cm, 6・7が11.9cm, 8が13.1cm, 9が15cm, 10が13cm, 11が12.1cm、器高は5が4.6cm, 6が4.8cm, 7が4.4cm, 8が5.1cm, 9が6.1cm, 10が4.7cm, 11が5cmを測る。

12は牛角把手がつく瓶の胴部上半の資料で、胴部外面ナデ、内面ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は内面暗黄茶褐色、外面灰黄褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は26.2cmを測る。

2号住居跡（図版96-1, 第204図）

Cトレント中央で検出した住居跡で、南半部は喪失する。北壁長9.6mを測る大型住居で、壁高は0.46m遺存する。柱穴はP1・4で、柱間はP1~4間5.3mの間隔を有する。P1・4の左右lmには深さ20cm程のビットがあり、補助柱穴と考えられる。また、貼床を掘り下げたところ、P4の南側で1m方形の土坑を検出した。壁面が加熱を受けて赤変しており、炭・焼土がみられた。大型住居の割には出土遺物は少なく、カマド内とP5・6付近から土器が出土したのみ。

カマド（図版96-3, 第205図）

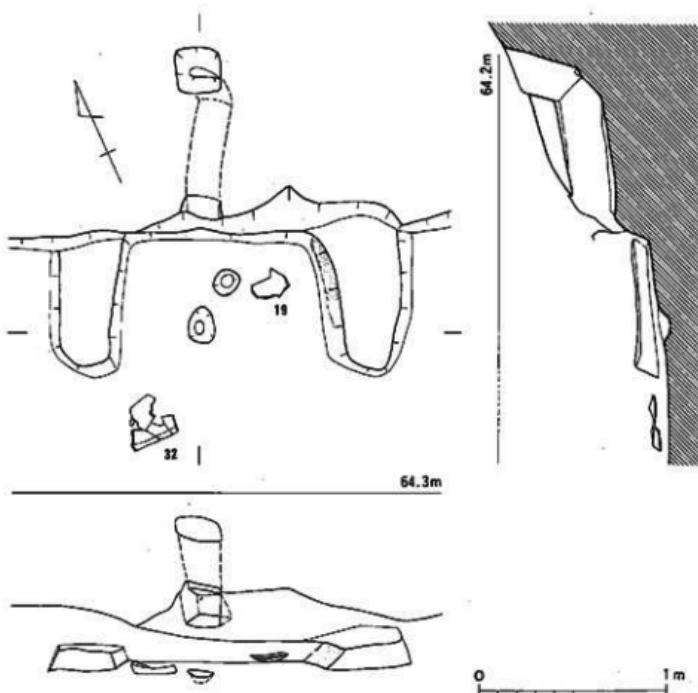
Ia類で、北壁のやや左寄りに付設する。当カマドは大型住居に相応しく、これまた大規模である。袖部は暗茶褐色土で構築しており、焚口幅110cm、奥行き58cmを測る。右袖は長さ85cm、基部幅58cm、残高23cmで、左袖は長さ73cm、基部幅42cm、残高13cmを測る。奥壁から35cmの箇所に支脚の埋設穴があるが、前面はあまり焼けておらず、右袖壁面が良く焼けていた。煙道はトンネル式で、長さ91cm、幅19cmで、煙出し部は20cm方形を呈する。底面は10°の傾斜角で立ち上がる。カマド内からは土器片が出土している。

出土遺物（図版98・99、第206・207図）

須恵器(13~17) 13~15は壺蓋の資料で、調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は13が緑灰色、14・15が灰褐色を呈し、焼成も良好・堅緻である。口径は13が12.1cm、14が復原口径13.8cm、15が14cm、器高は13が4.4cmを測る。13の外面には灰かぶりが見られる。

16・17は壺身の破片資料で、復原口径は16が11.6cm、17が11.8cmを測る。調整はいずれも体部内外ロクロヨコナデで仕上げている。色調は淡灰色を呈し、焼成も良い。

土師器(18~32) 18~20は壺身、21は壺の資料である。18~20は蓋受け部を残すタイプで、21は内清氣味に立ち上がる口縁部をもつタイプの壺である。調整は全体に風化しているものが多く明確ではないが、残りの良い19は体部外面ヘラ削り、ナデ及びヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。19の内外には黒漆の塗布の痕跡を残している。器面は風化しているも



第265図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

の、いずれも作りの良い土器である。復原口径は18が 11.9cm 、19が 11.4cm 、20が 12.6cm 、21が 12.5cm で、器高は現存部で18・19・21が 4.5cm 、20が 4.2cm を測る。

22~28は甕の破片資料で、大・小がある。22は小型の甕で、復原口径 12cm と小さい。口縁部の形状でも若干違いがあり、強く「く」字状に外反する26・27のタイプと立ち気味に緩やかに外反する25・28のタイプがある。調整は脇部外面刷毛のもの(27)とナデのもの(22・23・25・26・28)、内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は27が灰褐色の他はすべて黄褐色を呈し、焼成も良好である。復原口径は25が 13.6cm 、26が 18.6cm 、27が 17.5cm 、28が 20.4cm を測る。

29は柱状部の長い高環で、調整は脚部外面タテヘラ削り、内面ヘラ削り、脇部内外はヨコナ

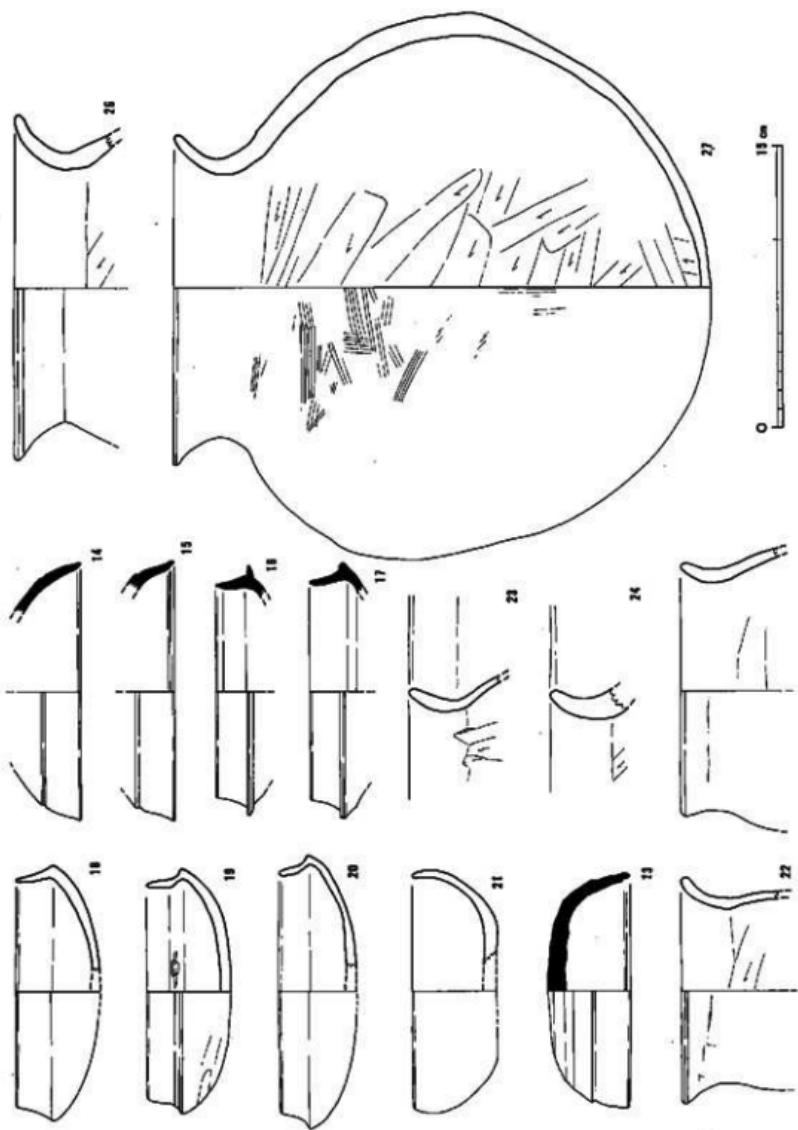
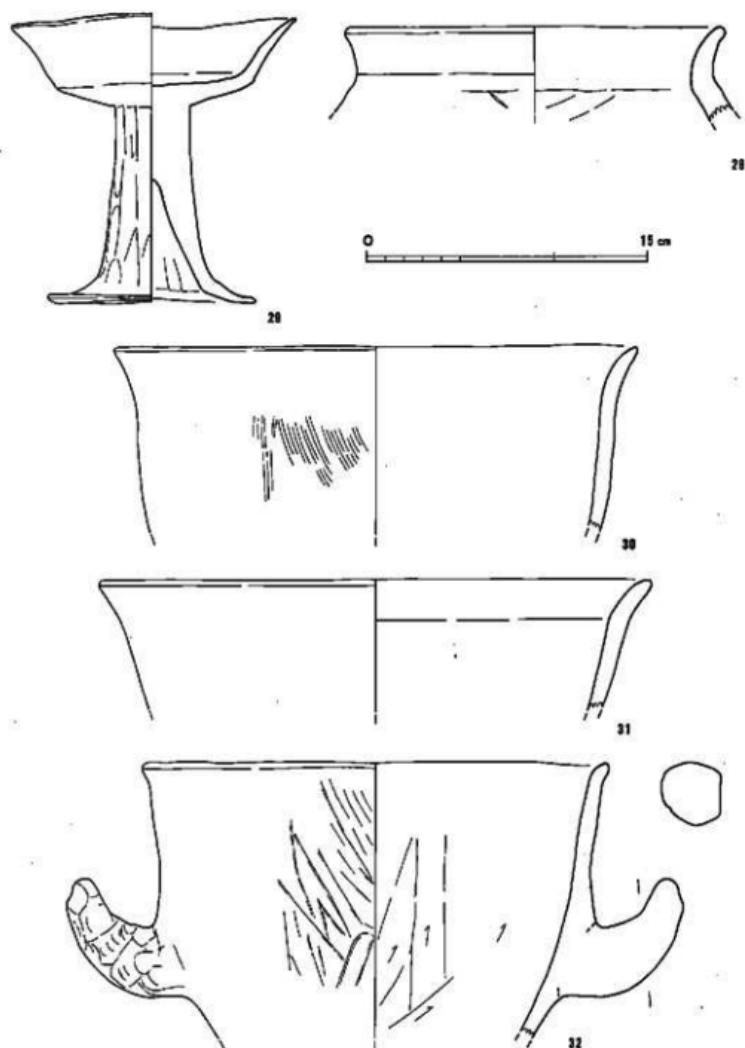
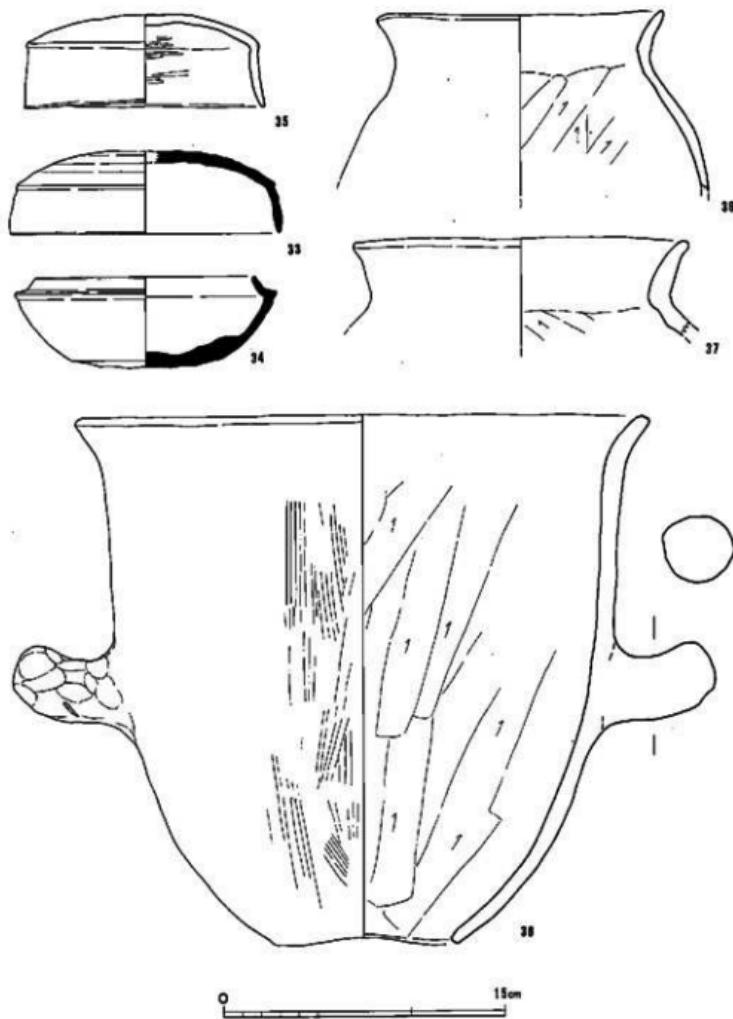


図 206 図 住居跡出土土器実測図② (1/3)



第207図 住居跡出土土器実測図③ (1/3)



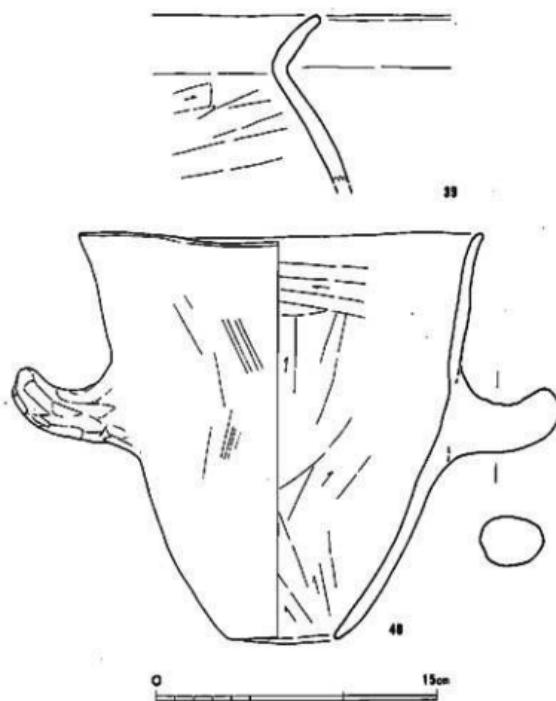
第208図 住居跡出土土器実測図④ (1/3)

テ、坯体部内外はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し、焼成良好である。口径は15.1cm、裾部径は11.1cm、器高は15.4cmを測る。

30~32は瓶の破片資料で、32には牛角把手がつく。31は器面風化が著しいが、調整は胴部外面刷毛。内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は30が28cm、31が29.6cm、32が22.8cmを測る。

3号住居跡（図版97-3、第202図）

Cトレンチの東端部で検出した。南半部は柿畠の開削により失われる。北壁長3.5m、壁高は北壁側で1.1m遺存する。北壁から東壁にかけて奥行き0.5mのテラスを有する。検出当初は平面形が方形を呈することから住居跡としたが、底面には柱穴は存在せず、底面中央がやや下がっ



第202図 住居跡出土土器尖測図⑤ (1/3)

ていることから方形堅穴とした方が妥当と思える。浮いた状態で土器が出土している。

出土遺物（図版99、第208・209図）

須恵器（33・34） 33は体部外面の屈折縫が明瞭な大型の壺蓋で、復原口径14.2cmを測る。調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げている。天井部内面にはタタキ目の痕跡が残っている。色調は緑灰色を呈し、焼成も良好である。

34は壺身の破片資料で、調整は外底部回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は内面灰黄褐色、外面黒灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。復原口径は11.8cm、器高は4.8cmを測る。

土師器（35～40） 35は体部外面に屈折縫をもつ壺蓋で、調整は天井部外面ヘラ削り、内面はヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は橙褐色を呈し、焼成も良好である。口径は12.8cm、器高は4.9cmを測る。

36・37・39は「く」字状に強く外反する口縁部を有す甌の破片資料で、調整は胴部外面ナデ、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデしている。色調は39が淡橙褐色の他は灰黄褐色で、焼成も良い。復原口径は36が13.2cm、37が18cmを測る。

38・40は牛角把手のつく甌の資料で、38は40に比べ寸胴で大型である。調整は胴部外面粗い刷毛で、40は下半をさらにナデ調整、内面はいずれもヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は38が復原で30.6cm、40が21.5cmで、器高は38が28.3cm、40が22cmを測る。

（2）土 坑

1号土坑（第202図）

1号住居跡に南側隅部を切られて位置する。隅丸長方形を呈し、長軸1.84m、短軸1.54m、壁高0.57mの遺存状況である。埋土は暗茶褐色土であり、円礫が出土した。

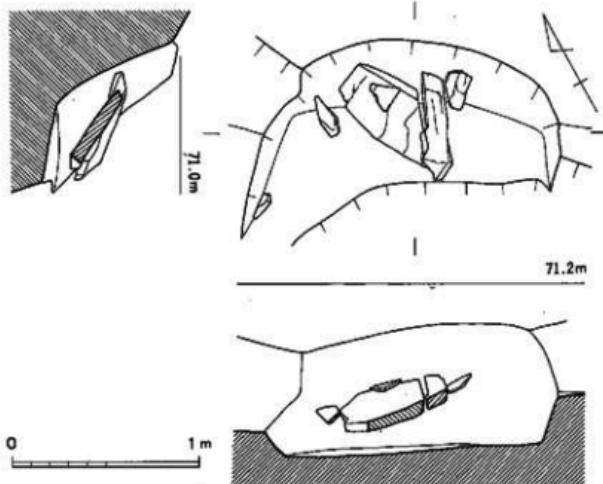
2号土坑（第210図）

Aトレーナーの中程に位置する。南半部は失われるため詳細は不明であるが、北壁幅1.57m、壁高0.63mを測り、浮いた状態で片岩が出土した。また、当土坑の2.5m東側では石室の残骸かと思える土塊があり、6世紀後半の遺物が出土しているが、詳細は不明であり割愛した。

（3）その他の出土遺物

出土遺物（第211図）

土師器（42） 体部外面に屈折縫を有す壺蓋の破片資料で、復原口径13.4cm、器高は現存部で



第210図 2号土坑実測図 (1/30)

4.8cmを測る。調整手法は器面の風化が著しく不明である。色調は内面黄茶褐色、外面淡黄茶色を呈し、焼成も良好である。Cトレンチの出土。

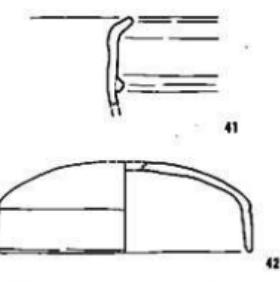
B. 弥生時代の遺物

当該区では、弥生時代の遺構は検出されていないが、2号住居跡付近で弥生土器が出土している。付近に遺構が存在するものと思われる。

出土遺物（第211図）

弥生土器(41) 如意形口縁下に1条の三角凸帯が巡る縁の小破片で、前期後葉に属す。

土師器(42) 体部外面に屈折縫を有す壺蓋の破片資料で、復原口径13.4cm、器高は現存部で4.8cmを測る。調整手法は器面の風化が著しく不明である。色調は内面暗黄茶褐色、外面淡黄茶色を呈し、焼成も良好である。



第211図 表探土器実測図 (1/3)

表2 住居表一覧表

単位:m

区	住居	平面形	規模		面積	住	柱間開間				面積	カマド			群	備考	
			長辺	短辺	段高	(m)	半	P1-P2-P3-P4-P1-(m)	形態	端道	主軸方位						
III	1	長方形	3.25	3.1	0.15	8.5				IV a		N43°E	G	住2を切る			
	2	長方形	(5.6)	4.6	0.28	(25.8)	4	2.2	3	2.4	3.2	7	I a		N12°E	G	住16を切る
	3	長方形	2.9	2.2	0.4	(5.9)	†			1.2			I a		N21°E	G	
	4	長方形?	4.8	(3.3)	0.8		(4)			1.6			I b	端込?	N14°E	G	住3を切る
	5	方形?	4.6	(4.6)	0.25		4	2.6	2.1	2.3	2.4	5.5	III a		N59°W	G	
	6		4.65		0.16								I a?			G	住13を切る
	7	方形?	4.2		0.48		(4)	2.1					I b		N29°E	G	住8・15を切る
	8	長方形	(4.2)	3.4	0.45		4			2.5	2		I a			G	住10を切る
	9	長方形?	3.2	2.25	0.15	5.4	無						IV a		S60°W	G	
	10	長方形?	(4.3)	(3.5)	0.28											G	
	11	不整形	(3.1)	(2.3)	0.35		4	1.7					III a		N40°E	G	住10を切る
	12	長方形	(3.9)	(3.7)	0.3		4	2	2.1	1.6	2.2	3.8	I a		N33°E	G	住5を切る
	13	方形	3.3	2.9	0.28	8.3	2	1.88					I a		N28°E	G	
	14												III a		N14°E	G	
	15				(2.4)											G	
	16	長方形	3.1	2.6	0.1	7.2	4	1	1.55	1.3	1.75	1.86	I a		N30°W	G	
IV	1	隅丸方形	(3.7)	3.9	0.4		4	2.08	1.87	1.98	1.68	3.12	I a		N27°E	G	
	2	長方形	4.45	(4.2)	0.6		4	2.1	1.46	2.05	1.62	3.6	I a		N58°W	G	カマド作り直し
V	1		3.8		0.65		(4)			2.23			I a	トンネル	N17°E	A	1号横開済を切る
	2	方形	4.7	(4.55)	0.45		4	3.25	2.44	3.14	2.42	7.9	I a	トンネル?	N36°E	A	
	3	方形?	5.5	(3.6)	0.7		4	3.45	2.52	3.38	3.15	9.6	II a	端込	N45°E	A	2軒重複するか
	4		4.2		0.36		(4)	2.08	6						A	住5を切る	
	5	方形?	4.5	(4.15)	0.55		4	2.3	2.78	2.25	2.05	5.2	III a		N79°W	A	
	6	方形?	3.1	(1.5)	0.25		4	1.84	1.5	1.74	1.38	2.55	I a		N57°W	A	
	7		2.7		0.3		2			1.3			III a	端込	N44°E	A	
	8	方形	4.25	(3.9)	0.7		4	2.27	2.1	2.22	1.75	4.1	I a		N35°W	A	外周溝あり
	9	方形?	(2.6)		0.2		(2)	1.16								A	
	10		3.7		0.22		(4)			2.3			I a	端込?	N24°E	A	
VI	1	長方形	3.85		0.65		無						I a		N36°E	C	
	2				0.32		無?						III a		N37°E	B	
VII	1	方形	5.15	(3.7)	0.45		4	2.55	2.52	2.5	2.48	6.25	I b	端込	N36°E	C	
	2	隅丸方形	2.6	2.45	0.6								IV a		N20°E	E	
	3		4.16		0.28		(4)	2.5		2.5			I b	トンネル?	N26°E	E	
	4		3.35		0.26										E	横1に切られる	
	5	長方形	(2.7)	(2.45)	0.78		2	1.6							E		
	6		(3.9)		0.3										E	縦2と重複	
	7	長方形?	3.9	(2.9)	0.42		(4)			1.9			I a	端込?	N26°E	D	
	8		3.3		0.5		(4)			2.4					D		
	9	方形	5.28	5.1	0.6		4	2.7	3.18	2.82	3.16	8.72	I b		N3°E	F	逆直し
	10	長方形	(2.4)	2.1	0.4										F		
	11	長方形?	4	3.1	0.56		4	2.2	1.38	2.35	1.8	3.7	II b	端込?	N10°W	F	
	12	隅丸方形	2.5	2	0.3		無								F	壁穴が要当	
	13	長方形?	4.75	(0.15)	0.22		4	2.8	1.8	2.8	1.75	4.87	I b		N11°W	F	
	14	長方形?	(4)	3.9	0.5										G	横3に切られる	
	15	長方形?	3.95	(1.5)	0.5		4	1.35	1.8				I a		N9°W	F	
	16	方形?	(4.3)	(3.6)	0.55		4	1.5	1.7	1.68	1.95	2.9	II a		F	住9を切る	

区	住戸	平面形	規模		柱	柱間開拓		規模	カヤド			解	考		
			長辺	短辺		柱高(m)	柱間		形器	埋込	主軸方位				
	17	方形	3.2	3.1	0.72	2	1.85		I b	埋込	N32°E	D			
	18		3.12	3	0.68	無			I a		N29°E	D	柱24を切る		
	19	長方形	3.4	3.26	0.52	4	2.15	1.6	2.35	1.68	3.6	II b	S84°E	D	
	20	長方形	3.75	3.14	0.45	4	1.55	1.87	1.44	4.9	2.8			G	
	21	扇九方形	2.5	2.15	0.12									G 穴穴が妥当	
	22	長方形?	0.69	0.69	0.12									G 穴穴が妥当	
	23	方形	3.05	2.9	0.32			1.48	1.86					G	
	24	長方形	2.4	2.1	0.5	無			I b	埋込?	N66°W	D			
	25	不整形	2.75	2.6	0.44	無?			I a			D			
	26		2.6		0.5	無?						D			
	27	長方形	4.4	0.9	0.45	4		2.1	2.6	III b	埋込	N22°E	D		
	28		5.15		0.4	(4)	2.6						D		
	29	長方形	4.3	(3.3)	0.36	4	1.3	1.96	1.2	2.04	2.48	I b	N38°E	D	柱30を切る
	30		3.4	(1.45)	0.3	4							D		
	31	方形	(4.35)	(3.2)	1.5	4	2.3	2.12	1.86	2.1	4.4			D	
	32	長方形?	6.6	(4.45)	0.92	4	2.8	3.05	2.8	3.1	8.4	I a	N72°W	D	小窓11に切られる
VII	1	円形	(10)		0.3	10							F	弥生時代	
	2	方形?	3.6		0.75		1.45	2.42	1.25	2.2	3.47	I a		F	柱1を切る
	3				0.12								F	詳細不明	
	4	方形?	(3.2)		0.16	4	2.24		2.3				F		
	5				0.12								F	空穴が妥当	
	6	方形	4.36	(3)	0.8	4		1.75	1.8				F		
IX	1	方形?	3.7	(1.7)	0.37	2	1.75			IV a		N1°W	E	D1を切る	
	2	方形?	9.6			(4)				I a	トンネル	N24°E	E		
	3		3.5	(2.3)	1.1								E	空穴が妥当	

参考: 無一柱柱穴、埋込一振り込み式煙道、トンネルトーンネル式煙道

VI 自然科学的分析

1. C¹⁴年代測定結果報告

外之限遺跡III区の竪穴住居跡から出土した炭化材について、社団法人日本アイソトープ協会に依頼して年代測定を行った。その結果は、下記のとおりである。

協会コード	依頼者コード	遺構番号	C ¹⁴ 年代
N5372	KOF 5-1 №9	III区11号住居跡	1760±75yB.P. (1710±75yB.P.)
N5373	KOF 5-2 №10	III区13号住居跡	1760±90yB.P. (1710±75yB.P.)

年代はC¹⁴の半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのばる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管ガス封入圧力および温度の読み取り誤差から計算されたもので、C¹⁴年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は95%となります。なお、C¹⁴年代は必ずしも真の年代とひとしくない事にご注意下さい。

（平成元年3月7日付の回答報告書）

上記のC¹⁴年代測定結果を実年代に直すと次のようになる。

III区11号住居跡……… A.D. 115～(190)～265

III区13号住居跡……… A.D. 100～(190)～280

外之限III区11・13号住居跡のC¹⁴年代測定結果は、両住居跡が2世紀末を前後する頃のものという年代を導き出したが、両住居跡はカマドを有する4本柱の住居跡であり、須恵器・土師器が出土している。土器年代からすると6世紀半の時期であり、C¹⁴年代とは咀嚼をきたす結果となつた。

2. 外之限遺跡III区住居跡カマドの地磁気年代

鳥根大学総合理工学部 時枝 克安
鳥根職業能力開発短期大学校 伊藤 崇明

1 地磁気年代測定法の仕組

地磁気は一定ではなく、周期の短いものから長いものまで様々な変動をしているが、これらの変動の中でも、時間が10年以上経過すると顕著になるような緩慢な変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代測定法で時計の働きをするのはこの地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の変化曲線に年代を目盛って、地磁気の方向から年代を読みとろうとするものである。しかし、例えば、ある住居跡のカマド跡の操業年代を知ろうとするとき、カマドが使用された時の地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては年代を知ることはできない。実は、カマドの操業時の地磁気の方向は、カマドの焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順は、まず、カマドの焼土の熱残留磁気を測定し加熱時の地磁気の方向を求めて、次に、この方向に近い点をこの地域の地磁気永年変化曲線上に求めて年代目盛りを読みとることになる。

地磁気中で粘土が焼けると、粘土中の磁性鉱物（磁鐵鉱等）が粗い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度（磁鐵鉱では575°C）以上に再加熱されないかぎり数万年以上時間が経過しても変化しない。キュリー温度以上に再加熱された場合には、それまで保持していた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、新たに加熱時の地磁気の方向を向いた残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方向を正しく記憶することになる。それゆえ、年代既知の焼土を利用して、その熱残留磁気から過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかをあらかじめ測定しておけば、このグラフを時計の目盛りとして、焼土の最終焼成年代を推定できる。この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので（註1）、この方向が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代測定法の詳細については、中島による解説（註2）が参考になる。

2 地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、そ

の場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが挙げられる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。

第二に、「地磁気年代は地磁気変動という物理現象を通じて推定されているので土器編年に左右されない」と思われるがちであるが、これは誤解であり、地磁気年代と土器編年には密接な関係がある。すなわち、少数の年代定点をのぞくと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れた地磁気年代は土器編年の影響を強く受けており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代定点が少ないのでやむを得ない。しかし、地磁気年代測定法は、地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である点、相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の性格をもっている。

3 遺跡と試料

外之限遺跡（福岡県朝倉町）III区の4軒の1・7・11・13号住居跡カマドから熱残留磁気の方向を測定するための定方位試料を採取した。1・7・13号住居跡の考古学的年代は出土した土器から6世紀後半と推定されているが、7号と13号では年代推定の根拠となる土器が少ない。11号住居跡は土師器2片より6世紀後半のものと推定されている。11・13号住居跡は木材あるいは茅の炭化物を多量に出土することから焼失家屋跡と考えられる。これら両住居跡のカマドは火災による再加熱を受けていることに注意しなければならない。

地磁気年代推定用の定方位試料の採取状況を述べると、1号住居跡カマドでは、奥壁（高さ～30cm）が約5cmの厚さにわたって焼けていたが、中央部は明らかに元の位置から動いていたのでここを避け、奥壁の南北両側面から各々、9個と16個を採取した。7号住居跡カマドでは床面焼土から30個、11号住居跡カマドでは比較的焼けのよい縁の部分（長さ～35cm、高さ～15cm、厚

住居跡とカマドの焼土の特徴、試料数

遺構	住居跡とカマドの焼土の特徴	試料数
1号住居跡カマド	壁面焼土（高さ～30cm）	25
7号住居跡カマド	壁面焼土、土器僅少	30
11号住居跡カマド	縁部焼土（高さ～15cm）、焼失家屋跡、木炭片多數	12
13号住居跡カマド	壁面焼土、土器僅少、焼失家屋跡、木炭片多數	14

さ～5cm)から12個、そして13号住居跡カマドでは床面焼土から14個を採取した。各住居跡とカマドの焼土の特徴、試料数を次表にまとめる。

定方位試料の採取法としては、立方体状に加工した焼土塊に小プラスチックケース(24×24×24mm)を被せ隙間を石膏で充填する方法をとっている。また、試料の方位はプラスチックケース上面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定した。

4 測定結果

試料の残留磁気の方向と強度をスピナー磁力計で測定した。データの描い方が全体に思わないでの、交流消磁(50,100エールステッド)を行いデータのまとまりの改善を図った。交流消磁というのは、交流磁場中で試料を回転させながら磁場強度はある値Hから零まで滑らかに減衰させ、磁性粒子の磁化方向を乱雑化することによって、抗磁力がHよりも弱い二次的磁化成分を消去することを言う。1・7・11・13号住居跡の各カマドの残留磁気の方向を図1～4に示す。図において、(a)は消磁前、(b)は消磁後(50エールステッド)の結果である。なお、いずれのカマドについても、100エールステッドの交流消磁では、残留磁気の方向がかえって乱れたので、データの表示を省略する。

1号住居跡カマドの残留磁気の方向(図1)は、分散の小さいグループと大きいグループの2群に分かれ。50エールステッドの交流消磁をすると、分散の小さい群ではデータの集中度が増加しているが、分散の大きい群では顕著な変化がない。分散の大きい群はすべてカマドの南側面で採取された試料のデータである。これらのデータは焼土の最終焼成時に攪乱を受けたと判断できるので省略する。分散の小さい群の交流消磁のデータのうち、さらによく揃っている円内のものを選び、これらをカマドの最終焼成時の地磁気の方向として、カマドの地磁気年代を求めるところにする。7号住居跡カマドのデータ(図2)は、50エールステッドの交流消磁をすると、伏角の深くなる方向へ移動しているが、データの集中度はあまり改善されない。100エールステッドの交流消磁をするとデータのまとまりはかえって悪くなつた。比較的まとまりのよい50エールステッドの交流消磁のデータから、とくに分散の大きいものを省略して、参考値として円内のデータの平均方向を計算することにする。1・7号住居跡のカマドについて選択した円内のデータの平均伏角(I_m)、平均偏角(D_m)、Fisherの信頼度係数(k)、95%誤差角(θ_{95})、利用試料数/採取試料数(n/N)を次表にまとめる。なお、 k の値が大きく、 θ_{95} の値が少さいほど、残留磁気の方向がよく揃っていることを意味する。

交流消磁(50エールステッド)後の残留磁気の平均方向と誤差の目安

遺構	Im	Dm	k	θ_{av}	n/N
1号住居跡カマド	43.82度	-8.10度	2087	1.06度	10/25
7号住居跡カマド	54.41	-8.63	37	5.18	22/31
11号住居跡カマド	データの分散が大きく有意の平均なし				
13号住居跡カマド	データの分散が大きく有意の平均なし				

5 地磁気年代の推定と考察

図5は広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線(註3)上に、外之限遺跡1・7号住居跡のカマドの残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の精円)を記入したものである。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を地磁気永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の精円から同様にして推定できる。上記の方法で求めた1号住居跡カマドの地磁気年代候補値はA.D.490±10またはA.D.50±10となるが、6C後半という1号住居跡の土器年代に近い値(A.D.490±10)を外之限遺跡1号住居跡カマドの地磁気年代として選ぶ。7号住居跡についてはデータの乱れがかなり大きく、95%誤差角が5.18度にも達するので、結局、意味のある地磁気年代を推定できることになる。今回得た地磁気年代の値を次表にまとめる。

外之限遺跡住居跡カマドの地磁気年代

遺構	地磁気年代
1号住居跡カマド	A.D.490±10
7号住居跡カマド	データの分散が大きく推定できない
11号住居跡カマド	データの分散が大きく推定できない
13号住居跡カマド	データの分散が大きく推定できない

1号住居跡の地磁気年代として、土器年代(6C後半)よりも約100年も古い結果を得たことになるが、11号住居跡については出土した2片の土師器から6C後半という1号住居跡の地磁気年代と重なる年代が推定されているので、住居跡の相互関係の解釈次第でA.D.490±10という年代値も妥当ではないかと考えている。

最後に、試料採取にあたってお世話をなった福岡県教育委員会の伊崎俊秋氏はじめとする皆様に厚く感謝します。

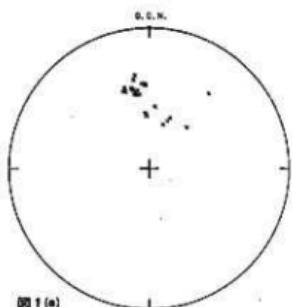


図1(a)

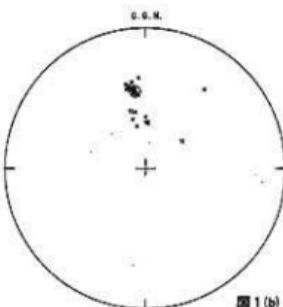


図1(b)

図1 外之原道路1号住居跡カマドの残留磁気の方向
(a)消磁前, (b)消磁後(50 エールステッド)

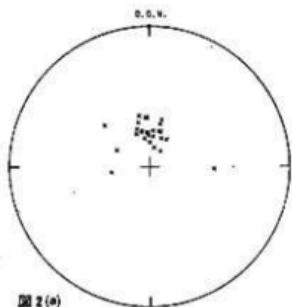


図2(a)

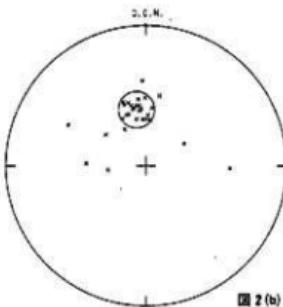


図2(b)

図2 外之原道路7号住居跡カマドの残留磁気の方向
(a)消磁前, (b)消磁後(50 エールステッド)

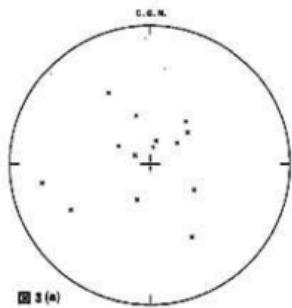


図3(a)

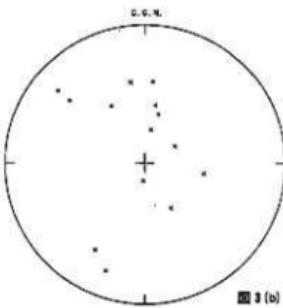


図3(b)

図3 外之原道路11号住居跡カマドの残留磁気の方向
(a)消磁前, (b)消磁後(50 エールステッド)

第212図 热残留磁気測定関係図①

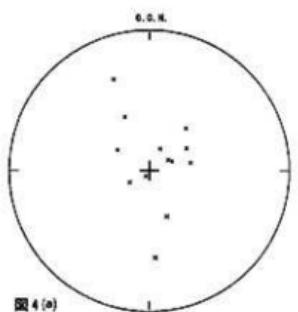


図4(a)

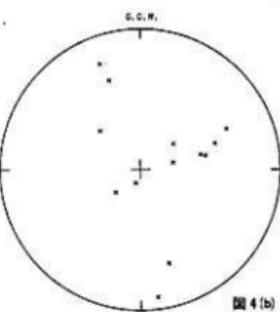


図4(b)

図4 外之隈遺跡17号住居跡カマドの残留磁気の方向
(a)消磁前, (b)消磁後 (30 エールステッド)

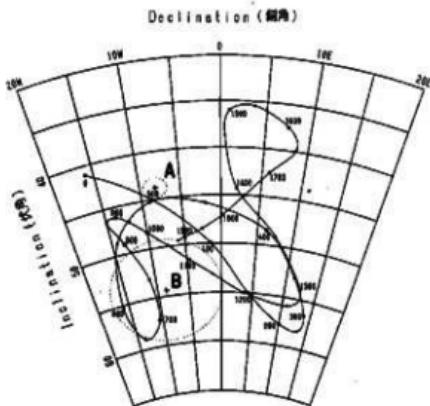


図5 外之隈遺跡1・7号住居跡カマドの残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲
(点線の経路)及び西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化
A: 1号住居跡カマド B: 7号住居跡カマド

第213図 热残留磁気測定関係図②

註1 広岡公夫 「考古地磁気および第四紀古磁気の最近の動向」『第4紀研究』 15,200-203 1978

2 中島正志・夏原信義「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9 ニューサイエンス社

3 註3に同じ

3. 朝倉町外之隈出土青銅鏡の鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館 斎藤 努

1 はじめに

福岡県教育委員会伊崎俊秋氏より依頼のあった、朝倉町外之隈遺跡Ⅰ区1号墓およびⅡ区2号墓出土の青銅鏡3点について鉛同位体比を測定したので報告する。

2 試料

青銅鏡試料は、いずれも鏡片として提供されたものを分析に用いた。

3 方法

国立歴史民俗博物館において最近新たに開発された「高周波加熱分離—鉛同位体比測定法」(註1・2)を用いて分析を行った。この方法によれば、従来法に比べ、低プランクで迅速(鉛の分離に要する時間:約15分)に、高精度な測定を行うことが可能である。

4 結果

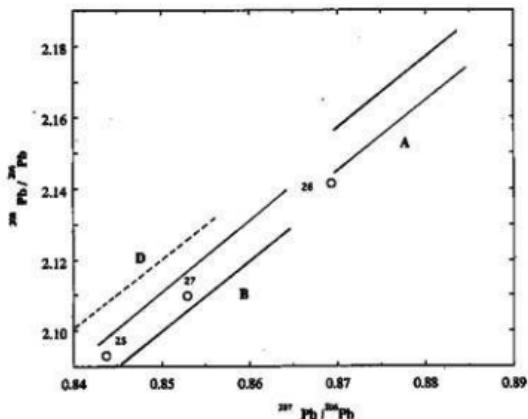
鉛同位体比の測定結果を資料番号、分析番号、資料の種類、出土地とともに表1に示した。分析番号は当博物館で独自につけたものである。資料の種類は、測定依頼時に付記されてきたもの記入してある。図中に示した番号は、この表3の資料番号である。測定結果は、これまでに報告されている東アジア青銅器のデータと比較するために、馬淵・平尾たちの方法(註3・6)に準じて図示した。ここでは、縦軸に $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、横軸に $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ をプロットする「A式図」を用いた。この表示法によれば、弥生時代～平安時代における青銅器の鉛同位体比の変遷を、下記のように示すことができる(註5・6)。すなわち、

- A: 弥生時代に将来された前漢鏡の範囲 (華北の船)
- B: 後漢・三国時代の舶載鏡の範囲 (華中～華南の船)
- C: 日本產船の範囲
- D: 弥生時代に将来された多鋸細文鏡、細形鏡剣などの範囲 (朝鮮半島の船)

図1中の記号A～Dは、これらに対応する。

第214図に示したとおり、重圓連弧文鏡(資料26)のデータは領域AとBの間にプロットされているが、これは、連弧文鏡や方格規矩鏡、線形式獸帶鏡など前漢末記ないし後漢初期から作られたとされる鏡のデータがA～Bの領域に広く分布するという従来の報告と整合する(註3・4)。他の2点の青銅鏡(資料25・27)は、後漢中期以降のグループである領域Bにグルーピング

される。



第 214 図 外之隈出土青銅鏡の鉛同位体比

表 3 外之隈出土青銅鏡の鉛同位体比

資料番号	資料	出土地	分析番号	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{209}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{210}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{211}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$
25	圓文帶神獸鏡	明倉町外之隈 I 区 1 号墓	B725	0.8436	2.0932	18.615	15.704	38.966
26	重圓連弧文鏡	" II 区 1 号墓	B726	0.8693	2.1415	17.895	15.557	38.323
27	飛禽鏡	" II 区 2 号墓	B727	0.8529	2.1098	18.341	15.644	38.697

註 1 斎藤 努・田口 勇：日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集，91（1994）

2 Tsutomu SAITO : The Third International Conference on the Beginning of the Use of Metals and Alloys, 40 (1994)

3 馬淵久夫・平尾良光：MUSEUM, 370, 4 (1982)

4 馬淵久夫・平尾良光：MUSEUM, 370, 16 (1982)

5 馬淵久夫・平尾良光：考古学雑誌, 73 (2), 199 (1987)

6 馬淵久夫・平尾良光：考古学雑誌, 75, (4) 385 (1990)

V 総括

1. 外之限遺跡の集落について

はじめに

調査時点では、便宜的にI～IX区に区分して調査を行ったが、III～IX区において6世紀後半を主体とする竪穴住居跡が70軒（竪穴かとした分を除く）、掘立柱建物跡が4棟検出された。V～VII区間は、丘陵の急傾斜面にあたり遺構は存在しないが、両区検出の住居跡は時期的にも一連の集落として捉えられる。

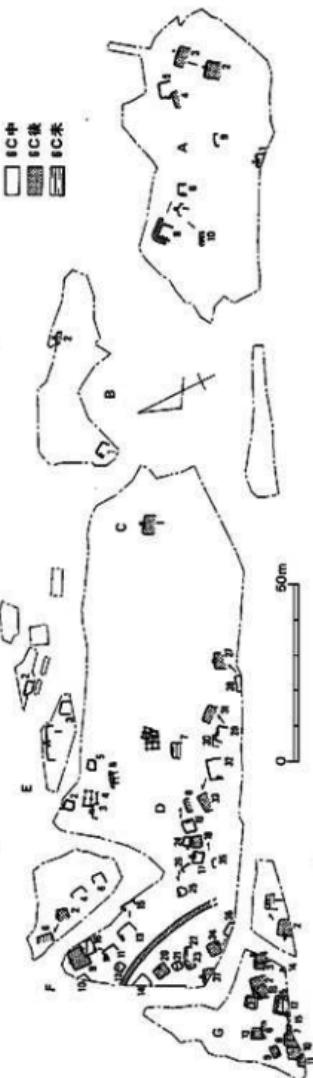
竪穴住居は丘陵の急斜面及び裾部（標高46～72m）にかけて築造される。この様な集落立地は思いがけないものであった。また、外之限遺跡の集落自体は6世紀中～末の約半世紀という短期間で終焉してしまう。

本項では、外之限遺跡の特異な集落立地と集落の盛衰、この二つの問題について若干考察を加えてみたい。

（1）竪穴住居の形態

本跡の住居形態は、基本的に3～6mの方形ないしは長方形プランに4本の主柱穴を配し、北東または北西壁の何れかにカマドを付設するタイプである。南半部を失い、床面積を測り得ない住居が大半を占めるが、残存する壁長により特大・大・中・小・極小型住居に分類できる。

また、住居壁が残っている52軒について壁長の平均値を求めたところ4.0mであった。



第215図 外之限遺跡集落配置図

特大型……壁長9m以上の規模；IX区住2号—〈1軒〉
大型……壁長5~7mの規模；V区住3号, VII区住1・9・32号他—〈7軒〉
中型……壁長4.1~5m未満の規模；III区住4号, V区住2号, VII区住13号他—〈19軒〉
小型……壁長3~4.1m未満の規模；III区住1号, V区住6号, VII区住11・19号他—〈28軒〉
極小型……壁長3m未満の規模；III区住3号, V区住7号, VII区住2・24号他—〈11軒〉

ここで注目されるのが、壁長9.6mを測るIX区2号住居跡で、極小型住居の3.5倍もの壁長を有する。外之限遺跡のなかでは突出し、同時期の他遺跡の竪穴住居にあっても大型の部類に入る。大型住居は7軒の検出で、何れも4本の柱穴を配する。中型住居は19軒存在し、基本的に4本の柱穴を配している。小型住居は28軒存在し、本跡の竪穴住居の主体をなす。4本柱の住居跡15軒、2本柱の住居跡6軒、無柱穴の住居跡4軒と4本柱の住居跡が主流を占めるが、柱穴は住居壁側に寄っている。極小型住居は11軒の検出であるが、柱穴を4本配したものは1軒もなく、2本柱（3軒）もしくは竪穴部に柱穴がみられない無柱穴の住居（5軒）である。

筆者はかつて、住居跡竪穴部の縮小化とカマド煙道部の伸長化現象との相関関係を両者は反比例するものとして、住居形態は6世紀後半~7世紀前半頃から竪穴部の縮小化に伴い、床面中央にあった柱穴が住居壁側に寄り、最終的には竪穴外部に位置する。それに連動してカマドも作り付け型（I類）から突出型（II・III類）に変わり、竪穴部が縮小した分、煙道が伸長化すると指摘した。また、住居壁から煙道部先端までの長さを一軒の竪穴住居の占める空間一占有空間と規定し、竪穴住居の占有空間は5~6世紀代の一般的な方形竪穴住居と8世紀代の方形小型竪穴住居であっても両者の占有空間には大差ないと論じたことがある（註1）。

通常、6~7世紀代の集落遺跡にあっては、小型住居は数軒検出される程度であるが、外之限遺跡の場合、小型住居と極小型住居を合わせて39軒の検出であり、過半数を優に超えている。当住居跡はカマドを付設し、日常容器も豊富に有していることから所謂竈屋的なもの或いはお産小屋ではなく、一般的な居住用に供されたものと考えている。これは、外之限遺跡だけの特異な現象であるのかにわかに断じ難いが、興味深い現象として捉えておきたい。

（2）住居の群構成

本跡では、カマド脇の床面を若干掘りぬき上部器座を埋置した住居としてIV区1号住居跡、VI区1号住居跡、VII区15・37号住居跡があり、カマド脇に土師器座・瓶を置いている住居跡としてはIII区9号住居跡、V区1・3・5・8・10号住居跡、VII区11・34号住居跡、IX区1号住居跡がある。窓の内容物としては、水或いは穀物を貯蔵していたものと推測される。カマドから貯蔵用窓にかけての空間は炊事場であり、炊事が女性の仕事であったと仮定すると前述の空間は女性に限定された空間と言うことができる。この様な本跡の土器のあり方は、1軒の住居が消費生活の基本単位であったことを明示している。外之限遺跡の場合、約50年という時間幅で住居の建替え

がなされており、短期間であるため住居の切り合いも比較的少ない。住居が2~3軒集まって小群を形成し、小群が数群集まって全体として一つの集落を構成するものと考えられる。

さて、そうした目で外之隈遺跡の集落をみていくと、本跡の群構成は、A群-V区の10軒、B群-VI区の2軒、C群-VII区東端の1号住居跡、D群-VIII区中央部の16軒と建物跡2棟、E群-VIII区北端部の5軒とIX区の2軒の合計7軒と建物跡2棟、F群-調査区北西端の3号大溝以東の10軒、G群-3号大溝以西の24軒の都合7群にグルーピングできる(第215図)。

A群の2~3号住居跡及び6~8号住居跡は同時期で、カマドも同方位を呈することから同時並存と考えている。D群では西半部に小・極小型住居を配し、東半部に中型住居を配する。時期的に17→18号、19→8号、26→25号、28→27号、29→31号、32→33号へと変遷するものであろう。E群には特大型のIX区1号住居跡が構築され、同住居跡は本跡の盟主的存在である。また、掘立柱建物跡も2棟存在する。F群住居は地形に沿って築造されたため住居主軸が北を向いており、カマドも北壁面に付設される。G群は本跡中において切り合いが著しい一群であり、集落はIII・IV区南側に拡大する様相を呈する。

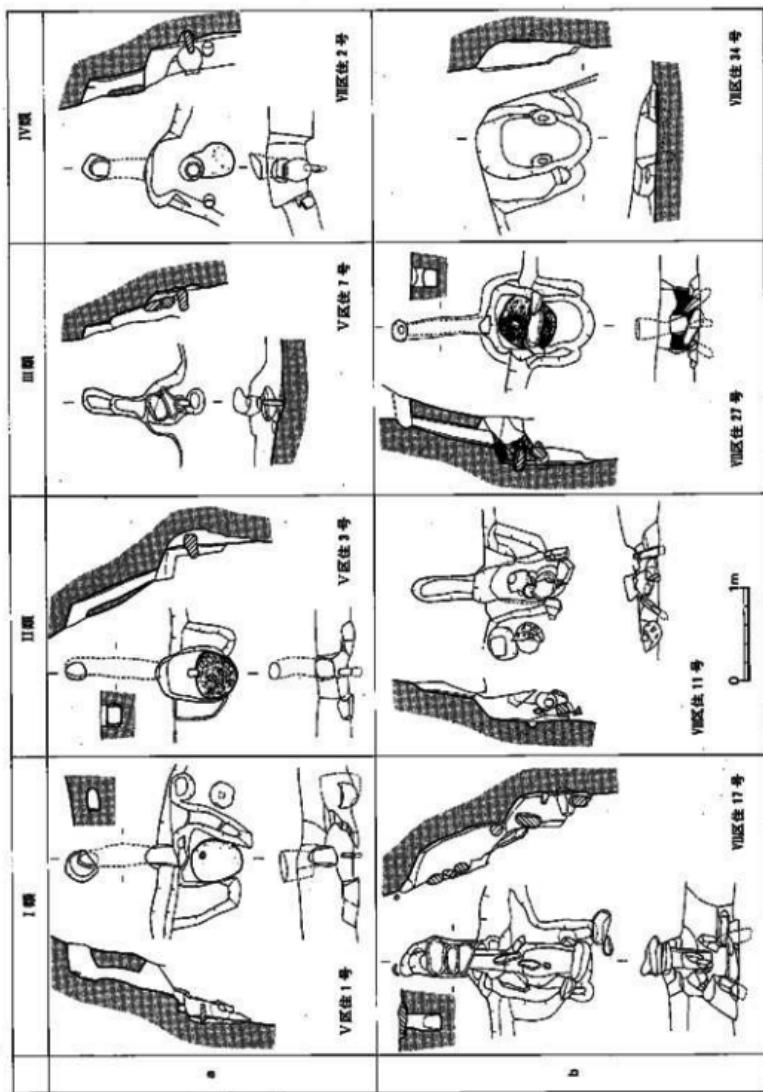
また、C群を除く各群中においては、カマドの主軸方位を等しくする住居2~3軒が一単位として小群をなしており、この小群を一世帯とする見方もある(註2)。ここで注目されるのがD群であり、本跡では検出例が少ない掘立柱建物跡が2棟存在する。建物跡は総柱であることから倉庫と考えられるが、東側のC群との空開地は広場として機能していたものであろう。

(3) 集落の立地

本跡の住居群は丘陵急斜面という特異な集落立地を呈する。III区の丘陵裾部という削合平坦な場所ならその存在も理解できるが、VI・IX区の丘陵尖端部における立地は、通常想像もつかない。このような集落立地は、平野部から山間部への進出とみて取れないことはないが、何故、集落が短期間で終焉してしまうのか。その理由として、天災・疫病・戦闘・強制排除等を考えられるが、その何れをもって答えとして良いのか判らない。ただ、カマド脇からは土器類が使用時の状態そのままで出土している住居跡が多く、カマド支脚には甕が乗った状態で出土している例もみられる。この事は、生産性の低下や強制排除による住居の放棄ではなく、家財道具を持ち出す間もなく廃絶したと言え、天災もしくは疫病の発生によって集落を放棄し、他所に移住したものと理解しておきたい。

また、V区の東端部には6世紀前半築造の円墳が存在するが、墳丘を切って1号住居跡が構築されていることは、古墳を築造した集団と集落を営んだ集団とは別系統と考えられる。さらに、3号櫛列及び3号大溝出土の古墳関連遺物の存在もこの事を補強するものであろう。

第216図 外之界蟲跡カマド分類図



2. カマドの構造について

本跡の住居跡は、丘陵斜面を開削し築造しており、壁高は残りの良いもので70~90cmを測る。カマドは大半が山側一北東壁に付設しており、遺存状態が良好な住居が多く存在し、カマドの構造を復原するのが比較的容易である。ここでは、カマドの構造について考えてみる。

(1) カマドの形態分類

本跡のカマドは、住居壁に粘土を直接貼付し、壁体を構築する作り付け型—I類、住居壁を若干掘り込んで袖部を貼付する突出型—II類、突出の度合いが大きいもの—IⅢ類、及び住居コーナー部に付設するもの—IⅣ類の4タイプがある。また、袖部に立石を有するか否かでa・b類に細分した(第216図)。

支脚には川原石が多用されるが、土製品を用いたカマドもある。煙道はカマド奥壁からトンネル式に掘り込んだものと煙道を一旦掘削し、天井部を粘土・石で被覆して構築する掘り込み式がある。

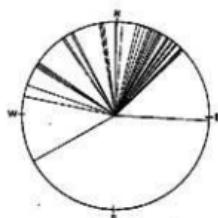
カマド主軸はN45°E~N80°Wの幅を有するが、これは住居が地形に沿って築造されるためであり、基本的には山側にあたる北壁か、丘陵と直交する西壁の何れかに付設している。

(2) カマドの構造

I a類は特大型~極小型の何れの住居跡にもみられる。I b類は袖部先端もしくは中程に川原石を立てたもので、壁体全てを粘土で構築するa類に比して構造が比較的容易であり、なおかつ焚口部・壁体の補強が図れる。袖石は奥壁から50~80cmの部位に立てている。VII区17号住居跡カマドはI b類の好例であり、煙道部まで完存する。煙道は掘り込み式であり、川原石を5個並べ、煙道天井部の蓋石としている。

II類はa・b類合わせて4軒の検出である。II a類カマドの好例としてV区3号住居跡が挙げられる。本カマドの煙道部壁面には板目压痕が遺存し、掘り込み式煙道の構築法が判明した次第である。掘り込み式の煙出し部先端は隅丸方形を呈するが、トンネル式のそれは円形もしくは橢円形を呈することから天井部が削平された煙道の判断材料となり得ると考える。

III類は住居壁を20~40cm程掘り込んで構築し、a・b類合わせて8軒の検出である。VII区27号住居跡カマドはIII b類の好例であるが、袖石は袖部先端に立てるのではなく、掘り込み部コーナーに立てている。



第217図 カマド主軸方位グラフ

IV類は小・極小型の住居にのみみられる。構築方法としては二種類あり、粘土を直接貼付して壁体を構築するもの（III区住9号、VII区住34号）と住居壁を凸形に掘り込むもの（III区住1号、VII区住2号、IX区住1号）とがある。IV類例は7~8世紀代の住居には比較的見出されるが、6世紀代ではそれ程多くはない。築城町赤幡森ヶ坪遺跡（註3）、筑後市前津中の玉遺跡（註4）は8世紀代の集落であるが、森ヶ坪遺跡においては約1割の住居がIV類のカマドを付設していた。

しかし、5世紀前半の築造とされる塚堂遺跡D地区5-6A号住居跡（註5）は、既にIV類のカマドを付設している。カマド導入期からIV類のカマドは構築されており、その系譜もさることながら柱配置及び上部構造が問題となる。カマド祭祀については今回も筆舌に至らず、別稿に期したい。

おわりに

6世紀前半には大和朝廷を震撼させた磐井の乱（527年）が勃発する。乱後は大和朝廷の九州支配が直接的・強固なものへと変質する。そうした中で、外之張遺跡の集落は形成されるが、耕地の拡大を図るため山間部への進出を余儀なくされたにも関わらず、集落は天災・疫病により僅か半世紀で終焉したものと推測される。この様に、本集落の盛衰を捉えておきたい。

註1 摂著 「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』 1994

註2 小笠原好彦「民衆のムラ」『古代史復元』 6 1989 講談社

註3 福岡県教育委員会 『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集』 1992

註4 筑後市教育委員会 『前津中の玉遺跡』（筑後市文化財調査報告書第4集） 1987

註5 福岡県教育委員会 『塚堂遺跡IV』（浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集） 1985

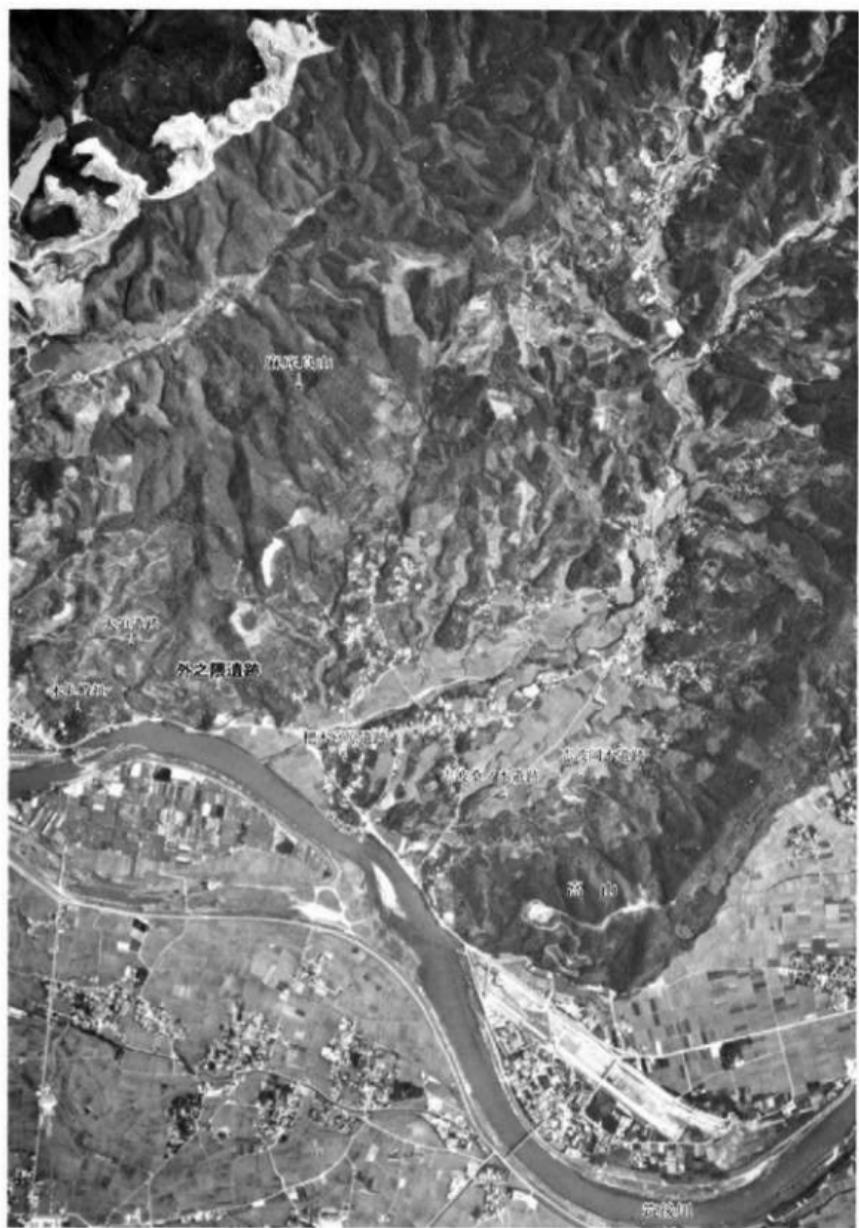


第210図 V区3号住居跡カマド煙道部壁面拓影



同カマド煙道板状圧痕

図 版



外之限道路周辺航空写真 (国土地理院 KU-76-2 X)



1 外之限道路遠景（筑後川村岸から望む）



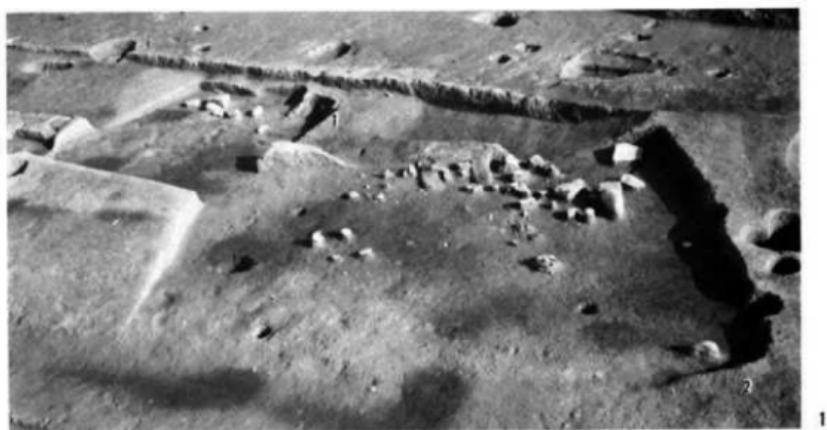
2 外之限道路及び志波台地遠景（恵蘇八幡宮上空から望む）



1 III区全景（北から）



2 III区全景（南東から）



1



2



3

1 1・2号住居路（南から）

2 同貼床下部（南から）

3 1号住居路カマド（南西から）



1



2

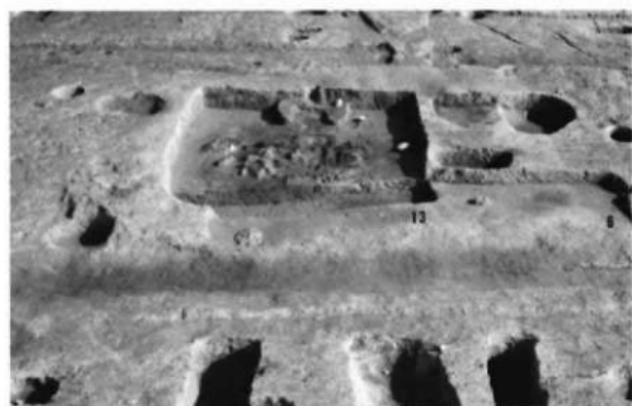


3

1 3・4号住居跡、SX1(南西から) 2 2号住居跡カマド(南から) 3 3号住居跡カマド(南西から)



1 4号住居跡カマド
(西から)



2 6・13号住居跡
(南西から)



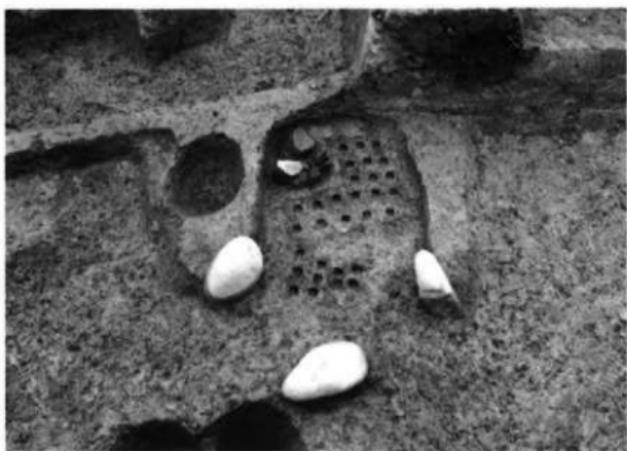
3 13号住居跡カマド
(南西から)



1 7号住居跡
(南西から)



2 7号住居跡カマド
(南西から)



3 热残留磁気サンプル
採取後



1 9号住居跡
(南から)



2 9号住居跡カマド
(北東から)



3 10号住居跡
(南東から)



1



2



3

1 11号住居跡(南東から)

2 11号住居跡カマド(南西から)

3 カマド完掘状況(南西から)



1

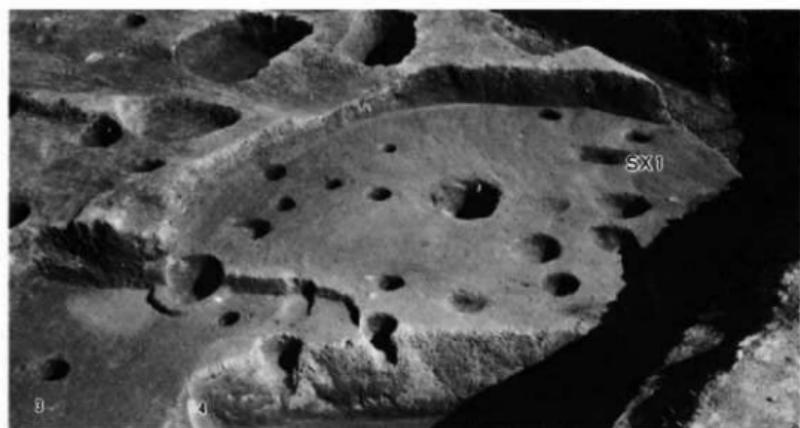


2



3

1 5・12号住居跡(西から) 2 12号住居跡カマド(南西から) 3 14号住居跡カマド(南から)



1 SX 1 (南から)

2 SX 1 造物出土状況(南から)

3 SX 4 (南西から)

図版 12



1-5



3-3



2-2



2-9



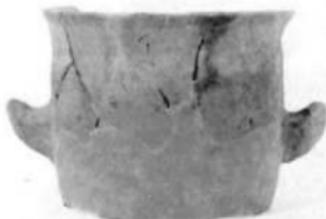
3-4



2-15



3-5



2-20



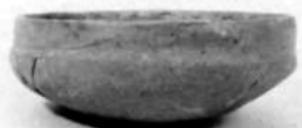
3-6



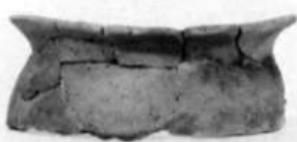
4-4



3-8



4-5



4-7



4-10



5-1



5-2



6-3



6-4



9-3



7-4



8-4



9-5



11-7



14-3



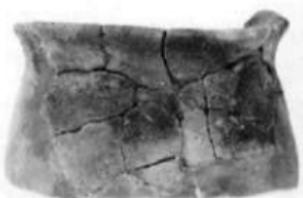
11-3



14-5



11-4



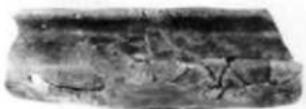
15-2



16-3



12-4



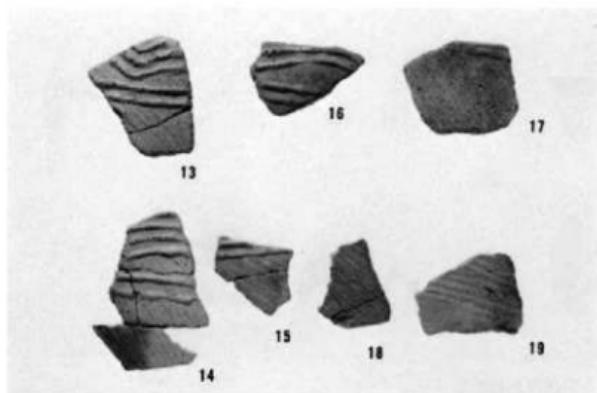
SX4-1



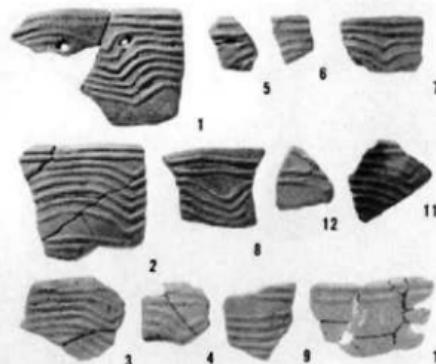
12-5



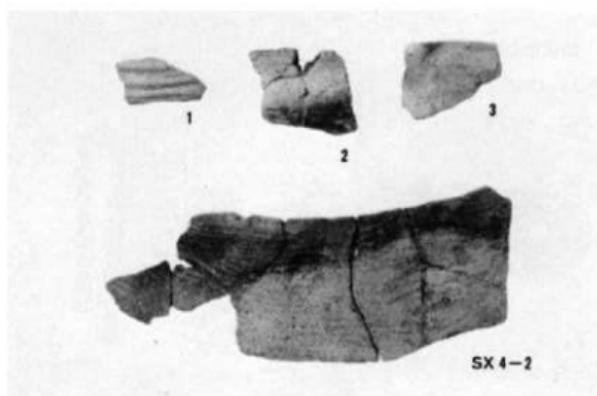
P17-2



1 SX 1 出土土器①



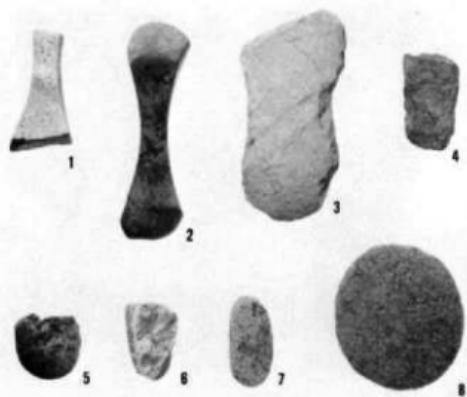
2 SX 1 出土土器②



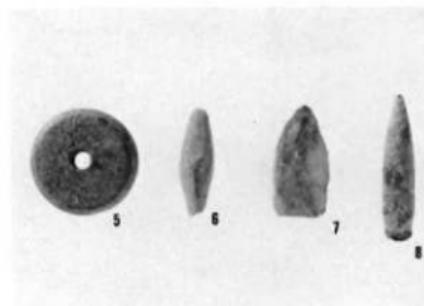
3 III区出土縄文土器



1 Ⅲ区出土石器①



2 Ⅲ区出土石器②



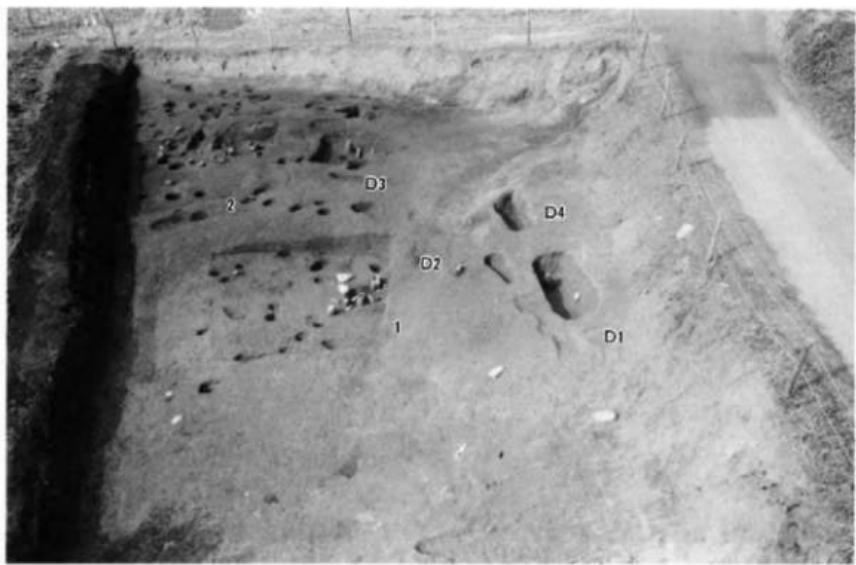
3 Ⅲ区出土石器・土製品・その他



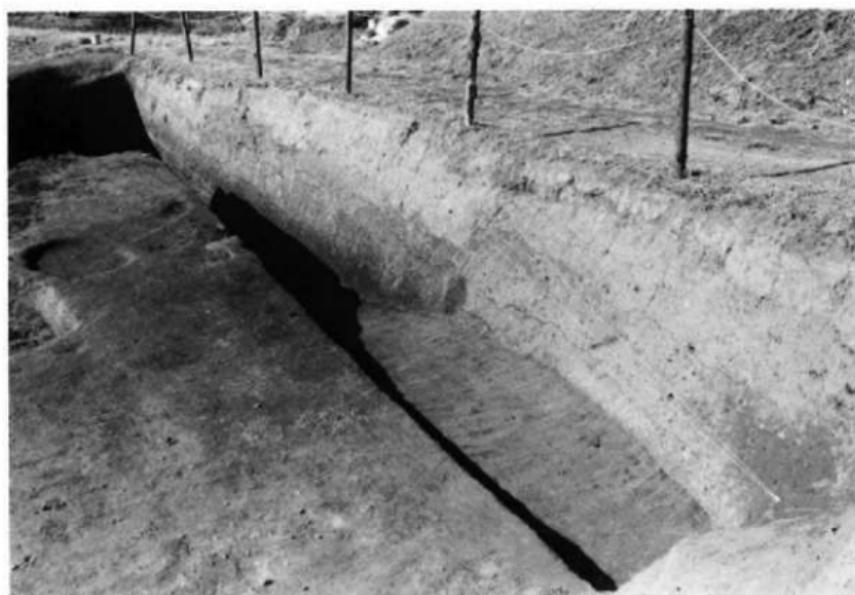
4 Ⅲ区出土鉄器



1 IV区全量 (南上空から)



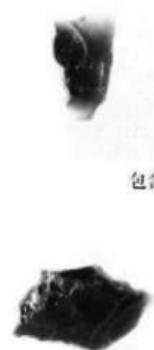
2 IV区全量 (東から)



1 西端トレンチ（東から）



包含層



2号住居跡

3 IV区出土石器

2 西端トレンチ土層



1 1号住居跡（東から）



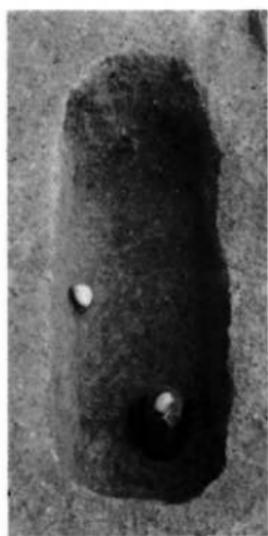
2 1号住居跡カマド（南から）



1 2号住居跡（南東から）



2 2号住居跡カマド（南東から）



2 1号土坑(西から)



2 5号土坑(北東から)



8



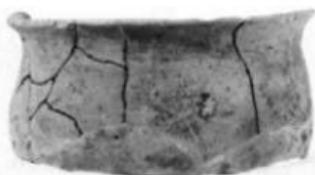
9



6

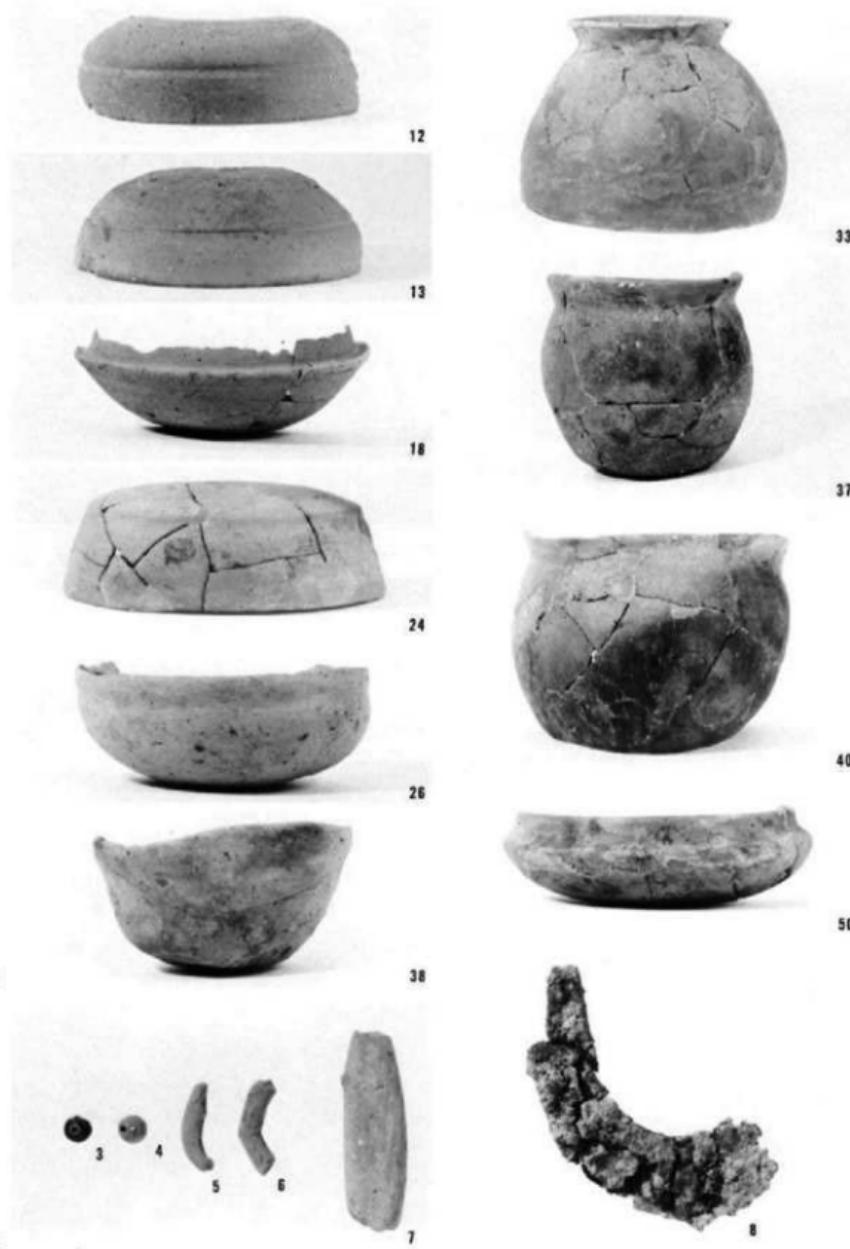


10



11

3 IV区1号住居跡出土土器



1 2号住居跡、3号土坑出土土器

2 住居跡・土坑出土土製品

3 西端トレンチ出土鉄器



1 V区全景 (西上空から)



2 V区東端部 (西から)



1 1号住居跡
(北西から)



2 1号住居跡カマド
(南西から)



3 煙道部断面
(南西から)



1 2号住居跡（南西から）



2 2号住居跡カマド（南西から）



1 3号住居跡
(南西から)



2 3号住居跡カマド
(南西から)



3 遺物出土状況
(南東から)



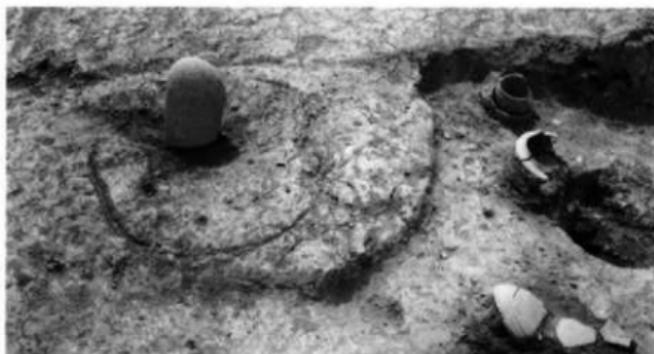
1 4・5号住居跡（東から）



2 5号住居跡カマド及び遺物出土状況（東から）



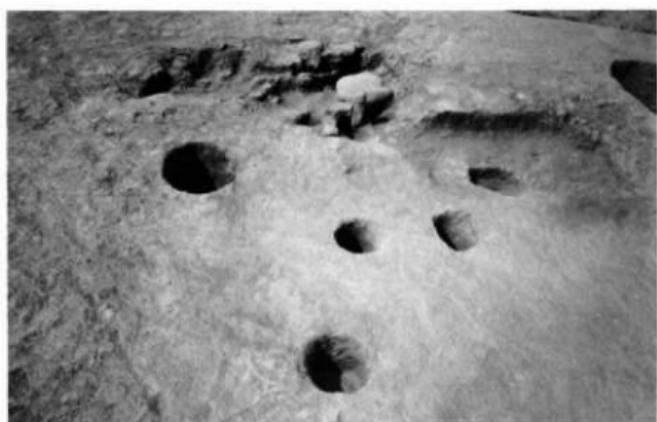
1 6号住居跡
(南東から)



2 6号住居跡カマド
(南東から)



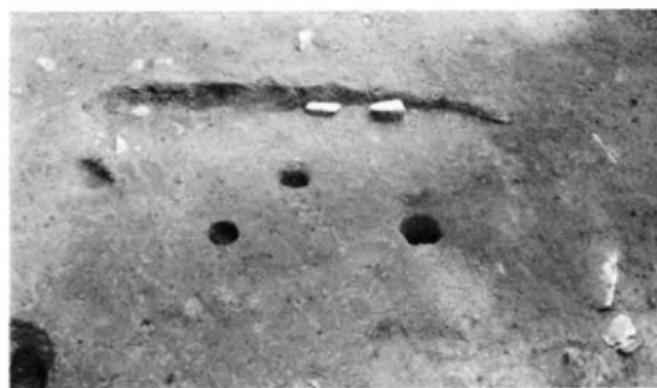
3 遺物出土状況
(南東から)



1 7号居住跡
(南西から)



2 7号居住跡カマド
(南西から)



3 9号居住跡
(南から)



1 8号住居路
(南東から)

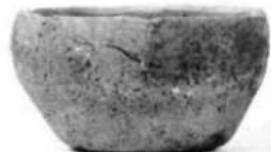


2 8号住居路カマド
(南東から)



3 遺物出土状況
(南東から)





24



34



25



35



27



78



36



31



33



37



38



42



39



43



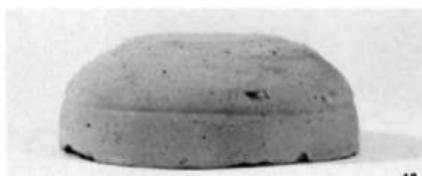
44



40



45



49



52



51



53



54



55



56



57



58



59



60



61



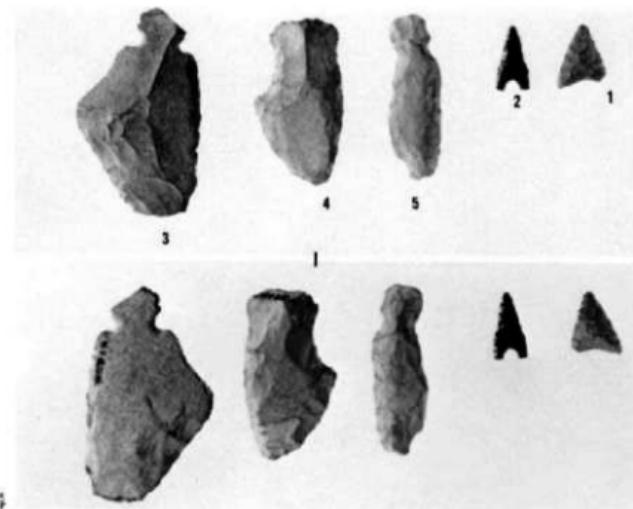
62



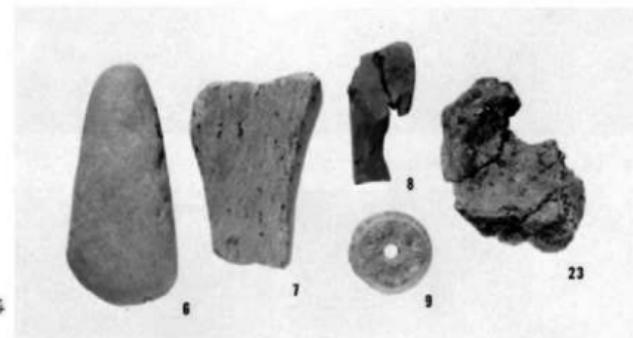
63



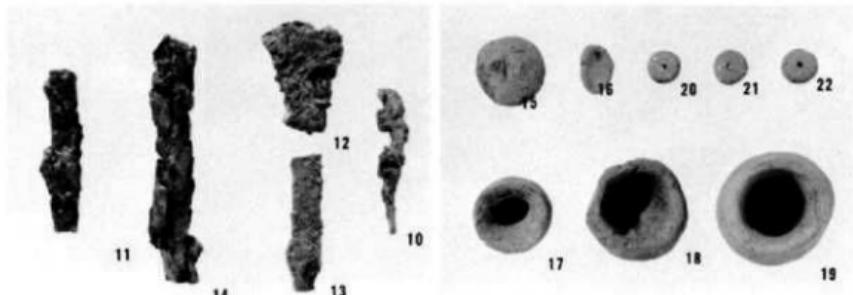
64



1 V区住居跡他出土石器



2 VI区住居跡他出土石器
·石製品·土製品



3 V区住居跡他出土鐵器·土製品



1 VII区全景（西上空から）



2 1号上坑（北西から）



1 1号住居跡（南東から）



2 1号住居跡カマド及び遺物出土状況（南東から）



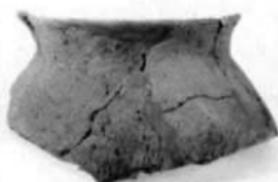
1 2号住居跡(西から)



1



5



2



6



3



7

2 VIIK 1・2号住居跡出土土器



1 VII・VIII区全景（北西上空から）



2 VIII区全景（南東から）



1 VIII区東端部上段（北から）



2 VIII区東端部下段（北から）



1 1号住居跡（北西から）



2 1号住居跡カマド（南西から）



3 カマド完掘状況（南西から）



1 2号住居跡（東から）



2 2号住居跡カマド（南西から）



3 遺物出土状況（南東から）



1 3号住居跡
(南西から)



2 3号住居跡カマド
(南西から)



3 4号住居跡
(南西から)



1 5号住居跡（南東から）



2 遺物出土状況（北西から）



3 6号住居跡、2号建物跡（北西から）



1 7号住居跡（南西から）



2 7号住居跡カマド（南西から）



1 VIII区西端部住居群（西から）



2 9-11・16号住居路（南から）



1 9号住居跡
(北から)



2 9号住居跡カマド
(南から)



3 10号住居跡
(東から)



1 11号住居跡（南から）



2 11号住居跡カマド（南から）



1 カマド内遺物出土状況
(南から)



2 カマド完掘状況
(南から)



3 カマド袖部横断面
(南から)



1 12号住居跡
(北西から)



2 13号住居跡
(西から)



3 13号住居跡カマド
(南から)



1 14・20号住居跡、3号柵列、3号大溝（北西から）



2 14号住居跡（西から）



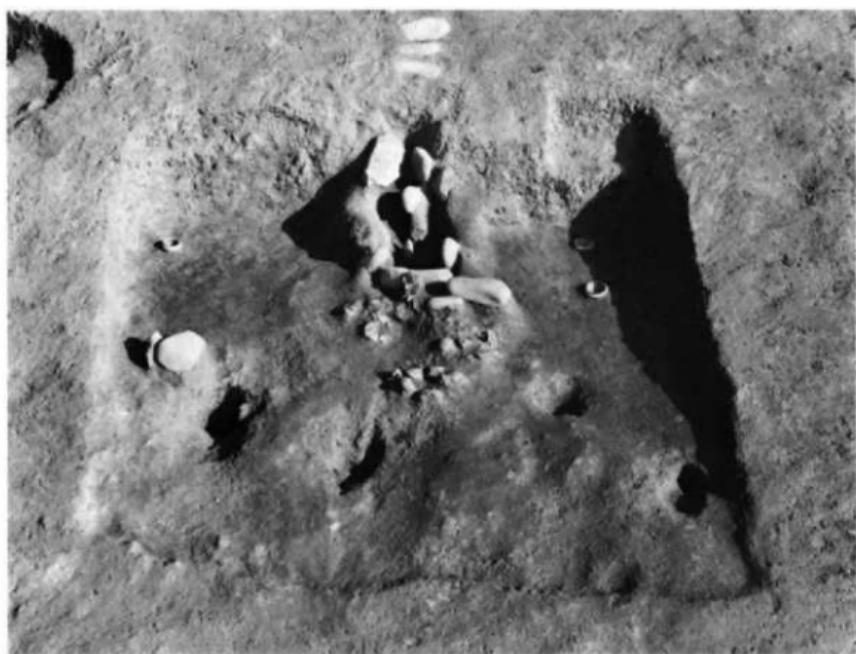
1 15号住居跡
(南から)



2 15号住居跡カマド
(南から)



3 遺物出土状況
(南から)



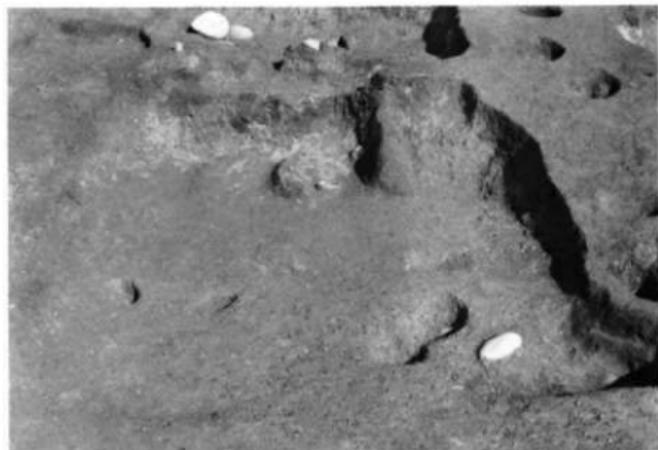
1 17号住居跡（南西から）



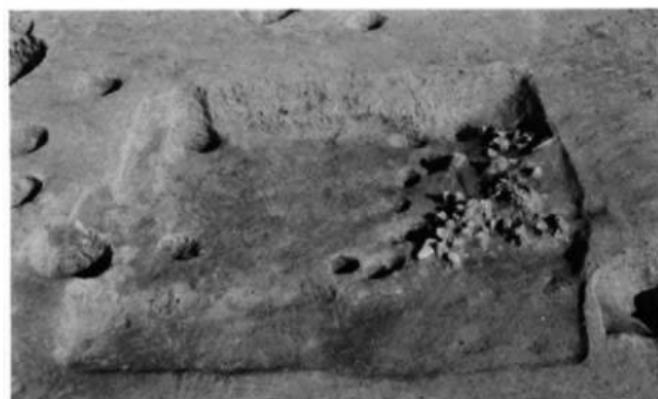
2 17号住居跡カマド（南西から）



3 カマド袖部縦断面（東から）



1 18号住居跡
(南西から)



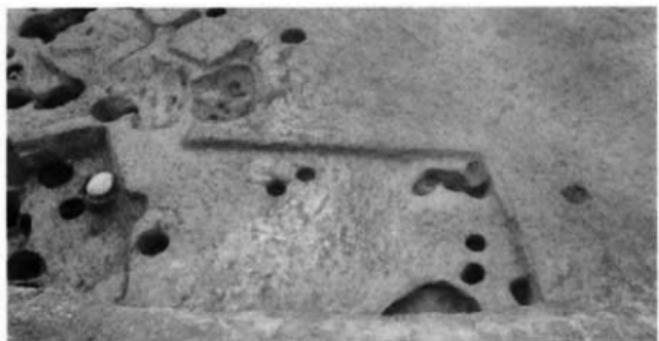
2 19号住居跡カマド
(南から)



3 19号住居跡カマド
(西から)



1 20号住居路
(西から)



2 22号住居路
(南西から)



3 23号住居路
(南西から)



1 24号住居跡
(南東から)



2 24号住居跡カマド
(南東から)



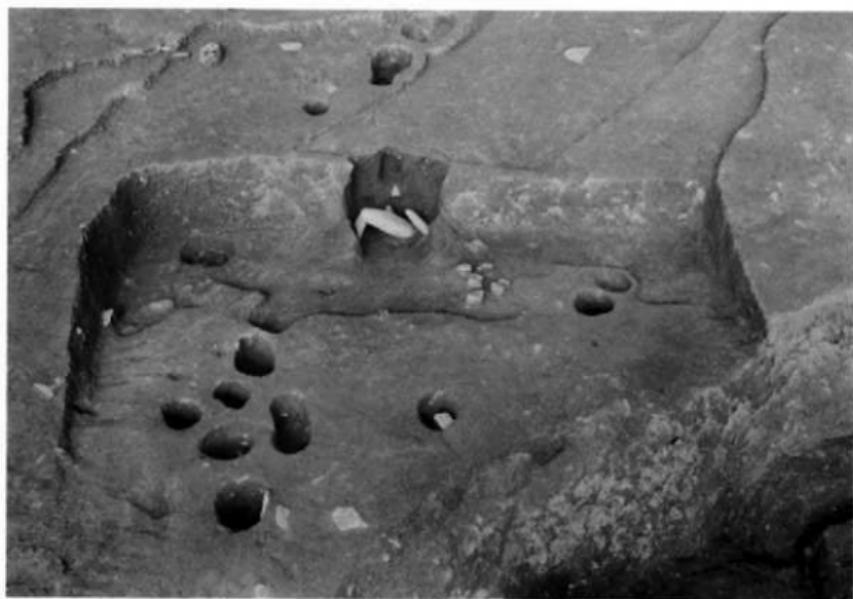
3 遺物出土状況
(北東から)



1 VII中央部下段住居跡群（南西上空から）



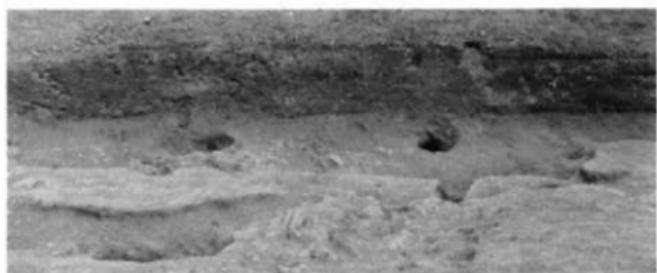
2 25号住居跡（東から）



1 27号住居跡（南西から）



2 27号住居跡カマド
(南西から)



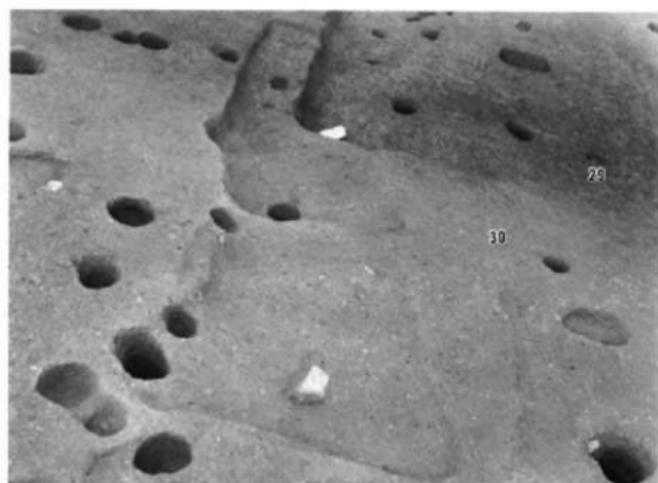
1 28号住居跡
(北東から)



2 29号住居跡
(南西から)



3 29号住居跡カマド
(南西から)



1 30号住居路
(北西から)



2 31号住居路
(南東から)



3 32号住居路
(東から)



1 32号住居跡上層断面
(東から)



2 同貼床下部
(南から)



3 32号住居跡カマド
(東から)



1 33号住居跡
(東から)



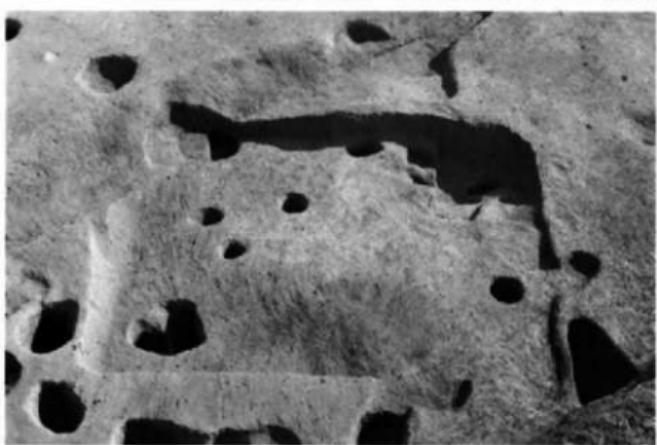
2 同貼床下部
(東から)



3 33号住居跡カマ下
(南東から)



1 34号住居跡
(西から)



2 同貼床下部
(西から)



3 34号住居跡カマド
(西から)



1 36号住居跡
(北西から)



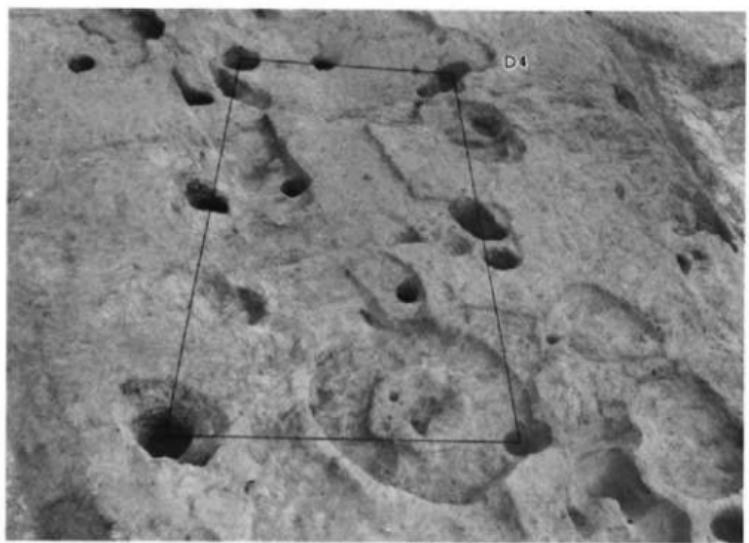
2 37号住居跡
(南から)



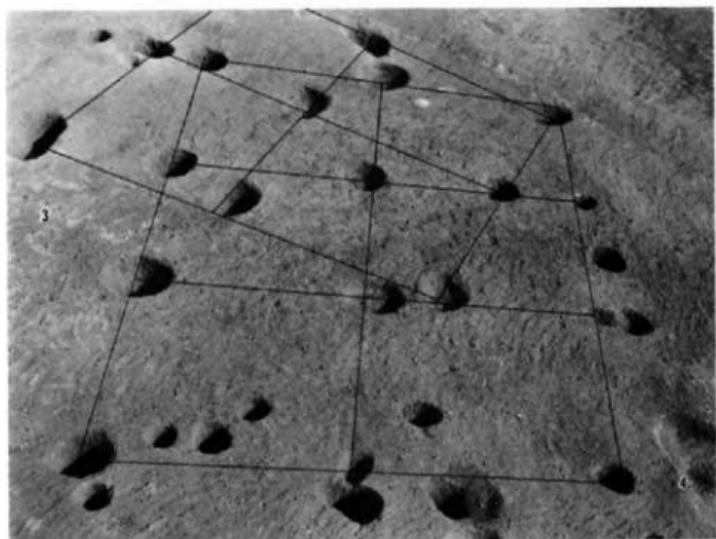
3 37号住居跡 カマド
(南から)



1 VIII区中央部上段造構群（北西から）



2 1号建物跡、4号土坑（北西から）



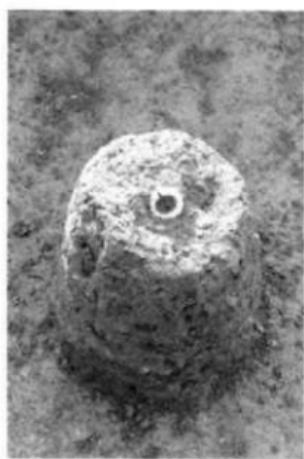
1 3・4号建物跡（西から）



2 1号柵列（北西から）



3 橫列柱穴土層断面（南西から）



3 3号柵列柱穴内耳環出土状況



1 2号柵列 (南西から)



2 3号柵列、3号大溝 (南東から)



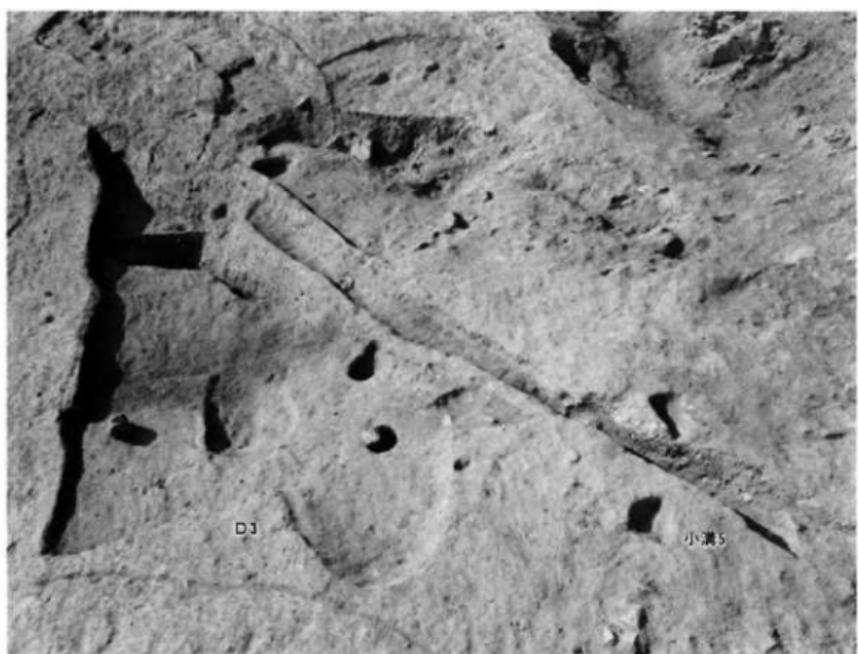
1 1号土坑（南東から）



2 遺物出土状況（南東から）



3 1号土坑土層断面（北西から）



1 3号土坑、5号小溝（南東から）



2 3号土坑土層断面（北西から）



1 4号土坑（北西から）



2 遺物出土状況（南西から）



3 5号土坑（東から）

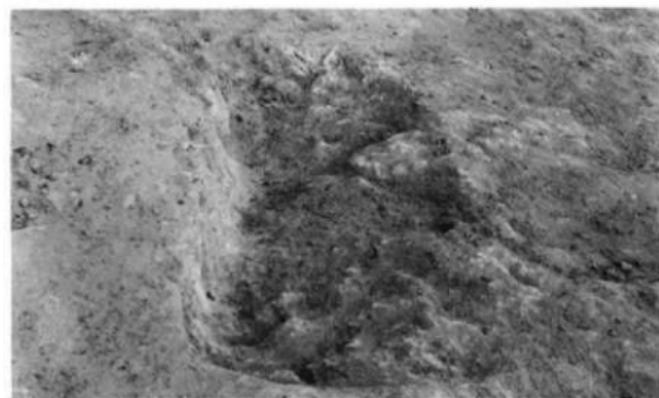




1 9号土坑
(南東から)



2 10号土坑
(北東から)



3 11号土坑
(北西から)



1 1号製鉄造構（南東から）



2 1号大溝、1・2号小溝、2号土坑（南東から）



1 2号大溝
(北東から)



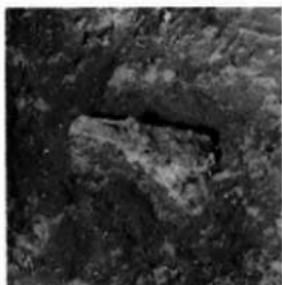
2 2号大溝上層断面
(南西から)



3 道物出土状況
(南東から)



1 3号大溝（北西から）



3 鉄鎌出土状況（南東から）



4 土師器甕出土状況（南東から）



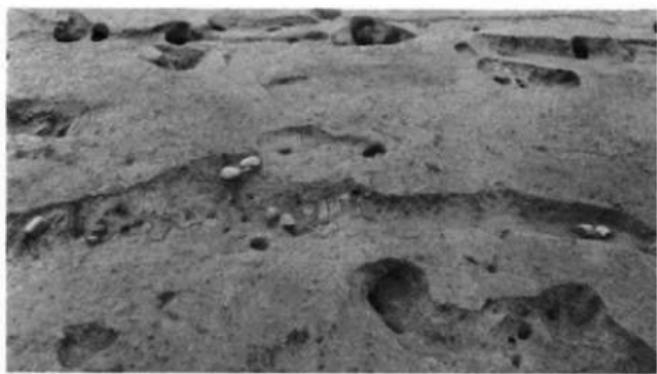
2 3号大溝上層断面（南東から）



1 6号小溝
(南から)



2 10号小溝
(南西から)



3 12号小溝
(南から)



2



13

7



14

8



15

9



16

10



11



17



21



18



24



19



25



20



30



32



37



33



39



34



42



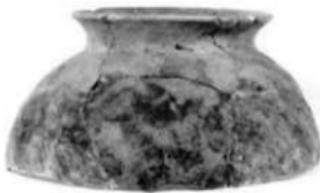
35



43



36



60



61



62



64



71



73



65



80



69



81



70



82



84



87



88



89



91



93



92



100



102



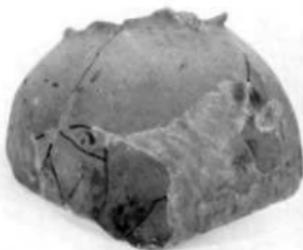
94



104



103



116



106



109



118



110



120



111



127



115



129



128



145



135



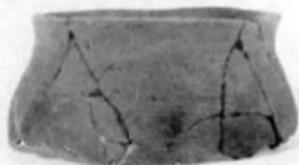
147



137



163



139



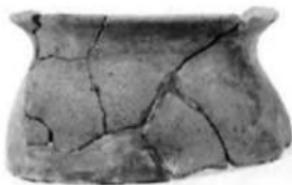
171



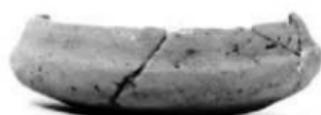
178



179



188



193



200



194



202



195



204



196



206



210



214



227



215



237



218



238



219



221



242



223



226

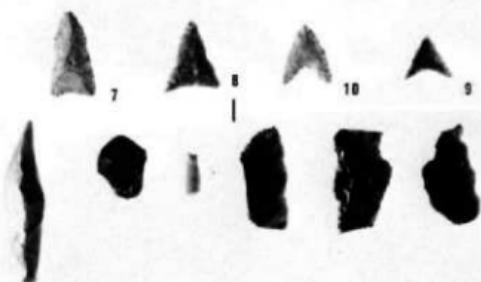


250

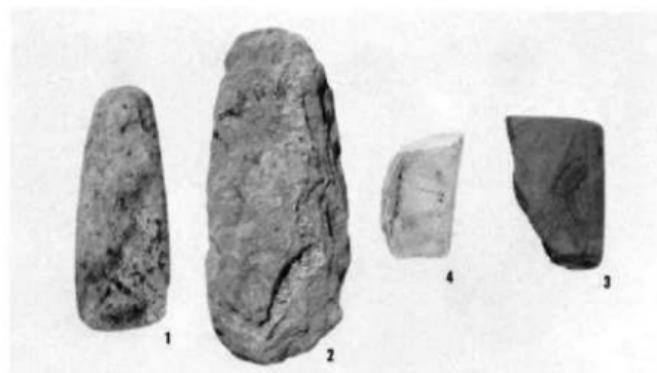


1 5・10号小溝出土土器

260



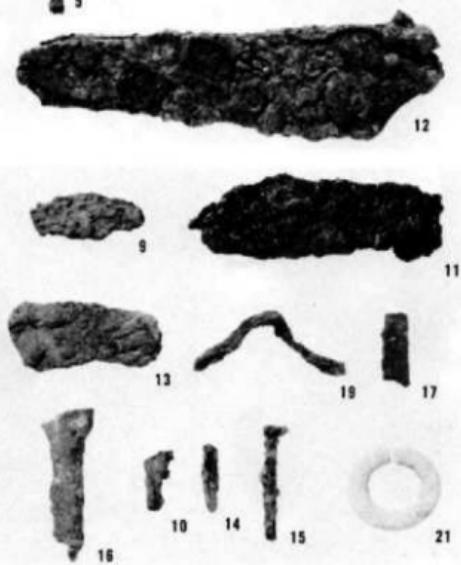
2 VIII区出土石器



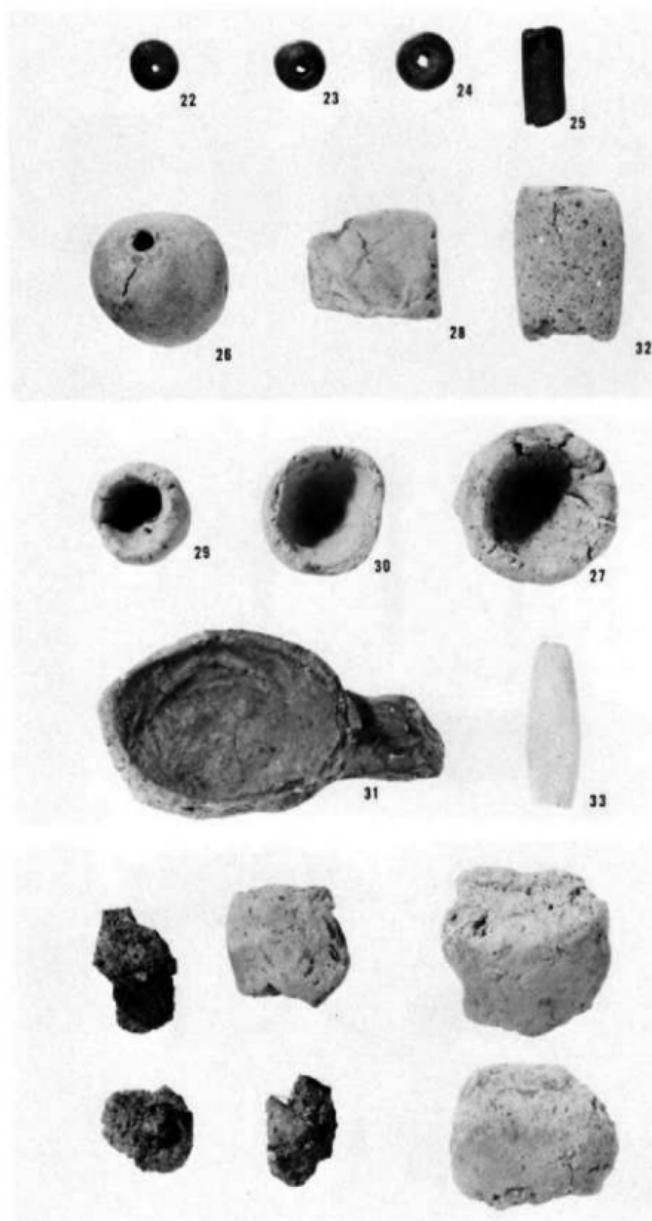
1 VII区出土石器
石製品



2 VII区出土鐵器①



3 VII区出土鐵器②





1 VII区西端・VII区全景（南上空から）



2 VII区全景（北西から）



1 1~4号住居跡（北から）



2 1号住居跡（北から）



1 2号住居跡（南から）



2 4号住居跡（南から）



1 6号住居路（西から）



2 1・2号土坑（北西から）



17



21



23



2



32



3

1

1 VIII区1・2・4~6号住居跡出土土器

2 VIII区5号住居跡出土紡錘車

3 鉢区出土石器

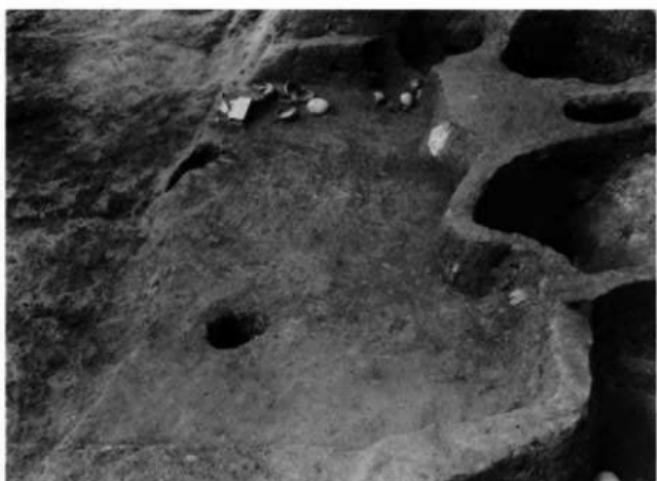


1 IX区調査前状況（西上空から）



1 IX区全景（横断道開通後, 南上空から）





1 1号住居跡
(南東から)



2 1号住居跡カマド
(南から)



3 遺物出土状況
(東から)



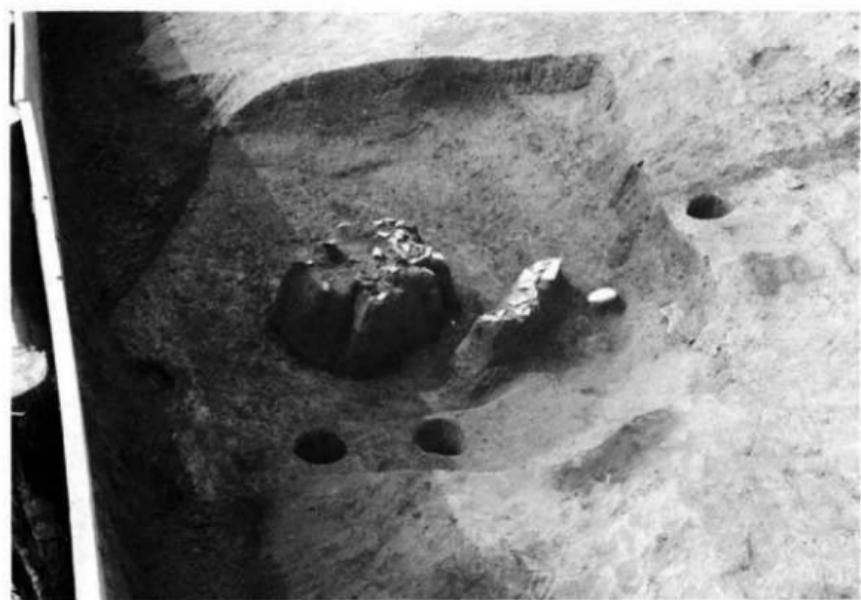
1 2号住居跡
(西から)



2 土層断面 (西から)



3 2号住居跡カマド
(南西から)



1 3号住居跡（南東から）



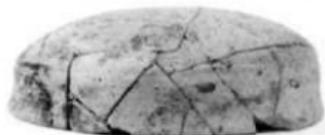
2 遺物出土状況（北西から）



1



9



2



10



3



11



4



5



12



6



13



7



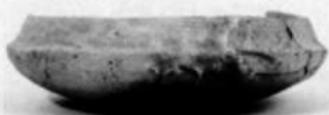
14



8



15



20



35



21



36



27



37



29



38



33



34



40



1 亂れ道影・・・何が出てくるかな??



2 1区墳丘墓・・・あつ、鏡だ!



3 VIII-X 1号櫛列・・・これが本当の人生!



4 調査終了後・・・消えゆく外之原道路・大道通跡

報告書抄録

ふりがな	そとのくまいせき						
書名	外之殿遺跡II						
副書名							
卷次							
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋文化財調査報告						
シリーズ番号	40						
編著者名	井上裕弘・伊崎俊秋・小田和利・時枝克安・伊藤晴明・齊藤努						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地 (発行機関)	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 Tel 092-651-1111						
発行年月日	西暦 1996年3月31日						

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村:遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
外之殿	福岡県朝倉郡 朝倉町大学 山田字外隈 花木町大学 志波字本陣	404420: 570390 404411:	33° 21° 48°	130° 46° 1°	871116 ~881216 · 900905 ~901011	約12,700	道路(九州横 断自動車道) 建設に伴う 調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
外之殿	集落	縄文晚期 弥生中期 古墳後期	竪穴住居 土坑 竪穴住居 建物跡 土坑 滑石 製鐵 稻	縄文土器・石器 須恵器 土師器 鐵器	丘陵急斜面に立地する

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属3-7 2 1 3 3 0 5 1
分冊番號 H 7	分冊番号 3

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—40—

平成8年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡県福岡市博多区東公園7-7

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8-34

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

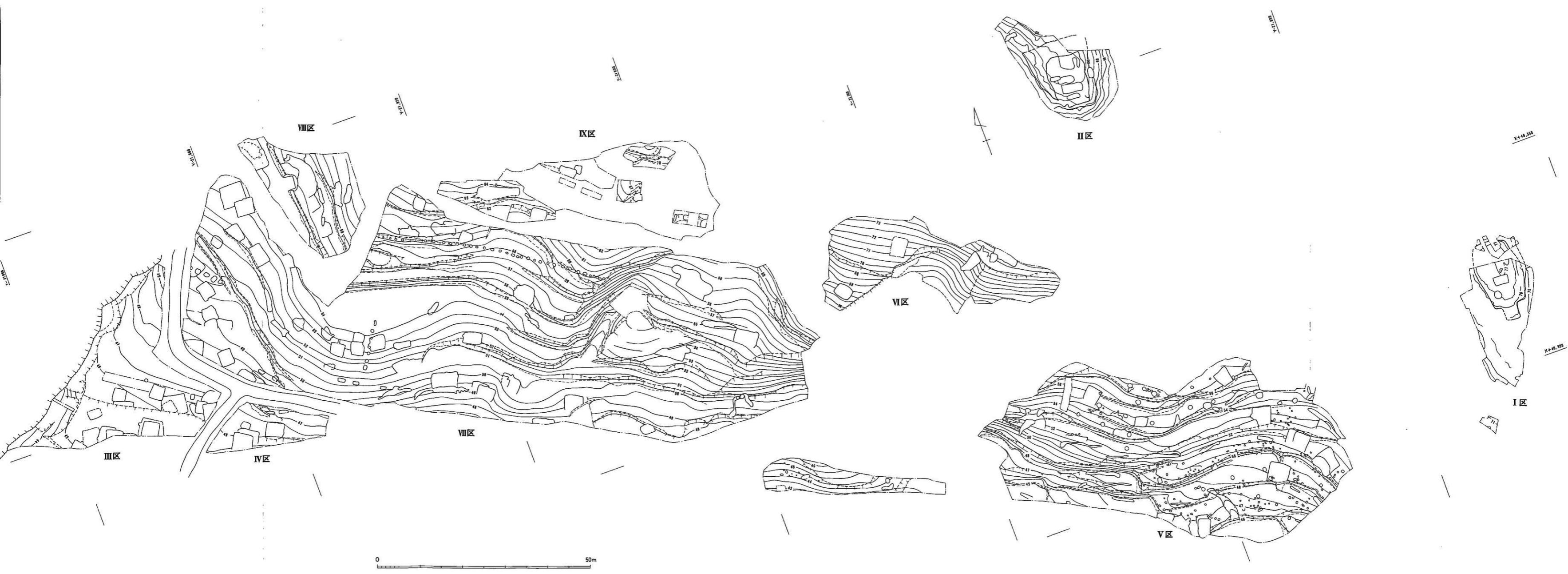
— 40 —

福岡県朝倉郡朝倉町・杷木町所在 外之隈遺跡の調査(集落編)
(外之隈遺跡Ⅰ)

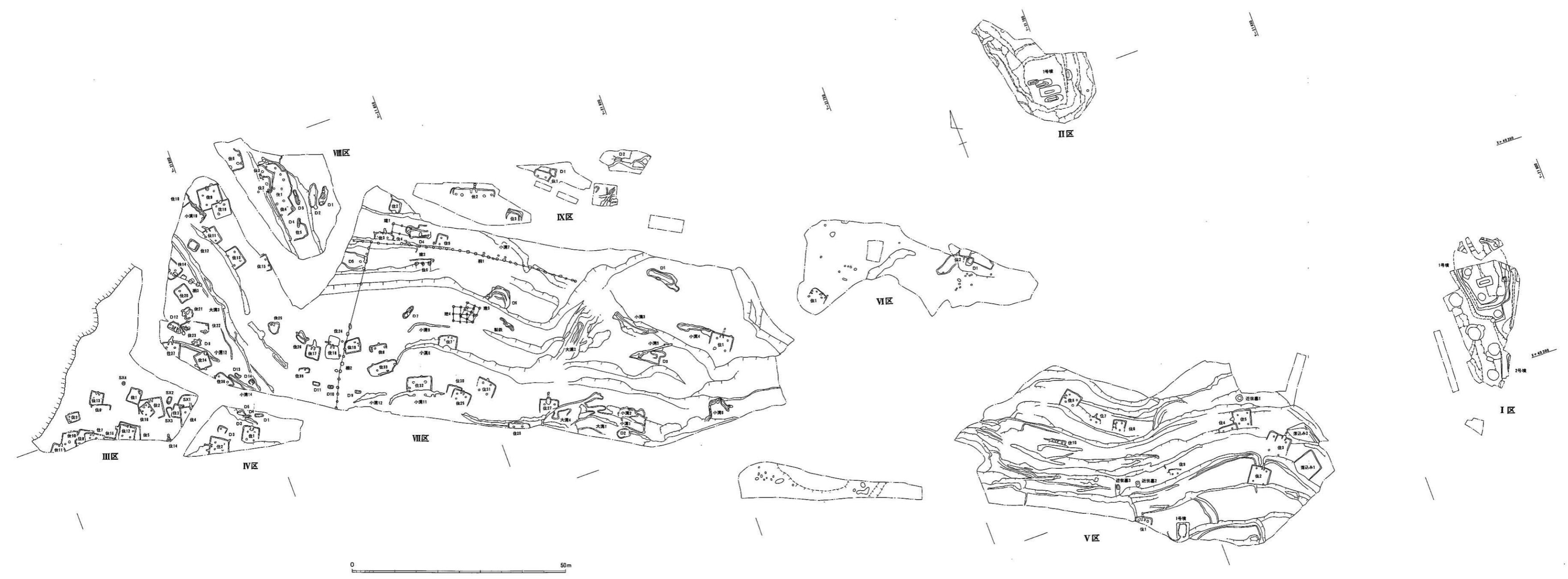
付 図

1996

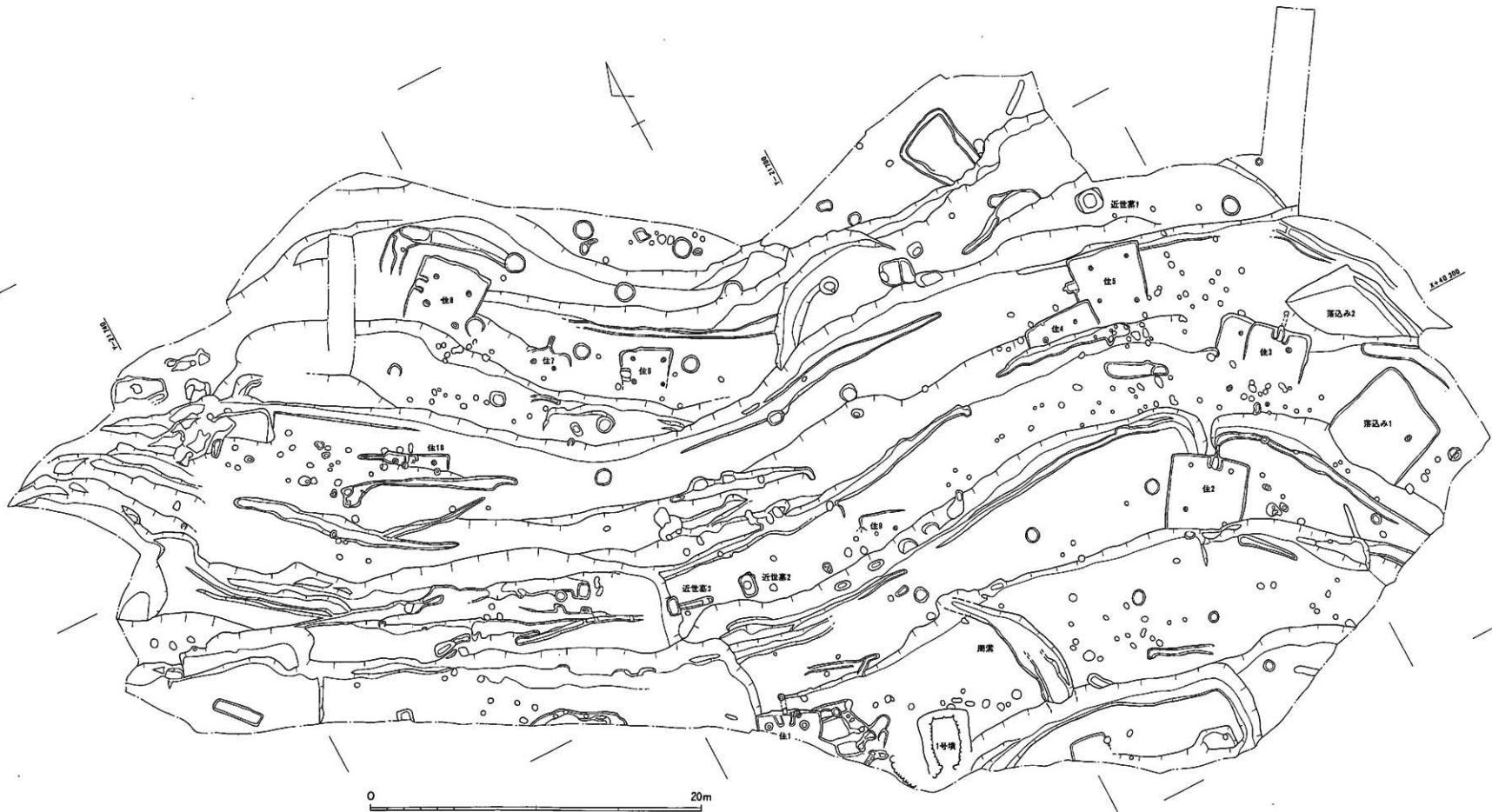
福岡県教育委員会



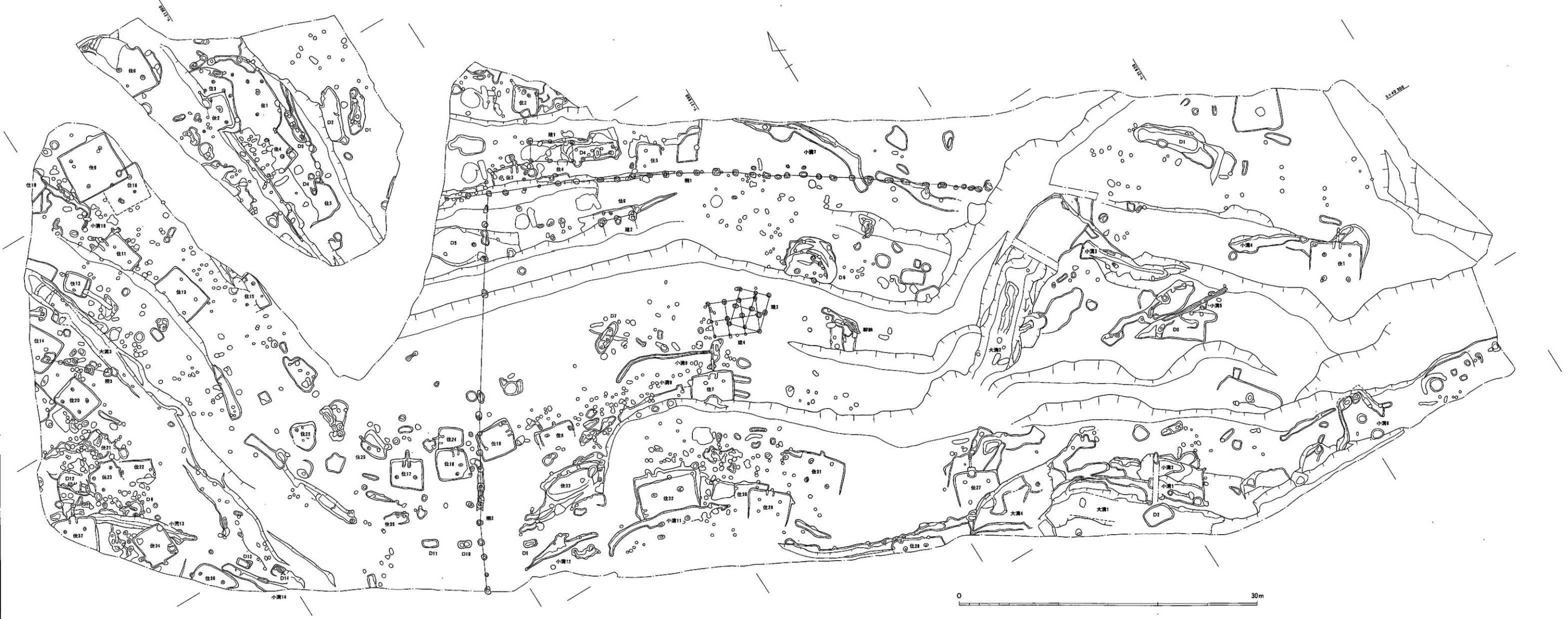
付図1・外之限遺跡地形測量図 (1/400)



付図2 外之限道跡構配置図 (1/400)



付図3 V区造構配置図 (1/200)



付图4 VII・VIII区造構配図 (1/200)